

サービスエリア

蔵小路タマの冒険



蔵小路タマ・著



1 : 絶対にやだだったこと

最初にミツチャンから話を聞いたときからアタシは行きたくないかかった。ゼーったいに行きたくない。知らないところは苦手だし、怖いし、だいたいのネコのアタシまで、どうして行かなきゃならないのか、ゼーんぜんわかんない。それも、パパとママが大喧嘩してて、ミツチャンが言うには離婚かもしれない、みたいなこんな時期に、旅行なんてさ。ミツチャンは「だから行くんだ」って言うけど、家族旅行くらいで夫婦が仲直りできるなんて、ネコの判断でもちよっと甘すぎると思うなあ。「日常のルーティンを断ち切ることが必要」とかも言っただけど、アタシにはよくわかんない。どっちにしてもネコが人間関係修復の役に立つとは思えないから、アタシを家に残して、人間だけで勝手に行ってほしいよ。今までみたいにさあ。

去年だっておとしだって、アタシはお留守番だった。ホテルにネコは泊まらないから、つて。それって正しいルールだね。観光とか旅行つて、人間が大騒ぎしてるだけで、どう楽しいのかネコにはわかんない。わざわざ遠くまで行ってくたびれて、帰ってきてくたびれて。人間はくたびれるのが好きみたいだ。アタシの場合、ネコ元氣ときれいなお水と、柔らかいクッションと快適なエアコンがあれば、何日でもお留守番します。パパ、ママ、ミツチャン、いつてらっしゃーい、っていうわけにいかないかなあ。今年はおホテルじゃないんだって。なんでも、パパの知り合いの人から長野の別荘を借りたんだって。千メートルの高さの場所にあつて、空気がきれいであ涼しくて、おまけにネコも泊まれる！だからタマ

[目次]

- 1 : 絶対にやだだったこと . . . 3
 - 2 : 誤解だってばあ . . . 8
 - 3 : だからあ、旅行はやだあ . . . 20
 - 4 : ここ、どこ? . . . 28
 - 5 : 宇宙アンテナ . . . 37
 - 6 : 応用課程終了 . . . 49
 - 7 : 犬の能力 . . . 59
 - 8 : よく知ってる知らない人 . . . 66
 - 9 : 大金持ちになる計画 . . . 73
- タマの **世田谷都市伝説** 85 ~ 123
- 10 : 闘争の本質 . . . 126
 - 11 : 蔵小路屋の消滅? . . . 138
 - 12 : 戦争、もうひとつの真実 . . . 148
 - 13 : 千曲川旅情 . . . 164
 - 14 : 明かされるルーツ . . . 178
 - 15 : ドッペルゲンガー . . . 191
 - 16 : 子ネコの好奇心 . . . 200
 - 17 : 馬券の当てかた . . . 212
 - 18 : カラス電報の将来 . . . 225
 - 19 : オデュッセウスの帰宅 . . . 233
 - 20 : 災難と救済 . . . 244
 - 21 : 解決なの? . . . 253
 - 22 : とりあえず終わり . . . 259

も連れてく！だつてさ。ネコも泊まれるっていうことと、ネコも行くっていうのは同じじゃないと思うけど。

千メートルっていうのも、なんだかやだなあ。まあね、アタシだつてネコだから高いところは好きだよ。でもさあ、ものには限度があるでしょ。三メートルのお屋根には登れるけど、千メートルっていったら、どうやって跳び上がるの？もし上がったも下りられないじゃない。お向かいの松の木から下りられなくなつて、大騒ぎしたこと、ミツチャン、忘れちゃったのかな。

でもね、アタシとしては「長野」っていうところにちよつと興味もあつた。いえ、別に、行ってみたいっていうわけじゃないけど。長野ではアユが食べれるし銅像もある。おかあさんがそう言つた。「おまえのルーツは長野だよ」って。

おかあさんのお父さんは千曲川っていう川のすぐそばの河原っていう場所に住んでたんだつて。川にはアユっていうお魚がいっぱいいて、川に向かつてガオツつて吠えると、アユが驚いて岸に跳ね上がったきて、いくらでも食べれるんだつて。最高におい

ちよつとボケたキジトラ。光の具合で紫色にも見えるのがチャームポイント。お向かいのおぼあちゃんには、アタシのことトラつて呼ぶけど、まあいいじゃない。ネコは度量が広いし、二つ名前のオネエサンっていうのもかっこいいでしょ。

それで、何を知りたい？うちの苗字はなんて読むのかつて？ たしかに珍しいよね。くらこうじつて読むの。元は京都つていう町でお公家さんっていう仕事をしてたつて聞いている。お公家さんが何を作つて売るのが知らない。でね、ご維新とかいう火事みたいなものがあつて、お味噌屋さんになつたの。理由は知らないよ。とにかくそーなんだから。もしかして伝説かもしれないけど。それから東京に出てきて、ここの世田谷でお店を開いたのが、ずーっと前のことみたい。味噌の蔵小路屋つていえば、セレブの定番だつてミツチャンが言つた。セレブってなんだろう。アタシは知らない。

知らないことがいっぱいあるのは、ネコだからしょーがないんじゃないかと、アタシがまだ二歳だからだよ。アタシのおかあさんは、大通りのむこうの下駄屋さんにいるの。いつも遊びに行つてるけど、

しいお魚で、長野の千曲川はネコの天国なんだつて。でね、おかあさんのお父さん、つまりアタシのおじいちゃんだけど、アユ取りの名人で、一日に三千匹も取つて人間の漁師さんにあげてた。人間はみんな、偉いネコだつて感心して、河原に銅像を建てたんだ。クマベエの像つて書いてあるから行けばわかる。おじいちゃんの銅像でお昼寝したら、きつと気持ちいいよ。

ね、すごいでしょ。行きたいよね。行って、「アタシ、クマベエの孫です」なんて言つたら、千曲川のネコも人間も親切にしてくれるだろうな。とも思うけど、やっぱり行きたくない。行きたくない理由？いっぱいある。ネコ元気の袋に入つてるつぶつぶくらいあるよ。あーあ。

あ、ごめん。アタシが誰だか言つてなかったよね。いつもはクールなんだけど、今朝ミツチャンから、明日のアサイチで出かけるつて聞いてから、瞳孔がちよつと開き気味なんだ。ほんとはもう、押し入れの奥に隠れたい気分。人間みたいに取り乱してごめんね。

はい、アタシは蔵小路家のタマです。毛の色は、

こないだ行つたら、また弟や妹がたくさん生まれてるじゃない。これで二度目。そんなに弟や妹ほしくないんだけど、生まれたばかりの子ネコはかわいかったな。まだ目が見えないから遊んであげられなくて、おかあさんは「今が一番らくだよ」なんて言つてた。子供つて、動けるようになると、ものすごく手がかるからね。アタシもそうだったつて。そうかなあ、こんなにおとなしいのに。

弟と妹はみんな毛並みが良くて、頭も良さそうに見えたから、もう少ししたらあの子たちにコンピュータ教えてあげようつて決めたんだ。だあれ？ネコとコンピュータは関係ないだろうなっていう人。ぜんぜんわかつてないじゃない。ふつうのイエネコは、みんなキーボード打てるんだよ。今、みんなが読んでるこれだつて、アタシが打つてるんだから。ミツチャンが蔵小路屋のダイレクトメールを作るんだつて、むりやりパパに買わせて、インストールだけして、難しすぎて使つてないアドビのインデザインに直接打ち込んで。ミツチャンよりアタシのほうが、いろんなソフト使いこなしてるよ。

教えてあげる。イエネコはね、生まれて一ヶ月くらいで字が読めるようになるの。新聞や雑誌はどこにでもあるでしょ。ツメでひっかいてるうちに自然に憶えるんだ。アタシも知らないうちに憶えてた。ノラネコでも、ごはんを探すのに忙しくなければ、大体みんな字が読める。スポーツ新聞ばかり読んでもネコは野球とサッカーのことなら、ものすごく知ってる。そういえば、タバコ屋さんのネコは競馬の新聞読んで「オレの予想は外れたことない」なんて言ってた。アタシも競馬中継見ながら試したことあるけど、新聞読んでなくても、競馬ってかからず当たるよね。だって、お馬が走るんだよ。お馬さんはちゃんと教えてくれるじゃない。今日は勝つぞ、とか、気分じゃないからもう帰りたい、とか。外れの馬券ばかり買って損してる人間で、信じられない。お馬の言ってること、きつとわかんないんだろ。うな。

なんだっけ、そうそう、コンピューターの話だった。アタシだって最初から使い方がわかってたわけじゃない。ミツチャンのうしろで、寝たふりして見てたら、すぐにわかつちゃった。ミツチャンはただ

使えればいいみたいだけど、アタシは違って、どうして動くのか知りたくなって、パパが持つてるウインドウズ7のリファレンスっていう本を読んでみた。いろいろよくわかったけど、これ書いた人、本当に日本人？ わざと難しく書いてるのか、日本語を正しく書けないか、どっちかだね。ネコが書けばもっと面白くなるよ、あの本。

それからミツチャンのコンピューターを総点検して、絶対にいらぬファイルとか意味ないバックアップファイルとか、パパやママに見られちゃう困るヒストリとか、全部消してあげた。こんなの平気で残してるから、コンピューターから全部バレちゃうんだ。人間ってセキュリティ感覚ゼロだよ。まあ、ミツチャンはデフラグも知らないみたいだから、しよーがないんだけどさ。

ご主人がコンピューター持つてるネコは、みんなアタシくらいはできるよ。すごいネコはカナキーで打つてる。夜中にチャットしてて、猛烈なスピードで打つ人がいたら、多分ネコだからね。アタシはカナキーより横文字が好きだから、いつも外国のネコとチャットするの。アメリカのサイトにはネコ専用

のチャットルームもあるんだよ。知ってた？

ネコってひまでしょ。いつも家でぐてぐて寝てて、人間ならひきこもり。だからコンピューターが好きなのかなあ？ そんなアタシに旅行について来いなんて、それだけでも無理に決まってるじゃない。無理、ムリ、むりだあ。やだよ、怖いよおおお……ほら、また目が真っ黒になっちゃった。





2 : 誤解だっばあ

それでアタシは隠れようと思った。ミツチャンは「支度しなきゃ」なんて言いながらテレビを見てた。アタシがそーっと起き上がると「ネコはいいね、荷物がないから」だつてさ。ごじょーだんでしょー、行かないんだから支度なんていらないよ。で、お水飲みに行くふりして、まず押し入れに入ったけど、ここ、ちよつとまずいかもしれない。いつも隠れる場所だから。いつもつていうことは、もちろんミツチャンも知ってる場所つていうことで、探されたら最初に見つかつちゃう。考えなきゃ。どつか斬新な、想像もつかない場所つてないかなあ。つて考えてたら眠くなつてきた。寝ちゃダメだよ。寝たら熊が来るよ、なんて思つても眠いんだ。

夜中の二時ごろに目が覚めた。みんな寝てるみたい。ちよつと安心して、トイレに行つてからネコ元

ながらミツチャンの机の下に隠れた。シロブタはアタシを追いかけて来たとき、ちよつとパパと鉢合わせして、そのまま捕まつて、ベランダからお庭に放り出された。ざまあみろー。

ドアの向こうを通つていても、あいつもネコだから、アタシがここに座つてるのを知つてる。だからわざわざゆつくり通るんだ。オレ様の縄張りだぞ、みたいに。アタシは縄張りなんていらぬ。ネコがいくら威張つて「縄張りだー」つてニャーニャー言つたところで、しよせんは人間の土地でしょ。ただのカラ威張りよね。その現実を受け入れられないネコは考えが浅いと思う。でもさあ、人間にしても「自分の土地だー」なんて大騒ぎして、隣の扉がネコのシッポの幅くらい入り込んでるだけで、扉を壊せとか壊さないとかやつてる。アタシは知つてるんだ。ザーマスおばさんの扉がこつちに入り込んでるの。パパとザーマスが表通りで三時間もやりあつてた。地面を掘り返して見つけた四角い石のところだね。「測量」とか「訴える」とか、ごちゃごちゃやつてた。アタシは出窓からそーつと見てたけど、人間て、ネコよりセコいかもしれないな。シロの縄張りよりも

気食べて、さてどうしよう、なんて思つたの。しばらく玄関に座つて、誰か来ないか見てたけど、来るわけないよね、こんな夜中に。と思つてたら、隣のザーマスおばさんとこのシロが、ドアの向こうをゆつくり、そう、わざとゆつくり通つて行くじゃない。白くてブクブクしてて、性格悪いんだ、あいつ。

アタシが最初にケンカしたのがあのシロでね、最初つていつても、それから誰ともケンカしてないから、生涯で一度だけの大ゲンカ。まだ小さい子ネコのときに、あのシロがアタシの毛色を見て「おまえ、まだチビだから多少は見られるけど、大きくなつたらポケ編のポケネコになるぜ」なんて言うの。アタシも若かつたから、ちよつとムカつてネコパンチ入れたら、あのバカ、その何十倍も殴つてくるわ食いつくわで、結果？ 当然アタシの負けよ。泣き

みっちなあ。

二人がいなくなつたすぐ後で、お向かいの柴犬のタロが、四角い石にオシッコかけてた。アタシは大笑いだったよ。これで石はタロのものだあ、つて思つた。

タロはいいやつだよ。アタシよりひとつ年下。タロがもらわれてきた日には「おかあちゃん」なんて泣きつばなした。あんまりかわいそうだから一晩中くつついてなめたりあやしたりしたんだ。それ以来、タロはアタシをネエサンつて呼ぶの。弟のつもりみたい。シロには思いつきり吠えるけど、アタシには吠えない。だからいつも遊びに行つてる。今は逆にタロにペロペロなめられるけどね。

なんだっけ：：そうだ、玄関に座つて、今度はどこに隠れようかなつて、ぼんやり考えてた。朝になったら、多分パパとママは喧嘩しながら旅行に出かける準備を始めるはずだから、そのときに絶対に見つからない方がいい。ミツチャンが少しは探すかもしれないけど、想像もつかない場所に隠れば、きつと想像もつかないだろうから見つかるわけないもん。

ん〜ん、想像もつかない場所ねえ。アタシにも想像もつかない。お店の裏にある味噌蔵にはまだ隠れたことないけど、下がコンクリで硬くてつめたい。朝まで寝てるのやだな。ときどきへじが出るってシロが言ってた。あいつの言うことだからウソかもしれないけどさ。

廊下の突き当たりの納戸には何度も隠れた。あはは、シヤレじゃないよ。柔らかいぬいぐるみが始まつてあって、眠るには最高。でも、見つかるだろうな。アタシは扉を閉めないから。入ったら出るに決まつてる場所で、扉を閉める意味ってある？ 入ったまんま出ない所はお墓の中だけ。納戸で死ぬ気にはなれません、まだ。

どんな場所がいいか、いろいろ考えたの。お風呂場の洗濯籠の中とか、キッチン空き瓶の奥とか、居間のソファの下とか、テレビ台の裏とか、いろいろ考えたけど、どこもイマイチだなあ。居心地いい場所には、もう何度も隠れてる。

ほら、想像できない場所って、やっぱり想像できないでしょ？ もし想像できたら、それは想像できないことにならないんだ、きつと。

「ウスグレノマサ、っていうの？ いい名前だと思っけど、ちょっと長くない？」
「そうよなあ。こんな名前は仁義切るときにしか使わねえ。あんたがオレを呼ぶならマサだけでいいよ」
「そうなんだあ。じゃ、マサさん、あなたはノラですか？」

「うっ、ずいぶんモノをはっきり訊く子だねえ。そうだよ、今は立派なノラだ。シヨバは競輪場のまわりだけ」

「ノラってつらい？」
「おいおい、いきなり何だよ。苦労話はさせっこないだ」

「だって、わかんないんだもん」
「まあ、イエネコ一途のお嬢さんならもつともだ。そうさなあ、他のネコのこたあ知らねえが、オレについちゃあ、つらくもあり、自由でもあり、つてとこだ。けがや病気さえしなけりや存外楽しいもんさ」
「ふーん、楽しいんだ。アタシもノラになってみようかな」

「タマさん、といったね。悪いこたあは言わねえ、間違ってもそんなことを口にしちゃいけねえ。せつ

玄関でじつとして考えてると、また眠くなりそうだったんで、アタシはお外に出ることにした。パパがキッチンのドアに作ってくれたネコ道を通ってお庭に出た。ぴよんぴよん飛び上がってお屋根に登ると、わあ、誰かいる。知らないネコだ。

しばらく見つめてたら、めっちゃ怖い声で「そんなに見るなよ。ケンカしたくなるじゃねえか」だつて。それでアタシは目をそらして「こんばんわ」つて言った。

「あんた飼いネコだな。ノラの作法を知らねえようだ」今度はそんなに怖い声じゃない。横目でよく見ると、チャトラなんだけどお腹から後ろの縞が薄くなつてる、ちょっと大きなネコだった。

「ごめんなさい。この家のタマつていいです。あなたはどうな？」ミツチャンがノラと遊ぶとネコエイズになるつて言つてたけど、話をするくらいならいいでしょ。

「これはどうも。由緒正しいお嬢さんに名乗る名前は持ち合わせちゃいねえが、ご所望とあればお教えしよう。川崎あたりじゃちよつとは顔の、薄グレのマサっていうのがオレの名前よ」

かく飼い主がいて、お見受けしたところ毛並みもいよいよだから食い物も悪くねえだろう。それで一生過ごせるなら、誰が好き好んでノラになるつて言うんだ。ノラは命がけの渡世だぜ」

「ごめんなさい。怒ってる？」

「いやあ、これしきのこと怒るもんか。ただな……」と、マサネコはそれまでの箱座りから起き上がった、向こうを向いて正座した。

「ただ、ちよつとな、こんな夜にやよくあることだが、子ネコのころを思い出しちゃった。情けねえ」

「どーして情けないのかわかんないけど、やっぱりごめんなさい」

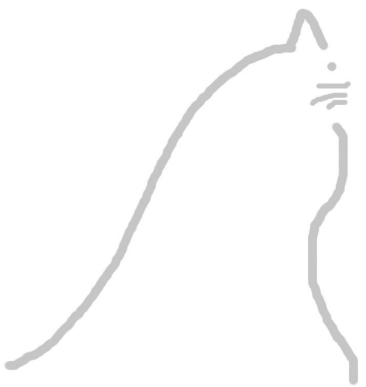
「いいつてことよ。……あのなあ、オレも小さいころはイエネコだったのさ。あんたみてえに大きな家じゃねえ、二間の小さいアパートでおじさんに飼われてた。ところが、オレがあんまり羽目え外して、外で大騒ぎして遊ぶもんだから、アパートの大屋にみつかつちまつて、おじさん、店立てをくらつた」
「タナダテつて？」

「知らねえのか？ ここは動物飼育禁止のアパートだから出てけ、つてことさ。それで、おじさんはオレ

を抱いて、『マサ、おまえを捨てたくないし、引越すカネもない。どうしよう』って、男どうしの愁嘆場さ。オレは思ったね、一宿一飯の恩義どころか、たとえ半人前とはいえ六ヶ月の中ネコまで育ててくれた恩人に、ここが忠義の見せ所」

「コトバが難しくくて、よくわかんない」

「いいんだよ、読者にはわかるから。で、オレは翌日の朝、家を飛び出して、それっきり帰ってねえ。若気の至りなんて言う気はねえぜ。ネコとして正しい道だった。それがノラの始まりよ」



「難しい話はナシだぜ。なんだ？」

「あのね、多分簡単な話だと思うよ。えーと、川崎ネコのマサさんが、どうしてわざわざ世田谷まで来たの？」

「ああ、そのことか。ケジメでな、やんなきゃならねえことがあつて来たんだ。まあ言ってみりゃあ敵討ちみてえなもんだ」

「カタキウチ？ 素敵ッ、アタシも手伝う」

マサネコはアタシを上から下まで見回して「おじようちゃん、あんたはケンカにや向いてねえ。お気持ちだけ、ありがたくいただいとくよ」

やっぱりな、と思った。アタシはどう見ても体育会系じゃないから、戦闘の最前線に出るのは無理なんだ。そのかわり、もしマサネコがケガでもしたら、そのときは助けてあげよう。ぜつたいにそうしよう。「ところでタマさん、この辺にシロっていうネコはいねえかな」

「いるよ。どうして？」

「もしかしてそいつは、そうさなあ、あまり賢くなくて、どっちかっていえば鼻っぱしだけ強くて」

「そう、そうだよ。とっても尊大なバカネコ」

言い終わって、空を見上げたマサネコは、ちよつと寂しそうだったけど、会った最初より、うんとネコっぽくて、骨があつて、かつこ良かった。そっかー。「いやいや、聞きたくもねえことを聞かせちゃったな」

「マサさん、勇気があるんだね。アタシだったら家出なんてきつと考えないよ。ずーつとおじさんに飼ってもらおうと思う。ラクチンに生きることしか知らないもん」

「あんたはそれでいいんだ。どこでどう生きてても、そりゃあこの世の定め、おてんとうさまと毎日のごはんには逆らえねえつてことさ。流されるのも生き方、決めるのも生き方、つてどこだろうよ。わかるかな？」

どこかのバカネコか人間が言ってるなら、マサネコのセリフは、ただ粋がってるだけにしか聞こえないだろうな。このときのアタシには、かなりジンときたんだ。やっぱりノラにはなれそうもない。

「うん、ちゃんとはわからないけど、適当に流されて、きちんと決めてやつてくことにする。ひとつ訊いていい？」

「よし、そいつだ。どの家だか教えてくれるか？」

「すぐお隣の家。今マサさんが見ている家がそう」アタシは首を伸ばして隣の家の方を向いた。「シロをやつつけてくれるの？ あいつ、弱いネコには強いけど、強いネコが来たら逃げちゃうから、そーつと近付いて」

「いや、シロはどうでもいい。シロを飼っているおばさんに用がある」

「おばさんというより、おばばだよ。この辺じゃザーマスって呼ばれてるけどね」

「じゃ、そのザーマスに、この薄グレのマサ、挨拶しなきゃならねえワケがある」

それからマサネコは、シッポをこまかく左右に振りながら、アイサツのワケを話してくれた。イエネコだったときの話で、アタシは寝転がって聞いてたけど、途中でいきなり飛び上がった。

なんてこと！ 川崎のアパートの大屋っていうのは、隣のザーマスだった。そういえば、不動産業を営んでおりますオッホッホ、なんて言ってたっけ。マサネコのおじさんをタナダテしたとき、ザーマスは白いネコを抱いてて、「どうせお飼いになるなら、

うちのシロのような純血種がよござますよ。いずれれご自分のお屋敷でお飼いなさいまし」なんて言っただろう。そのときシロもマサネコに「いろいろ混ざった汚い雑種だなあ。お前、腹の中にギョウチュウ何匹飼ってるんだ」って言ったんだって。それからザーマスは賃貸契約書とかいう紙を出して「こちらにペット不可と書いてござーましょ」ってやったから、マサネコは書類に書いてあるザーマスの住所を目に焼き付けて、大きくなって強くなって、このばばあにスプレーかけまくってやるって心に誓った。

「オレたちネコは、自分の境遇を嘆いたりしねえもんだが、あるときばっかりは世間の不条理が身にしみたぜ。おじさんは典型的な階級差別とか言ってたが、そんな難しいことあオレにゃあわからねえけど、人やネコを悲しい目にあわせるなあ良くねえ。良くねえことして、それが当然だって顔してる人間を、もし、おてんとさまが許すんなら、ここは薄グレのマサ、男一匹、義理を果たさにおさまらねえ。なあタマさん、オレの言うこと、間違ってるか？」

マサネコがあんまりかっこいいんで、アタシは何

「もう間違いないねえな。川崎に乗ってきたクルマにちげえねえ」

マサネコはザーマスの家を見おろして、苦難苦節の優曇華の花とか、百年目とか、またよくわかんない独り言を言ってた。そのとき、アタシは別に眠くはなかったけど、ちよつとあくびしちゃったの。

「おや、眠そうだね。オレもイエネコのころはよく寝たもんだ。とんだ邪魔をしちまったなあ。勘弁してくれ。家に入って寝たほうがいい。オレの仕事に付き合うことあねえからな」

アタシは、それもそうだ、おうちに入って寝ようと思つて、あつ、思い出した。いつもみたいにミッチャンのベッドでスヤスヤ眠れるなら悩みはないんだ。今夜はそうもいかない大問題があるじゃない。だからお屋根に登ったんだっけ。どーしよーかなあ、マサネコと朝までここにしようかなあ、もう一回だけ想像もつかない隠れ場所を探そうかなあ、なんてウジウジしてると、

「なんだか寝床に帰りづれえわけでもあるみたいだな」ってマサネコが言った。そうだ、マサネコに相談するのもいいかもしれない。苦労ネコだから名案

て言つていいかわかんなかった。「い、いえ、正しいと思いまーす。正直言つて、全部はよくわかんないけど、マサさんみたいにきちんとしたネコは、そんなにいないと思いまーす」

「そうか、それを聞いて安心したぜ。オレは頭は良かあねえが、タテヒキだけは強いって言われてんだ」

またわかんないことを言う。タテヒキってどーゆー意味？ マタタビのことかなあ。外国語知つてもダメだ。もつと日本語の勉強しよう。

マサネコは少し首を伸ばして「あの建物は車庫だろ？」って言つて、すぐ下を差した。

「そうよ、あそこにザーマスの白いベンツが入ってる」

「ベンツってなあ大きいクルマか？」

「うん、うちのよりずっと大きいよ」

「鼻面にネコの口みてえなマークが付いてるやつか？」

ん？ネコの口？ネコの口が前に付いたクルマを想像しちゃった。かなり怖いよね。けど、ああ、わかった。エンブレムのことでしょ。

「そう、ネコの口マークだよ」

のひとつくらいあるかもしれない。

で、アタシは大体の話をして、

「だから、アタシはみんなが出かけるまで、想像もできない場所に隠れてたいの。想像できない場所って、どこかなあ？」

マサネコは、何が面白いのかニコニコして答えた。「ネコの痛みつてもものは、そのネコにしかわからねえ。そりゃたしかだ。隠れたい気持ちもわかるけどな、ここはひとつミッチャンといっしょに旅してみちゃあどうだろう」

「アタシ、旅行はイヤなの。ぜったーいにイヤなんだから。そう決めたからそうなんだよ」

「ふうん、ま、決めたならしょうがねえ。で、身を隠すつてわけだね」

「うん、本当に隠れるんだ」

「だがな、あんたが言ってる想像もできない場所なんて、めったにねえぜ。だって、そりゃ、あんたが考えつかない場所ってことだろ」

「だから困つてるのよ。考えつかなくて」

「じゃ、こうしよう。あんたが一番隠れたくねえ場所はどこだ？ そういう場所に隠れりゃ、ミッチャ

ンだって、まさかそこにゃあ隠れねえだろうって、探さねえと思うぜ」

「そうかあ！隠れたくない場所に隠ればいいんだ。とつても名案だね。それなら考えられるよ」

というところで、アタシはマサネコにお休みって言って、お屋根からおりた。ネコ道からおうちに入って、ネコ元気をちよつと食べて、居間のソファアに座って考えた。さあて、一番隠れたくない場所ってどこだろう。

これ、簡単だと思ったけど案外むずかしいなあ。キツチンの流しの中は、入ったことないけど、きつと嫌いだと思う。水浸しだからね。それに隠れられる場所じゃないし。ヘビが出る味噌蔵も、ヘビさえ出なければ特別にイヤってわけでもない。どこかないかなあ。おうちの中をいろいろ考えたけど、あんまり嫌いな場所ってないのよねえ。好きな場所ならいっぱいあるけど。困ったなあ。

あたまがボーッとしてきたから、別のことを考えよつと。そうだ、バカで威張り屋のシロがもうすぐマサネコにボコボコにされるかもしれない。マサネ

あれ、アタシいま何て言った？カゴだよね。おうちにあるもので一番嫌いなものは、あのカゴだ。アタシが嫌いなことはミツチャンもよく知っている。そうよ、カゴ！想像もできない隠れ場所、みつけた。

カゴがどこにあるのか、アタシは知ってるよ。階段の下の物入れの中の、上の方の棚。知ってないと怖いでしょ。探検に入ったら、いきなり天敵が目の前なんて、ベランダでカラスに会ったときみたいになるから。カラスも大っ嫌い。アタシより大きい鳥なんて信じらんないし、鳥って、なに考えてるかわかんないじゃない。ミツチャンは、カラスはとつても賢いって教えてくれたけど、本当かな？賢いとか頭がいいとかって人間が言ったとき、それは人間から見てのことだよ。ネコ的にはカラスなんて、うるさくて凶暴なだけだと思うよ。まあ、カラスの話はいいか。

アタシが階段の下の物入れにそーつと入ると、いつものところに天敵のカゴがあった。やつぱり入るのヤだな。入ったところで、別に何が起きるわけでもないのは知ってる。でもヤなんだ。わあ、気持ち

コのことだからケガはさせないと思うけど、ネコパソチの一発くらいは食らうだろうな。見てたいな。シロって、けつこう意気地がないのは知ってる。パパにつまみ出されたときにも完全にパニくってたもんだ。だけどあるとき、アタシは死ぬほど怖かったよ。シロに殺されるかと思った。生まれてから今まで一番怖かった。いつもは怖いことなんか一んにもないから、ちよつとでも怖いと、とつても怖く感じちゃうのかもしれない。他のネコはどーなのか知らないけど。

そういう恐怖の体験っていうの、ほとんどないなあ。ミツチャンとウソのケンカするけど、そんなのもちよつとも怖くないし：あつ、もうひとつ思い出した。まだ小さいときにカゼみたいなのにかかって、病院に連れて行かれたつけ。あるときも怖かったな。すつごくヤだった。プラスチックのカゴに入られて、底っていうか床っていうか、つるつるして立ってられなくて、お医者さんはいきなり注射打つし、病気で気持ち悪いし、もう最悪だった。あれ以来アタシにとつて、あのプラスチックのカゴは天敵なんだ。見るのもイヤ、入るなんて考えられない。

悪くなりそ。目が回ってきたよお。こういうのをトラウマっていうんだろうね。怖くてしよーがないから、またちよつと別のことを考えちゃおう。

人間の中にもアホは大勢いるみたい。こないだ、道歩いてる大学生風の男が、このバイト、トラウマになりそう、なんて言ってた。大丈夫だって、あんたみたいに鈍感で無教養な動物はトラウマとは無縁だって。フロイドなんて名前も知らないでしょ。アタシは夢判断だけは全部読んだ。それ以外のフロイドさんの本は読んでない。だって、あんまり強引で、きつとこの本はフロイドさん自身が夢に見たことを書いたんだろう、つて思ったからなんだ。でもさあ、半分くらいは正しいような気もしてる。教えてあげる。ネコはね、上部意識と下部意識が混ざってるの。簡単に言えば、エゴとイドが同居しちゃうって混ぜこぜなんだ。どれがエゴで、どれがイドかは、人間と同じでわかんないけど。だからきつと、シラフでもとんでもないことしちゃうんだろう。ときどき自分のやつてることがわかんなくなったりする。それがネコよ。

ほら、別のことを考えると落ち着くでしょ。オモチャ

のネズミを追つかければもつと落ち着くけど、ここにはないみたいだからいいや。

よし、カゴに入ろう。アタシは鼻の周りをヒクヒクさせて、半分開いてたカゴのドアから中に入った。思ってたより狭いなあ。そうか、病院に行ったとき、アタシはまだチビだったからとつても広く感じたんだ。うん、このくらしいの狭さなら我慢できるかもしれない。快適ってわけじゃないよ。横の壁に細長い穴があいてて外から見られそうだから、隠れてる気にはなれないけど、お医者さんの注射がフラッシュバックするほどひどくないから、とりあえず座ってみましょ。

最初に、ドアに向かって箱座りしてみたの。落ち着くようで、どこか無理な感じ。体の横と壁の間に隙間があって、こういう半端な空間って、ネコはみんな嫌いだよ。隙間がない場所はないかな。試しにカゴの一番奥に行って丸くなってみた。ちよんどのいじやない。床にふわふわのクッションがあれば文句ないけど。どっかから誰かの冬用のセーターでも引っ張ってこようかな、なんて思ったら、アタシは猛烈に眠くなってきた。マサネコはすごいなあ。

ぜんぜん眠くなさそうだった。アタシが寝てる間にスプリーしに行って、捕まっちゃったらどうしよう。助けに行かなくちゃ。でも眠い。とつても。いいや、眠っちゃおう。目が覚めたときにはおうちには誰もいなくなつて、アタシ一人のお留守番の始まりだ。気持ちいいい。

ミツチャンが叫ぶ声にびっくりして、アタシは目を覚ました。とつても興奮してママを呼んでる。

「ママ！ タマがちゃんとケージに入って待ってるよ。あんなにスネてたのに、やっぱりタマも行きかけたのね。タマ、あんたはそこにいなさい。このまま連れてってあげるから」

なに！ どーゆーこと？ アタシはワケがわからなかった。カゴの中なら想像もつかないから、見つかるはずなかったのに、何が起きたの？

「タマ、えらいね。お出かけ用のケージがわかるんだ」お出かけ用？ えっ、冗談でしょ？ ぜんぜんそ

んなつもりじゃないんだけど。お願い、出してよー。これは誤解なの。ものすごい誤解。違うんだってば。アタシはえらくもないし良いネコでもないから出し

てよー。わぁ、ケージごと持ち上げられて玄関だ。カバンや荷物の隣。ケルマのドアが開いてる。これっでもう絶望的に最後っていう感じ。ヤダヤダヤダヤダ、ヤダーッ。



3：だからあ、旅行はやだあ

アタシはギャアギャア騒いだ。もうどうにもならないのはわかるけど、観念なんか絶対にしない。ネコは往生際が悪いんだ。カゴの間からおうちのお屋根が見えて、マサネコの耳の先がチラツツと見える。わーい、マサネコ、助けてよお！って叫んだら、耳がピクツツと動いた。それからすぐ、耳は見えなくなっちゃった。

ミツチャンが「居心地が悪いのね」ってバスタオルをアタシの下に敷いてくれた。そーゆー問題じゃないんだよ。アタシはギャーギャー言いながらタオルの下に潜り込んだ。こんなのヤだ。鳴き止んでなんかやるもんか。

パパが「それじゃ行くか」って、クルマを動かしたんで、アタシの体はフワツツと揺れて、いやだあ、この感じ、地面がなくなったみたい。気持ちわるう。

アタシは思いつきり大声でギャンツツて叫んじゃった。うわつ、ノドが痛いよ。これ、とつてもまずい。どっかに着くまで騒ぐんだから、今からノドが痛いのは困る。そうだ、鳴き方を変えよう。今度はニャオーワって鳴こう。夜中にこの鳴き方してると、必ず誰かがやめろって言いに来る。きつとうるさいんだろうな。ニャオーワ、ニャオーワ、ニャオーワ、アタシは純粹に抗議しまーす。完璧な抵抗でーす。どうこうしろっていう要求なんか、今はもうない。戦略なき戦術っていうの？なんかの本で、具体的な要求のない闘争は確実に破綻する、とか書いてあったけど、そんなの知らないよ。ネコは正直に日和見だから、我が身が置かれた状況にただ反応するだけ。いいなら寝てるし、悪ければ逃げる、逃げられなきゃ騒ぐ。ニャオーワ。

あなたがイライラするのもタマが鳴くのも勝手ですよ。どっちかが我慢しなくちゃ。大体いつもあなたは世界中が自分の好きになるって考えてるじゃない。思い通りにならないことだってあるんだから」

ほーら始まった。ミツチャンは完全にタヌキのモード。もつとケンカが大きくなって、ムチャクチャ険悪になって、帰りましょ、つてならないかな。ニャオーワ。「世界は関係ないだろ。うるさいからうるさいって言うてるだけだ」

「あつ、そ」

パパの論理って、すごくネコの。理由なんか知らないんだよ。ヤだからヤなだけ。アタシにもよくわかる。ニャオーワ。パパとママ、いつもケンカになるんなら、アタシとシロみたいに、なるべく会わないようにすればいいのに。いっしょに旅行なんて、どっから見たって間違ってるよ。二人とも、まだ未練があるのかな。正しい生き方について、一度マサネコと話し合ったほうがいいよ。ニャオーワ。

それからパパとママ、奇妙に静かになっちゃった。なんか、アザミのイガイガが空中を飛んでる感じ。

そしたらパパが「おい、タマを少し静かにさせる」って言った。多分ミツチャンに言ったんだろう。でも、答えたのはママで「しようがないでしょ、ネコなんだから。初めて乗るんだし、クルマが嫌いな

のよ」ってやり返した。これ、危険な兆候。いつもの始まりかたのパターン。ミツチャンもヤバツツて感じて、どっちの味方にもなりたくないから、いきなりタヌキ寝入り。タヌキって、いきなり寝ちゃうのかな。会ったことないからわかんない。ニャオーワ。「鳴いてる理由を訊いたんじゃない。うるさいんだよ」

「理由があるから鳴いてるのよ。鳴くなつて言ったらネコは鳴くわよ」

そう、そのとおり。ママ、わかってるじゃない。「だから、どうでもいいから鳴くのをやめさせろ」
「どうやって？ 説得するの？ ネコに言葉は通じないでしょ」

いや、それは違いますよ。全部わかってやってるんだ。ニャオーワ。

「うるさくてイライラする。なんとかしろ」

「なんとかって、タマの首でも絞めればいいの？」

ママの「あつ、そ」のあとは大体こういう空気になるんだ。ミツチャンはタヌキだし、アタシの声だけすぐく大きく聴こえる。ニャオーワ。あーあ。ニャオーワ。

広い道に出て、パパは左に曲がろうとしてるみたい。そしたらママが「中央道はいやですからね」って、ぶすつと一言。「運転するのはオレだ」ってパパも唸る。えーと、アタシとしてはどっちもヤですけど。どっちも使わないっていう選択肢はないのかなあ。ニャオーワ。

「八王子までの慢性渋滞、忘れたみたいね」ってママ。そしたらパパ、いきなりクルマを右に曲げて、隣のトラックにぶつかりそうになった。アタシはカゴの中でカチカチに固まった。おつかないよー。タヌキのミツチャンも目を開けた。

「なあにやっつてんのよおー!」ママが叫ぶ。

「関越で行くんだから文句ないだろ」ってパパ。

「あつ、そ。命がけね」

ねえミツチャン、このクルマすごく危ないよ。死んじゃうかもしれないから、ここで降りようよ。まだ歩いて帰れるから。ミツチャン、いっしょに帰ろ

うよお。ニャオーワ。

だめだ、チラッと一瞬目を開けただけで、ミツチャンはまたタヌキ。アタシは餓いネコだけど、ミツチャンは子供だから逃げ出すわけにはいかないのかもしれない。つらい立場だね。ニャオーワ。

で、またアタシのニャオーワだけが聴こえる不思議な沈黙。道にはクルマがいっぱいいるから、ほんとにノロノロしか進まない。グーグルで調べた長野はとっても速かった。こんなノロノロじゃ、いつまでたつても着かないよ。ここには食べ物ないし、どーするのかな。ニャオーワ、ワ、ワ、ワ。

そういえばアタシはおなががすいてる。あのー、みなさーん、アタシはネコ元気が欲しいんですけど。それと、お水も飲みたいんですけど。もしもーし、みなさーん：：だめだ、通じない。

鳴き叫ぶのもくたびれてきた。こんなに相手にもされず反応もなしじゃ、まるつきりバカみたいだよ。こういうのをネコ砂に釘ついでいのか。一人で遊ぶのは好きだけど、一人相撲は趣味じゃない。あーあ、観念しようかなあ、つて隣を見ると、ミツチャンはタヌキが本物になってスヤスヤお休み。こ

んな険悪な場所によく眠れるね。将来、強靱な精神力の偉大な人間になるよ。アタシが保証する。でもミツチャンの特技は寝ることだから、これで普通なのかもしれない。いつもテレビ見るかネットやってるか、それとも寝てるかだもんね。きつと前世はネコだったに違いない。それにしちゃ本は全然読まないから、生まれ変わって退化しちゃったんだろう。

ご主人につられてアタシもすごく眠くなってきた。叫びすぎた？ちがうよ、夜中にずっとマサネコと話してたからだよ。だからこんなに眠いんだ。タオルの下にもっと潜って丸くなると、かなりいい感じ。眠いなあ、とつても。体が床に溶けちゃうみたい。今まで気持ち悪かったクルマの揺れも、なんか気持ちいい。んーん、脱力だなあ。タオルの下でノビてよう。

パパとママの声で目が覚めた。制限速度がどーとかこーとか言ってる。パパが「カメラがなければいいんだ」って言う。あれっ、アタシのカゴの隣にミツチャンのクールピクスがあるよ。カメラあるじゃない。ママが「あつ、そ」って言って、話は終わった。

なんだかよくわかんない。きつとネコには測り知れない話なんだろうね。どっちにしても、勝者のない闘争ほど不毛で消耗するものはないよ。ハタ迷惑なだけ。おかげで起こされちゃったじゃない。クルマはフワフワ飛んでるみたいに走ってる。カゴの中でも感じるよ。速いなあ。これが高速道路っていうんだね。

お外の景色も眠る前と全然変わってる。広い原っぱがずーつと続いてたかと思うと、登ったら下りてこれないような大きな木がゴシヤゴシヤ生えてたり、クルマがいきなり土管みたいな穴ぼこに入っで真っ暗になったり。なにこれ？窓の外がテレビの絵みたいになってる。こんなテレビの中みたいな場所も世界にはあるんだ。アタシはちよつと面白くなってきた。よく見ると道路の脇に生える葉っぱにカマキリがいたり、木の枝にリスが見えたり、大好きなネコじゃらしにトンボが止まっていたり、わーい、ワンダーランドだあ。

ってキョロキョロしてるうちに、見るものが道路の脇の砂や土ばっかりになってきた。あそこに降りたいたいなあ。クルマを止めてくれないかなあ。一生

のお願いだから、ちよつとでいいからお外に出してほしいんだよなあ。わかる？ アタシの言いたいこと、ねえ。

オシッコがしたくて我慢できないんだよお！ どうにもこうにも、もうダメってとこまできちゃって。きのうの夜はいろいろ忙しくて、トイレに行つてなかった。今朝はいきなり逮捕されてクルマに乗せられた、ネコは辛抱強いけど、程度ってものもあるんだ。

じゃ、ここでする？ それができれば苦労はないよ。アタシはネコだよ。ネコは恥ずかしいことができない動物なの。ん〜ん、どうしたらいいのよお。

タオルの下でもぞもぞ動いてみたけど、もう末期的に限界。ねえ、アタシのトイレ出してよ。クルマのどっかにあるでしょ。ねえねえミツチャン、トイレだよトイレエえ。って言ってみたら、タヌキのミツチャンが、半分寝ぼけて「タマ、なあに。こっちにおいで」って、アタシをカゴから引きずり出して、ひざの上に寝かせてくれた。いいんだか悪いんだか、まずまずオシッコ漏らせなくなっちゃった。こんなことならカゴの中で漏らしとくんだった、なん

「あら、タコヤキなら私も食べていいかな」アタシはタコヤキいらなけれど、止めてくれるなら大賛成。たくさんクルマがある広場の、その真ん中あたりにクルマは止まった。あのお、荷物の中からトイレ出してほしいんだけど。もう限界通り越してんだけど。ニヤオニヤオ…：ダメだ、ママには通じない。「ミチ、あなたもタコヤキ食べる？」

クルマが止まったから、ミツチャンは安心して本格的に眠るつもりみたい。「あとでね。あたしは寝る」って、シートに横になっちゃった。えーッ、どーしたらいいの？ トイレ出してほしいんですけど。「じゃ、タマをみてね。エアコン切れるから、窓少し開けとくね」って、パパとママは向こうの建物のほうに歩いて行った。

なんなのよお！ 「タマ、おまえも行くかい」くらい言ってもいいじゃないの。トイレも出してくれなくて、相談もなしにクルマに居残りって決めるなんて、そんな仲間はすれにするなんて。よーし、そーゆーことなら蔵小路タマ、自分のことくらい自分で解決しちゃうんだから。

そーつとお外を見ると、ずっと向こうに木があつ

て思つたら、もつと危険な感じになった。アタシはミツチャンのひざの上でもぞもぞ動きながら必死に我慢してた。「どうしたの。落ち着きなさい」って言って、ミツチャンはまた眠っちゃった。あーあ、ネコは孤独だ。このまま何も理解されずに、お腹が破裂して死ぬんだろうな。今はアタシ、何も決められないから、流されて生きて、流されて死ぬよ。マサネコの言ったこと、やつとわかった。これがネコの生涯なんだ。おかあさん、先立つ不幸をお許しください。アタシはそれほどこい娘じゃなかったし、これから恩返しすることも特に考えてないけど、とにかく先立つちゃうんだから…：。ミツチャンのひざで漏らすとやだから、誰にも気付かれないように、またカゴに入つてタオルの下に潜り込んだ。

あれっ！ クルマのスピードがゆっくりになって細い道に入つてく。

「いきなりどつちに行くのよ」ってママが言ってる。「決まつてるだろ。サービスイリアに入る。腹が減つた」

「私はまだ減つてない」
「このタコヤキはうまいんだ」

て草も生えてる。あそこならオシッコできる。走つて行つて走つて帰つてくれればいい。知らない人がいっぱいいるけど、怖いなんて言つてらんない。よし、行こう。

窓のガラスは、アタシが通り抜けられるくらい開いてた。シートに飛び乗つて、ガラスに手を掛けて足をジタバタさせたら、どうにか頭が外に出た。そのまま思い切つて飛び出すと、大成功、アタシはコンクリの地面に立つてた。着地のときにちよつとコケたので、誰かに見られたかな、って思つて周りを見回した。誰も見てなかったみたい。やったね！

アタシは木に向かつて全速力で走つた。人がいっぱいいて何度もぶつかりそうになったけど、自分でも美しすぎるランニングバック風のカットバックで、きれいによけて走つた。

木の下から少し奥に入った草の上でオシッコ用の穴を掘ろうとしたら、あれえ？ 土の地面つて、こんなに硬いの？ ネコ砂の何十倍も硬い。それに土がツメの間に挟まって気持ち悪いったらない。ここに穴掘るの？ そーいえばアタシ、生まれてからこれまで、ネコ砂のトイレでしかしたことなかったん

だ。えーい、もーいよ、間に合わないからここでしちやおう。穴が浅くたって、たくさん土をかければいいんだから。こういうのを緊急避難的超法規的措施っていうんだ。で、アタシはとつても浅い穴に、これは仮設トイレだと思いつながらオシッコをした。

ふー、気持ちいい。さっきまでの気分がウソみたい。お腹が破裂して死んじやうのはナシになったから、先立つ不幸の予定はキャンセル。おかあさん、アタシは生きてるよお。

問題解決、気分爽快でゆっくり地面を見ると、わあ大変だあ。オシッコが川みたいにな、ずーっと向こうまで流れてる。ここの地面は吸い込まないんだ。どーしよ。これ全部に土を被せるの？

アタシは一生懸命あたりの地面を掘った。いくらやっても土はほんの少ししか川にかからない。近くの草を足で蹴ると、葉っぱが飛んで川にかかる。うん、こっちのほうが早いかな。お外でオシッコするのがこんなに大変なんて、ほんとに思いもしなかったよ。

ガサガサバサバサやって、このくらいでまあいいか、つてなつたときには、アタシはものすごく疲れ

てた。さあ、ミッチャンのところに帰ろう。

ん？どつちだつて。アタシのクルマはどこ？来たときは木に向かつて走つたからいいけど、今は目印がなんにもない。あたり一面がクルマで埋まつてるだけ。

パニクリながらアタシは走つた。走つてミッチャンのクルマを探した。だけど、クルマはネコ砂みたいにゴチャゴチャあるし、どれも似たようなワゴンで、見分けなんかつかない。クルマもネコみたいなのに、いろんな変わった色だつたらいいのにね。ここにあるのは同じ形で同じような色ばかり。うちのクルマ、どこにあるんだろう。走れば走るほどわかんなくなつてく。もしかしてアタシ、迷子になったの？

ミッチャン、返事してよお。目が真っ黒くなつてるのかな、景色が明るくて白っぽくなつて、とつても見えにくい。それでもムチャクチャに走つて走つて走り回つた。

もう動けないよ。ついにアタシはコンクリの上に座り込んでしまった。息しても空気が入ってこない。ああどーしよう。クルマ、どうして見つからないんだらう。パパかママ、アタシがいけないのに気づいて

くれないかな。ミッチャン、まだ寝てるのかなあ。タオルの下なんか潜り込まなきゃよかった。

広場からどんどんクルマが出てく。入つて来るだけ出てくん。すごいなあ、たくさん走つてる。あれ、アタシのクルマだ！走つてる！あつちに向かつて走つてる！ミッチャーーン！



4 : ゴゴゴ、ゴゴゴ

コンクリの広場に座り込んでたらクルマが来て轆かれそうになった。そうだよね、ここはクルマが止まる場所だ。アタシはやつこのことで立ち上がって、オシッコした木の下まで歩いた。頭の中も見える景色も真っ白。今、ネズミのオモチャがあっても遊べないだろうな。

すっかりしなきや。蔵小路タマは他のネコよりちよつとだけ賢い、つてミツチャンが言つてた。賢いならボーツとしてちゃダメだ。どーしたらいいか考えよう。とりあえず大変なことが起きたのだけは本だから。

木の下に座ってみると、ここが安全地帯なのがあった。草より体を低くしていれば人間には見られない。入つて来るクルマはよく見える。そうだ、ここで待つてよう。ミツチャンはすぐ迎えに来てくれ

に、：：アタシに、：：眠くなったみたい：：すごく眠いよお。どーしよー、

気がついたらアタシは日陰の草の上で丸くなって眠つてた。やつぱりアタシはネコなんだ。犬みたいに待つてられない。おなかもすいたなあ。ネコ元気、一口でいいから食べたい。冷たいお水も飲みたい。でもここにはなあんにもない。

もう一回クルマを見張る？アタシの中で「もうよそうよ」つて声が聞こえた。ホントによしていいのかなあ。よしちやおうかな。タロなら何て言うだろう。「ネエサンの仕事は待つことだろ」とか言うかね。マサネコなら「流されるか決めるか、どっちかだ」つて言うだろうな。こーゆーときは他のネコや犬が何て言うかはわかるけど、カンジンのアタシ自身がどーしたいのか、ぜーんぜんわかんない。

でも決めた！アタシはここで待つ。ミツチャンを待つ。死んでも待つ！悲壮感漂つて、必死の形相で待つのはネコの柄じゃないけどき、とにかく待つのが一番いいみたいなきがする。だつて、アタシはミツチャンと離れるのイヤなんだから。

るはず。はぐれた時は、どつちか片方は動いちゃいけないつてボイスカウトの本に書いてあつた。ここで見張つてよう。待つてよう。

アタシは待つた。ずーつと待つた。少し落ち着いてくると、すごーく怖くてきみしくて、とつても情けない気分なのに気付いた。どーしてこーなつたんだらう。ネコは反省はしないけど後悔だけはする。夢だつたらいいのに。目が覚めたらタロが吠える声が聞こえたりして。そーならいいな。

入つて来るクルマを全部見てるけど、どれもウチのクルマじゃない。いつ来るのかなあ。ナンバーに品川つて書いてあると、そのたびにドキツとする。でも違うんだよなあ。忠犬ハチ公は偉かつたなつて、しみじみ思った。何年も待つてたんでしょ。アタシにできるかな。何年も、ここで待つてなつて、アタシ

夕方になつてもミツチャンは来なかつた。アタシは正座したり箱座りしたり、眠くならないように気合を入れてクルマを見張つてた。もう何千台もクルマを見た。泣き言は言わないよ。言う相手もないけど。ちよーどいいのは、疲れすぎておなかがついたのお水を飲みたいのも感じなくなつてること。ほら、ネコだつてできるんだ。待つたのは犬だけの特技じゃない。

暗くなつて、クルマがライトを点け始めると、ナンバーが読めなくなつてきた。ライトのギラギラにネコはとつても弱い。おまけに雨も降つてきた。濡れるのやだな。タオルもないし。アタシは箱座りして、ノドだけは濡れないように頑張つて、入つて来るクルマを見てた。シツポの先までびしょびしょになると、すごく寒くなつて、体が勝手に震える。目もよく見えなくなつてきた。ミツチャン。

正直言つて、憶えてるのはそこまでの。次に気が付いたとき、アタシは全然知らない場所で寝てた。誰かが来た気配がして、黒い大きな影が目前にいきなり出た。わっ、一体何なのよお。アタシは

ギャツと叫んだみたい。

「やあ、食べ物を持ってきたよ」って影が言う。よく見るとネコだ。とっても大きい。でも、怖い目じゃない。足元にはタコヤキが一個あった。アタシは怖がるのをやめた。

「ありがと」って言うてみたけど、実はアタシ、粉モノは得意じゃないのよ。っていうか、食べれないの。

「食べなよ。今ニヤニラしてきたところだから腐つてない。出来立てだ」大きなネコはあたりを見回してから座った。

困ったなあ。せつかく持つてきてくれたのに、食べれませんかと言えない。えーい、郷に入ればミズまで食えだから、死ぬ気になって食べてみよう。なるべく匂いがかがないようにしながら食いついてみた。あれっ、おいしい！これ、ホントにタコヤキ？粉モノ？

「おいしいだろう。このサービスエリアのタコヤキは有名なんだ。一気に食べたね。少しは元気になっただかな？」

アタシは口の周りをペロペロなめて、ついでに両

くて、とってもおいしいお水だ。飲みながら、きのうの夜アタシがどーなっちゃったのか知りたくてしよーがなかった。だけど、恥ずかしいことだったら聞かないほうがいいかもしれない。

「安心して飲めるのはこの水だけ。他にもゴミ集積所やトイレの裏にも水があるけど、洗剤とか殺虫剤が入ってるからやめたほうがいい」って、先に飲み終わった大きなネコが言った。アタシは首を小さくうなずかせてお水を飲み続けた。

フワーツ、お水が体中に行き渡って、一瞬で毛替わりしてみたみたいなきもち。思わず「気持ちいいイイ」って叫んじゃった。

「それはよかった。ところで、キミはタマっていうんだね？」

あらやだ、どーして知ってんのかしら。首輪も迷子札も付けてないのに。

「はい、タマです。どーしてわかったの？」

「夜明け前の大活躍で、このあたりじゃキミの名前はもう有名だ。本当に憶えてないの？」

ホントもウソも、大活躍って、アタシ何したの？「憶えてないです。まったく記憶にありません。完

手を使ってタコヤキの匂いを顔に付けた。とってもいい感じ。「うん、すごくいい気分。ごちそうさま。それとお、できればお水も飲みたいんだけど」

「ああ、いいよ。ついておいで」

お外は朝で、もうお日様が出てた。大きなネコについて歩き出して、うしろを見ると、アタシがいたのは建物とエアコン室外機の狭い隙間だった。いつ、どうやってあんな所に潜り込んだんだろう？

「きれいな水があるのは少し先だよ。我慢できる？」

「うん、アタシ元気」本当に元気になったみたい。「それは良かった。夜中のキミは死にかけてたから心配したんだ」

「えっ、アタシ、どつかで倒れたの？」

「うん、最後だけちよつとね」大きなネコはニヤツと笑って振り向いた。

「わあ、全然憶えてない。ご迷惑をかけたんじゃないじゃないんだけど」

「迷惑なんて、とんでもない。キミは立派なネコだ。ほら、ここが水飲み場」

近くの水道から流れてくる水がコンクリの流しに溜まってる。水道の蛇口がいつも開いているらし

全にナシ。ねえねえ、頼むから教えて。何したの？アタシ」

「じゃ、話そうか。でも、その前に、僕の名前はギンタっていうんだ、よろしく。で、僕は偶然、最初から見てた。タマさんがクルマの窓から飛び出したところからね」

ギンタはアタシがオシッコをするところも見てた。ウチのクルマが走り出したんで、ギンタは全速力で追いかけてくれた。クルマの前に飛び出せば止まるかもしれないって思ったんだって。危ないよね。だけどやっぱりクルマのほうが速くて追いつけなかった。

それからギンタは、クルマを見張ってるアタシを見張っててくれた。ここみたいなサービスエリアで迷子になったり捨てられたりするネコや犬はけっこう多いんだってさ。だから、なるべく助けたいんだけど、いきなり声をかけて助けると、甘ったれた飼い犬やイエネコは、助けられるのが当然みたいな態度だし、ペットフードを用意しろとか、柔らかい毛布がほしいとか無理を言うから、助けるかどうかは少し見張ってからにするんだって。善意に悪乗りす

る天真爛漫ほど対応に困るものはないってギンタは言った。アタシもそー思う。：：タコヤキを黙って食べて正解だった。ネコ元氣しか食べませんなんて、言わなくてよかった。ホントにね……。

アタシが居眠りしたのも、それから雨の中で夜中まで頑張ったのも知ってた。アタシにもそこまでの記憶ならある。で、ギンタが、もう助けようと思っただとき、アタシは立ち上がって歩き始めたんだって。すぐくよたよたして、下向いて、死にそうに見えたらしい。だけどネコの本能なんだろうね、少しでも安全そうな、建物の裏に向かって歩いてた。それでね、ここからが、みんなが知ってアタシだけが知らない、夜明け前の大活躍ってなるんだけど、なるべくギンタが言ったとおりに書いてみるね。

ちようどアタシがサーブスエリアの通用門あたりまで来たとき、母さんネコのニヤニランと三匹の子ネコが、このあたりでは札付きの性悪犬たちに囲まれてた。犬は五匹で興奮してて、ニヤニランから子ネコを引き離して噛み付こうとしてた。実際、あの五匹は前にもネコを噛み殺してるから、もう絶体絶命。大きなギンタも見てるしかなかった。

も容易に抹殺されるのは皮肉ではなく当然の帰結。野性・獣性・本能の内在を恣意的に無視し続けた現代倫理の破綻は、当初から予見されて然るべきものでした。アタシの命が消滅することで新たなパラダイムが誕生することを祈りつつ、さあお食べー！って大声で叫ぶと、アタシは犬たちの輪の中から飛び上がって、横にあったドラム缶に体当たりした。ドラム缶はドッカーンと大きな音を立てて、その次にアタシはドラム缶にツメを立ててギョッっていうヤな音を鳴らした。

犬たちの腰が引けたところで、今度は近くにあったバケツの山に突っ込んで、全部崩してガラガラガツシャーン。犬たちは驚いて逃げ出した。

ギンタがアタシに駆け寄ると、アタシはゆっくり起き上がって「あしたはどっちだ」とだけ言って眠っちゃったんだって。草むらから出てきたネコたちとギンタが、アタシをエアコン室外機の裏まで運んでくれたっていう。

っていうのがお話なんだ。自分でもぜんぜん信じられないよ。この、おしとやかなアタシが、そんな大立ち回りできるはずないでしょ。ね、そうだ

そこにアタシが割って入ったんだ。「ミツチャンと会えないなら死んだのと同じなんだから、犬の兄さんたち、アタシを食べていいよ。世田谷の蔵小路タマっていうのが名前だから、食べた後でも忘れないでね」って、叫びながら五匹の真ん中に飛び込んだ。

犬たちはびっくりして一瞬ひるんだ。その隙にニヤニランと子ネコたちは脱出して、草むらに隠れてた他のネコたちと合流。残ったのはアタシと、ずうとうしろで見てるギンタだけ。

「さあ、いつでも食べて。イエネコだから肉は柔らかくておいしいよ。骨まで残さず食べてね。残すと掃除する人が迷惑するでしょ。そこんとこ、よく考えて」って、五匹の真ん中でピタッと正座した。

犬たちはどーしようかって顔を見合わせた。そのときアタシはニコニコしてたらしい。ついに犬の一匹が「てめえ、いい度胸だ。本当に食うぞ」って唸った。

「はいどうぞ。蔵小路タマ、いつでもバーバリズムの餌食になります。文明が見当違いに行過ぎた二十一世紀のネコが、プリミティヴな衝動に、いと

よね。：：だけどさあ、ギンタはウソつくようなネコじゃなさそうだし、言われてみればね、右の肩のあたりが痛くて熱いの。どっかにぶつけたみたい。もしかするとドラム缶かも。マメダなら膏薬の貝殻貼るかもしれないくらいに痛いんだ。

「思い出した？ タマさんは親子四匹を助けたんだよ。みんなはスーパークャットだって言ってる」

「そんなあ。恥ずかしいよお。子ネコが助かったのはよかったけど、ぜんぜんまったく憶えてないんだ。アタシの記憶は、雨で寒くて、それでもクルマ見張ってたところで切れちゃってるの。その次がギンタさんのタコヤキ」

「まあいいさ。いずれ思い出すだろ。それに、悪いことしたわけじゃないし。じゃ、よければみんなの所に行かない？」

「みんなって？」

「ここに住んでるネコたち。まだ集会やってると思うよ。すぐ近くだ」

「うん、行く」

オシッコの木の場所に戻って、ミツチャンのクルマを待ってたい気持ちもあるけど、見張りして、ま

た意識不明になって、またスパーキャットになって、今度は犬たちが勝って、アタシがドッグフードになるかもしれないなんて思うと、毛が逆立ちそう、だからギンタについて行くことにした。見張りはもっと元気になってからにしよう。

「ギンタさん、ひとつ訊いていい？」

「いいけど。さん付けはやめようよ。ギンタって呼んでくれないか」

「じゃ、ギンタ、アタシのこともタマだけにしてよ」

「そうか、不公平なものね。いいよ。じゃ、タマ、ご質問は何かな？」

「あのね、アタシの目がヘンじゃなければ、ギンタはものすごく大きくて、アタシの三倍くらいあるみたいなんだけど」

「そのことか。うん、三倍くらいはあるかな。僕の母さんはメインクーンっていう種類のネコで、なんでもアメリカのメイン州ってところ来たんだって。そのネコは大きいのがふつうで、僕くらいが標準体型らしい。僕の今の体重は九キロくらい。人間にもネコにも、よく犬と間違われるよ」

「ふーん、そーいう種類なんだ。すごいね。アメリカ

カのネコかあ」

アタシは、ネットでチャットしてたアメリカのネコが、ギンタみたいなメインクーンで、大きな体でキーボード叩いてるのを想像したら、なんか微笑ましくなっちゃった。

「なにニコニコしてるの？ どこかヘン？」

「ううん、ヘンじゃないよ。かわいいな、って思っただけ」

「かわいい、って、どこか。こんな図体のでかいネコ、かわいくなんかないでしょう。大体、女の子はみんな、何かあると『かわいい！』って言うけど、どうリアクションしていいか、とっても困るよ」

「ごめん。違うの。かわいいことを考えただけなの。気にしないでね。それにギンタは『かわいい』じゃなくて『かっこいい』って思う」

「僕がかっこいい？」

「アタシ的には、この上なくかっこいいよ。手足の先と耳の先がこげ茶で、体は薄茶なんて、シヤムみたいじゃない。それとも思いっきり大きなシヤム。はしっこそうだし強そうだし」

「参ったな。僕が強くないのは明け方に証明したで

しょ。タマを助けられなかった」

「その話はもういいって。どんなネコだって犬五匹の中には飛び込まないもん。多分あのとき、アタシのアタマのネジが三十二本くらい緩んでたのよ。もう元に戻ってるかどうか心配だけど」

「きつとタコヤキと水が締め直してくれたと思う。ついでに油も差してあるはずだ」

「アタシもそんな気がする。気分いいもの」

アタシとギンタは草むらの中を、向こうに見える林に向かって歩いた。お空がキラキラの青で、風も気持ちいい。世田谷の空気より酸素が濃いんだ。ん？

「あ、このここはどこなんだらう？」

「あのさあ、ここってどこなの？」アタシは立ち止まってギンタに訊いた。

「どこって、サービスエリアの近くだよ」

「そーじゃなくて、なに県とかのこと」

「ああ、それなら長野県だ。長野の真ん中あたり」

わーい！長野だ長野！アタシのルーツ！銅像があるんだ！アタシは嬉しくなって、そこらへんの草を引っ掻いたり足で地面をキックしたりした。

「ねえねえ、川があるでしょ？千曲川。アユって

うお魚がいる川」

「千曲川ならあるし、アユもいるけど、どうしたの？」

「クマベーっていうネコ、知ってる？」

「クマベーさん？ いやあ、僕の友達にはいないなあ。知り合い？」

「アタシのおじいちゃん。アユ捕りの名人なんだ」

で、アタシは、おかあさんから聞いた話をした。だからアユを食べたいし銅像も見たい。もしかしたらアタシのイトコやハトコもいるかもしれない。みーんなに会ってみたい、っていうようなことを一気にギンタに話した。とっても興奮してたから、ちゃんとしゃべれたかどうか自信ないけどね。

「そういうことか。わかったよ。落ち着いたらクマベーさんを探しに行こう。アユも食べさせてあげる。約束するよ」ってギンタは言ってくれた。

よかったあ。これで千曲川に行ける。あたし一匹だったら、川がどっちの方向かもわかんない。ミツチャンとはぐれたのは最悪だけど、ここが長野なのはラッキー。

「みんな待ってるから集会に行こう。あの林だよ」

アタシは「うん、うん」って言って、シッポをピン

と上に立てて、ギンタの後をついて行った。



5 : 宇宙アメンテナ

「Sだよ。スーパーのS。黄色と黒のトラシマ模様の真ん中に、赤か青でSがいい」

「スーパーがSで、コンビニはKだね」

「コンビニはCだな」

「いいえ、Kですよ。Kが歩いているマークのコンビニがあるでしょ」

「それ、サンクスじゃない？」

「揺らいで重なってる。不確かな状態です」

林に入るとネコたちの声が聞こえる。話がかんがらがつて、何についての話し合いか、よくわからない。ネコは二匹ならかなり深あく会話できるけど、三匹以上だと大体こうなっちゃう。まるで人間の高校生みたい。

アタシとギンタが入ってくと、おしゃべりはピタッと止まった。ネコは七、八匹くらいいて、みんな

なこつちを見てる。寝転がったり正座したり、全員がラクチンな格好で、視線だけアタシに集まってる。なんか、ちよつと照れくさいな。挨拶しなくちゃ。

「こんにちは。はじめまして。世田谷ネコのタマです」

「よつ、大統領！ヒーローの登場だよ」って言ったのは短毛の白ネコ。名前はユラノスケっていうんだ。

「待って、ヒーローは失礼じゃないか。お嬢さんだからヒロイン」と、チャトラのネコが言う。トントっていう名前で、昔はアメリカに住んでたらしい。

「ヒロイン？そうかなあ。ヒロインって、悲劇に遭ったり王子様に助けられたりするネコでしょ。スーパーキヤットなら、やっぱりヒーローじゃないかしら」ブルーグレーの、アタシより小柄なネコが言った。名前はジャガっていうらしい。

「みんな、静かにしなさい。行儀が悪い。タマさん、

こんな連中じゃが仲良くしてやっておくれ。ワシの名前はケットシーで、この長老じゃ。みんなを代表してお礼を言わせてもらおうよ。ワシも見てたが、あの戦いは見事じゃった。四十年以上のワシの記憶の中でも、巖流島の決闘と並ぶ素晴らしいじゃ。あなたは近頃まれに見るキモの座ったネコと見受けられた。歓迎するから好きなだけここにいなさい」そう言ったのはこげ茶の長毛ネコ。たしかに年寄りみだいに見えるけど、ホントに四十歳以上なのかな。そーならメトセラ並みの長生き。

また誰かがしゃべり始めるといけないから、アタシはすぐに答えた。

「長老さん、みなさん、ありがとうございます。ミツチャンが迎えに来てくれるまでここにいます。だから、よろしく。それと、ギンタさんには話したけど、アタシ、犬たちとケンカしたみたいだけど、まったく全然ひとつも憶えてないんです。意識がない間にやっちゃったらしくて、なんにも知りません」

「意識なかったの？それであの活躍？すごいなあ。あつ、僕はルドルフ。黒ネコだよ。知らない間つて、じゃあ変身したんだね、スーパークャットに。クラー

ケケントみたいだ」

「だから言ってるだろ。変身するならマントが要るんだ。マントがないと本当の変身じゃない。それに、できたらマスクもほしいな。スーパーマンはクラーケケントだつてみんなに知れちゃってるのは、マスクしてないからだよ。タイガーマスクとかスパイダーマン、月光仮面だつてマスクしてるし」

「ユラノスケ、やめなさい、その話はあとでいい」長老が口から泡を出してしゃべるユラノスケを止めた。「ところで、ニヤニランが何か言いたいことがあるようじゃ」

一番向こうで子ネコと遊んでいた三毛が、立ち上がった。こっちに来た。しとやかな美人ネコだ。

「タマさん、助けていただいてお礼の言葉もありません。親子四匹、あのままでは死んでしまうところでした。必ず恩返ししますから、これからもよろしくお願いしますね」つて言つて、何度もお辞儀した。「いいええ、困ります。アタシだつて何したか憶えてないんだから、そんなお礼なんて」

「いいじゃないですか。やつぱりお礼したり、みつぎ物したりは大切だよ。そーゆーときは、はいはい」

て快く受ければいいんだ」つて言ったのは、右足に小さな長靴を履いているネコ。「オレの名前はペロだ。昔、飼い主のピエールを城主にしたことがある。みつぎ物作戦だね。あんときゃ大変だった。ニセの公爵をでっち上げて」

「ペロ！ やめんか。どうもお前ら、集会になるといきなり集団躁状態になる。特に今日は大切な集まりじゃ。知らない人間を相手にするように少しネコを被つて自重しなさい」また長老が割つて入つてくれた。

アタシは長老に軽く会釈してニヤニランさんに「あー、ギンタさんがタコヤキをくれたとき、ニヤニランさんがどうとかつて言つてみたいだけ、タコヤキを取つてくれたのはあなた？ とつてもおもしろかった。ありがとう」つて言うと、ネコたちはクスクス笑い出した。

ニヤニランさんも笑いながら「いいえ、それはギンタさんが取ってきたんだと思いますよ。ここだけのネコ方言なんでしょうね、ニヤニラつていうのは。いろんな食べ物人間からもらうテクニクのことなんです。下からじつと見上げて、かわいらし

くニヤニラつて鳴く方法。私はそれが得意だからニヤニランつて呼ばれるだけよ。よければあとでお教えしましょうか。四十八のパターンがあるの」

「ぜひお願いします。あとでお訪ねします」

するとチャトラのトントが「僕もバスの中でハンバーガーをニヤニラするのがうまくつたよ。まだハリーじいさんと暮らしていたころだ。バスで隣の人からハンバーガーもらつて食べた、そうしたらいきなりトイレ行きなくなつてね。タマさんは小のほうだったろ。僕はあのほう。タマネギが悪かつたのかな。で、ハリーじいさんが無理矢理バスを止めてくれて、そこまでは良かったけど、バスに置いてきぼり食つちやつた。なんかタマさんと似てるね」

「こら、トント。その話はポールマザスキーさんが映画にしてくれただろう。これを読める人は、もう知ってるかもしれない」

「そうかなあ。マザスキー映画はけつこうマイナーだからなあ。えーと、題名は『ハリーとトント』です。レンタルにもあると思うよ」

「えーつ、トントさんは映画スターネコなんだ」こんなところに映画に出たネコがいるなんて、アタシ

は驚いた。

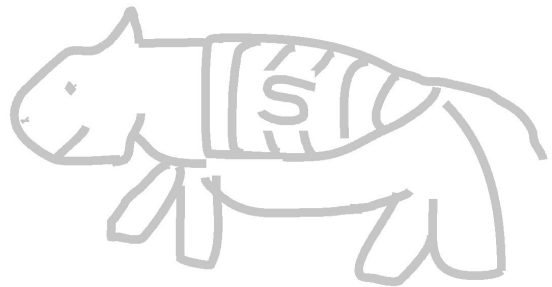
「いやあ、偶然だよ。プロデューサーに『犬みたい
にヒモ付けても歩けるか』って訊かれて、いいよっ
て答えたら映画に出られただけさ」

そうか、今度ミッチャンにヒモを買ってもらおう。

「わかったわかった。あと、タマさんに挨拶してい
ないネコは誰かな？」

「はい。ジャガでえす。自慢は毛の色よ。ブルー
に見えるでしょ。おばあちゃんが半分ペルシャだっ
たの。だから半分の半分の半分だけペルシャで、好
きなものはジャガバター。だからジャガなの。その
他には、えーと、えーと：なに言えぱいの？ そ
うだ、タマさんはヒーローですか、ヒロインです
か？」

「あんな、その話はもう終わってるんだ」またユラ
ノスケが口を挟む。「そんなことより、タマさんに
マントとマスクをプレゼントするから、着てくれる
かな。黄色と黒のトラシマで、デザインはこんな感
じで」って言いながら、地面に描いた絵を見せた。
すぐくへタクソで、カバがスイカに化けたっつい
うかなんていうか。



「それ、もしかしてネコなの？」アタシは思わず訊
いちゃった。みんなも絵を覗き込んで大笑いしてる。
「はい、はい、もうよしなさい」長老が言う。「ネコ
に着物が要らないことくらい、どんな考えの浅いネ
コでもわかる。散歩するチワワではない。私たちは
ネコなのじゃ。タマさん、悪く思わんでくれ。ユラ
ノスケは少々ピントがズレてはおるが、電気知識
にかけては長野のネコでは一番だな」

電気？アタシはユラちゃんがヘルメット被って

電柱に登ってる姿を想像した。どうも似合わない気
がする。足を踏み外して落っこちるか、感電して黒
ネコになるか、どっちかだろう。

「いやあ、一番なんて。ボクにわかるのはアナログ
の低周波だけで、高周波とかデジタルになると」

「こらっ、お前はそれがいかん。どうして高周波は
わからんと決めつけるのじゃ。デジタルも勉強すれ
ば必ずわかる。人間のように自分で己の限界を定め
て、そこから一步も踏み出さんのはネコとして恥ず
かしいと思わんか：：んっ、ワシとしたことがいつ
の間にかユラノスケのペースにハマってしまった。
いや、前五行すべて削除。段落前半デリートオール。
うほっ、ようするにワシは、お前に黙れと言いたい
だけじゃ。あと五分だけ黙っていたら、イヌハツカ
が生えている場所を教えてやろう。どうだ？」

「イヌハツカ！ 黙る。もうなんにも言わない。沈黙
する。寡黙なネコになる。で、どこにあるの？」

「五分後じゃ。それでタマさん。その木の根元で
寝ているのがシュレディングといって、このあたり
では学者ネコとも呼ばれておる。おい、挨拶せんか」
「はい、あの、私、シュレディングです。シュレと

呼んでいただいても、私の同一性は論理実態的に
担保されますから、シュレでいいです」

「はじめまして、シュレさん」

「どうも、はじめまして。シュレディングというの
は昔の飼い主の名前なんです。私を箱に閉じ込めて、
青酸ガスを吸わせたら死ぬだろうという残酷で無謀
な実験を空想してた人で、アインシュタインのおじ
さんもいつしよに妄想していたようです。飼い主の
影響からか、私も哲学とも物理学とも、あるいは宗
教とも思える思索的学問を修めました。その一方、
青酸ガスから始まって、放射線、サリン、梅の種な
ど、広範囲かつ多様な毒物についても独学で学びま
した。いつ、どんなもので殺されるか知らないのは
悲惨であり不条理かつ不合理ですから。それが少し
は役に立って、今では食べられるものと食べられな
いものを判断する係りをやっています。みなさんが
下痢などされないためです」

「はあ、えーと、つまり考える学問と、失礼ですけ
ど毒見係をやってらっしゃるの？」

「非常に的確な洞察と申し上げましょう。もちろん
私の中では両者は量子的に離散したものではなく、

数の連続性のように、なめらかな移行性と関連性を持つているのですが、その辺は斟酌いただかなくとも結構です」

「斟酌も解釈も、アタシには難しすぎて無理だけれど、怪しい食べ物があったらシユレさんにお訊きすることになります。そのときはよろしくね」

「もちろん、喜んでお調べします」

なんか、ややこしいのか簡単なかわかんないネコだ。でも、とつても紳士的で物静かだから、多分実直なネコ柄なんだろうな。ひとこと言えれば、近所付き合いたいネコっていうこと。

「もう五分経ったでしょ？」ユラちゃんと言う。

「まだじゃ、黙っていないとワシの五分は十時間にも十日にもなるぞ。さてこれで、集会にいるネコは全員紹介したな。あと二匹、いや、三匹おるが、現在任務中でな、名前だけ教えておこう。まず、ここにいるルドルフの相棒で、イッパイアテナというのがおる。なんでも、東京で一家を構えておるそうじゃ。気が向いたらやつてくるかもしれない。それからシナモンとムラタというもおる。この二匹は今、サービスエリアでクルマの見張りど、ネコを探しに

来る人間がいなかを監視しておる。タマさん、安心おし。もしもミツチャンが現れたら、すぐに報告が来ることになっておる」

えっ！そこまで考えてくれているんだ。アタシはこのネコたちを千倍くらい、もっともっと好きになった。そして泣きそうになってきた。できるならゴロツとひっくり返っておなかを上にしたところだけど、それだけは我慢した。

「そこまで気を遣ってもらってるって、アタシ知らなかった。長老さん、みなさん、本当にありがとう」

まわりから、いつてことよ、当然だろ、次の当番は私だからね、とか、いろんな声が聞こえた。アタシはもう一回、みんなにお辞儀した。

「さあ、これで今日の集会は終わりにしよう。解散。あつ、タマさんとギンタはちよつと残ってくれるか。ユラノスケ、ちよつとおいで」

長老はユラノスケに耳打ちしながら、林の奥の方向を指したりしている。ユラは目を真つ黒にしながらうなずいていたかと思うと、すごいスピードでどこかに走って行った。

林の中には長老とギンタ、それにアタシだけが残った。まさかアタシに何かくれるんじゃないでしょうね。マントとマスクはヤメになったけど、カシムリとか首輪の話はまだ出てない。そーなら丁寧にお断りしなきゃ。体に何か付けて歩くの、アタシは嫌いなんだ。ヤなんだから。

「さて、まずギンタ。いろいろご苦労じゃった。タマさんはまだここに慣れていない。しばらくの間、一緒にいてやつてもらえないかのう」

「はい、僕もそのつもりです。今回はすぐに旅に出ずに、ちよつと長くいようかと思っていましたからちよつどいいです。それに、タマさんといえるのは楽しいし嬉しいし」

えっ、ホントなの？アタシは顔が温かくなってきた。知らないうちにベロも出した。そーつとギンタを見ると、下向いて右手で地面を掘ってる。長老はわざと気付かない振りしてるに違いない。

「おー、それなら心配はない。よろしく頼むぞ。そこでタマさん、実はワシも今朝の事件を一部始終見ていたのじゃ」

またその話、もういいよ。

「いや、タマさんが、またその話、もういいよと思ってるだろうことはわかる。だが聞いてくれ。ノーワイヤーであるように動けるネコをワシは初めて見た。この観察眼に狂いがなければ、タマさん、あんたは特別なネコだ」

そりゃまあ、眠ってる間に犬とケンカするなんてフツーじゃないのはわかるよ。でも、フツーじゃなきゃ特別っていう安直な論理展開は、ホントに安直だよ。フツーと特別の間には準急、快速、急行があるじゃない。あれえつ、アタシ少し疲れてるみたい。

「そうかなあ。自分では特別ななんて思わないです」

「いや、特別に違いない。顔をよーく見せてくれ」

長老はアタシの顔を真正面からじーつとじーつと見つめた。やだあ、そんなに見ないでよー。恥ずかしいじゃない。

「やはりな……。ギンタ、タマさんのヒゲを見てごらん。ふつうのネコより二ミリは長い。特殊な電波に同調するためじゃ。すべてのヒゲが導波器になってアンテナの一部を構成しておる」

特殊なデンパ？ヒゲがアンテナ？長老さん、な

に言ってるんだろう。

「導波器がこれだけ多素子だとアンテナのゲインはかなり高そうじゃな。どんな微弱な信号でも、深宇宙からの通信でも捕えられるに違いない。さてタマさん、よければ頭のとっぺんも見せておくれ」

顔より頭のほうがいいから、アタシはすぐに下を向いて頭のとっぺんを見せた。

「耳はそのまま。立てたままにしないで。うむ、なるほど。噂には聞いておったが、これほど完璧に特別なネコはおらん。頭の頂点にループアンテナの模様がある。これがアンテナ本体、つまり輻射器にあたる。そして耳が反射器の役目をして、倒しかたで指向性が変わる仕組みじゃ。素晴らしい。見事じゃ。ほれほれするのお」

ほれほれだつて。だけどさあ、頭のテッペンを褒められてもそんなに嬉しくないよ。だいたい、今まで自分の頭のテッペンなんて見たことないから、どんな模様があるのか知らないし。

「どうだギンタ、素晴らしいじゃろう」

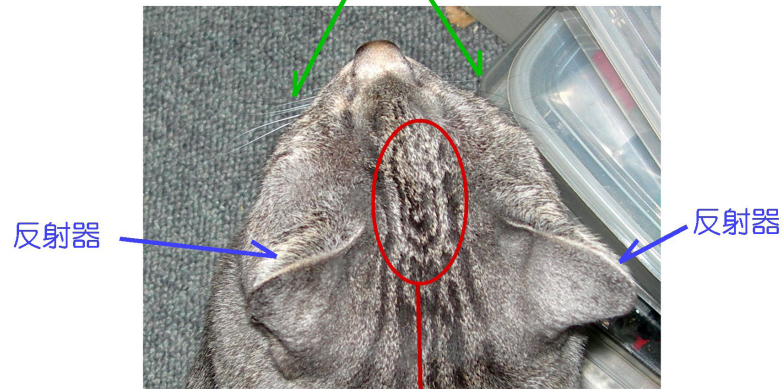
「まあそうですね、たしかに妙な模様があるなあ、なるほど、不思議ですね。うーん」

やだやだ、ギンタまで巻き込まれてる。アタシもなにか言ったほうがいいと思つたから、「あのお、そのアンテナっていうか、ワンセグみたいなものですか?」って、とにかく訊いてみた。これが悪かつたみたい。

「ワンセグ? そんな子供だましの代物ではない。ある重要な信号を強力に受信しておるのじゃ。人知れず、いや、ネコ知れずに受信しておる。その信号はダイレクト検波され、ある種のヘテロダイン操作によって脳波の周波数に変換され、タマさん、あなたの大脳皮質にズコーン!と作用するのじゃ。その結果、タマさんの人格ならぬネコ格が大きく変化するだけではなく、電波の指令に導かれて、知らず知らずに本来の自分とはかけ離れた行動をとつてしまうことになる。つまりネコの魂自体が浮遊し、この世とあの世の境目をさまようともいえる。タマさん、あなたは生きてまま死ぬ特殊なネコじゃよ。冥界からの使者かもしれん」

ヤだあ、そんなゾンビみたいなネコになりたくないよお。アタシは一生正気で生きてたいんだ。デンパだかなんだか、妙なものに支配されたくなんか

導波器



(ループアンテナ)
輻射器

いんだよおおお。ねーねー、こんなオカルト、早くやめてくれない。

「うーむ、完全無欠とはこのことじゃろう。タマさん、もういい、顔を上げなさい。そこで、質問がいくつかある。いいかな?」

「はい、少しなら」また怖いと言われるのかなあ。「では最初に、これまでに短毛の黒ネコと接触したことがあるかどうか教えておくれ」

短毛の黒ネコ? いきなりなによ。まあ、世田谷で見たことあるような気もするけど、話したことなにかないよ。話したことなければ接触じゃないでしょ、きつと。

「えーと、多分ないと思います」

「それでは、これまでに空の上から何か不思議な声が聞こえたことはありませんか?」

ほーら、やっぱり来た。これって、一般的にも一番ヤバい質問でしょう。こんなことマジに訊いたら、ふつうは訊いたほうがよっぽどデンパだつて思われる。

「ありません。飛んでるカラスが鳴いてるのは聞いたことあります」って、軽くかわしたつもり。

「カラスではなく何かの声じゃ。神様の声に近いといえる」

長老さん、タタミかけてきた。またひらつとかわそう。「神様ですかあ、いえ、まだ神様と知り合いじゃないんで、話しかけられたことはありません」

「そうか……。あなたのような特別なネコには、いつ黒ネコが来ても、天から声が聞こえてもおかしくない。そのときには逃げてはいけない。あわててもいけない。常に心の準備をしておくように。今話したように、あなたはこの世とあの世、生者と死者、光と影、天国と地獄、などなど、すべての領域を自由に行き来できる能力を持った宿命のネコなのじゃ。そんなネコには、当然ながら能力に見合った使命も与えられておる。責務じゃ。拒否できない任務じゃ。指令はいつ来るかわからん。備えよ常に」

ということは、その指令とやらが来ると、アタシは死者の国とか暗黒星雲とか、とんでもないところに飛ばされるっていうの？あたしの都合も聞かないで？そんなのがいつ起きるかわかんないなんて、なんなのさあ一体。心の準備？できるわけないじゃない。ホントに来るのかなあ、来るんだらうなあ。

すぐわかる」

「あの一、長老。お言葉ですが、国家機密を扱うエージェントが、見てすぐわかってしまうと困るのではないでしようか？」ギンタがネコっぽく突っ込んだ。「ま、それはな、見るネコが見れば、ということじゃ。細身で短毛の黒ネコが二匹いっしょに歩いておつても、それほど奇妙ではあるまい」

「まあそうですね。兄弟と思うかもしれない」

「そうそう、兄弟じゃ。そう見える」

「それで、長老は二匹組の黒ネコに会ったことがあるんですか？」

「ワシか？ワシはまだ会っておらん。だがな、二人組の人間には会ったことがある」

「そりやそうでしょう。人間の二人連れならサービスエリアにもウジャウジャいますから」

「違うのじゃ。国家機密を扱っておると思われる、黒づくめの二人のことじゃ。その昔、シカゴで出会った。ジェイクとエルウッドといってな、巧妙に偽装したパトカーに乗っておった」

どこかで聞いた名前だなあ。

「中古で払い下げられた、塗装がそのままのパトカー

それって怖いよ、怖い。わあ、シッポの毛がタヌキになってきた。

「長老、タマさんが怖がつてるみたいです」ギンタがアタシのシッポに気付いてくれた。「意味がわからない宿命とか任務とか、いきなり言ったら女の子にはキツイですよ。男の僕にだってキツイと思えます。もう少しくわしく説明してくれませんか」

「怖がらせるつもりはないのじゃ。安心しておくれ、タマさん。つまり、ワシが言いたいののは、ただ、ふつうでは考えられん不思議なことがタマさんの身に突然起きるかもしれないということじゃよ」

「だめですよ。それじゃだめ。変なことが起きるなんて、それだけでも怖いでしょう。しょうがないな。じゃ、僕から質問します。まず短毛の黒ネコって、なんですか？」

「聞きたいか？それでは話すが、ここだけの秘密にしなければいかん。いいかな？」

「いいですよ。ね、タマさん」

アタシはやつと「いい、いい」って言った。

「黒ネコはエージェントじゃ。国家機密を扱っておる。通常は二匹一組で行動する規則だから、見れば

じゃった。誰が見ても中古のパトカーで、だから絶対にパトカーだとは見破られない。これほど巧妙な偽装があるか？」

「ええまあ。それ、シカゴですか？長老はアメリカにも住んでたことあるんですか？」

「そう。今のワシに生まれ変わる五世代前のことだかの。その二人がエージェントだと確信したのは、ジェイクが教会で『光』を見たからじゃ。あれは啓示の形をした通信に他ならん。これ以上明白な事実はありません」

「んーんと、どうもよくわからないんですけど、その人間たちと黒ネコとは、どういう関係になるんでしょうか？」

「わからんか？ エージェントにはネコもおるということじゃ。ときにはネコのほうが工作に向いておる。たとえば張り込みを考えてみなさい。人間が一日中同じ場所に立っておれば不審に思われるじやろう。だがネコなら誰も気にせん。そこじゃよ」

「なるほどねえ。そうかもしれないですが、一日中ずっと同じ場所にいたら、おなががすいてたまらないでしょう」

「ギンタ、国家権力を甘く見てはいかんよ。優秀なエンジニアは特殊超小型携行食料、つまりハイパーレーションをツメの間に隠しておる。これはダング虫よりはるかに小さいが、濃縮したコンニャクでな、マグロ味、ビーフ味といった数十種類が用意されておって、一粒食べれば百メートルダッシュ、二粒なら半日以上活動を続けられる優れたものじゃ。内閣調査局第二別室、通称ニベツがマンナンライフに予算青天井で極秘に開発を依頼し」

「わかりました、わかりました。僕がおなかですく話なんかしたから悪かったんです。もうスパイの食べ物はいいですから、その二匹の黒ネコが、どうしてタマさんのところに来るんでしょうか」

「まだわからんか。困ったヤツじゃ。お前はタマさんのアンテナを見たらう」

「あの模様がアンテナなら、ま、見ました」

「ま、ではない。外宇宙からの秘密信号を捕らえる高性能アンテナじゃよ。いざれタマさんは、発信地不明の信号を受信することになる。国家の危機に関わることじゃ。その内容を黒ネコが聞きに来る。ほとんどが嵐の夜と決まっておって、黒ネコは稲妻と



6 : 応用課程修了

ギンタといっしょにサービスエリアに戻った。お水を飲みながら、今日これからの予定を相談して、夕方また会うことにして、ギンタはユラノスケがイヌハツカをやりすぎてるだろうから、森に捜索に行く、アタシはニヤニランさんにニヤニラを習いに行くことにして、いったん別れた。

駐車場を突っ切るのは危ないよってネコの本能が言ったから、アタシは外側のフェンス沿いにオシッコの木のほうに歩いた。途中で駐車場を見ると、ものすごく広い。クルマがたたくさん停まってる、人間も歩いている。アタシ、あんなところを駆け回ったんだ。信じられない。長老の言ったこと、ホントだったかもしれない。神様が宇宙プロボでアタシを操縦してたのかもしれない：なんて思ったら、また怖くなってきた。

ともにやって来るはずじゃ。そして森の洞窟へ行くとタマさんに伝えるじやろう」

あれえ、これもどつかで聞いたような観たような。「よいか、充分な上に充分慎重にコトを運ばねばならん。稲妻への対応を間違うと別の世界に飛んでしまい、獰猛な犬たちと戦うことになる。ワシが忠告できるのはここまでじゃ」

アタシとギンタが顔を見合わせている間に、長老は消えて無くなっちゃった。うーん、謎だね。

なるべく駐車場を見ないようにしてオシッコの木まで行くと、大きなネコがおなかを出して寝てた。おなかの毛は真っ白で長毛。背中のはうはホルスタインみたいな模様の短毛。原子、心母のジャケを思い出しちゃった。そのネコは上を向いて寝たまま言った。

「タマさんだね。世界が上下逆になってるけど、ちゃんと見張ってるよ。頭が地面に着いてて気持ちいいんだ」

「あつ、ありがとう」

「ネコを探しに来たようなクルマは、まだ一台もない。人間たち、何が楽しいんだか、浮かれたクルマばかりだ。オレはムラタ。よろしく」

「ムラタさんって、おうちの名前？」

「違うよ」って言いながら、ゆっくり起き上がった。

デカイ！顔っていうか頭っていうか、アタシの二倍はある。でも体は少し大きめネコのサイズだから、頭っていうか顔だけがとつても目立つ。

「なっ、わかつたろ。村田英雄でございます」

なるほど、って納得できるのは、人間なら寄りばっかりだろうな。アタシは、ママが持ってた古いレコードで見たからすぐにわかった。

「村田英雄なんだあ。じゃ、ムラタさん、王将歌つてよ」

「それは無理だな。似てるのは顔の大きさだけで、オレはすぐくオンチ」

「そっか、オンチなんだ」

「そう、ものすごいオンチ。その代わり、子ネコを背中に乗せて馬になれる」

馬がオンチの代わりになるかどうかは別にして、ムラタネコはとつても優しそうに見える。

「集会はどうだった？ オレは張り番してたんでね」

「どーも迷惑かけます」アタシは深くお辞儀した。

「別にいい。謝られても困る。いいんだよ、一生の間をどう過ごしても、結局は同じじゃないか。寝ても働いても同じ。集会の一時間くらいなら、オ

レの生涯にとつて無視してもいいくらい小さなことさ。気にしなくていいよ」

「えー、まーそう考えればそうだけど」アタシはちよつとマゴついた。一生の時間の過ごしかた：：高尚な哲学に飛躍したのか、それとも、フツターの会話が続けているのか。どうやって話を合わせよう。そうだ、アタシがフツターの会話を戻せばいいんだ。

「集会ではアタシ、みんなにご挨拶して、みんなもアタシに声かけてくれて、ユラちゃんがマントをくれるって言って、スイカみたいな絵も見せてくれて、そしたらみんなが笑ったんです」どうもヘンだな。收拾がつかなくなってる。どーしたんだろう。

「わかるよ。ネコの集会を説明するのは無理だから。いつものとき。決まった議題があつても、話があつちこつちにジャンプするんだ。ネコが生きるテーマは一種類じゃないってことだな」

うわっ、ムラタネコの言葉って、ときどき飛んでる。生きるテーマって何だろう。あとでゆつくり考えよう。

「ジャガっていうネコはいたかい」

「うん、いました。ブルーできれいなネコでしょ」

「あれはオレの娘なんだ。頭はそれほど良くないが、器量と愛嬌だけでどうにか生きてる。仲良くしてやってくれ」

「もちろんです。近いうちにじやれて遊びます」

「頼むよ。その器量と愛嬌のチンイソーなネコが、もうすぐ来るはずなんだが。次の見張り当番だから」

って言う言葉が終わらないうちに、ネコが歌ってる声が聞こえてきた。ちようちよ、ちようちよ、頭にとまれ、頭があいたらシッポにとまれ。

「ジャガ！黙って歩きなさい。見張りの仕事は極秘任務だつて長老が言つてたろう」って大きな声でムラタネコが言った。極秘任務を極秘任務だつて大声で言つちやダメだと思っけど。

「極秘？そつだつて？ あら、タマさんもいたんだ」

よく見るとジャガは本当にかわいい。ぬいぐるみみたい。ハーフには美人が多いっていうけど、半分の半分の半分でもいいのかもしれない。競馬なら奇跡の血量とかいうんだろうな。

「うん、アタシもいるよ。通りかかったとこ。これからニヤニランさんに会つて、ニヤニラ教えてもらうの」

「タマさんならニヤニラ初期課程くらいすぐ修了できるよ。がんばつてね」

初期課程？てことは第二課程とかもあるのかな？そのたびに試験があつたりして。ミツチャンは試験になるとすぐイライラしてた。ふだん全然勉強してないからで、とって試験前にも勉強しないけど、イライラだけは一人前にしてた。

「ねえジャガさん、ニヤニラの初期課程を修了できないネコもいるの？」

「やだあ、そんなのいないわよ。誰だつて十五分もあればできるから。ニヤニランさんが『大変よくできました』って、肉球スタンプをおでこに押しつけておしまい」

なんだ、十五分か。安心した。

「さあ、オレがタマさんをニヤニランのところに送つて行く。お前は入つて来るクルマをちゃんと監視するんだぞ。居眠りしたらヒゲ抜きだ」

ひげを抜いても生えてくる、ツメはどんどん伸びてくる、でもシッポが抜けたらラララ、ラララ、ララ、春秋毛替わりリリリ、リリリ、リリ、リリ。ジャガがまた歌いだした。今度は替え歌じゃなくてオリジ

ナルかもしれない。でも、よく聴くと夢は夜ひらくに似るといえば似てる。

ムラタネコといっしょに、サービスエリアのちょうど向こう側で、ニヤニランさんが子ネコと隠れる場所に向かって歩いた。途中にはクルマが出入りする車道があって、横断歩道なんかない。そこでは『死なないで済む渡りかた』を習った。怖かったけど面白かった。どういふのかって？ 良い子が真似するといけないから、ここでは書いてあげない。

ムラタネコは、もっと大切なことも教えてくれた。ここで生きて行くルールと方法の基本、とか言っていた。大体こんなことらしい。

サービスエリア内をむやみにウロつくのはダメ。ていうのは、本当はネコも犬も、もちろん象やキリンだつて、ここに入っちゃいけない規則だかららしい。見つかるかと警備員に捕まって保健所送りになるみたい。規則を作るときに、意見なんかちつとも聞いてもらえなかったネコが、その規則に従わなきゃなんないのは不条理だ、つてムラタネコは言う。アタシに言わせれば、もつと本質的な問題として、人

間の規則でネコが保健所に送られるなんて、許しがたい帝国主義でしょ、つて言ったら、ムラタネコに「タマさんはアナーキーだ」つて言われた。そうかな。

でもね、例外なし、とか、一律に、とかいう規則には必ず風穴があくんだ。息苦しくて仕方ないもんね。それに人間も人の子だから、実際の話、ネコがサービスエリアにいても、ちよつとだけなら見逃してくれる。だからアタシたちネコは、いつも『ちよつとだけ』を心がけて、警備員の前をハデにウロチョロしちゃいけない。

それから、サービスエリアの建物には絶対に入っちゃダメ。これは鉄板らしい。入ると即座に蹴られて放り出される。皮のブーツで蹴られて内臓破裂で死んじゃったネコもいるみたい。でも、そこはそれ、裏には裏がある、つてムラタネコは言うんだけど、裏つてなんだろう？

そんなことを話しながら歩いてたら、木の枝の上で葉っぱに隠れてるネコがちらつと見えた。「あれ誰？」つてムラタネコに訊くと、

「シナモンだよ。ネコを探してる人がいないか、木の上から見張ってる」

アタシがシナモンさんに小さくお辞儀したら、シナモンさん、バチツつてウインクしてくれた。かっこいいなあ。アタシもいつか誰かにウインクしよう。

シナモンさんはアタシと同じくらいの大きさをキジトラ。アタシみたいにボケた模様じゃなくて、正統派のくつきりしたキジトラ。ちよつとうらやましいな。ミッチャンが昔、アタシの毛色のことを「バナメイえびの殻をピンボケで撮った色」つて言った。適切な表現なのを認めるしかない自分を、アタシは認めたくないけど認める。

で、ここで生きて行くルールと方法の基本の続き。

建物の裏にゴミ処理場があって、食べれるものが袋に入ってる。けど、そのビニール袋には触っちゃいけない。袋をひとつでも破るとネコ狩り週間が始まって、しばらくどのネコもサービスエリアに近寄れなくなる。みんなの迷惑だからやめましょう。

最後に、トイレはなるべく林の中ですること。特に花壇では絶対にしちゃいけない。

「掘りやすくて埋めやすくて、トイレにはちよつどいい土だけど花壇は危ない。見つかったら追いかけて回されてへとへとになる。この前、誘惑に負けてウ

ンチしたら、警備員が五人で追いかけてきたよ。走りすぎて肉球が痛くなった」

「アタシも木の下でオシッコしたけど、大丈夫かなあ」

「知ってる。においがしたから。けどまあ、あの程度なら人間にはわからないだろうよ。そうだ、教えておこう。今、オスネコだけで報復闘争つていうのをやってる。厨房の窓の下で、そうつとオシッコをして逃げてくる。そんな闘争なんだ」

それ何ですかつて訊こうとしたら、ニヤニランさんのところに着いちゃった。

「タマさん、さつきは失礼しました。ニヤニラの練習でしょ？ ムラタさんはご苦労さま」

「おい、子供たち、おかあちゃん御用があるから、おじさんと遊ぼう」ニヤニランさんのおっぱいに吸い付いてる子ネコたちにムラタネコが言った。

「そうね、さあピポバ、お馬のおじさんがネコ馬になつてくれるつて」

ムラタネコはシッポで子ネコたちをじゃらしながら、少し開けた場所に連れて行った。

「助かるわ、ムラタさんはときどきピポバと遊んで

くれるの。そのときだけ息抜きができるのよ」

子育てって、そんなに大変なのかな。母ネコになるの、ちょっと考えなくちゃね。子ネコはかわいいけどさ。あの三匹がもう少し大きくなったら、読み書きとキーボードの打ち方教えてあげよう。

「みんなとっても元気そう。それで、一匹はピポパっていう名前なのはわかったけど、あとの二匹は？」って訊いたら、ニヤニランさん、笑って、
「いいえ、三匹でピポパなの。ピとポとパ。いっぺんに呼ぶときに便利でしょ。長老さんが付けてくれました」

なーるほどねえ。長老さんは実用的なことも考えるんだ。

「さあ、よければニヤニラ教室にしましょうか。ところでタマさん、今、おなかせいでる？」

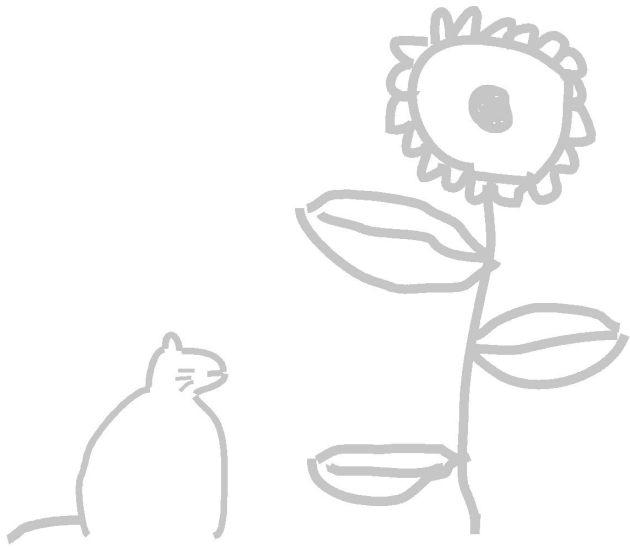
「はい、とっても起きてからタコヤキひとつだけで」「それは素晴らしいことよ。練習してすぐに実地試験ができるから」

うわっ、やっぱ試験がある。

「まず、心構えが大切です。いいですか、第一はネコの自尊心を隠すこと。自尊心のないネコはネコで

す。タマさん、あなたはどうしますか？ やってみてください」

なんだ、簡単じゃないの。アタシはヒマワリまで走って行って「タコヤキくださいー！」って叫んだ。「あらあら、申し訳ないけれど、それで何かがもら



はないですから、捨てるなんて無理は言わないわ。

表に出ないように隠せばいいの。それと警戒心も隠すこと。これも隠すだけ。具体的には、足の肉球を常に地面に付けておいて、いつでも飛んで逃げられるようにする。これが大切よ。でも、その気配を表に出してはいけません。警戒しながら人間に近付くと人間も警戒しますから。人間には無警戒な、少し能天気なネコと思ってもらえれば大成功です」

アタシは多分ダイジョブだな。素で能天気だから。「最近の愚かな人間は何をするにも形から入ろうとしますが、ネコはそれではうまく行きません。一番大切なのは基本になるキモチです。モノの感じ方と考え方です。といって精神論ではないのよ。根性さえあればうまく行くなんて思い込むのは、もっとおバカな単細胞筋肉組織だけでしょう。幸い私たちネコは、それほど単純ではないの。わかるわね？」

「はい、アタシもネコですから」早く実地試験でタコヤキ食べたい。

「それでは、今言ったことを忘れずに実技に移りましょう。そこにある大きなヒマワリを人間だとしていま。人間は今、タコヤキを食べ始めようとしています

えるのは子ネコだけですよ」

「えーっ、ダメですかあ？」どこが悪いんだろ。

「そんなことをすれば人間が驚くだけです。タマさん、もしもね、カラスがバタバタ飛んで来て、あなたの前に降りてギャアアッと鳴いたら、あなたは食べ物あげますか？」

なるほど納得。そりゃ驚くわ。

「わかりました。もう一回やりまーす」で、今度はそーっとヒマワリに近付いて「タコヤキ、いただきたいんですけど」って、小さくつぶやいてみた。

「うーん、さつきよりいいけれど、瀕死のネコに食べ物を与える人間は多くありません。やっぱり模範演技が必要みたいですね。私がやってみるから、よく見ててください」

ニヤニランはとっても上手だった。これならどんな人間でも食べ物くれたくなる。気配を消さずに、犬みたいに軽く足音を立てながら近付いて、ヒマワリを見上げてピタッと正座して、一番かわいい顔になって、ちょっと高い声で「くださいな」って言った。なるほどねえ。プロだわ。

「わかりましたか？ じゃ、やってみましょう」

形から入るなって言われたけど、最初は真似っこするしかないから、アタシはなるべく同じになるようにやってみた。ヒマワリ相手でもすぐく緊張した。歩き終わって正座したところで、ニヤニランさんがストップって言った。

「はい、大体いいですが、座ったら人間の目を真っ直ぐ見ましよう。上目遣いはいけませんよ。下心があるように思われます。昔の少女まんがのように、頭のまわりにバラの花束がある感じで見つめましよう」

うわっ、池田理代子か山岸涼子。アタシとしては大和気か大島弓子がいいな。ま、ここはネコつながりで大島さんのタッチでいこう。邪夢になったつもりでニコッと笑って「タコヤキひとつ、くださいな」って言った。

あつ、邪夢って『たそがれは逢魔の時間』に出てくる人のことだからね。ネットで流行ってるヘンなネコやレストランじゃないよ。センス疑われちゃ困るから注釈です。

「はい、上手にできました」ってニヤニランさんが言ってくれた。それから「次に、タコヤキをもらっ

たらどうしますか？」だって。えー、まだ終わりじゃないんだ。

「えーと、食べます」

「はい、少し急いで食べましよう。ガツガツ食べる寸前くらいのスピードで。というのは、人間は動物が何かを食べているのを見るのが大好きだからです。一種の支配欲の変形ですね。でもネコと違って、人間にはずーっと見続けているほどの根気はありません。サービスのつもりで少し早く食べてあげるべきでしょう」

深いなあ。食べ方に作法があるんだ。もしかしてニヤニランさんの苗字、小笠原？

「食べ終わっても人間がまだ見ているようなら、もうひとつくださいとお願ひしましよう。運良くもええたら、その場で食べずに、しっかりとわえて戻ってきます」

「どーしてその場で二個食べちゃいけないんでしょーか」

「良い質問ですね。理由はいくつかあります。まず、意地汚く見えるからですよ。もしかするとこのネコ、図々しいかもしれない、と思われかねません。そう

なると蹴飛ばされる可能性も出てきます。人間の気持ちはコロコロ変わりますから注意が必要です。それに、もっと大きな理由として、タコヤキを三個もくれる人は、まずいないからです。このタコヤキはワンパック六個入りでしょ。半分をネコにくれるほど太っ腹な人間はまずいません」

たしかにそうだ。全部スジが通ってる。

「二個目をもらって帰ってくるとき、走ってはいけません。泥棒ネコみたいに思われて人間が気を悪くします。もらっちゃったからどうでもいいと考えるのは、ネコとして正しくありません。ほんの少し相手に敬意を払うことも大事です。ネコの生き方は安手のビジネスモデル商売と違って道義も大切にします。わかりますね？」

わかった！ アタシは何度も大きくうなづいた。「それでは仮免許ということで、一度ニヤニラしてきてください。ここから見えますから」

はい、行ってきまーす。ずっと向こうのほうから、ムラタネコがピポパと遊んでる声が聞こえる。馬上槍試合だ！ とか、また落馬した！ なんて叫んでる。ピポパよりムラタネコのほうが面白がつて

るみたい。アタシはゆっくり歩いてタコヤキ屋の近くまで来た。

少し待っていると女子高生風の二人連れが来た。なんかキヤアキヤア大声で叫び合ってる。仲は良さそうだけど、あれ、会話のつもりかなあ。ネコどうしならケンカになるよ。ちよつとヘン。でも、おっかないおじさんよりいいかもしれないから、アタシは狙いを定めた。

二人がタコヤキを受け取ったタイミングで、ニヤニランさんに教わったとおりに近付いて「ひとつください」って可愛らしく言ってみた。

「あれえ、ネコだあ。欲しがってる」

「うぜえなあ、こいつ。ちよーばんかませろ」

アタシはいきなり襲われた。殺されるう！ 思いつきり逃げて、走って草の中に飛び込んだ。あれが女？ 信じらんないよ。すぐ凶暴。あーゆーのに限って、結婚したら子供ポロポロ産むんだろうな。人類の終焉も近いと思う。

その次に来たのが若い男の人たち。三人連れで全員サングラス。禁煙なのにタバコ吸ってる。一人なんかは時代遅れに金髪をおっ立ててる。これ、ダメ

だろうな。だけど、そう、読者の予想通り、この人たちは優しかった。

「結構かわいいじゃん」

「ちようだいって言ってるのかな」とか言いながら、一人一個ずつ、全部で三個もくれた。三個もらうシチュエーションは習ってない。アタシはアセった。急いで二個食べて、残りの一個を口にくわえて、本気でお辞儀しちゃった。ていうか、自然にきちんとお辞儀してた。

三人はアタシに「元気でいろよ」「次に来たらまたやるよ」って言ってくれたから、アタシは嬉しくて嬉しくて、それから、どーしてかわかんないけど悲しくなっちゃった。シッポを振って返事しながらゆっくり歩いて、ニヤニランさんのところに戻ったとき、体も気持ちもぼーっとしてた。

「大変よくできました。初期課程だけではなく応用課程も合格です」ニヤニランさんはアタシのおでこに肉球をペタンとくっつけて笑った。

・・・そうか、これがニヤニラか。



7: 犬の能力

アタシは猛然と眠い。朝早く起きて、一度もお昼寝してないからだ。タコヤキ三個も効いてる。どこで寝よーかなー。もう考えるのも無理。いいや、エアコンの室外機のうしろで寝よう。

子ネコみたいにぐっすり寝てたんだよね、きつと。ギンタが「タマ、起きろよ」ってアタシを起こしたとき、自分がどこにいるのか、一瞬わかんなかった。そうだ、ここは長野だ。

ノビをしてアクビして、ギンタの横を見ると、あらまあ、ユラノスケが這いつくばってワケわかんないこと言ってる。

「サンプルアンドホールドのコンデンサはハイインピーダンスじゃないと困る。リークカレントが問題だって言ってるだろ。テフロンスタンドに乗せたら、デバイス自体のタンデルタが大ききゃ意味ない

ぜ」ぜんぜんわかんない。

「予想通りだったよ。イヌハツカで完全にブツ飛んできた。ペロとトントが手伝ってくれて、やっとここまで連れてきた。今日はもう寝かせるしかないよ」二匹でユラちゃんを寝床まで運ぼうってなって、引っ張ったけど動かない。

「ユラノスケさん、歩きましょう」って言ったら、いきなり走り出そうとする。もー大変。イヌハツカってこんなに効くの？

やっと寝床の箱の中に押し込んだ。プラスチックの大きな箱で、建物の裏の崖に半分落ちかかって置いてある。古いタオルとか、いろんなものが敷いてあるから居心地はよさそう。

「明日になったらユラノスケは全員に謝るはずだよ。マタタビやイヌハツカや人間にもらったグラスなん

かで大騒ぎしたら、シラフになり次第、周りに謝るのが昔からのしきたりでね。まあ、お互いさまだから、誰もそれ以上文句は言わない」

「ふうーん。薬物に寛容な社会なんだね」

「怒ってみてもしょうがないからね。マタタビをまたいで通れるネコなんていないじゃない。自己責任でやれば問題ないし、仮にどうにかなっちゃっても、それはそのネコのことだから。アレやっちゃいけないコレもだめって規則作るより、責任取りきるほうが大事だよ」

「死んじゃったら？」

「あのね、人間と違ってネコは節度を心得てる。死ぬまでイヌハッカやるようなネコはまずいない。もしいたとして、そんなネコには救いがないから助けてやることはない、っていうのが基本的な考えなんだ。まあ、助けようにも方法がないけど」

自由の裏には責任が伴うって、ミッチャンが倫理のレポートで書いてた。書いてる本人、意味はわかっ てなかったろうけど、フリーズだけは本当だね。でもさ、これってさ、ひっくり返せば自由が制約されれば責任も回避できるってこと？…：パパがネズミ

ほうにどンドン歩いてく。

「ねえ、危なくない？」

「いいヤツだよ。ともだちなんだ」

「嘘まない？」

「あいつ、まだ動物を噛んだことない。食いつくぞは、ただ言ってるだけ」

大きめの茶色い犬だった。アタシたちを見ると「やあギンタ、久しぶりだな。こっち来いよ。あっち行け、こっち来い、あっち行け、こっち来い」って吠えかたを変えた。

アタシたちは犬の足元まで行って座った。犬は吠えるのをやめてギンタの耳をなめ始めた。

「おい、くすぐりたいよ。わあ、鼻をなめるな。元気だったか？ お願いだからなめるのよして。ともだちを、わ、やめて、紹介しに来た。くすぐったーい」

「あいさつだけ。気持ちよく受ける」犬はギンタをなめ回してから、やっと離れてアタシに言った。

「やあ、初めて見る顔だね。どこから流れてきたの？」

「世田谷から。名前はタマです」

「タマさんか。すると今朝の機動隊騒ぎのネコだ」

「機動隊？ どういうこと？」ってギンタが訊く。

捕りで捕まって罰金がきたとき「あんな道、四十キロで走るバカはいないよ。七十キロだつて安全じゃないか」とか言ってた。それ聞いたとき、引かれもんの小唄だなんて思ったけど、これって、自由が制約されて責任も取らされる見本かもしれない。パパもネコになればいいのに。

「少し早いけどごはんを食べに行こうか」ギンタが耳の後ろを搔きながら言った。

またニヤニヤ？ アタシ今度はジャガバタカイカの丸焼きがいい、つて言おうとしたら、ギンタはフェンスの下を潜って外に出た。あれえ、お外に行くの？

畑や林があつて、家はあんまり建ってない。ギンタとアタシは早足したり止まったり、草をくぐったりいるんなものの匂いを嗅いだりしながら進んだ。とっても面白い。探検してるみたい。ここはジャングル、アタシは野生ネコ。

遠くで犬が吠えてる。「こらあ、あっち行け。行かないと食いつくぞ」つて言ってる。鎖でつながれてるから近付かなきゃ大丈夫。なのにギンタは犬の

「あれ、知らないの？ サービスエリアにいたんだろ？」

「いたけど、機動隊なんか知らないよ」

「そうか、へんだな。カラスとカワセミから聞いたんだけど」

「どんな話ですか？」面白そう。こういうの大好き。

「あのな、カラスとカワセミじゃ微妙に内容が違うけど、まあ大体のところ」

つて、茶色の犬が話してくれたのはこういうことだった。

夜明け前、火炎瓶や爆竹を腹に巻いて、鉄パイプを持った四十七匹の過激犬がサービスエリアに突入して、あたり構わずオシッコをかけながらネコの縄張りを荒らしまわった。運悪くそこに居合わせた親子のネコ四匹が犬たちに囲まれて火炎瓶を投げつけられ、鉄パイプで串刺しにされかかったところへ、タマという名前のボケたキジトラの、惨めたらしくてパッとしないネコが…：そんなこと誰が言ったのよ！ だから鳥つては大ッ嫌い…：突然現れて、空手や柔道の技、それに道教の妖術まで駆使して過激犬をバツバツとなぎ倒し、親子のネコを救出

した。戦闘能力はランボー以上だけど、どうも毛色と見た目がねえ。天は二物を与えずだ、ってカラスが言ってた。：くっそう、言いたいこと言うじゃない……

怒った犬たちは周りで見ていたネコに火炎瓶を投げつけ、ネコも投石や砂かけやウンチ投げで応戦。戦闘は激化の一途をたどり、ついにサービスエリアの建物が炎上し、駐車していたクルマはことごとく横転して、ワレセントウジョウウタイニトツニユウセリ。

駐在さんが来たけど手に負えないから、県警に第四機動隊の緊急出動を要請。機動隊はSWATも連れてきたっていう。機動隊が犬とネコの間に割って入って双方に放水し、やっとどうにか沈静化したのが朝八時。長く厳しい戦いだった。

県警は、騒ぎの元になった過激犬の幹部十二匹を暴行傷害放火、もちろん公務執行妨害、凶器準備集合罪、治安維持法違反、その他多数の容疑で現行犯逮捕したっていう。なお、逮捕された十二匹は完全黙秘のまよう。警察はネコ側からも事情を訊くと称して、長老以下数匹が任意同行で引っ張られてる。

サイレンは聞こえた？」

「ん？ そういえば聞いてない」

「犬は鼻がいいんだろ。火事の匂いはした？」

「いや、それもなし……ということは、一体何があったの？」

ギンタが朝の一件を手短に話した。茶色い犬は「フムフム」って聞いてた。

「なあんだ、タマさんがノラ犬を追い払ったっていう、たったそれっぽっちの、つまらないことだったのか」

たしかにアタシは意識がなかったから、威張るつもりも褒めてほしくもないけどさ、もしかしたらアタシだけじゃなくてニヤニヤ親子も死んでたかもしれない一大事を、それっぽっちだのつまんだの言われたくない。ちよっとムツとした。

アタシから流れ出す険悪な雰囲気、茶色の犬はすぐに気付いた。

「あつ、ごめん。気を悪くさせちゃったよね。オレって単純だから、ものすごい大事件、大ニュースって思ってたんだ。ほら、こんな田舎で娯楽がないだろ。カラスやカワセミの言うことがワイドショーなのは

犬ネコ双方は正式な停戦合意に向けて話し合いを始めた。しかし、犬側が要求する「オレたちにもワニラさせる」がネックになって、合意には程遠いと思われる。ネコ側の主張によれば、犬だって勝手にワニラすればいいのであって、それを阻止しているのは人間じゃないか。人間に追っ払われるのをオイラたちのせーにするなんて、破れるももひきヒヨロビリで、言語道断はしご段、とのこと。溝はなかなか埋まりそうもない。

「サービスエリアの建物が全焼して、駐車場はフジテレビの中継車でいっぱいだから、今は営業中止してて再開は一年後なんだろう？」

うーん、一を聞いて十を知るはあるけど、これは一粒万倍日だわ。鳥の想像力っていうか創造力は生物の中で一番かもしれない。

話の後半をあきれて聞いてたギンタが言った。「あのさあ、それ、信じてる？」

「まあ、鳥の言うことだから多少の誇張や個人の感想はあるだろうな」

「BPOに言いつけたら局長のクビが飛ぶくらいサプリメントな話だよ。機動隊が来たっていうけど、

知ってる。時事問題についてのFNN程度の信頼性しかないのもわかってるよ。でも、自分に関係ない大事件って、やっぱり楽しいじゃない。フィクションがノンフィクションに化したときって、インチキかもしれないって、どこかで思っても、地下妄とか環ウソとか火星の面とか壊れた尾翼とか、あつ、こんな例だと十年後には誰にもわかんなくなるけど、オレ、単純に楽しんでるじゃうんだ。だからゴメン。ごめんねタマ」

アタシは笑い出した。この犬、ほんとはいいやツなんだなあ。

「いいよ、もう怒ってないから。気にしないでね。それよか、あなたの名前教えてよ。まだ聞いてない」「これは申し遅れた。ギンタ、ちゃんと紹介しなきゃだめだろ。えっと、オレの名前はタケチヨ。面倒ならタケって呼んで。見た目ほど強くないしケンカは嫌いだ。楽しいことなら何でも大好き」

そう言ってタケチヨはアタシの頭をなめた。ちよっどアンテナのあたり。タロもそうだけど、どうして犬ってすぐにペロペロなめるんだろ。

「ねえタケチヨ、ひとつ訊いてもいい？」

「いいよ」わあ。またなめた。

「アタシたちが近くに来たとき、来るなど来いの両方言ってたでしょ、どーしてなの？ どっちだかわかんなかったよ」

「ああ、あれね。飼い主の手前、そうしなくちゃならないんだ。飼い主はオレがネコを嫌いだと思ってる。それにオレは番犬だから、ヘンなものが近付いたら吠えなくちゃいけない。もしどこかで飼い主が見て、ネコが近くに来てもオレが吠えなかったら、完全なバカ犬だと思われる。だから吠えるんだ。でも『こっち来い』だけだと優しい口調になるんで、『あっち行け』も混ぜてる」

「番犬にもいろいろ(気苦労があるんだあ)」

「察してくれる？ 人間はオレたちのこと、犬は犬だって決め付けてるし、犬の能力を認めたくない。犬は犬にできることしかできないと思ってる。たとえばこの鎖」って言って、タケチヨは魔法みたいに鎖を外しちゃった。

「ほら、いつでも外せるんだよ。ほとんどの犬は外せる。つなぐのも自由自在」今度は一瞬でつないでみせた。

「すごいな！ 初めて見た」ギンタが唸った。

「だろ？ 今日ハゲストが来たから本邦初公開」

「なら、いつでも外して遊んでほしいじゃない」ってアタシが言うのと、

「そりゃあ絶対ダメ。犬は飼い主に忠実だから、いつでもおとなしく鎖につながれることになってる。勝手に鎖を外せるなんて、人間には秘密だよ。今オレがやった鎖外しの術は見なかったことにしてくれよ。鎖外しを緊急時以外にやると犬の組合から除名されるんだ」

タロも鎖外しの術、使えるのかな。あいつはネコに近いから無理かもしれない。帰ってら訊いてみよ。「わかったよ。面白かったからまた見せてくれ。誰にも言わないから。でも緊急時なら堂々と外せるんだね？」ギンタは何か考えてるみたい。そんな感じで訊いた。

「もちろん。火事とか、誰かの命が危ないとか」

「そうか、それなら都合だな。ところで、タケチヨは持久力ある？」

「持久力ってどういうこと？」

「たとえば、休まないでどのくらい走れるか、みた

いな」

「ああマラソンね。そうだなあ、一息で五十キロ、いや、四十キロは……ちょっと無理だろう。若いころなら二十キロは走れた。今は多分十キロ、もキツいだろうから三キロ、そう三キロなら走れる。うん」
「たった三キロ？ 北極の犬ぞりレースはもつと走るぜ」

「あれはプロ。キミたち二匹がネコのサーカスみたいに火の輪くぐりするなら、オレだって百キロ走ってみせる」

「じゃ、三キロでいいや。あのさあ、ちょっと助けてほしいことが近々あるかもしれない」

って、ギンタはタケチヨに話を始めた。アタシはそばで聞いてて、すごく嬉しくなってきた。ギンタがアタシをここに連れて来た理由もよくわかった。みんなはわかる？ 多分、わかんないよねえ。

タケチヨは、「そういうことなら念のためにエドにも話しておこう」って言った。



8：みへ知ってる知るなら入

「犬にもネコにもいろいろあって、犬だから荒っぽい、ネコだから親切、なんてことは言えない。人間にも良いのと悪いのがあるだろ、それと同じこと」「わかるよ。シロっていう意地悪なネコがいるもん」「タマが記憶喪失中にやつつけた五匹の犬とさっきのタケチヨじゃあ、同じ犬でもまったく違う。タケはバカが付くくらいにいいヤツだ。ここだけの話、ふつうのネコよりもずっと信じられる」

アタシたちは夕ごはんの場所に向かって歩いてる。ごはんは七時ぴったりに始まるんだって。もうおなかはペコペコで、ネコ元気なら一袋くらい食べれそう。まだ遠いのかなあ。

「もうすぐだ。あそこに明かりが見えるだろ。あの家」何軒か家があつて、その一番小さなおうちのお庭が明るくなって、もうネコが何匹か集まっていた。

「普通の間は、ネコのウンチが臭いとか、花壇を荒らすとか、文句言ってるだけで何もくれない。知らない人は、いつもあたいたちを可愛がってくれる。病気になるとかスリもくれるんだよ」

「アタシはちよつと混乱した。このあたりでは「知らない」っていう言葉の意味が違うのかなあ。」

「さっきごはんをくれた人がクスリもくれるの?」「そうさ、あれが知らない人だ。この辺のネコはみんな知ってるよ」

「普通の間は、ネコのウンチが臭いとか、花壇を荒らすとか、文句言ってるだけで何もくれない。知らない人は、いつもあたいたちを可愛がってくれる。病気になるとかスリもくれるんだよ」

「アタシはちよつと混乱した。このあたりでは「知らない」っていう言葉の意味が違うのかなあ。」

「さっきごはんをくれた人がクスリもくれるの?」「そうさ、あれが知らない人だ。この辺のネコはみんな知ってるよ」

「アタシは訊かないことにした。」

ネコの食堂だ。

近付くとサービスイリアのネコもいた。知らないネコもたくさんいた。みんな正座して縁側を見つめている。縁側にはお茶碗が二十個くらい並べてあった。大きな洗面器にお水が入ってる。

テレビの音みたいなの「七時のニュースです」っていう声が聞こえたら、おうちの中からおじいさんが出てきた。

「はい、お待たせ。ネコカンがいい子はこっち、カリカリはあっちだよ」

カリカリのほうに移動してお茶碗の前に座って待つてると、おじいさんが順番にザラーツと入れてくれた。もう夢中で食べたよ。アタシのお茶碗には他に三匹のネコが首突っ込んで食べてた。

「ゆっくり、よく噛んで食べなさい。おかわりもあるから急がないで」っておじいさんが言う。こんなにたくさんネコといっしょに食べるの、アタシ初めて。

「アタシはちよつと混乱した。このあたりでは「知らない」っていう言葉の意味が違うのかなあ。」

「さっきごはんをくれた人がクスリもくれるの?」「そうさ、あれが知らない人だ。この辺のネコはみんな知ってるよ」

「アタシはちよつと混乱した。このあたりでは「知らない」っていう言葉の意味が違うのかなあ。」

「アタシは訊かないことにした。」

「アタシは訊かないことにした。」

森ネコはおうちの裏に消えて行った。

しばらくするとギンタが「さあ、帰ろうか」って言いながらやって来た。シナモンさんとシユレもいっしょだ。「今日は豪華だったね。いつもの特売ネコカンだけじゃなくてモンプチもあった。ジュー

シーな貝がおいしかった」

「ドライがビーフ味なのがよかつわた。おなかの中でエレガントなハンバーグになってるでしょう」

「本日の食品全般において、添加物は許容範囲内でした。防腐剤は多少検出されましたが、ただちにネコの健康に影響が出る値ではありません」

「食べる前に見たとき、ペロとルドルフとジャガもいたみたいだったけど？」

「あの三匹なら先に帰ったよ。なんだか相談があるとか練習があるとかで、急いで帰った。僕たちも帰ろう」

「あのね、さつき森から来たネコが、道の向こう側のネズミチェックやってくれて」

「コアラがそう言った？　じゃ、やっておこう」

アタシたちは道の反対側のトマト畑に入った。ネズミチェックって何だかわかんなかったから、アタシは見てた。

ギンタたち三匹は畑の中にばらばらに座って、完全に気配を消した。アタシも静かにした。誰か一匹が急に動いてまた静かにする。それを何度か繰り返してたら、シナモンさんが「いたわっ！」って叫

んで走り出して、他の二匹も走った。面白そう、アタシも走った。ネズミが何匹か、畑の外に逃げてた。

「五匹くらいいたね。これだけ脅かしておけば明日までは入ってこないだろう」ギンタが言った。「シュレ、おまじないをしておこうよ」

オスネコ二匹は畑と道路の境目に、ちよとずつオシッコをした。

「非存在も存在の可能性として認識される、不確定性理論の応用です」シュレが難しいことを言う。

「どーゆーことですか？」ってアタシが訊くと、シナモンさんが、「いないネコをいるかもしれないってネズミが思うことよ」って明解に通訳してくれた。

そのとき、ごはんを食べさせてくれたおうちの向こうから森ネコの声が聞こえてきた。

「だからあんたは今日、ネズミ何匹食べたの？」

「食べてません。おなかすいてなかったから」

「ほんとに使えないゴクツブシの青大将だね。のたくってばっかりで、ちゃんと仕事しないと承知しないよ」

「へびだからのたくるしかないんです」

「口答えるんじゃない。明日、もしネズミ食べてなかったら足腰立たなくしてやる。わかつたかい」

「それも無理です。へびに足腰はありません」

そのあと、森ネコの声は聞こえなかった。へびに腕押し、砂場にクギだと思って、森に帰っちゃったんだろう。そういえば森ネコのことをギンタはコアラって言うってた。毛の色が灰色だからかな。ギンタに訊くと、

「あのオバサンネコは、色も性格もコアラみたいだからだよ。一見可愛いけど、けっこうキツイこと言うし、それに、木の幹にしがみついて寝るのが特技なんだ。熟睡しても落ちないから驚異だね」だって。「私も真似して見事に落ちたことがあるわ。あの特技は森で生きる知恵というより、一種の進化論的な適応でしょうね」シナモンさんが言った。すごい、かなりインテリなんだ。あとで生い立ちを聞いたたら、原宿図書館の裏で生まれて、本を読みながら育ったんだって。

アタシたちはサービスエリアに帰ることにして歩き出した。みんなおなががいっぱいなので、ゆるゆるしか歩かない。アタシは、ごはんをくれたおじい

さんが『知らない人』って呼ばれてたのが気になって仕方がなかった。

「ご飯をくれたおじいさん、どうして知らない人なの？」

「知らない人だからです」シュレが言う。

「知らない人なのよ」ってシナモンさん。

そうか、おじいさんの名前を知らないから『知らない人』なんだ。

「名前を知らないから知らない人なんだね」

「いいや、名前は両角権太郎っていうんだ。この辺のネコはみんな知ってる」

「名前がわかつて毎日会ってるのに、どうして知らない人なの？」

「名前というものは、その人やそのネコをアイデンティファイする記号でしかありません。あるシステムの中で、知らない人という記号で明示的に示唆される対象が明確かつ排他的に認識されさえすれば、どこにも齟齬は生じないでしょう」

またあ、難しいこと言うんだから。「シナモンさん、どーゆーこと？」

「みんなが権太郎さんを知らない人って呼んでいる

から、それでいいじゃない、っていうことよ」

うむむ、わかったような、そうでないような。

「あのね、最初から話したほうが早い。二年くらい前に、知らない人がネコにごはんを配り始めたんだ。あのおじいさんだよ。そしたらいろんなネコが『知らない人がごはんをくれるよ』って言い始めて、それ以来ネコの間では、おじいさんを知らない人って呼ぶようになったわけ。僕たちの間ではそれで通用してる。よそじゃ無理だろうけど」

なーんだ、そーゆーことか。だけど紛らわしいよね。いや、紛らわしいと思ってるのは、ここではアタシだけだから、全然ややこしくないのかもしれない。よくわかんなくなってきた。

「仮定の話として、ネコが一匹しかいない島があったとして、一匹だけいるネコの名前が『百万匹のネコ』だとしたらどうでしょう。このアナロジは非常に興味深いですね」

「どーして？」

「この島には百万匹のネコがいると言われることになりませんから。ホッホッホ。知らない人と同じですね。ジョークですね。楽しいですね。ハッハッハ」

「あなた、どうしてこんなところにいるの？」ネコ語はカラスに通じないし、ネコはカラス語がわからない。犬はトリ語がわかるから、タケチヨがいれば通訳してもらえるけど、どうしよう。

「きつと巣から落ちて、パニクって動き回ったんでしようね。あなた、一人で帰れる？」ってシナモンさんが訊いたら、何を誤解したのか、子供カラスはシナモンさんに襲いかかった。

シナモンさんはうしろに跳んで逃げて「危ないじゃないの。野蛮なトリね」って、別に怒ってない。「そんなところだろう」ギンタが言う。「食べ物全然ない冬なら、僕はこのトリを食べるかもしれないけど、今は満腹だし、カラスは不味いから食べないよ」

「ギンタ、カラス食べたことあるの？」驚いてアタシが訊くと、

「そりゃあるさ。飢え死にしそうになれば、僕たちネコだけじゃなくて、どんな動物でも、人間だって、食べられるものなら何でも食べるようになる。僕は欺瞞的な草食系の白ライオンじゃない」

まあそうだ。アタシだってタコヤキ食べておいし

シュレの笑い声を初めて聞いた。こんなのが楽しいのかなあ。シュレにはそうなんだろうね。

アタシたちは一列になって歩いた。林や森の中を通るときには自然に緊張しちゃう。いつヘンな生き物が飛び出してきてもおかしくないから。できれば走って通り抜きたいけど、おなかがいっぱいだと走る気になれない。それにアタシはすぐ眠いんだ。ミツチャンになら「眠いよお」って言えるけど、ここじゃあ誰にも言えない。ちよつと悲しいな。ネコは独立心が強いなんてウソだよ。

道の右側で何かが動いて、カサコソって音がした。今のなにっ？ みんな立ち止まって、逃げるかどうか迷ってる。アタシの眠気は吹っ飛んじゃった。

ギンタがみんなに目で合図して、音のしたほうにササッと進んで、そーつと草の中を覗き込んでる。

「なんだ、カラスの子どもだよ」

「私も見たい」「アタシも」「拝見しよう」みんな草の中に入って子供カラスを取り囲んだ。やつと黒い羽が生えたくらいの赤ん坊で、恐怖でフリーズしちゃってる。

かった。

「食べないのは私も賛成よ。でもどうする？ 放っておく？」

「アタシ、カラスは大嫌いだけど、まだ子供だからなあ」

「放置するのは生命倫理が許しません。可能であれば保護者のもとに返すことを希望します」

「けどさあ、この子、メチャメチャに突っついてくるよ。命がけで命を救うのって、あんまりネコの性格に合わないような」ギンタは乗り気じゃない。

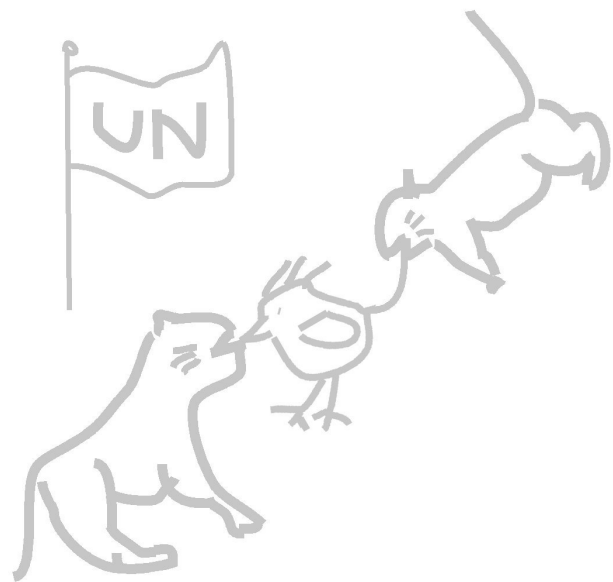
「わかりました。見解だけ述べて高みの見物的態度をとれば世俗の評論家に堕します。私は真の学究として自らの意図を具現化すべく試行しましょう」

シュレはいきなり子供カラスに近付いて、クビを甘噛みして持ち上げた。「ほれ、このように考慮すれば突つかれることは、あつ、どうしてあなたは首が真後ろまで回るのか。前を向いていなさい。いてっ、救助者の眼球を狙うとは、こらっ、やめなさい。ギャッ」

「しょうがないな。シュレの目玉が片耳がなくなる」とまづいから」って、ギンタはカラスの前に回って、

クチバシをくわえ込んだ。「せめて、こらっ、このカラスが、うんしょ、メスなのを、口あくなっ、願う」シユレとギンタは二匹がかりで子供カラスを木の上に引っ張り上げようとしている。巣が見つからないから、とにかく木の上にとまらせて、親鳥に見つけてもらうことにしたらしい。木の上なら犬にやられることもないし。それにしても大騒ぎだ。クチバシは押さえたから突っつかれないけど、カラスには足蹴りっていう技もある。羽根をバタつかせる手もある。思いつきり抵抗してる。これじゃ助けてるのかイヂメてるのかわかんないなあ。

「あーあ、歓迎されない国連軍みたい」ってシナモンさんが言った。



9：大金持ちになる大計画

それからのアタシの生活は、もしかすると世田谷でミツチャンと暮らしたときよりヒマ。チヨーヒマ。気が向けばニヤニラして、夕方に知らない人のごはんを食べて、他のネコと世間話して、ピポパと遊んで、なんかあ、全部がゆるいんだよね。生活に人間が関わってないと、こんなにも気が抜けるんだあ、ってわかった。マサネコが言った、病氣と怪我さえしなければって、こーゆーことかもしれない。極端なんだよ、この生活。時間が流れてって、それをどー使おうと自由。なーんにもしなくていいし、なーんにも気にしなくていい。でもさあ、病氣や大怪我すれば、どっかで硬く冷たくなっちゃうのは予感じゃなくて現実だし、それはおっかないないって思うけど、心配したって何が変わるわけでもないでしょ。そんなこと心配するのって、地球が滅亡す

るのを心配するのと同じことじゃん。アタシ個人の小状況からすれば、怪我や病氣と地球の滅亡って、結果として死んじゃうんだからおんなじなんだよ。だから、そんなところは都合よく思考停止しちゃって、日陰の涼しい場所でお昼寝すればメツチャ氣持いい。

わかる？アタシの言ってること。サービスエリアの周りに竹林なんかないけどね、のたのた生きるのがいーみたい。

ミツチャンを探すのやめたのか、って？ やめてないよ。あきらめてない。長老がね、監視シフトからアタシだけ外したの。最初は、アタシも見張るーって言い張ったけど、説得されちゃった。タマが見張ったら、気合を入れすぎるだろうって。当たってるね。やっぱ、もう一回記憶喪失ネコになったらまずい

し。それに、もしミツチャンが現れたら、そのときタマもミツチャンも判断力ゼロになって、ロクなこととは起きないだろうって。アタシが狂喜乱舞して車道に飛び出すのを怖がった。アタシにしてもミツチャンの目の前でクルマに轢かれたくない。シフトから外す理由を言ったついでに長老は「ベンジャミンが『エレーン！』と叫びながら叩いたガラス窓が、叩きすぎて割れてしまっていたら、物語のその後の展開はまったく違うものになっていたじやろ」とも言っていた。なんの話かわかんないけど。

で、アタシにはお仕事がなくなつてウルトラハイパーなヒマになつたわけ。昼間はヒマでもいいよ。だけど夜、その辺をブラついていると、急に世田谷のこと思い出しちゃうんだ。マサネコは敵討ちしたかなあ、タロはアタシをあちこち探しているだろうなあ、パパとママもアタシのこと心配してるだろうなあ、ミツチャンは…ミツチャンは…

えーん、えーん、会いたいよお。とつても会いたいよお。ベッドで寝たいよお。いっしょに寝たいよお。文句言わずにお風呂入るからさあ。迎えに来てえええ…

け。その時その時に面白いことはあるよ。でも、どんなに面白くても、生きる目的にはならない。昔、子ネコのころに考えたんだ。一生活のごはんを食べるだけ食べて、その後、おなががすいて死んじゃっても、僕の生涯はそれでいいんじゃないかって。一生活なんて食べられるわけじゃないね。お腹が破裂しちゃうもの」

ギンタは小さく笑った。あたしもつられて、ちよつと笑った。

「でもタマには、ミツチャンに会うつていう大きな目的がある。それだけじゃない。正直に言えばタマは今ノラネコだ。誰が何て言おうと、今のタマにはノラとして、生きるために生きるつていう目的もある。ねえ、すごいと思わない？ タマには生きる目的が二つもあるんだよ」

ギンタは「元氣出せ」とか「そんな顔するな」とかいう、意味のない無責任なことは言わなかった。アタシはそれが嬉しかった。もちろん、生きる目的がいくつあったとしても、アタシの世田谷に帰りた、ミツチャンに会いたい気持ちは変わらないけど。でもね、ギンタがアタシの気持ちをちゃんとわかっ

どうにもならないのはわかっているよ。アタシが悪いんだから。黙つて飛び出したアタシが悪い。あのとき、オシッコオシッコつて騒げばよかったのかなあ。帰りたいなあ、とつても。今、ここから歩き出したら、何日で世田谷に戻れると思う？ 死なないで帰れるかな？ ここ、出て行こうかな？

つて、昨日の夜、一人で思つてた。夜の真つ暗な景色が、虫しか動いてないのにとつてもにぎやかに見えて、アタシだけが止まつてる。体の力が抜けて、そのまま地面にすーつと吸い込まれるみたいだった。帰れないなら死んじゃおうよ、つて自分の中から声が聞こえたとき、誰かが背中をゆつくりなめ始めた。

ギンタだったよ。何にも言わないで、とつてもゆつくり、丁寧にもつくりかしてくれ。ギンタのベロがあつたかかった。

しばらくして、「タマ、きみは幸せなネコだよ」つてギンタが言った。「僕たちみたいなふつうのネコには生きる目的がないんだ。生きるために生きてるとしか言いようがない。難しい話じゃない。生きるためにごはんを食べて、ごはんのために生きてるだ

てくれることが、すごい嬉しかった。

アタシは言葉で答ええないで、ギンタの首と耳のうしろをゆつくりなめた。それしかできなかった。

だれっ？ そのあとはページが破れてて読めないつて。おだまり！

「ネコ世界初！ 革命的な発表がありまーす。集会に来てくださーい」

朝、お水を飲んでたら、ペロが走り回りながら叫んだ。叫び終わると歌いだした。

「立てー飢えたるものーよ いまーぞ日は近しー たたーえわがはらからー あかつーきーわーきーぬー」

ギンタが寝場所から飛び出して来て「ペロはどうしちゃったんだ。恐ろ病にでもかかったのかな。それとも新種のイヌハツカでもやったか」

ホントの集会かどうかは怪しいけど、集会つていうんなら行かなくちゃ。まだ寝てたユラちゃんを起こして三匹で林に向かった。

「革命より睡眠が大切だぜ。革命起こしても眠気はなくなるんないよ。眠れば眠くなくなる。まったくネ

コ騒がせなヤツだ」ユラちゃんはブツブツ言ってる。「どうせヒマなんだから、とりあえず行ってみようよ。つまらなそうなら帰って来てまた寝ればいいじゃん」

林の奥に着くと、とても大規模な集会だつてわかった。誰が作ったのか土を盛り上げたステージができて、その前に客席用の広場があった。日比谷の野外音楽堂みたい。ネコの土木工事能力は動物の中で最低レベルだから、これだけでも革命的な仕事って見える。

宣伝の効果があつたのか、サービスイリアのネコだけじゃなくて、知らない人のところで会うネコも何匹か来てた。トントとニヤニランの姿が見えないのは、二匹で駐車場の監視をしてくれてるからだろう。ムラタはピポパを連れて来てた。

「さて、本日はお日柄も良く、早速にお集まりいただき、ありがとうございます」ステージに飛び上がったペロが挨拶した。

「これから、あるイベントを開催しますが、その前に、イベントの意義と目的、将来の展望について、少しばかり話をさせてもらいます」

「赤塚先生のネコは銀行の通帳持ってたぞ」

「そりゃ昔の話だよ。今はネコの名前じゃ通帳作れない。肉球っていう実印を持ち歩いているのにね」

「ネコは無産階級まではわかった。ユラノスケ、黙って聞きなさい。聞かないなら眠っていてもいいぞ。ペロ、続けて」って長老。

「どうも。えーと、この世はカネが万能とばかりは言えないけど、カネが無いことには始まらないんだ。自分のカネを持ってコンビニで好きなネコカンを買えるネコなんていない。そりゃ、イエネコには飼い主の愛情はあるよ。でも、愛さえあればやって行けるなんていうのは幻想だ。三ヶ月もしてみろ、サカリが過ぎていきなり倦怠期だぜ。あつ、違った。ちよつとメモを見るね」

「ムガー、スー、ムガー」ユラノスケが大いびきの真似をしてる。

「おいっ、子供もいるんだ。せめてR12で話せ」ムラタが注文をつける。

「わかった、気をつけるよ。で、かくの如く虐げられたネコは、その地位に甘んじるのに慣れてしまつて、オレの知る限り、人間と互角に渡り合つて、た

「もったいぶらずに早く言え」誰かが野次つた。

「まあまあ。皆さんに正しく理解してもらうには、そもそもから説明しなきゃならない」

「少しつて言つたじゃないか。そもそもじゃ長いだろう？」ユラちゃんが寝そべりながら言う。

「えつとお、ちよつと長いかな」

「短くても長くてもいい。無駄なことを言わずに、必要事項だけ、簡潔に話しなさい」って長老。

「はい、それではお言葉に甘えて」

「甘えて良いとは言つとらん」

「すみません、甘えません。えーと、つまりオレが話したいのは、まずネコの地位の問題だけど、オレたちは知的な動物であるにもかかわらず社会の最下層に押し込められている。これは覆しようのない事実で、ぜひとも改革・解放しなければならぬ」

「働かないで食つてるんだから最上層だよ」またユラちゃんが野次る。

「いや、そういう意味ではなくてだな、ネコはどう頑張つても今の社会じゃ自立できないだろ。経済活動なんかさせてもらえないし財産も持てない。典型的な無産階級だ」

とえ傀儡を使ったにせよ社会的地位を築いたネコは、不肖、このペロだけだ」

「自慢ならよそでやれ」ってユラちゃん。

「自慢じゃないよ。オレは侯爵を作つたんだ。そうすればオレもラクチンな生活ができるから。侯爵の飼いネコになつたのは立派な社会的成果だぞ」

「食われそうになつたからじゃん」

「たしかにな。発端はそうだったよ。悪いか」

「悪かないさ。で、その社会活動できるネコが、今度はどうするんだ？ 伯爵でもでつち上げようってか？」

「いや、今度は違う。もう貴族は飽きた。たしかに食い物はいいし権力もあるがな、あのくだらない見栄の張りつこのパーティーはヘドが出るぜ。貴族の生活には新鮮な刺激がまるでないんだ。それでみんな不倫するんだけど、相手は隣の領主のカミサンとか、近親交配みたいなものさ。飼いネコの生活なんてマンネリにマンネリ足してもまだ足りないから、オレはピエールのところから逃げたんだ」

「子供がいるつて言つてんだろ。本筋に戻つたらどうだ」ムラタはピポパを連れて帰ろうかどうしよう

か考えてる。

「わるいわるい。もうやらない。またメモ見るからね。さてみなさん、アメリカでは下層階級の人間が一代で金持ちになるには三つの方法しかないって言われている。犯罪かスポーツか芸能界。この三つだ。昔、アメリカに住んでたとき飼った主のパパラディさんがそう言った。この人は芸能界の二流の仕掛け人でね、若い無名のミュージシャン集めて、ヒット曲作って儲けてた。ある朝、ミシシッピーでクリームをなめて、金儲けの方法を思いついたんだって。オレもカラバ侯爵の経験から、少しは仕事を手伝った」

「また話が外れてるようじゃ。軌道修正せよ」って長老。

「外れてないですよ。具体的な例を話してるだけです」

「そうとは思えんが。お前の話は全然見えん」

「じゃ、見えるようにします。っていうことで、ネコが社会活動できるって証明するんだ。金儲けすればいいんだよ。さっき言った三つの道のうち、犯罪はモラルの面から論外だからやめるとして」

「おまえにそんな倫理観があるって知らなかった」

が認められるっていうことさ。そうしたらネバーランドを丸ごと買い取ってネコの国にする。すごいだろう」

「夢を語るのには良いことじゃがの、そのボーカルなるとかはどこにいるのじゃ」

「そうこなくちゃいけない。はい！それではみなさん、未来の世界的スターによるミニコンサートを始めます。こちらに注目してください…あれえっ、長老、みんな寝ちゃってるよ」

アタシは周りを見て驚いた。全員スヤスヤ寝てる。客席で起きているのは長老とユラちゃんとアタシだけ。ギンタも気持ちよさそうに眠ってる。

「ユラノスケ、タマさん、悪いがみんなを起こしておくれ。本当に、五分間つまらん話を聞くだけで寝てしまうのじゃから」

アタシとユラちゃんは手分けしてネコたちを起こして歩いた。ピポパだけは寝かしておいた。みんながなんとなく目を覚ましたとき、ペロが言った。

「みんな、これから才能溢れる新人歌手が、素晴らしい歌をお聞かせします。オレが面倒見るから大ヒット間違いなし。これでオレたち全員、いもづる

てユラちゃん。

「あるよ。この長靴が正義のしるし」

「いいから続けるのじゃ」

「すみません。それで、どこまで話したっけ。そうだからスポーツか芸能が残されてる。それでいろいろ考えたけど、スポーツはだめだ。知り合いのマイケルは犬と野球やって完敗したって言った。それで、最後の芸能。これはいいかもしれない。可能性は高い。日本でならパパラディさんと同じビジネスモデルがまだ通用する。いや、絶対にうまく行く」

ユラちゃんがおなかを上に向けて寝転がったまま「そんで？」って言った。

「それでボーカルグループを作ったんだ。オレがプロデュースとプロモートして大々的に売り出す。マスコミにちよつとでも注目されてみる。今の状況ってメチャクチャで、才能のカケラもない女子高生をワンサカ集めてタバにするだけで売れちゃうんだから。そこにオレが面倒見たアーティストが出てくることを考えれば、こりやもう世界的にバカ売れ間違いなし。CDやグッズが飛ぶように売れてカネはジャカジャカ入ってきて、おまけにネコの社会活動

式に億万長者になります。それではご紹介しましょう。世界初！歌うネコ、ジャガ&ルドルフ！最初の曲は『他人の関係』！いってみよー」

ステージにジャガとルドルフが飛び出してきたリズムをとり始めた。

♪パッパッパッパッ、ちゅっちゅっちゅちゅちゅちゅっ

ルドルフがスクヤット風に歌う。続けてジャガが、

♪逢うときにはいーつでも他人の二人

ゆうべはゆうべ　そして今夜は今夜

フルコーラス歌い終わると、ジャガとルドルフは深くお辞儀した。てーねーなお辞儀で前川清さんみたいだ。

「こんにちわ。僕たちの初ライブによるこそ。短い間ですが楽しんでください」

「あたしたち、まだまだへたくソだけど、一生懸命がんばりまーす」

「じゃ、次の歌は」

「ちよつと待った」ムラタがステージに飛び乗った。

「こらジャガ、おまえ、この歌の意味わかってるのか。若い娘が歌う歌詞じゃないだろう」

「えー？ 歌に年齢制限があるなんて聞いてないよ」
「この歌は大人のムードの金井克子さんだから許される。おまえみたいなガキは歌っちゃいけない」

「いやいや、そうとばかりは言い切れまい」長老が言った。「問題は、ジャガが歌詞の意味をどう解釈しておるかじゃろう。ジャガ、これは何を歌った歌じゃ？ 歌の意味がわかるか？」

「意味ですかあ、そうだなあ、えーと、ネコには親戚が少ないってことだと思います」

「親戚？」

「そう、兄弟姉妹とかイトコハトコ、おじさんおばさんみたいなネコ。だって、みんなどっかに行っちゃうでしょ。それで、周りは他人だらけになっちゃうんです」

「なるほどのう。どうだムラタ、納得したか？」

「しかし長老、本人がその気じゃなくても、聴いてるほうはハラハラしますよ」

「そこです！」ペロが飛び出す。「清純派が危ない歌を歌う、歯がゆいようなミスマッチが受けるんです

よ。百恵ちゃんの最初のころを思い出してください」
「うーむ、ワシは百恵は大好きじゃが、ひと夏の経験には七転八倒したな」

「ねっ、ねっ、そうでしょ。これで大ヒット間違いなしだ。オレのセールス戦略は常に正しい」

「あー」黙って聞いていたシュレが意見を言いたいみたい。「この歌は現象と観察者の関係を的確に表現していると思われます。歌い始めから終盤近くまでは完全な三人称で記述されていますが、最後の四行に至って唐突に一人称に変転する。つまり、現象という三人称を、どう注意深く観察しても、観察者の主観及び存在を、観察結果から排除するのは不可能であり、観察という行為が行なわれる限り観察というシステムに観察者が含まれてしまうのは不可避ということですよ」

なるほどねえ、まったく理解できないけど、他人の関係がとっても高尚な歌に思えてきた。

「とにかくですね、ジャガの魅力を全世界にアピールできるから、これでいいんだよ。ムラタさん、半年後には左ウチワだね」

「カネなどいらぬが娘の生活が安定するなら、ま、

許す」

「親御さんのお許しをいただいたところで、次は、ルドルフのソロで裏切りの季節。盛大な拍手を！」

ルドルフは淡々と歌い始めた。失恋の歌みたいだ。歌い進むにつれて体をよじったりシッポを膨らませたり、だんだんと悲痛な顔つきになつてく。それですついに

♪しーんじていたボクが悪い

いーけないことをしたような

裏切りの花がー 咲いていた

のところ、その場に倒れこんで泣き出しちゃった。ジャガが走り寄ってルドルフの耳をなめるけど効き目はない。

「おい、すごい演出だな。真に迫ってる」ユラちゃんも他のネコを褒めるなんて、めったにない。「オックスの赤松愛より百万倍もすごいや。ペロもやるもんだね」

「いやあ、さすがのオレでも、ここまでの演出はできない。裏切りの季節を歌わせるっていうアイデアはオレだがね」

「これペロ、お前はどこまで人非人、いやネコ非ネコなのじゃ。あまりに残酷この上ない。ネコにはやってよいことと、やっても差し支えないことがあるが、こればかりはダメじゃ」

そーだよ、ちよつとやりすぎだよお。ネタバレになるから詳しくは書かないけどさ、ルドルフの伝記を読めば、そこが触れちゃいけないところだつて、誰にでもわかるよ。今のアタシと同じ境遇だったルドルフが、やつとの思いでおうちに帰ったときに何があったか。思い出しても涙が出てきちゃう。知らない人は『ルドルフとイッパイアッテナ』を最初から読んでね。いい本だよ。

やつとルドルフは立ち上がった。ジャガが横で支えている。

「ごめんなさい。歌の途中でやめるなんて、プロじゃないですね。この歌、僕にはつらすぎるんです。練習でも最後まで歌えなかった。今日こそ歌い通そうとしましたが、やつぱりできません。この次はちゃんと歌います」って言って、また泣き出しちゃった。「しめた、『泣きのルドルフ』のキャッチで売り出そう」っていうペロの独り言を聞いて、ムラタがネコ

パンチを二発食らわせた。パンチをもちに受けたペロはステージの上まで吹っ飛んで、すくっと着地した。

「盛大な拍手をありがとう。どうもルドルフは感情移入しすぎたようです。歌は三分間の演劇とも言われます。最初からこれほど演じられるのは、世界的スターの証拠でしょう。さて、続きましてはジャガのソロで、アカシアの雨がやむとき。どーぞ！」

♪アカシアの雨にうたれて

このままあ死んでしまいたい

夜ーがあける 陽ーが登る 朝の光のその中で
冷たくなった私をみつめて あーのひーとーわー
なーみだをなーがして くれるでしょうかー

ワンコーラス終わって拍手が来たところで、ムラタがまたステージに駆け上がった。「やめやめ、やめー」

「どうしてこういう、若い娘に似合わない歌ばかり歌わせるんだ。ジャガ、このホワホワした退廃的なイメージがわかっているのか」

「ホワホワはわかるけど、退廃的ってなあに？」

デイーを自分なりに解釈し反芻して、初めて魂の叫びが出てくる

「ネコの胃袋は一個だけ。反芻なんかできるもんか」
「比喩だよ比喩。一回腹にしまっ、また出すんだから反芻だろ」

「それじゃ、毛玉吐くのは歌と同じだな」

「もういい加減やめんか。これはワシが認めた集会じゃ。ペロはユラノスケのヤジにいちいち答えてもいい。人間の国会でもそうなっておる。ところでワシから質問じゃが、選曲はペロがやっとするのか？」
「はい、いずれはオリジナルで揃えますが、それまでは二匹に合った歌を選んでます」

「選曲の基準はどうなっとするのじゃ。この二匹を見れば青春歌謡が適しておるように思えるのう。天地真理とか郷ひろみとか、歌詞に意味のないパッパパラーな歌じゃ」

「さすが長老。そうなんですよ。オレも最初は深読みしようがない歌を選びました。でも却下されたんです」

「誰が却下した。ルドルフとジャガか？」

「いえ、カラオケさるです。このプロジェクトを聞

「うーん、長老、何とか言ってください」

「ワシが言うのか？ まあ、全体の選曲がきわめつけに偏っことはたしかじゃな。それがセールスポイントなら致し方ないが」

「ジャガは俺の娘です。見ちゃいられないですよ」

「芸能界とはそういうところじゃ。ところでジャガ、この歌は何の歌だと思っとするかの？」

「何の歌って、そーだなあ、これ、家出したイエネコの歌だと思っただけど、違う？」

「イエネコがどうして死にたいのじゃ」

「家出したんです。それでおなががすいて、死にそうなくらいおなががすいて、道端に座ってるんです。それで、もしこのまま死んじゃったら、飼い主は泣くかなって」

「それじゃ、あの人って飼い主のことか」ムラタが気拔けて訊いた。

「決まってるよ、飼い主よ、きつと」

「ね、問題ないでしょ」ペロがジャガの肩を叩きながら言う。「この子はしっかりしてる。持ち歌を完全に理解してます。それが大ヒットにつながるんです。歌は口先だけで歌ってもダメだ。歌詞とメロ

きつけて裏の山から下りて来ました。なんでも、最近再放送もないしDVDも出ないからヒマだっ、勝手にディレクターになってます」

それから、ネコの仕事にサルが口を出すのは妥当か、とか、サルは日光で稼いでいるじゃないか、とか、サルネコ共闘の是非っていうか、本音のところはサルに手柄を取られるかもしれない心配をみんなで言い合っただけど、予想通りに結論なんか出なかった。

「えっと、そろそろファイナルで最後の歌を」

「まだ歌うのかい」

「そりゃ、ファイナルは華やかにいかなくちゃ。ルドルフとジャガ、スタンバって」

「おまえ、またヘンな歌だったらノドぶえ噛み切るぞ」ムラタはもう我慢できないって顔してる。

「それではみなさんもステージに上がってください。手をつないで明るく歌いましょう。青い山脈！」

♪わーかく明るいうたあ声にー

なだれは消える花も咲く

あーあおおい山脈 雪割りざあくうらー

タマの 世田谷都市伝説



蔵小路タマ 著

前半はおしまい。
ちょっと休憩しましょ。
続きの前に、怖いお話してあげる。
おかあさんがどんなネコかわかるよ。
すぐに後半を読みたい人は
飛ばしちゃってもいいよ。

タマ



壱：地下怪魚とサクラエビ

アタシがまだ一歳のときだった。「タマ、いいものあげる」ってママが呼ぶから急いで行ってみると、お茶碗に白くて小さくて細長いお魚がたくさん入ってた。わぁ、おやつだ！って近付いた次の瞬間、アタシは思いつ切りうしろに跳び退いちゃった。ヤバイよ、これ。お魚だけど、食べたらどうなるかわかんない。ふつーのお魚じゃないでしょう。

ていうのは、その前の晩、ミッチャンと二人で見たテレビを憶えてたから。ミッチャンはポテトチップ食べながら半分居眠りで見ってたけど、アタシはちゃんときっちり見たんだ。どっかの地下に鍾乳洞の秘密の洞窟があって、そこに住んでるお魚やカニや虫の話。真っ暗で光が全然ないから、生き物の体は全部白くて、目も役に立たないから無くなっ

ちゃってる。その洞窟では目無しのお魚知ってる。連中が、鍾乳石の壁を伝ってウロウロしたり、水溜りみたいな池でフラフラ泳いでた。見てて全身の毛が逆立ったよ。こういうのと遊びたくない。出会いたくないし、もちろん食べたくもない。

それが今、アタシのお茶碗にいっぱい入ってる。いくらネコはお魚が好きでも、鍾乳洞のへんなお魚なんか食べたくない。ママ、これどこで捕ってきたの？どこの洞窟？って、アタシはなるべく遠くに離れてフーフー言ってた。

「あらやだ、タマはしらす干が嫌いなのかな」ってママが言った。そーか、このお魚はしらす干って言うんだ。「まだ食べたことがないからイヤなのね。ちよつとこつちにおいで。カルシウムが入ってて体

にいいのよ」って、ママがアタシをお茶碗の方に引張った。そりゃそうでしょう、鍾乳洞なんだからカルシウムだらけじゃない。どうしてそんなお魚、食べなきゃなんないの。アタシはママの手を思いつ切りすり抜けて逃げて、そのままお外に走って出たんだ。ほんとに危機一髪。知らないで食べてたらアタシまで目無しになっちゃってたかもしれない。

アタシは玄関の脇に置いてある自転車の陰に座って考えた。どうしてママは危険なお魚をアタシに食べさせたかったんだらう。アタシを目無しネコにして「新種のネコです」ってキャットショーに出すつもりだったのかな。それとも「洞窟で発見したネコです」とかいつて、テレビに売り込む予定だったのかな。いくら味噌屋が不景気でも、それはないよね、多分ないと思いたい。

テレビではあの真っ白な連中を「貴重な生物」とか言ってた。貴重なお魚がネコのおやつになる？まあテレビのことだから過剰演出だったんだろーね。きつとどこかに、目の無い白いお魚が大量に捕れる洞窟があるんだ。漁師さんが洞窟に入って行って、アミでお魚をザクザク捕ってるのを想像してみ

た。かなり面白い景色だよ。洞窟漁業協同組合もあるかもしれない。だけど、どこにあるんだろ、その洞窟。そうだ、魚屋さんのネコに訊いてみよう。アタシが生まれた下駄屋さんのお向かいに魚勝さんという魚屋さんがあるの。カッチャンというネコがいて、お魚のことなら何でも知ってる。

魚勝さんの前で「カッチャン」て叫ぶと「ここにいるぜ」ってお屋根の上から眠そうな声が出た。「タマだよ」って言いながら、アタシはお屋根に登った。

「ねえ、しらす干って言うお魚知ってる？」
「しらす干い？」カッチャンは寝転がったまま短いシッポをピクピク動かして「ネコには離乳食みたいなもんだけ」って言った。

「食べたことある？」

「ああ、ガキのころ、よく拾い食いしたな。それがどうした？」

「食べて、どっかへんにならなかった？ 目が見えにくくなるのか」

「馬鹿言ったらあ、なんでしらす食ってへんになる

んだよ。ちゃんと匂いかいで、腐ってなけりや、魚なら何でも食えらあ。目ヤニで見えにくくなることもねえよ」

そうか、カッチャンはお魚なら何でも食べちゃうんだ。けっこう勇敢だね。

「で、さあ、シラスボシがどこで捕れるか知ってる？どのへんの洞窟か」

「おめえバカんなつちまったのかあ。洞窟で魚が捕れるかよ。海だよ海」

うーん、海ねえ。話がどうも違ってるみたい。あつ、そういうことか。海のとつても深いくところなら光なんて届かないものね。

「海のずーっと深いところで捕れるんだね」

カッチャンはむくつと起き上がって、あたしの顔をじーっと見た。

「あのなあ、さつきから何ワケわかんねえこと言ってるんだよ。しらすはなあ、その辺の海でフツーに捕れる魚で深海魚なんかじゃねえ。簡単に言やあイワシのチッコイやつのことだ。わかったか？」

またあ、冗談でしょ。カッチャンはシヤレがきつくて有名なネコで、自分でも「おらあ世の中ついで

なんか逆だ。今となつては、きのうのテレビ番組の方がウソくさく思えてきたんだけど、まあいいか。

「鍾乳洞のお魚以外の、どこが思い込みなの？」

「それ以外の全部、つて言つたつてわかんねえだろうから、そうだな、たとえばの話、光がねえ場所の魚は白くなるつてえのは、まあわかるとして、じゃ青い海の魚はみんな青いのか？魚の色は泳いでる場所の色で決まるとでも思つてんのか？」

そんな難しいこと、わかるわけないじゃない。それこそ、いつもたくさんお魚を見るカッチャンの専門でしょ。でも、わかんないなんて言うのはシヤクだから、

「そーだと思つよ。場所によつて海の色は変わるから、だからいろんな色のお魚がいるんだ」

「おめえなあ……、めんどくせえだけじゃなくて厄介なネコだぜ。じゃ訊くけど、サクラエビはどこで捕れるんだ？赤い海なんてどこにもねえぞ」

ほんとは。たしかに赤い海なんて聞いたことない。お魚専門のカッチャンに、お魚関係で言い負かされるのは仕方ないけど、ここで「わかんない」つて言つて、ごめんなさいするのはネコの自尊心が許さない。

に生きてるんだ」なんて言ってるから、アタシをからかつてるに違いない。

「ふーん、イワシの子なんだ。じゃ、なんで白いんだろーね？」アタシにアドバンテージ。

「そりやおめえ、茹でたからに決まつてんだろ。ほんとにおめえはめんどくせーネコだな。しらすが一体なんだつてんだよ。洞窟とか目とかあ」アドバンテージ消滅。

で、アタシはきのう見たテレビの話をした。話して少し怖くなつたけど、我慢してなるべくわかるように話した。カッチャンは耳をかきながら、あきれたような顔をして聞いてた。それから、ママがおやつにシラスボシをくれたことを話そうとすると、「わかつたわかつた。それにしてもおめえは思い込みの強えネコだぜ。思い込んだら命がけ、つてえタイプだ。惚れられたオスネコにや、とんだ災難だぜ」

「オスネコは関係ないと思うけどな……ま、そのへんは今度いつか話すとして、ねえねえ、アタシのどこが思い込みなの？」

「早い話が全部だよ。いや、鍾乳洞の魚のことはほんとかもしれないねえ。テレビが言つてたんなら」

アタシは赤そうな海がないかどうか、世界地図を思い浮かべた。あつた！

「あるもん。サクラエビは紅海で捕れるんだよ」カッチャンはおなかを上にしてギョヒョヒョヒョつて笑つた。アタシもつられて大笑いした。

それから、カッチャンがシラスボシをちゃんと見せてくれるつていうんで、二匹で魚勝さんのお店に降りていった。なるほど……、落ち着いてよく見ると小さいけど目玉がある。形もフツーのお魚だ。シラスボシは鍾乳洞でも深海魚でもないつて納得した。カッチャンはついでに、茹でる前のシラスも見せてくれた。こつちの方はちよつと不気味で、目だけ真っ黒で体は透明。これで目が無きヤクラゲじゃない。海の中を泳いでるとき、他のお魚からは見えないうな。こんな透明ネコがいたら怖いよね。人間ならもつと怖いかもしれない。きつとウエルズおじさんは、このお魚を見て透明人間を書いたんだと思つた。



式：世田谷の地下空間

「オレの夢はなあ、シラスウナギを踊り食いすることだ。こう、ツメを水ん中に入れて、一匹ひっかけたパケツ！考えただけでもよだれが出らあ」

魚勝さんのご主人からもらったシラスボシを食べながらカッチャンが言った。アタシは初めて食べるシラスボシがおいしくて、ただ「うんうん」としか返事しなかった。

「おい、タマ、聞いてんのか、シラスウナギだぜ。透き通ったウナギの子ども！」

「シラスボシ、おいしい。アタシこれでいいよ」

「あーあ、トーシロのネコはこれだからヤだねえ。こんなザコ食って、おいしいもねえもんだ。おめえ、夢とか希望とか野望とか妄想とかねえのかよ。つまんねえネコ」

「うっそでしょー。とつても気持ち悪いんだよ。目が無くて、真っ白で、泳ぐのもゆっくりで」
「だから食ってみてえんじやねえか。洞窟のヘンな魚あ食った、世界最初のネコになれらあ。ついでに真っ白なカニも食いてえ。真っ白なコウモリもいるかなあ」

カッチャンが洞窟の奥に座り込んで、白い魚やカニを一心不乱にムシヤムシヤ食べてるのを想像してみた。カッチャンならできそう。アタシは遠慮しとくけど。

「オレはなあ、ガキの時分から、世の中のナマモノは全部食えると思ってんだ。腐ってるのは別だぜ。洞窟ん中にあるなら、今夜にも行ってみようじゃねえか、なあタマ」

今夜？ 世田谷から一番近い鍾乳洞って、今夜行けるほど近かったっけ……。

「いいけどさあ、どこにあるか知ってるの？ テレビでやってたのは、たしか外国の洞窟だったけど」

「げえこくにあるなら世田谷にもあるはずさ。世田谷にやあ何でもあるんだ。東京タワー以外は。なんつったって世界で一番の街だからよお」

ちようど食べ終わったんで「ごちそうさまあ」って言った。満足してるアタシの顔を見て、言ってることは違って、カッチャンは嬉しそうだった。

「シラスウナギって、これよりおいしいの？」

「味か？ 知らねえよ。食ったことねえから」

「魚勝さんに頼んで買ってきてもらえばいいじゃない」

「買ってくるう？ ネコにい？ ……あなあ、シラスウナギってのは一匹で五百円もするんだ。スーパーで売ってるドライフード一キロ分で一匹。無理だあ、魚勝が脱税したって無理だ。でもよ、おめえが言ってた、その、テレビに出てた洞窟の魚ってえのもうまそうだな」カッチャンはニタツと笑った。

すごい郷土愛。ネコ区議会があつたらトップ当選確定だろうね。

「あるかもしれないけど、場所がわからなくちゃ行けないよ」

「そんなのワケねえ。知ってるネコに訊きゃアいい。そうだ、おめえのかあちゃんは物知りだったな」

っていうことで、アタシたちは道を渡って、おかあさんがいつも座ってる下駄屋さんの縁側に向かった。でも、どーしてこうなっちゃったんだろう。洞窟の生き物なんて、アタシは見るのも触るのもイヤなのに、なんだか知らない間に、ヘンな生き物探しで洞窟に行く隊員みたいになってる。子どものころおかあさんに言われたっけ。おまえはネコのくせに意志が弱すぎる、って。そーなんだろうーな。まだアタシの性格、治ってないんだろーな。

カッチャンがいきなり「白い目無し魚を食いたいんで、洞窟どこですか」なんて言うもんだから、話は少し混乱したし、アタシがシラスボシを目無し魚と間違えたところから話したので、話が少し速回りになったけど、忍耐強いおかあさんは、最後には全

部わかってくれた。ただし…、

「あなたたち、もう子ネコじゃないんだから、少しは論理性を持ちなさい。他のネコに何かを訊いたり伝えたりするのなら、口を開く前に要点を整理しなくちゃだめ。相手の立場や知的レベル、コモンセンスを推し量って柔軟に対処しないと、相手に何も伝わらないだけじゃなくて、あなたたち自身の知的程度を疑われたり、ときには尊大なネコだと思われるのよ。まあね、それができない人間もすごく多いって聞いているけど。さっきのあなたたちの話し方は、脳みそがウニのネコの話し方よ」

「ウニ！ 食いてえ。おばさんも好きだろ？」ってカッチャンが言ったもんだから、アタシたちは思い切り睨まれた。アタシは何にも言っていないのに、なんで睨むのよお。

「そういう風に、刹那的に話題を飛ばすのもネコの悪いところですよ。私までウニの話を始めたら、洞窟の話はどうなるんですか。さあ、洞窟かウニか、どちらかに決めてちょうだい」

「そりゃ洞窟だな。近所の洞窟の場所を知りてえんだ。どっかにあるだろ？」

本気で言ってるんじゃないでしょうね。

「という言い伝えがあるけれど、これはまあ神秘化するための方便でしょうね」

「ああよかった。おかあさんはカルトじゃなかった。でも、まんざらウソでもなさそうだから、無視するわけにもいかないの」

どっちなのよお。もうやだ。

「わかったわかった、早え話が、その洞窟っていうか穴ぼこっていうかは、かなりヤベえしろもんなんだろ。ダイジョブだつて。町内の若えもん連れてけば、たいげえのこたあ丸く収まるから安心しなつて。で、場所はどこ」

「場所はね、馬事公苑と桜新町の間にあるはず。地図には載っていないわよ。グーグルの写真にも写っていないから、正確にはわからない。もう今となっては」

「今となつては、つて、どーゆーこと？」アタシも少し面白くなってきた。

「そもそも、その洞窟は旧日本軍が極秘で掘った地下鉄トンネルだからよ」

「やった！ 地下妄大好き」

おかあさんは少し考えてから「あなたたちが探しているような洞窟が、世田谷にもあるらしいけど、…この話を教えていいものか、迷うわ」

「そんなあ。もつてえぶらずに教えてくれよ。な、タマも聞きたいだろ？」

アタシはホントは「別にい」って言いたかったけど、行きがかり上なんとなく「うん」って言った。

「しかたないわね。でも、いい？ これを知ったネコは後世まで語り継ぐ語り部ネコになる責任があるの。そして、洞窟の封印が解かれるのを命がけで阻止するという暗黙の誓約を受け入れたことにもなるの。それでもいい？」

えっ、おかあさんはフリーメーソンだったんだ。アタシとしては『良いスカウトになります』くらいにしときたい。

「おつ、封印けつこう、誓約けつこう。面白そうだねえ。オレはちゃんと言ったとおりにするけど、たとえばの話、封印が切れたらどうなる？」

「そのときには洞窟から百八ツの煩惱が世界中に飛び散つて、この世は暗黒に包まれる…」

あらま、その洞窟は中国の山にあるの？ まさか

「いいえ、この地下鉄の話は秋庭さんの本には出てきません。どうやら本当の話らしいから。でも公平を期して言えば、地下網か地下妄かは確かめたネコがいないのでわかりません。このあたりのネコに語り継がれている言い伝えなのよ」

「よっしゃ、今夜から馬事公苑あたりを掘つてみようかね。とりあえずタマと二匹で」

「およしなさい、無駄ですよ。これまで何世代ものモノ好きなネコがトンネル探しをやってきて、空気穴さえ発見できなかったものが、たった二匹でみつけられるはずがありません」

「そんなもんかねえ」カッチャンは不満そう。

「そんなものです。それに、ネコがいくら真剣に掘つたところで、たかだか五十センチでしょ。洞窟は地下二十メートルといわれていますから、深すぎて人間でもみつけれないんですよ」

「なんでえ、それじゃ今夜は行けねえじゃん」

「今夜も来週も無理でしょう。行かなければ死なずに済むし」



参：ダーウィンの奇跡？

洞窟に行くど死ぬんだ。なんだか物騒な話になってきた。だけど、とりあえず行かなければ死なないみたいだから、こういう第三者的・高みの見物っぽい話は大好き。もっと聞かせて。

「死ぬってどーゆこと？ 恐怖のネコ食いゴジラでも隠れてるの？」

「ゴジラもアンギュラスもモスラもいませんよ。その代わり、進化したネコとネズミとゴキブリがいます」って、おかあさんはキリッと断言した。どっか秋庭さんのスタイルになってない？ 「あるらしい」とか「言い伝え」とか言ってたのが、段々事実っぽくなってきて、今度はバチっと言いい切っちゃった。まあいいか、地下妄だから。

「おばさんさあ、ネコやネズミやゴキブリは、この

辺にだってウヨウヨいるじゃねえの。そんなもん怖かあねえよ」

「わたしは『進化した』って言わなかった？ 三種類の生き物は洞窟に閉じ込められたことで、世界に例のない形に進化して、モンスターに変貌しているの。いくら種の保存が生き物の本能だとしても、奇跡としか言いようがないのよ」

「奇跡だか墓石だかしらねえけど、町内の若けえもんが十匹もいりゃあ……」

「ダメでしょうね。ゴキブリにも勝てないと思うわ。洞窟のゴキブリは大きさが二十センチもあって、顎の力はカミキリムシの百倍、素早く動いて、一秒間に十メートルは走るから、地上のネコは一瞬で殺されます」

「すごいゴキブリ！ じゃ、洞窟じゃあゴキブリが王様なんだ」

「いいえ、そのゴキブリはネズミの食料です」

「ネズミが食うのか？ そんな化けゴキを？」

「たしかにネズミですけどね、わたしたちが知っているネズミではありません。進化か退化かわかりませんが、地上のネズミと比べて金魚とサバくらいの違いがあります。洞窟は光が入らず暗黒なので、タマが見たテレビの生き物のように全身真っ白。でも、壁や天井に生えたコケ類が出すごくわずかな光があるらしくて、その光で動体視力を得るために目玉の直径が三センチにもなっています。白ネズミに三センチの目を付けたらどうなるか、想像してごらん下さい。もうネズミではないでしょう」

どんなネズミか想像してみたら、わあ気持ち悪う。そんなヘンなものがある洞窟なんて、アタシゼーったいに行かないからね。

「それで、ネコは？」 カッチャンは興奮してる。どーやらアタシとは感受性が違うみたいだ。

「ネコがネズミを食べるのは地上でも地下でも同じですから、ネコも極端に進化しています。ネコが洞

窟に閉じ込められたときには、いろんな毛色のふうのネコだったはずですけど、今では白ネコしか残っていません。食べ物が少ないのか敏捷に動くためか、大幅に小型化して子ネコくらいの大きさになっています。目も退化して、わたしたち地上ネコのような視力はなくなっています……」

「チッコくて視力がねーネコなら、オレがケンカして負けるわきゃあねえ」

「いえ、カッチャンは負けます」

「なんだよ、その言い方。あのなあ、魚勝のカッチャンていやあ、このあたりじゃちっとは名の売れたケンカ屋で……」

「まあ最後まで聞きなさい。視力を失った代わりに、地下ネコの聴覚と嗅覚は百倍も鋭くなっていて、運動能力、特に跳躍力は地上ネコの十倍もあるんです」

「ピョンピョン跳ねやがるのか、ウサギみてえに」

「ひと跳びで三十メートルは当たり前だそうよ。あつという間に目の前からいなくなったり、次の瞬間、目の前に現れたり、まるで神出鬼没、猿飛佐助みたいなものでしょう」

「そのサルトビなんかかって、なあに？」

「昔の有名な忍者の名前よ。まだテレビがなかったころ、ラジオ番組に出てたわ」

「忍者がパーソナリティーやってたのか。すごいな。番組名はなんていった？ 葉隠れニッポンとか？」

「えーと……まあ、忍者の話は明日しましょう。わたしも悪かった。今は地下のネコの話です。いい？」

「そう、ネコネコ、地下ネコだな」

「で、白くて小さくてすばしい地下ネコには、地上のどの動物も持っていない、知られざる能力があります」

「おかあさん、テレビドキュメンタリーの見すぎじゃない？ 最近なんでも『知られざる』や『まだ見ぬ』だから……知らないのは放送原稿書いた人だし、まだ見ぬって言っても現地の人やネコは昔から見てるはずでしょ。その形容句、テレビ見てるアタシまで無知蒙昧の俗ネコにされてる気分。製作者の視点の狭さが臭いほど匂う言い方だと思っちなあ」

「タマ、お前は偉くなったわね。そういう突っ込み、おかあさんは大好きですよ。ネコは常に言葉には繊細で、表現は的確明瞭でなくちゃ」

「地下ネコお、地下ネコの話をしてくれ」

わからないの。それに、ネコたちが洞窟に閉じ込められてからまだ七十年くらいしか経っていないのに、これほど急に進化した理由もわかっていない。謎だらけなのよ。カッチャンも目からレーザー出したいのなら、深い穴に入って五十年くらい我慢することね」

「五十年も穴ん中か。ちょっと長えよ」

「それじゃ洞窟の中ではネコがネズミを取って、ネズミがゴキブリを取って、っていう食物連鎖があるんだ。でも、んつと、そうするとゴキブリは死に絶えるんじゃない？ 一匹残らず」

「さすがわたしの娘ですね。そう、単純に図式化した食物連鎖なら、ゴキブリは一方的に食べられるだけ。タマの言ったとおりになるでしょう。でも、洞窟にはもうひとつの連鎖があって、ゴキブリはネコを食べます」

「ゴキに食われるのか！ 不甲斐ねえネコだなあ」

「真つ暗な中でうしろから襲われてごらんなきい。地下ネコの聴覚は異常に発達しているけれど、人間が使っているマイクروفオンと同じで、感度が良いのは耳が向いている方向だけ。前方の感度が良いほ

「はいはい、言い方が悪かったわ。地下に住むネコは目が退化した代わりに、まったく新しい能力を身に付けたの。目から鋭いレーザー光線を発射するのよ。自分が発生する生体電気を溜める生体電池が前頭葉にできていて、十秒程度の充電で〇・一秒くらいの短時間だけ強烈なレーザー光を出せる。洞窟の暗黒の中で、ネコたちの光線が縦横に飛び交ってる。すごい光景でしょうね」

「見てえ、多摩川の花火よりきれいだろっな」

「花火と違って、地下ネコには遊びではありません。食糧確保の手段なんです。ネズミの音がする方向にレーザーを発射して、それがネズミに命中したらどうなるでしょう。さっき言ったように、ネズミの目はごく小さな光に合わせたサイズですから、レーザー光が当たれば露出オーバーになって、しばらくは何も見えなくなつてネコに簡単に捕まってしまうます」

「地下ネコつてハイテクなハンターなんだ」

「オレも目からレーザー出してえ」

「ハイテクかどうかは……、どういう経緯でこのように進化したのかは、研究者もいないし、まったく

ど左右や後ろからの音には気付きにくくなるの。音響学的な宿命だつて誰かが言つてたわ。耳の方向の真横からゴキブリに襲われたネコは、気付く間もなく骨だけになるでしょう」

「ゴキに目つぶしレーザーは効かねえのか？」

「ええ、ゴキブリの目は完全に退化していて、光はまったく感じないからレーザーは役に立ちません。さあ、わかった？ 洞窟では食物連鎖というより『食物環』とも呼んだ方がいい関係が成り立っているの。ヘビとカエルとナメクジ、もつと簡単に言えばグー・チョコキ・パーと同じ三角関係。今は外とつながっていない隔離された環境だからバランスが取れているけれど、洞窟が何かの加減で外界とつながったら、おぞましい生き物たちが地上に解き放たれ、わたしたちネコだけでなく人間も存亡の危機に陥ります。ねえカッチャン、それでも馬事公苑あたりを掘りに行く？」

「えつと、まあ、そうだなあ。なんかさつきから腹のあたりの毛が湿っぽくなってきやがった。多分、今夜は雨だな。濡れるのやだから中止しよう。タマもその方がいいだろ？ な？」



四：恐怖、ネコワ二様の幻

カッチャンは「濡れないうちに帰ろう」とか「そういやお腹が減った」とかブツブツ言いながら魚勝さんに帰って行った。アタシはもう少し知りたくて、おかあさんのところに残った。

「あのさあ、マジに訊くけど、今の話、本当なの？ 地下ネコとかデカ目ネズミとか化けゴキとか。もしかしておかあさんの創作？」

「あら、あなたは親の話を信じないの？」

「信じたっていいけど、前にもアタシをおつかない話で怖がらせたことあったでしょ。同じ手かなと思ってる」

「なによ、わたしがいつ作り話であなたを怖がらせた？」

「ほら、あれよ、子ネコのころ話してくれたネコワ

二様」

「なんだ、ネコワ二様のお話か。あなたたち子ネコが、わたしの言うことを全然聞いてくれないから、ちよつとはウソをついたけれど、でもね、ネコワ二様はこの辺にいるのよ。世田谷ネコの伝説だから、それは本当にいるの」

「伝説？ 迷信じゃないの？」

「どちらでも同じことですよ。多くのネコが『いる』と思えば、それはいるの。存在が確認できないの理由に『いない』なんて言い張るのこそ傲慢な発想で、一種の迷信じゃないかしら。その辺から唯物史観が破綻する糸口がみつかるはずよ」

「げーっ、おかあさんの言うこと、ときどきわからない。どこで勉強してるんだろーなあ。」

「ならいいよ。いる、でいいよ。でもどうして『ネコワ二様がこつちに向かつて歩いてる』なんてわかったの？」

「それはウソ。今いる場所なんてわかるわけでしょ。走り回って大騒ぎしているあなたたちを静かにさせて、わたしの周りに集めるには、ネコワ二様の力を借りるしかなかったのよ」

「やっぱりね。恐怖で子どもをコントロールしてんだ。子どもに与える心的外傷後ストレス障害なんて考えなかったんだ。ふーん」

「それより子どもたちを生き延びさせることが大切でしたからね。勝手に走り回って、表に飛び出してクルマに轢かれてもよかったのならPTSDの心配もしただろうけど」

これには言い返す言葉も無い。アタシは黙ってた。おかあさんも黙ってた。ネコにはよくあるんだよ、こーゆー沈黙。少しすれば直るけど、ちよつと時間がかかるから、その間にネコワ二様ってなにか話しておくね。

ネコワ二様ってね、体がネコでアタマがワニで、

耳だけはネコみたいに立っててクロコダイルくらい大きき。昼間は砦の先の多摩川で寝てて、夜になるとこつちに歩いて来るんだ。世田谷通りと淡島通りが好きみたい。好物はキクラゲ。ラーメン屋のゴミ箱の前に座つてることもあるって。だからラーメン屋の近くは、アタシ、通りたくない。今でもね。

鼻がすごく良くて、親の言うことをきかない子ネコの匂いをかぎつけると、暗闇を伝って猛スピードで走ってきて、騒いでる子ネコの耳を食べちゃうの。子ネコの耳って、柔らかくてキクラゲに似てるでしょ。歯が鋭いから、耳を取られた子ネコはすぐには気付かなくて、翌日、目が覚めてから自分がドラえもんになっちゃってるのに気づく。実際、三軒茶屋では一度に六匹の子ネコが耳を取られたって。

調べたら人間の世界でもナマハゲっているじゃない。ネコもナマハゲ怖いけどさあ、子ネコにとってはネコワ二様のほうがずーっと怖いんだよ。

たわいない話、なんて思ってるでしょ。でもね、子ネコのときにおかあさんから「ネコワ二様が環八渡って芦花公園も通り過ぎた」なんて言われると、すぐに「いい子にしくちや。いい子の匂いにな

くちゃ」ってあわてて、おかあさんのおなかの下に頭を潜り込ませたんだ。っていうのが、ネコワニ様のお話。

「あのさあ」ってアタシは言った。「さっき、洞窟は軍隊が作った地下鉄の跡とか言ってたかった？」

「ええ、旧日本陸軍がね」

「なんで世田谷なんかに地下鉄を通そうとしたの？」

「おや、おまえは知らないの？」

「うん、ぜんぜん知らない。地下妄にも出てこなかったし」

「地下妄だけが秘密の地下鉄じゃないわ。もつとすごい秘密だったの。陸軍が世田谷に地下鉄を作ろうとしたわけ、本当に知りたい？」

「知りたい、知りたい、すごーく知りたい」

「じゃ、少し長くなるけど、話してあげましょうか。まず、その地下鉄の目的だけど、皇居と馬事公苑の間をつないで、お馬を運ぶことだったのよ」

「お馬あ？なんでまた」

「私を知るわけじゃないでしょう。とにかくお馬を運ぶの。でもね、ネコパディアで調べてみたら、計画は

もつと遠大で、馬事公苑からずつと先まで線路を延ばして、相模陸軍造兵廠、今ではアメリカ軍の相模総合補給廠になっているけど、そこを經由して厚木の海軍飛行場まで行くつもりだったみたいよ」

「長〜い地下鉄を作ろうとしたんだね」

「だから、わたしの推測だけど、お馬を運ぶのは表向きの秘密の目的で、本当の秘密の目的はふたつあって、ひとつは相模原から厚木に戦闘機の部品を運ぶ高速鉄道。もうひとつは、いざとなったら皇族や政府の偉い人を皇居から厚木に運んで、飛行機で日本を脱出させるためだったと思うの」

「なるほどお。地下妄よりずつと面白いや。兵隊さんが掘った地下鉄なんて、他にないもの」

「兵隊さんは穴掘っていません。よく考えてね。馬事公苑は陸軍系で、相模造兵廠は陸軍そのものだけど、厚木は海軍よ。仲が悪かったの、陸軍と海軍。それで、どっちの仕事にするか決まらなくて、ついに内閣が民間活力でいこうって決めたわけ。都合のいい下地もあったし、税金使わなくて済むし」

「どーゆーこと？」

「それを説明しだすと、もつと長くなるけどいい？」

「いいと思うよ。この文章読んでる人も、多分ヒマだから」

「それじゃ、地下鉄銀座線の歴史から」

「銀座線なんて世田谷と関係ないじゃん」

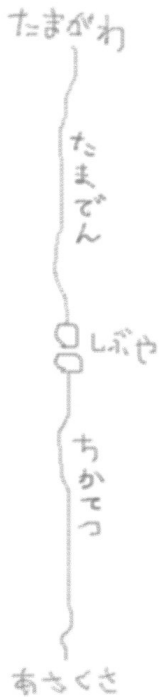
「だから長くなるって言ったでしょ。黙って聞きなさい。細かい話は省いても、銀座線ができたとき、浅草⇨新橋は東京地下鉄道っていう会社で、新橋⇨渋谷は東京高速鉄道っていう、今の東急のボスだった五島慶太っていう人の会社が作ったの。銀座線は新橋でふたつに分かれてたのよ」

「知ってるよ、ウイキに書いてあった」

「しばらくして五島さんは、浅草⇨新橋の東京地下鉄道を、かなり露骨なインチキで乗っ取って、浅草から渋谷まで一本の路線にした。新聞なんかでは強盗慶太って呼ばれてたわ。その名前、本人も否定しなかったみたいだから、ネコもそのくらい凶太くないと出世できないってことね」

「アタシ、出世なんかしたくないよ。クマのプー太郎程度でいい」

「ずいぶん志が低いのね。あなたが言ってるのは、今のままでいい、と同じじゃない」



「うん、面白いことがあれば今のままでいい」

「おまえはおとうさんに似たんだね。あのネコは、子どもが生まれるっていうのに、ふらふらどこかに行ってしまっ、一度も帰ってこなかった。本当にラクチンに生きてたから」

「その話は何度も聞いたよ。今は強盗さんの話でしよ」

「そうだった。その五島慶太さんは渋谷から玉川のほうに行く玉電も持ってたの。今の田園都市線とほとんど同じ場所を走っていた路面電車」

「やった、世田谷に近付いてきた」

「さて、プーさんでもプー太郎でもいいから、ちよつと考えて。あなたが五島さんだったら、同じ渋谷で終点になっている自分の銀座線と玉電を、そのままにしておきたいと思う？」

「えーと、えーと、ちよつと待って」アタシは頭の中で地図を描いてみた。



五：強盗さんがたへらんだこと

「つなげたい！」

「はい正解。誰だっけそう思うわよね。渋谷でつないで浅草と玉川を一本で結べば、電車に乗る人がもつと増えて、五島さんは大儲け間違いなし。だから、これはわたしの推測だけど、五島さんは線路をつなげやすいように仕組んだと思うの」

「なんかどんどん洞窟から離れてつるみたいだけど、いいの？」

「いいのよ。最後には全部わかるから安心しなさい。その伏線が銀座線の渋谷駅の場所。青山のほうから来た電車は、地上に出たとたん高架になって、東急東横店東館の三階にある駅に着くでしょ。地下鉄の駅がビルの三階よ。ネコペディアで世界鉄道七不思議に入ってるから見てごらんなさい。そのビル

は今でこそ東横店東館って呼ばれてるけれど、地下鉄の駅ができた当時は玉電ビルだったの。そうよ、五島さんの玉電の本社が入っている五島さんの建物。どこか胡散臭くない？」

「臭いね。タロがやつてるみたいに、自分のオシッコの匂いが付いた場所だ」

「極端に矮小化した相似性ね。まあいいわ。駅をわざわざビルの三階に作った理由は、本当なら地下に作るべきだったけれど、当時の電車は力が弱くて宮益坂の急坂を登れないからだ、っていうことになってる。でも、それだけでは理由になってない。というのよ、玉電ビルは渋谷川っていう川の上に建ってるの。山手線内周りの、ちようど内側を流れていた川で、今では川ではなくて排水路に格下げされてし

まった川。その上にヤグラを立てるみたいな難工事でビルを建てて、強引に三階を駅にしたのは、何とかして銀座線に川と山手線を渡らせたかったからでしょう。下心があつたと思えませんか」

「金持ちって下心のカタマリだと思っよ。下心のない金持ちって、いるのかなあ」

「それはネコジャラシに飛びつかない子ネコくらい無理な話です。もしも五島さんに下心がなかったら、駅場所はもつと青山寄りで、昔の東急文化会館、今のヒカリエの隣あたりになっていたでしょうね。もう始まっている渋谷再開発で銀座線の駅が移る場所の近くです。そうすると山手線への乗り換えが少し不便になるけれど、ビルを建てずに済んで安上がりですから」

「なるほどねえ。だけどおかあさん、いつそんなくだらないこと考えたの？よほどヒマだね」

「ネコはいつもヒマです。ただし、くだらなくはありません。五島さんと銀座線の関係を考察しておかなければ、世田谷の洞窟は地下妄以下のホラ話になってしまいます。ちゃんと聞いておきなさい」

「は〜」

「最初に銀座線の渋谷駅ができたのは一九三八年つまり昭和十三年で、そのときには東横店東館しかビルがなかったから、長いホームは作れなかっただろうし、電車はホームで折り返してたと思うの。それからしばらく経って一九五四年、昭和二十九年に、今の東横店西館が建つたので、線路をホームの先まで延ばして引き上げ線を作った。到着した地下鉄は必ずいったん引き上げ線に入るように変わったの。引き上げ線は西館の三階部分を通って、ハチ公の斜め上を横切って、道を渡って向かいの建物の屋上に行っている。今は屋上ではなく渋谷エクセルホテルの三階部分に当たる場所です。昔は引込み線のガード下に天津甘栗のお店があつたつてご主人が言っていました。ま、これは余計なことですけど」

「それじゃ、渋谷駅近くの銀座線の線路は、ずーっと高架だったり屋上にあつたりしたんだ」

「そういうこと。今でもそうよ。あなた、甘栗に釣られなかったのは偉いわ。銀座線の話はちよっとお休みして、銀座線ができる前、玉電はどうなっていたかという、なんとハチ公の前まで来てたの。映画でも玉電が見えるでしょ」

「憶えてるよ。同じ電車が意味なく往復してた」
 「映画だから一台しかなかったのよ。でも、線路の位置はほぼ正しいと思ってる。玉川のほうから来た玉電は、道玄坂を下って、ハチ公前の交差点を右折して、その先に駅があったわけ。実はその先にも線路は続いていて、山手線の下をガードでくぐってヒカリエの前に出て、そこから恵比寿方面に延びていた。ガードの痕跡も残っているけれど、これは別のお話」

「おかあさん、いつからテツおばさんになったの？いくらヒマでもマニアックすぎない？」

「いいじゃないの。昔の電車のことを考えているだけだから、乗りに行きたくてもできないし、だから電車賃もかからないし、動かなくてもいいからおなかもすかない。いい趣味ですよ。でね、玉電の駅は、最初はハチ公のあたりにあったけれど、地下鉄ができると同時に、なんと地下鉄の駅のすぐ隣、玉電ビルの二階に移動している。二階と三階で高さは違いますが、すぐ隣、地下鉄の駅のすぐ北側です」

「ということは、つなぎやすくしたんだ」

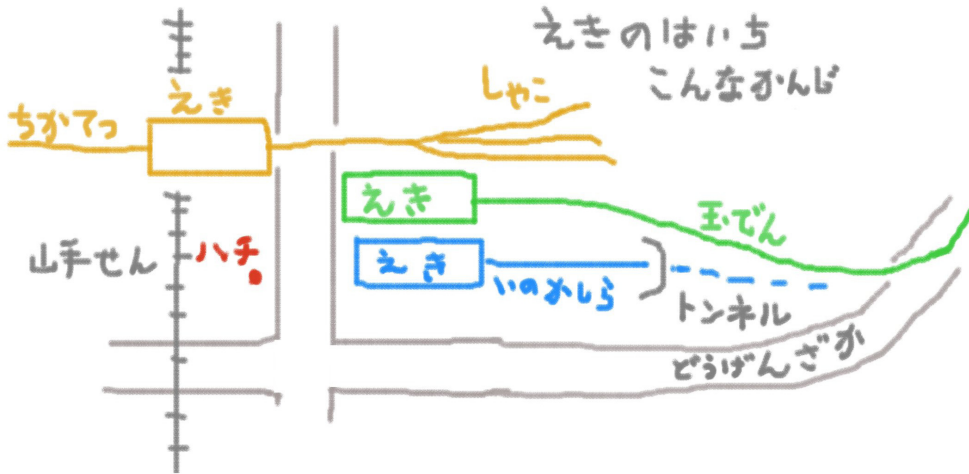
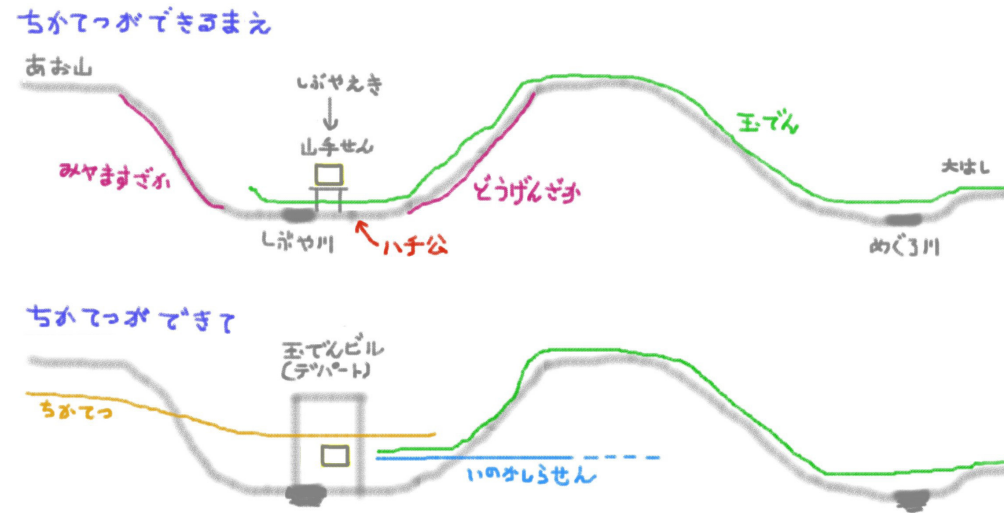
「多分ね。ついでに言っておくと、玉電の隣には、

同じ二階に井の頭線の駅もあるのよ。なんだか駅ばかりでしょ。渋谷駅にはこの他に横浜に行く東急東横線もあるし、新しくできた地下鉄副都心線、玉電の代わりの新玉川線、つまり田園都市線の駅もあるから、知らない人は迷子になるわ。ネコが行ったらパニックになって飢え死にするでしょうね。

なんでしたっけ、そうそう、玉電と銀座線をつなぐ話だったわね。あなたの言うとおり、線路をつなぐだけならとっても簡単にできる配置になった。玉電は、道玄坂の途中から路面電車をやめて専用の線路を走るようにして、坂も少し緩くなるようにしてビルの二階に引き込んでいた。もしつなげるなら、坂をもっと緩くして、少しでも方向を曲げれば三階の銀座線の引込み線とつながるわけ。模型の電車ならいつでもつながる状態よ」

「五島さん、つなげばよかったのに」

「いろいろ問題があったの。まず法律。地下鉄は鉄道、玉電は路面電車。同じ電車でも法律では違う種類なの。強盗さんなら、あちこちに賄賂を贈って解決できたでしょうけれどね。それから線路の幅、軌間っていますますが、銀座線は新幹線と同じ一四三五ミリ、



いわゆる標準軌っていう幅で、玉電は路面電車の標準の馬車軌なんて呼ばれる一三七二ミリ。強引につないだら必ず脱線しちゃうわ。だから、もしつなぐなら、どちらかに統一して線路を引き直して、電車の台車も合わせなければならぬ。お金はかかるけれど京成電車なんかではやってるから、絶対に無理というわけでもありません。

もうひとつ、これが最大のネックだったと思うことで、電車に電気を引き込む装置、集電装置が違っていた。玉電はふつうの電車と同じで架線からパンタグラフで電気を取っていた。ところが銀座線は線路の脇に三本目の線路みたいなレールを敷いて、そこから電気を取る第三軌条集電という方法だったの」

「なんでまた、そんな面倒な方法を」

「パンタグラフを使わなければ電車の上に何も付かないから、トンネルが小さくて済むでしょ。昔は穴を掘るのが大変だったから、トンネルはなるべく小さくしたかった。丸の内線も第三軌条集電だし、ロンドンの地下鉄もそうよ」

「電車はみんなパンタグラフがあると思ってた。京

王線しか見たことないもん」

「そういえば京王線はね、ちゃんとした鉄道なのに軌間が一三七二ミリの馬車軌なの。ヘンでしょ？これはね、最初は路面電車が始まった路線で、いまだに変えてないからです。つられて地下鉄の都営新宿線も馬車軌になってる。京王線と直通運転するつもりで作った路線だから、親分に負けた、っていうところかしら。いずれにしても東京の地下鉄だけでも三種類の軌間があって、銀座線なんかの標準軌、都営新宿線の馬車軌、その他ほとんどの線の狭軌。狭軌は軌間が一〇六七ミリで、JR在来線や私鉄では一番多い規格」

「一番多ければ標準じゃない。どうして狭軌なの？」
「多分、日本最初の鉄道、新橋⇨横浜が狭軌だったからでしょう。日本に技術を輸出したイギリスが、東洋の黄色い猿の鉄道なんか植民地規格の狭軌で充分だ、と考えたからでしょうね。結局それが日本の標準になっちゃった」

「ネコなら怒るよ。人間は怒らなかつたんだ」

「怒るものですか。しばらくは甘く見られたことにも気付かなかつた。本来なら国辱ものですよ」



六・強盗さんに追い銭のような

アタシとおかあさんは最初は正座して話していた。そのうち疲れて箱座りになって、今では寝転がって話してる。おかあさんがこんなにテッチャンだって知らなかつたなあ。ところで今ごろカツチャン、何やってんだらう。アマゾンで洞窟用品探してたりして。ネコ用はなかなか見つからないと思うよ。

「せめて銀座線にパンタグラフがあれば、五島さんにも打つ手はあつたはずですよ」おかあさんが言った。

「玉電の電車は背が高くて地下鉄には入らないし、銀座線の電車を道路で走らせるには第三軌条が要るから無理。どうしてもつなげるなら、どちらかの線路を改軌して、電車を全部作り直さないといけない。いくら五島さんでも、そんな大技は無理だった。そのうちにクルマが増えてきて、玉電は『じゃま電』

なんて呼ばれるようになって、結局一九六九年、昭和四十四年に廃止になったの。三軒茶屋⇨高井戸は路面電車ではなくて専用の線路だったから、世田谷線の名前で残っています」

「乗ってみたいなあ」

「ネコなら乗れますよ。わたしはよく乗っています。スルつと乗って、パツと降りれば、ワンマン運転なので、まずみつきりません。ネコ用の運賃は書いてありませんから、きつと無料なんですよ」

「玉電が廃止になつたっていうことは強盗さんの負けっていうこと？」

「五島さんが黙って負けると思う？ 認識不足です。お金と権威追求にかけてのネチっこさでは世界のベストテンに入るような人よ。新玉川線、後の田園都

市線で執念深くオトシマエつけさせてます。ネコは生まれながらに根気がないので、五島さんみたいに大成できません。少しは見習いましうね」

それはイヤだ。根気って我慢することですよ。アタシには無理。

「ねえ、いつになったら世田谷の洞窟が出てくるの？少し飽きてきちゃった」

「もうすぐよ。あら、わたしとしたことが調子に乗って玉電の最後までしゃべってしまいました。こんな最近の話までは要らなかつたのね。じゃ、ご希望にお応えして世田谷の洞窟」

「待って待って、トイレ行ってくる」

アタシは起き上がってノビをして、おかあさんのトイレに行つてオシッコした。このトイレ、久しぶりだな。ついでにおかあさんのごはんを少し食べてみた。やっぱりフリスキーだ。ネコ元気とはちよつと違う味。それからゆつくり戻ると、おかあさんは起き上がって正座してたから、アタシも向き合つて正座した。

「相変わらずフリスキーだね」

「今日だね。最近は安売りのを買ってくるみたいで、

「それを使えばノンストップで皇居から世田谷まで逃げられる。夜中に走れば誰も気付かない。すごくいいアイデアね。でも陸軍は五島さんまで騙そうとして、その線路は馬を運ぶためのものだって言ったから、五島さんは怒ってしまった。『おれにもウソつくのか』ってね。でも、後からわかつたことは、五島さんは怒つた振りしてただけみたい。いきなりオーケーしたら軽く見られるし、ちよつとゴネればもつとオイシイ話になるだろうと踏んだから。

次の日、陸軍がまた来て、いや、本当に馬を運ぶのが目的だ。ついでに郊外から都心に野菜を運ぶ。もし馬事公苑まで線路を敷いてくれたら、その先も相模原経由で厚木まで延ばしていい。戦争に勝つたアカツキには、作ってくれた線路の営業権だけではなくて山手線もあげる、と言つたの。まったくミエミエの話じゃない。VIPの脱出用と軍用鉄道そのものでーす、何が何でも作つてほしいでーす、つて言っているようなものでしょ。

五島さんは苦笑するしかなかったようで、ここはひとつ騙されてやるうか、となつて、まず馬事公苑まで銀座線を延長する約束をしてやつた。これが秋

銘柄が一定しないの。いろいろ楽しめていいわよ。じゃ、お話の続き。

この前の戦争で日本が勝つていたのは、戦争の始まりのころだけ。ドーツと景気よく攻めて行つた勢いは一年もたなかつた。開戦の次の年の一九四三年、昭和十八年の終わりごろには、軍隊の偉い人の中にも『もしかすると負けるかも』って思う人が出てきた。東京にボコボコと爆弾が落ちてきたからです。もつと爆撃されたら人間もネコも逃げられなくなつてしまふ。そこで、陸軍は東京都心からの逃げ道を作ろうとしたわけ。地下鉄で逃げるのよ」

「いつそ小田急で逃げましょか、つて歌もあつたね。地下鉄で誰が箱根に逃げるの？」

「こら、混ぜつ返さない。箱根でなくても、とりえず都心から皇族と政治家を脱出させればいいって考えたの。陸軍の偉い軍人が五島さんを訪ねて、地下鉄を渋谷から先に延ばして、馬事公苑まで線路を極秘で作つてくれないか、と頼んだのが一九四四年の初めころ。銀座線の赤坂見附あたりから皇居の地下に、秘密の引込み線があるのは知つてるでしょ」

「うん、地下妄に書いてあつた」

庭さんも書かなかつた超極秘地下鉄の始まりよ。

五島さんは銀座線を延ばして玉電とつなぐことを、その前からずうつと考えていたから、基本的な構想はできていたの。構想つていうのは、玉電ビルの三階にある線路を、そのまま先に延ばして、丘の斜面にぶつかつたところをトンネルの入り口にして地下にもぐる。隣の井の頭線と同じようにね。

地下に入ったら少し左にカーブしながら徐々に深くして行く。深くしないと線路が丘の向こう側にいきなり顔を出してしまうから、ちよつとまづい。そして今の神泉町交差点あたりで地上に出て、そこで玉電と接続しよう、というのが五島さんのそれまでの大まかな構想だつた。

馬事公苑までの全線地下化も、ほとんど同じ方法でできる。ただ、丘から入つたトンネルを、もつと深くして神泉で地上に出ないようにして、大橋まで持つて来ればいい。あとは玉電が走っている玉川通りの地下に線路を作るだけ。ひとつ問題は、大橋あたりで目黒川の下を越える方法。川の下に線路を通すのは、銀座線の万世橋でやつたことのある工事だけど、あのときみたいに水を干上がらせるやりかた

では人目に付きすぎる。さてどうしようかな、と考
えていた。

もうひとつ、これは秘密の鉄道なので、電車が走っ
たときに地上でゴーゴー聞こえるのはダメだから、
全体に銀座線よりも深いところを通さなきゃいけな
い。これもちよつと問題ね。というのは、その当時
の地下鉄は、地上から穴を掘ってフタをする開削工
法だった。でも今度はモグラみたいに掘り進む山の
トンネルと同じ作り方にしなければいけない。お金
も時間もかかるけれど、そこは大東急の五島さん、
『やれ！』の一声で工事が始まった。

目黒川の下をくぐるには、当時としてはものすご
く深い地下十メートル以上じゃないと抜けられない
し、音の関係もあるから路線全体をそれに合わせて
全線地下十メートルに決めて、まず大橋にあった玉
電車庫の敷地から三軒茶屋のほうに掘り始めたの」
「ちよつと待つてよ。それって極秘計画だったんで
しょ。おかあさん、どうしてそんなに詳しく知って
るの？」

「あら、言わなかった？全部ネコペディアに書いて
あります。書いたのは秋庭さんちのネコみたい。あ

のお宅には秘密資料が山になつてゐるらしいわ」
「秋庭さんがときどき資料を読み違ひするのは、資
料が多すぎるからなんだ。お気の毒」

「人間のすることですから、ネコより正確じゃあり
ません。人間はネコほど恥を知りませんし。」

五島さんの秘密の地下鉄は玉電の下をどんどん掘
り進んで、半年くらいで上馬あたりまで来た。今の
環七との交差点の近くよ。機械をほとんど使わずに
人の力だけで掘ってたから、そりゃあ大変だったら
しくて、作業員は外に出るのを禁じられて、ずっと
トンネルの中で寝泊りしてた。世の中は『欲しがり
ません勝つまでは』とか『足りぬ足りぬは工夫が足
りぬ』なんていつてた時代なので、そんな労働基準
法違反の働かせ方も普通だったようです。

あるとき、外に出られない作業員の一人が、ドブ
ネズミを見つけて飼いはじめた。別の作業員は、迷
い込んだネコを飼い始めた。娯楽がなくて、ただ働
くだけではつまらなかったのでしょう。トンネルの
中ではペットを飼うのが一気に流行したそうよ」

「犬は飼わなかったの？」
「散歩させないと嘔み付きますから」



七：今あかされる半地下私鉄道

「そのころ、渋谷⇨大橋間のトンネルはほとんど完
成していて、あとは目黒川の下を越えるだけになっ
ていた。一方、日本の敗戦は『可能性』ではなくて
『確実』みたいな状態で、東京への無差別爆撃が続
いていた。タマわかる？アメリカが無差別に動物
を殺したのはベトナム戦争が最初ではないの。広島
・長崎もそうでしょ。その前にもドレスデンや東京
があった。アメリカには大義名分があったのでしょ
うけど、殺された人間やネコは、そんなもので納得
できません。もつとも、戦争を仕掛けた日本も同じ
ですけど。本当に人間は愚かです。生き物の中で一
番愚かです。共食いで何でもすればいい。でも、
大義名分と無関係なネコを巻き添えにしないでよ。
ネコには勝手に生きる権利がある！闘争勝利！」

「あの一お、秘密の地下鉄……」

「あつ、ごめんなさいね。わたしもネコだから集中
力が限界かも。さあ、もうひとふんばり。」

トンネル掘りの現場では、おなががすいたら仕事
にならないから、地上がとんでもない食料不足だと
は信じられないほどのご馳走があった。ペットたち
も満腹していて、子供をどんどん産んだ。

掘り始めて約一年、玉電が玉川通りの旧道に入る
ところまで掘り進んだとき、五島さんから命令が届
いた。内容は、そこから深さを少しずつ深くして、
桜新町で地下二十メートルにして、桜新町で右に曲
がって馬事公苑に向かうこと。そしてもうひとつ奇
妙な命令があって、陸軍の仕事以外に、桜新町で右
に曲がらずに二子玉川方面にもトンネルを掘るこ

と。そのトンネルの深さは地下十メートルでよろしい、っていうの。五島さんは、このときにもう玉電の全線地下化を企んでいたようです。少しでも掘っておけば後で楽になるって考えたんでしょう。

桜新町から先を深くするのは陸軍の考えでした。玉電の下から外れて畑の下を走るようになるので、電車の音が畑に聞こえては困りますから。たしかにその考えはもつともですけれど、作業する側としては深さ十メートルと二十メートルでは大違い。桜新町から馬事公苑までの約九百メートルは地獄の工事で、何十人も何十匹も犠牲者が出たそうよ。

馬事公苑の地下駅は今の覆馬場の場所に決まっていたの。島式一面二線、長さ四十メートルのホームを作って、地上へは馬も運べる貨物用エレベーターが計画された。ね、これで皇居と馬事公苑を結ぶ秘密の地下鉄が完成するはずだったのよ」

「っていうことは、完成しなかったの？」
「そこが難しいのよ。設備はほぼ完成してた。渋谷から馬事公苑まで、単線だけど標準軌のレールと第三軌条は敷き終わっていた。直流六百ボルトの電気を玉電から受け取る変電設備もできていた。信号は

最初から作る気がなくて、タブレット交換のつもりだったから設備は要らない。つまり、このときまでに鉄道としての最低限の内容は完成していて、あとは試運転の列車を走らせるだけになっていたの。そして、そのとき歴史が動いた」

「おかあさん、あんなガマガエルみたいなおっさんの番組見てたんだ」
「何見てようと勝手にでしょ。この決め台詞、一度言ってみただけよ。文句言うんなら、どう歴史が動いたか話してあげないから」

「それはないよ。最後の最後がわかんないなんて、へびの生殺し、なめられないマタタビ。黙って聞く良いネコになるから話して」

「じゃ、話してあげる。作業員の全員が今夜の試運転の準備をしていた一九四五年八月十五日の昼過ぎ、突然『全作業中断』の命令が陸軍から下された。これまで玉碎覚悟の突貫工事とばかり言われてきた作業員たちは、命令のワケがわからず、かえって右往左往。いきなりすることがなくなったのでネコやネズミを撫でながら、ゴールデンバット改め金鶏を吸って待っていた。

同じころ陸軍の司令部では、機密文書を大きな焚き火にくべたり暗号機を壊したりの騒動の真っ最中。もうわかるわね。正午からの玉音放送で日本の敗戦が伝えられたからなの。軍隊、特に陸軍では極秘事項をアメリカに渡すまいと、涙ぐましい無駄な努力が行なわれた。当然、秘密の地下鉄も抹消すべき事柄のひとつだったし、いつマッカーサーが来るかわからないから、今日中にでも壊したい。そして、作業員が地上に出て、あることないことしゃべるのも困るから、えーい、この非常時だ、作業員もろともトンネルを埋めてしまえと、地下鉄建設の責任者だった印念中佐が、会議もせず独断で決定。

トンネル破壊工作の実行を命じられた伊集院少尉は、世田谷に向かうクルマの中で苦悶した。もう充分すぎるほど人間が死んだではないか。帝国軍人に下された命令とはいえ、戦争が終わった今、自分の手でこれ以上の殺生はしたくない。できない！
「ちよーっと待ったあ。何十年も経ってるのに、印念さんも少尉も昇進してないのはおかしいよ」

「二人とも二世ですよ。少尉の母親は紅緒さん」
「納得」

「馬事公苑近くの現場に着いた少尉は、自らトンネルの底まで降りて、数百人の作業員を集めて語りかけた。名演説だったそうよ。詳しい記録が残っていないのが残念ね。三十分以内に馬事公苑駅と桜新町の畑の下にダイナマイトを仕掛け、全員がここで死に、死者となって地上に戻り、新生日本のために、もう一度生きてくれ、と言ったと伝わっているの。

一時間後、ほとんどの人間が退避したとき、ダイナマイトが爆発して秘密の地下トンネル、桜新町⇨馬事公苑間は封鎖された。本当なら渋谷⇨桜新町間のトンネルも壊したかったのだろうけど、まさか玉川通りの下でドカンとやるわけにはいかなかったのでしょう。

封鎖された地下二十メートルの空間には、敷いたばかりのレールが延び、置き去りにされたネコとネズミ、どこからか紛れ込んだゴキブリが、明かりを求めて走り回っていた……これが世田谷洞窟の誕生秘話。歴史のひとつしずく」

「すごい話だなあ。それ全部ネコペディアに書いてあるの？」

「ええ、ほぼ全部、いえ、全部に近く、まあ多少足

りなかったところもあるけど、おかあさんが補なつておいたから安心して」

「どのくらい補なつたのよ」

「そうねえ、おおむね半分くらいかしら。わからないうところはツジツマが合うように作ったから」

「半分作った？ 半分創作？ それじゃ半地下妄じゃない。真面目に聞いて損した」

「でも面白かったでしょ？ ウソでもホントでも面白ければいいの。つまらないホントより楽しいウソが求められているの。ネコの世界でも人間の世界でも」

「そりゃそーだけどさあ。じゃ、目からレーザー出す地下ネコや目玉三センチの地下ネズミもおかあさんが『補なつた』の？」

「それは科学的な推測です。ダーウィンおじさんが酔っ払ったら、そんなこと考えるだろうなって」

アタシはなんだかよくわかんなくなってきた。マジにクラクラする。

「ちよっとお水飲んでくる」って言って、おかあさんの水飲み場に行って、落ち着かなきゃと思いがながらゆっくり飲んだ。それから深呼吸すると少し落ち

ヤバいなあ、洗脳されてるよお。

「そうよ。人間の社会は、そのときどきで一番無難な考えを『真実』と決めて信じ込むの。疑問を持たなければラクだから。新玉川線のトンネルは新しく掘ったとみんな信じてる。その結果、地下ネコは洞窟に閉じ込められたままで、覆馬場の下に何があるのか誰も知らない。まったくお幸せなことね。」

でもねタマ、事実を見つける鍵は、いつでも手の届くところ、見えるところにあるのよ。たとえば新玉川線のルート調べてごらんさない。渋谷あたりは新しく掘ったのだから、その先は玉川通りの下を進んでいる。ところが駒沢を越えて新町一丁目から、どういうわけか右にそれて旧玉川通りの下を通っているの。このルートは昔の玉電とまったく同じ。瀬田までそれが続いている。もしも新玉川線のために新しいトンネルを掘るなら、こんなヘンなルートではなくて玉川通りの下を直進したほうがはるかに作りやすいでしょ。これが動かぬ証拠。

もうひとつ、桜新町の駅の構造に注目して。桜新町は旧玉川通りにある駅で、馬事公苑への分岐点のはずだった。今、この駅のホームは地下二階と地下

着いてきた。こんなキツネにつままれたみたいな気分でおうちに帰りたくないなあ。そうだ、ウソでもいいから、ウソとホントを整理すればいいんだ。

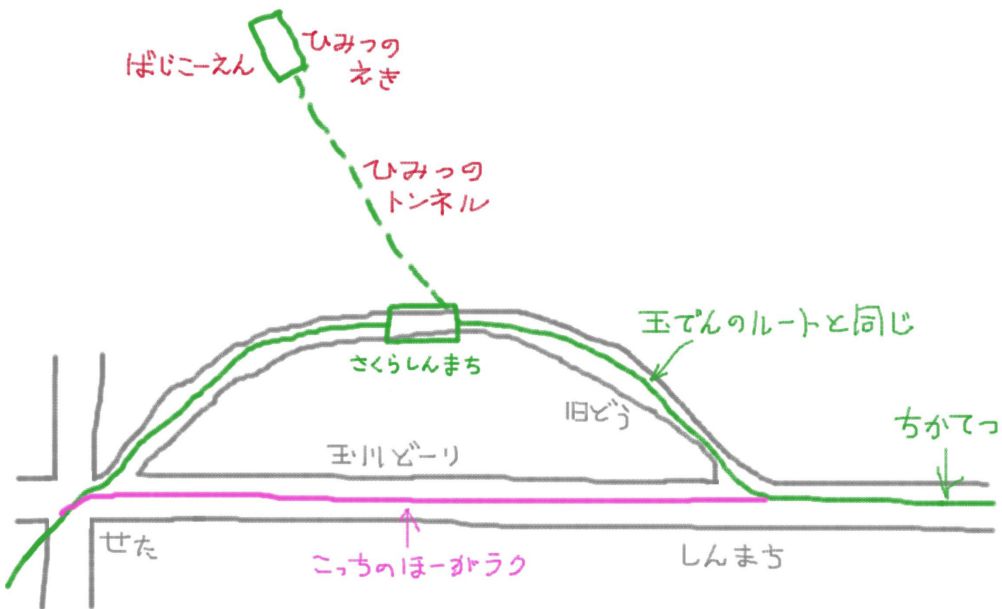
戻ると、おかあさんはヒマそうに座布団の隅をかじりながら待ってた。

「ねえねえ、つまんなくても楽しくなくてもいいから、さっきのお話の中でどんな本当にホントのことがあるのか教えてくれる？」

「いっぱいあるわよ。そうね、たとえば五島さんが陸軍かは知らないけど、玉川通りの下に地下鉄用のトンネルを掘ったのはホント。そのトンネルは長い間放ったらかされた後、一九七七年に開通した新玉川線が使われた。今の田園都市線よ。」

新玉川線の開通当時、どこから秘密が漏れて、トンネルが戦中のものだとバレかけたことがあった。もちろん常識人からは地下妄扱ひされて笑い話にもならなかったけどね。そのときにバレていれば、もしかしたら馬事公苑の廃墟駅も発見されていたかもしれない。惜しかったわね」

「そうだったら地下ネコたちも外に出られたのにね」あれ、アタシ、地下ネコがいるつもりになってる。

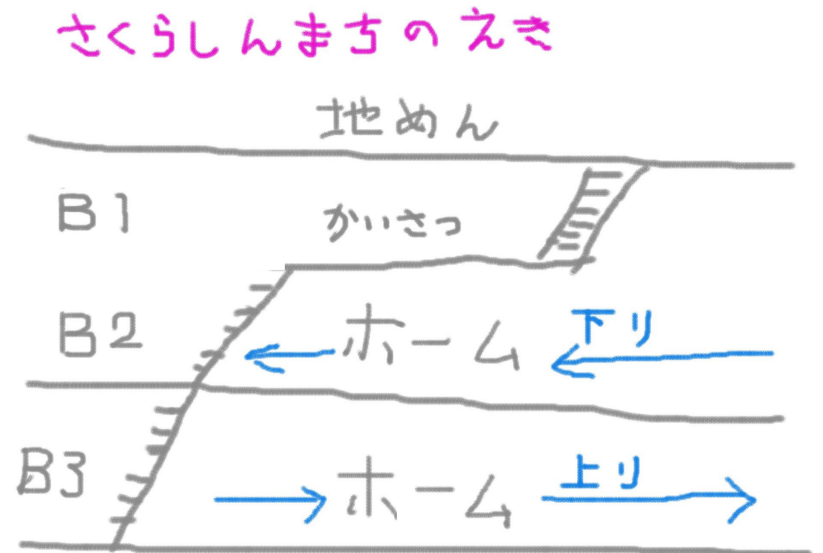


三階に分かれている。地下二階が下りの二子玉川方面、地下三階が上りの渋谷方面。二階構造の地下鉄駅は京王新線の初台なんかもそうだから、特に珍しいというほどのものではないけれど、新玉川線ではここだけ。どうして？って思わない？

陸軍の命令で新町から先を徐々に深くして行つて、桜新町あたりで地下二十メートルにしたのは憶えてるわよね。同時に五島さんに言われて、桜新町から二子玉川方面に向けて地下十メートルで掘り進んだ。そうするとどうなる？桜新町では地下十メートルと二十メートルのトンネルが上下にできない？当時の技術では上下二本のトンネルにするより、屋根の高いトンネルを作る方が簡単だったので、実際には幅が線路一本分、高さが二十メートル近い地下の空間がここにできたわけ。それをそのまま使つて、桜新町の駅が作られた」

「うわあ、まるで地下下みたい」

「いえ、半地下下ですよ。わたしの言っていることがウソだと思ふならウィキで調べてくらんなさい。地図はグー地図がいいでしょう。昔の写真も出てくるから」



ハ：もうシラスボシは怖くない

おかあさんの話を聞いていて、すごく遅くなった。お外に出ると、夜中の街はヘンな音でいっぱい。ゾワーとがザワーとか、とっても不安な感じ。アタシは速足で歩いた。ラーメン屋の前を通るとき、いつものクセで自然に店から離れて道の真ん中に出た。ネコワ二様がいるかもって、ふっと思つたら、ますます怖くなつてもっと速足になった。これなら走つたほうが安心な気がする。走ろうって。

途中の大通りも全速力で突っ切つて、やっとタロの縄張りに入った。これで一安心。アタシはまだネコワ二様が怖いみたいだ。こりゃPTSDだな。おかあさんに文句言わなきゃ。

遠くでタロが「ネエサン、遅いね」って言ったから、「明日遊びに行くよ」って声をかけておうちに

入ると、ミッチャンが飛び出してきて「どこで遊んだのよ。心配したんだから。不良ネコ」ってアタシを抱き上げた。違うのよ、遊んでたんじゃなくて、ちよつとそのおお、…言い訳は無理か。

「おなかすいたでしょう、こっちにおいで」って、ごはんの場所まで抱いて行つてくれた。フリスキー食べてきたんで、それほどおなかはすいてなかった。でも、この際食べたほうがいいよね。ミッチャン、珍しく親切だから。で、ネコ元気を食べようとする、「タマ、ほんとにシラスが嫌いなの？」って言いながら、冷蔵庫からママがアタシにくれたシラスボシを出してきた。いいえ、違うの。さっきは洞窟のお魚だと勘違いしてただけで、海のお魚だつてわかったから、今は大好きで、って言ったけど「なに

をニヤゴニヤゴ言ってるのよ。もう捨てるよ」って本気で言うから、アタシは急いでガツガツ食べた。「なんだ、食べるじゃない。気まぐれなんだから」とか言いながら、ミッチャンはアタシが食べてる横に座ってずっと見てた。そうか、いろいろ心配してくれてるんだ。アタシが帰ってくるまで起きて待っててくれたのかなあ。多分違うね。またゲームかネットやってたんだろう。

いっしょにミッチャンの部屋に帰って、ディスプレイ見たら、やっぱりチャットの画面になってた。例によって意味ない内容、意味ない会話。一瞬一瞬を意味なく過ごすと、あんたの一生を通して意味なくなるよって、ネコが説教してもしよーがないけどさあ。

明け方、目が覚めた。ミッチャンは熟睡。お水を飲んでウンチをして、コンピューターの前に座る。いつもの通りスタンバイになってる。OSの起動が遅くてイラつくって、いつもスタンバイ。リターンひとつで再起動。パスワードはTamaだよ。

最初にCNNで世界の最新動向をチェック。あつ、てる。もつときちんと調べないと突っ込みどころはみつからない。ヒマになったらやってみよつと。メールをチェックしたらおかあさんから返事が来てた。URLのリンクが二個あって、ひとつは日本語、もうひとつは英語版のネコペディア。ただし「日本語サイトは線文字Bで、英語サイトはアルメニア文字で書いてあります。あなたには多分読めません。勉強しましょうね」だつてさ。ためしに入ってみたら折れた小枝みたいな字が並んでたり、丸いダンゴみたいな字が繋がってたり、アタシには手も足もシッポも出ない。ネコの連帯感を保つとか、アホな人間のアラシを防ぐには、文字を変えるのはいいいアイデアだとは思うよ。だけど、ちょっとやりすぎ。ここまでくると排他性だけが見えちゃう。難しい問題だね。今度、世田谷ネコの会で話してみよう。線文字Bが読めないのアタシだけだったらやだな。コンピューターをスタンバイにして、もう一回寝ることにした。

タロが吠える声で目が覚めた。横を見るとミッチャンはまだ寝てる。何時？お昼過ぎ？っていう

アタシたちのCNNって『キャットなんでもニュース』のことだからね。トップはクレタ島のネコが二足歩行連続五時間の新記録を樹立。やるねゾルバ。それから、第一回ネコリンピックの開催地が、これで十二年続けて決まらなかったそうだ。どの街のネコも面倒くさがって開催地に立候補しないから。コミッションナーによれば「協議することに意義がある」んだつてさ。世田谷ローカルニュースでは、ネコジャラシの群生地情報とか、神社の境内でオスの三毛が生まれたとか、そんな程度しか書いてなかった。さあ、おかあさんが言ってたネコペディアを探そう。グーグルは外れ、百度もダメ、グーやヤフーではかすりもしない。キーワードを変えていろいろ試したけど、無いよ、ネコペディア。そんなサイトあるのかなあ。訊くしかないね。おかあさんにURL教えてってメールした。

返事が返ってくる間に、きのうの話をウイキで確かめてみる。玉電、銀座線、新玉川線、渋谷の地図、井の頭線、桜新町、馬事公苑、厚木基地、その他いろいろなキーワードで、出てきた検索結果を全部読んだ。なるほどなあ、とりあえず話のツジツマは合っ

ことは、ミッチャンまたずる休みだ。さすがアタシのご主人。起こしても無駄だから放っておくことにする。

タロは「あんただれ、知らないネコだね。あんただれ」って言ってる。タロの声の合間に「おれはカッチャンでんだ。タマのダチだぜ。吠えるんじやねえ、ばか犬」ってネコの怒鳴り声が聞こえた。これは急いで行ったほうがいいと思う。アタシは外に飛び出して、カッチャンとタロの間に割って入った。

「ネエサン、このネコほんとに知り合い？」タロが訊く。「おいタマ、このちっこい犬に礼儀つてえもんを教えてやれよ」カッチャンがフーフーいいながら言う。オスネコとオス犬はこれだから困るんだ。もう少し穏やかにできないものかしら。

あたしが二匹の真ん中に座ると、タロもカッチャンも静かになった。「はい、もう騒がないでね。こっちは柴犬のタロ。まだ四ヶ月だから許してやって。こっちはカッチャンで、魚勝さんのネコ」

「おい若けえの、次から吠えるんじやねえぞ」「うん、もう吠えない。ごめん」で、めでたく手打ち。胴乱の幸助さんの気分。ニボシかカブシ、持って

くればよかつたな。

それからタロの犬小屋のそばで、三匹寝転がって話をした。カッチャンは家庭菜園なんかに使う小さなシャベル、移植ゴテっていうのをくわえてきてた。「なあ、やっぱり掘ろうぜ。化け物が出てきやがったら面白じゃねえか」

「なんか掘るの？ここ掘れワンワン花咲じじいだね」ってタロ。

「花あ咲かねえし実もならねえよ。のんきな犬だな。高尚な生物考古学のフィールドワークやるんだ」

「ぼく、穴掘りは得意。任せてよ」

「あのさあ、アタシの考えじゃ、シャベルや素手の穴掘りで二十メートルは無理だと思っけど」

「二十メートル？ヨコに、タテに？」

「タテだよタテ。深さ二十メートルの穴あ掘る」

「かなり深いな…ネエサンの言うとおりに、それは無理な気がする」

「だから犬はダメなんだ。桃太郎でも家来にしかなれねえだろ。気合入れて親分になってみるっ」

「うん、ぼくは大きくなったら親分犬になるよ。柴犬だから。ネコは親分になれるの？」

「おう、なれるさ。ニヤンタッチャブルってえ映画観たことねえか？ネコが大活躍の主人公だ」

「そのうちツタヤで借りて観る」

「おめえ、カード持ってねえだろ。借りらんねえぜ。ツタヤのカードはな、身分証明書がねえと作れねえ。予防注射の証明書かなんか」

「えーと、まだないよ。注射してないから。でも、血統書ならあるけど」

「なんだそれ？」

「ぼくのお父さんやお母さんや、おじいさんやおばあさんや、そのまたお母さんみたいに、二十六代前までの名前が書いてある紙だよ。その紙ではぼくの名前は『春駒号』になってる」

「へえー、おめえ春駒っていうんだ。つーことはタロってのは世を忍ぶ仮の名だな」

話が外れるのはネコだけじゃなかった。犬もやっぱり外れる。どうせヒマだから、ここで雑談してもいいけど、アタシとしてはカッチャンに地下ネコや目玉ネズミや巨大ゴキはおかあさんの妄想だって言っときたい。

「あー、お話中すいませんけど、穴を掘る話の追

加情報をちよっと」

「なんでえ。透明な魚もいるってか？」

「そういう追加じゃなくて、きのうの夜、カッチャンが帰ってからの話よ」

「聞かせろ、詳しく聞かせろ」

「ものすごく長くくてめんどーな話でね、桜新町から馬事公苑の間に、洞窟があることはありそうなの」

「そうだろうな。掘ろうぜ」

「でも多分、洞窟に生き物はいないんじゃないかと…」

「どうしてだよ。おめえのかあちゃんはゴキとネズミとネコがいるって、たしかに言った」

「だからそれはあ、ダーウィンおじさんが酔っ払って考えたらそうなるだろうって、おかあさんが妄想しただけなんだよ」

「よくわかんねえ。じゃウソかよ」

「ウソっていうほどのもんじゃなくてえ、想像と願望が混ざって妄想になってるんだと思う」

「ますますわかんねえ。そもそも言いだしっぺはタマだけ。洞窟に白い魚がいるって言ったのは。それ

が白い地下ネコなんて、今日はいねえってえのか」

「うん、いない。ほぼ完璧にいない」

「なんだ、いねえのかよ。まあな、どんなネコにも間違えはあらあ。そんなこつて腹あ立てるカッチャンじゃねえぜ。かえってセイセイした。穴あ掘らなくてよくなったし、化け物退治もしねえで済まあ」って言って、カッチャンはゴロンと向こうを向いて寝ちゃった。なんか、悪いことしたみたい。何て言ってもいいかわかんないし、謝るのもへんだし、そうだ、あのこと話そう。

「だけどね、きのうの夜中、帰ってくるとき、ラーメン屋の前通ったら、ネコワ二様がいるみたいな気がしたの。とつても怖かったよ」

「ネコワニ！出たか！」カッチャンはすぐに起き上がって、こつちを向いて正座した。

それから、タロにネコワ二様の話をあげて、タロもそんな気配を感じたことがあるって言うし、それじゃネコ犬合同でネコワ二様退治しようってなって、捕まえ方を夕方まであーだこーだ話してた。そしたらタロの飼い主のおばあちゃんが、アタシたちにもごはんをくれて、みんな満腹したんだ。



九：その後の世田谷地上世界

アタシはシラスボシが大好きになった。硬めに乾かしたチリメンジャコも好き。透明な生のシロウオも食べれた。ドライフードしか好きじゃなかったアタシが、地下ネコ騒動でいろんなお魚をおいしく食べられるようになったんだよ。今度またなにか騒ぎがあつたらバナナ食べれるようになりたいな。

カッチャンはあれから世界ネコワニ捕獲隊世田谷支部っていうのを結成して、近所の犬やネコに「いっしょにやろう」って言って回ったけど、どうも反応がイマイチで、参加したのはタロだけだった。アタシも誘われたけど「めんどいじゃん」って断った。ホントは怖かっただけなんだけどね。

カッチャンはふてくされて、魚勝さんのお屋根で毎日寝てる。でも、大体こんなもんじゃない？ 新

しいムーブメントの始まりは。

おかあさんは半地下妄が一段落したみたい。きのう遊びに行ったら、ポアンカレ予想をネコの証明するんだって、おなかの毛をなめながら言った。なんでも、犬に長いヒモをつけて宇宙を一周させるんだって。それ、無謀じゃない？ ライカ犬なんか、人工衛星に乗っただけで帰って来れなくなってるよ、って言ったら、あくまでも思考実験なんだって。考えるだけで実験になっちゃうらしい。よくわかんないよ。ごはんを食べたって思うだけじゃ、おなかはいっぱいにならないもん。

タロが何度も「洞窟ってなんですか」って訊くから、子犬にもわかるように、おかあさんから聞いた話をしてあげた。犬って、ネコより冷静なのかなあ。

聞き終わってタロは「それでどっちなんですか？」って言うの。馬事公苑に洞窟があるかないか、ネエサンはどう思うかって。だからアタシは「多分あると思う」って答えたら、タロは、「じゃあぼくは『ある』と信じます」だって。おかあさんの妄想がアタシの半信半疑になって、最後にタロの確信になったわけ。これってネットでよくあるパターンだよな。ネット人種って子犬なみかもしれない。

正直、アタシにとって、極秘の地下鉄も驚異の地下生物も、あるかないかはどーだっていいんだ。そりゃ、もし地下ネコがいて、食うか食われるかの壮絶な生活をしていたら、とっても気の毒には思う。でもさあ、それはもしかしたらアタシの傲慢で、地下ネコは地上の生活なんか知らないから、食うか食われるかがフツの生活で、気の毒がられても、多分迷惑じゃないかって思うの。ネットかテレビが地下にもつながってれば別だけど。北朝鮮はメディアによって崩壊するかもしれない。

洞窟があるかないか、自分でもよくわかんなくなつてモヤモヤしてるアタシには、タロがちよっとうらやましい気もする。『ある』か『ない』かをスイッ

ちみたいに切り替えて、どっちかを完全に信じ込めれば、気持ちも世の中もスッキリすると思うから。そういうの、犬にはできてもネコには無理。無理なんだけど、もしできるなら、アタシはやっぱ『ある』に切り替える。絶対に『ある』だよ。なにげなくマンホールの穴を覗いたら、向こうにマタタビでできた巨大地下世界があつた、なんて、ものすごくロマンじゃない？ ロマンや夢を捨てたら、アタシたちネコは何のために生きてるのかわかんないもん。だから洞窟はきつとあるんだ。地下ネコも目玉ネズミも化けゴキも、きつといるんだ。

タマからひとこと…このお話はネコがしゃべったことです。全部ネコの言ってることです。物好きな人間が考証なさるのはご自由ですが、「事実と違う」とか「根拠がない」とか言われても、ネコなのでいっさい対応できません。ニャオーワ。

じゃ、後半、いってみよおー。

……っていうお話でした。
ネコがどれだけヒマかって、
これ読めばわかるでしょ。
人間も似たようなことしてるから、
ネコ並みにヒマな人、多いかもしれない。



10：闘争の本質

ジャガとルドルフの歌合戦があつてから、ネコやカラスの間でいろんな噂が飛び交った。あの二匹は来月CDデビューするって週刊誌に書いてあつたとか、ネコベックスのスカウトが来てた、とか、ついにペロが楽天銀行に当座預金の口座を開いた、とか……。あんまりいっぱい話があるんでユラちゃんの話の出所を調べてみたら、元は全部ペロだつた。ペロが忙しがってる「セールスプロモート」って何なのかよくわかつたよ。

でも、ペロがいくら一生懸命やっても、アタシを含めたサービシアのネコたちは、ペロの一攫千金計画はうまく行かないだろうなって思い始めてる。歌合戦の翌日、シユレが居眠りしながらこう言つたから。

とネコの合作が不可欠であり、また未知の総合的技術力を傾注することよつてのみ解決される可能性があります。しかしながら、そのような努力は経済的価値の増大に寄与するとは判断されがたく、よつて現在および未来において、ネコ語による人間とネコの意思疎通の可能性は極めて低く、よつてネコの歌を人間経済の娯楽産業として成立させることは非常に困難と推測されます」

わかる？アタシがわかつたのは「なんとなくダメ」つていうことだけ。どうしてダメなのかシナモンさんが簡単に言い換えてくれたのによると「ネコは働いてないからお金がない。CDなんか買えるわけないでしょ。それから、ネコ語を人間に伝えるのは絶対に無理」つていうことだつた。これならわかる。そーだよー。もしCDを作れたとしてもネコには買えない。人間だつて、ネコがただニヤニヤいってただけのCDなんて買う気にならないだろうな。キメラみたいにロンドンフィルでもバックに付ければ、ちよつとは売れるかもしれないけどさ。

それでもジャガとルドルフは毎日レッスンしてる。ムラタさんが近くにいないとき、ジャガは百恵

「第一の問題として、ペロの計画は大いなる構造的欠陥を孕んでいると考察します。余剰価値の存在によつて富の蓄積及び搾取が可能となり、そういった資本主義的機構の中でのみ、実態経済の冗長部分ともいうべき娯楽産業が成立します。しかしながら現状において、いかなるネコも生産手段を有せず、ましてや余剰価値を持つには至っていません。したがつて、ネコの歌がネコを購買層とした娯楽産業として存立し得る基盤が存在するかが最大の課題であり、これには否定的な観測をする以外ありません。

第二に、人間語とネコ語における統語法の差異を、どのように埋めるかが提示されていません。相互に理解可能な新たな言語はバウリンガル程度では脆弱と言わねばならず、その創造にはより高度な人間

ちゃんの『のぞきからくり』や伊東ゆかりの『小指の思ひ出』、沢たまきの『ベッドで煙草を吸わないで』なんかも歌つてる。ばれたらまた一騒動だよ。ペロは噂話のプロモーションでいつも忙しそうに飛び回つてる。見てて面白いし、誰が損するつてわけでもないから、誰も「やめなよ」なんて無粋なことは言わないんだ。

そんなのにつられてか、ネコの間で歌うのが流行つてきた。それぞれ持ち歌があつて、ユラちゃんのはヘンな歌ばかりで、

♪ ちよつとちよつとちよつと田の畦で

いなかのネーチャン……

とか、

♪ ひとつ出たホイのよさホイのホイ……

とか、子ネコが真似したがる歌ばかり歌つてる。アタシ？アタシは『木綿のハンカチーフ』だよ。

♪ 都会でハヤリの首輪を送るよー

タマにータマに似合うはずだ

のフレーズが好きなんだ。

でも、何といつても、仲間内で一番の人気はニヤニランさんが自分で作った『耳だけ向けて』っていう歌で、

♪ねえ、あんた耳だけ向けて

シッポで返事はないでしょう

ちゃんと書いてよ私の話

子ネコ三匹どうするの

♪ねえ、あんた耳だけ向けて

背中ゾクゾクしないでしょ

責任取ってと言わないけれど

子ネコ三匹どうするの

全部で八番まであるんだ。子ネコはピポパのことだろうけど、「あんた」って一体誰なんだろう？ いろんな説があつて、いろんな容疑者がいるみたいだけど、どれもたしかな証拠は無いから、いずれニヤニランさんが激白してくれるのを待つしかない。ネコの歌より女性週刊誌のほうの方が儲かるかもしれないな。

歌が流行ってるのにはもうひとつワケがあつて、真夏が終わったら雨ばーっかり降るようになったん

ミツチャンのベッドくらい気持ちいい。今のノラより昔の山ネコのほうが住環境には恵まれてるね。

寝てたはずの長老が目をつぶったまま「指令はまだ来んか」って訊いたんで、

「いいえ、来ません。心配ありません」って答えた。

二匹の黒ネコとか、深宇宙からの通信のことだよ。そんなもん来てたまるか。ホントに来たら怖いじゃない。アタシが来てほしいのは指令じゃなくてミツチャンなんだから。

話を変えようと思つて「この雨はいつ降り止むんでしょーか」って訊いてみた。そしたら長老は「止まない雨はない。しかし世界のどこかでは必ず雨が降つておるとビージーズも言うではないか」って謎の返事。どーゆーこと？

「えっと、そのお、雨が世界回り持ちなのは仕方ないとして、せめてこの辺だけでもお日様が出ないかなつて思つたんです」

「おやおや、若いネコは気が短くていかんな。半年も雨に降り込められたわけでもなからう。偶然にも雨が続いておるだけで、これは天意じゃ。千匹のネコが騒ぎ立てても止まぬものは止まん。浅はかで無

だ。夏の間は雨が降つても夕方とか朝早くだけだった。今じゃ一日中降つてる。ネコは自由に散歩けない。面白いこと、なーんにもできない。しょーがないから、みんな屋根のある場所に集まつて、好き勝手な歌を歌つてるわけ。

アタシはいつもはギンタとユラちゃんといっしょに、がけの途中に引つかったプラスチックの箱にいて、ときどきニヤニラのついでに他のネコの家にも行つてる。大体みんな、人間が捨てた箱や、建物の陰の見えない場所を家に決めてる。長老とシユレだけはリビアネコの生活を忘れたくないって、原始のネコがやつてたみたいに林の中の洞穴に住んでる。なんだか面白そう。アタシも一応リビア山ネコの子孫だから、どんなところだか見たくなって、遠くて雨に濡れるけど遊びに行つてみた。

そこは洞窟ついても、大きな木の根元にあった穴だった。中には枯葉がいっぱい敷いてあつて、長老とシユレが丸くなって寝てた。シユレが片目を開けて「よく来ましたね、空いてる場所で丸くなつたらどうですか」って言つてくれた。アタシは遠慮なく丸くなつたよ。枯葉は見た目より柔らかくて、

力な生き物としては、どんな運命をも受け入れるしかないし知れ。しかし、受け入れはするが、しぶとく運命を吟味し、本質を暴くのがネコとしての正しいあり方だと思わんか。ついでに言えば、わしの体内湿度計では、明日には晴れると出てる」

明日はお天気！それを最初に言つてくれたらいいのに。「ただし、この雨が止むと冷たい風が吹き始め、景色は急速に冬へと変わつて行くのが通例じゃがな」だつてさ。

そつかあ、ここは高原だから秋なんかなくて、夏の次はいきなり冬なのかもしれない。今は季節の幕間で空が暗転してるんだろーな。空には幕が無いから、代わりに雨が降つてるって思えば全部納得しちゃう。それで、次に幕が開くと一面の雪景色？冗談でしょ、とつてもマズいよ。アタシは寒いので大ッ嫌い。雪なんかすごーく苦手で、エアコンがコタツがないと死んじゃう。困つたなあ、っていう顔をしてたら長老が、

「寒くなつて、どうしても我慢ができませんようなら、シナモンといっしょにハナマルさんのお客になればよろしい」って言った。ハナマルさん？ そんな名

前のネコ、会ったことないよ。アタシ知らない。

プラスチックの箱に帰るとギンタが寝てた。寝てるだけで眠ってない。どのネコも眠るのに飽きちゃってるんだ。ギンタは「お帰り」って言って、シッポをゆっくり動かしながら、また目をつぶった。

「あのさあ、雨が止んだら雪になるの？」

「いや、雨が止んだら晴れると思うよ。晴れなきや困るでしょ」

アタシは少し安心した。明日の朝、急に雪景色にはならないみたいだ。

「じゃ、ハナマルさんっていうネコ、知ってる？」

「ネコ？ネコは知らないけど、人間のおばさんならサービスエリアの売店にいるよ。毎日会う人だ。タマもニヤニラのときに見てるはず」

「そーか、人間なんだ。雨が止んだらどの人だか教えてもらおう。」

「シナモンさんと仲がいいのかなあ」

「僕はよく知らないけど、どのネコにもやさしいって聞いた。そうそう、ユラの話では、この前の冬にユラが大怪我したとき、元気になるまでナイチンゲールみたくに面倒みてくれたって言ってた」

「ユラちゃん怪我したの？」

「あいつのことだから大げさに言ってるんだろうけどね。僕はその時期には旅に出てたから詳しいことは知らない。知りたければムラタに聞けばいいよ。ユラに聞くと話が胃に入ったドライフードみたいに膨れるから」

たしかに。ユラちゃんはサービス精神二〇〇パーセントのネコで、どんなお話でも楽しくなくちゃいけないって信じてるみたいだから、正しいドキュメントラリーには向かない。ムラタさんから聞くのがいだらうな。ちよつと眠ったらムラタネコを探しに行こう。アタシはギンタの背中にくっついて丸くなって「お休み」って言った。ギンタが「ムラタならニヤニラのところにいるよ」って言うのを聞きながらアタシは眠った。

長老の言ったとおり、夜中に雨は止んだ。ギンタはいなくなつて、ユラちゃんもまだ帰ってきてない。かわりにトントが丸くなって寝てた。耳がピクピク動いてるから、何か夢を見てるんだ。しばらくしたら「ハリー、こつちだよ」って寝言を言った。トントは今、どこにいるのかな。サンフランシス

コの砂浜？ニューヨークの公園？シカゴの本屋さん？トントには思い出しかないけど、アタシには帰るおうちがある。だけどさあ……今はおんなじだよ。少し悲しいね。

雨は止んでもお月様は出てない。真つ暗だと虫もあんまり鳴かない。アタシはニヤニラさんのところに行くことにした。サービスエリアのはずれに置いてある土管で、草に隠れてるから子ネコには絶対安全。シュレの耐震診断でも最高点らしい。

近付くとピポパはまだ起きてて、お馬のおじさんとわいわい話してる。「どーしてアルファベットには大文字と小文字があるの？」とか「高速道路の向こうにもネコはいるのかな」とか、さすがにネコで、三匹がそれぞれ知りたいたことを質問して、ムラタネコは一生懸命答えようとしてる。ってことは、もしかしてニヤニラさんの歌の「あなた」はムラタネコ？なんて一瞬思った。アタシは「こんばんわ」って言いながら土管に入った。

「いらっしやーい、おばさん」ってピポパが言ったから「おばさんじゃなくておねーさんだよ」って言

い返した。三匹は困つたみたいに顔を見合わせてから「いらっしやーい、おねーさん」って言い直した。「どこか適当に座ってくださいね」ってニヤニラさんが言ってくれたので、本当にテキトーにその場に座った。そしたらピポパがやってきて、アタシの匂いをかいだり耳をなめたりし始めた。アタシも三匹を公平になめてあげた。

「いいか、おまえらよく聞け」ってムラタネコがピポパに言う。「メスネコを『おばさん』って呼んじやいけないぞ。たとえおばさんに見えても『おねえさん』って呼ぶんだ。どーにも『おねえさん』って呼べないヨポヨポのネコだけ『おばさん』って呼べない。わかったか。呼び方ひとつで世の中丸く収まるから」

そしたらピポパがいつせいにアタシを「おねえさん、おねえさん」って呼び始めた。すごく複雑。良い教育なのはたしかだけれねえ。

「大文字と小文字がある理由、まだ聞いてないよ」ってポパが言うと、ピとパも「聞いてない聞いてない」って合唱して、三匹でムラタネコを見つめた。

「それはな、……、そんなに正面から見な。大人

ネコだとガンつけたことになって喧嘩が始まるぞ」

「喧嘩じゃなくて大文字と小文字、教えてよお」

「つとにもう、参ったな。そうだ、そういう英語の問題はオレじゃなくてタマさんに答えてもらおう」

えっ、アタシ？いきなり振るの？ピポパは今度はアタシを見てる。知らないなんて言えないなあ。

「それは、ほら、何でもふたつあると便利でしょ。お耳もふたつ、お目めもふたつ」

「おねえさん、ごまかそうとしてるー！」

ニヤニランさんがアタシにだけ聞こえる声で「すみませんねえ、知りたい盛りで。ウソでもいいから納得させてやってくださいませんか」って、そーつと言った。そうか、ウソでもいいなら、

「じゃ、真面目に答えるわよ。大文字は英語でキャピタルレターっていうの。キャピタルっていうのは、大金持ちとか政治家がいる街の意味だから、大文字は、そういう威張った人が使う字だったの。ふつーの人やネコは小文字を使ってた。それが二種類ある理由」自分でむいどいウソ。

「そうかあ、階級による差別的文化だ」ってポ。だあれ、そんなこと教えたの。シュレだろうな。

いから、どうしても文科系になってしまっんです。昼間なんかメールを打って遊びたいって、私の背中をキーボード代わりにしてたんですよ」

「それじゃ、飛び上がれるようになったらすぐにハナマルさんの休憩室に連れてって本物のキーボードに触らせてやればいい」ってムラタネコ。えっ、ハナマルさんって言った？アタシ、その人のこと知りたい。

「あの一、その人だれ？どこにいるの？」

「あらまあ、タマさんはまだ知らないんですね。ハナマルさんはサーブエリアのネコたちが一番信じている人間です。この前の冬の一件でネコを助けてくれる良い人間だとわかったの。知らない人と同じくらい良い人よ」

聞いてると、わかんないことがどんどん増えてく。「冬の一件って？」

「冬にあった、ちよつとした戦争だよ。死んだネコはいなかったけど、負傷ネコ一匹。終戦したわけじゃないって、名目上ははまだ戦闘継続中。朝鮮戦争みたいなもんだ」

夜も長いことだし、ニヤニランさんとムラタネコ



「わかった？さあ、もう寝る時間だから、こっちに来なさい」ってニヤニランさんが三匹を集めた。ピポパはニヤニランさんのおなかの下に頭を入れて、すぐに寝ちゃった。聞き分けのいい子ネコたち。アタシの小さいときと似てるかも。

「やつと寝た。あの三匹はオレの顔見るとずーっとこれだよ。教えてるっていうより、オレの教養が試されてるみたいだ。馬上槍試合なら楽なんだけども」「申し訳ないですね、ムラタさん。雨で外で遊べな

が、このイキサツを話してくれた。この二匹でよかったよ。ユラちゃんから聞いてたら広島戦争頂上決戦みたいになっちゃってただろう。

今から思えば、戦争が始まったのは今年の初め、毎日雪が降ってたくさん積もつてるときだった。建物の裏側に面して食堂の厨房があって、その窓の下だけは換気扇の風が出るせいかな雪が積もつてなかった。ネコが日向ぼっこするには最適な場所。詰めて座れば五匹くらい座れる。

ネコたちは替わりばんこに座って、乾いたコンクリの上で体を伸ばしたり居眠りしてた。ネコの習性を知ってる人ならわかるだろうけど、ネコは自分が気に入った場所では絶対にオシッコやウンチをしない。それに、みんなが気に入ってる場所は、どのネコの縄張りでもないからスプレーもしない。だから厨房の窓の下はとっても清潔。抜け毛の何本かはあったかもしれないけどね。

厨房に、ネコたちが『鉄面皮』って呼んでるオッサンがいる。本名は知らない。いつもおつかない顔してて、笑ったの見たことない。間違って近付きす

ぎると、怒りのオーラをピンバシ感じるから、みんな、なるべく接近遭遇しないようにしてた。

仕事場の窓の下にネコが寝てるのを鉄面皮がみつけたときから悲劇は始まった。窓から空のペットボトルや空き缶が飛んで来るようになったんだ。当たっても怪我はしないけど、ネコは熟睡できなくなった。そのうちに窓から出てくるものがエスカレートして、冷たい水をかけてきたり、ひどいときには揚げ物であまった油も降ってきた。

長老は、厨房の窓の下を渡航禁止区域に指定してネコを引き上げさせ、紛争の縮小を図ったけれど、そんなのに従うほどオスネコたちは軟弱じゃなかった。おれたちの聖地が廃墟になるなら、人間にやられるまま見てることはない。自分たちで廃墟にしてやるう、つて決めて、みんなでスプレーしに行った。スプレーの気分じゃないネコは、とりあえずオシッコをした。長老以外のオスネコ全員が闘争に加わったし、勇気のあるメスネコ、無邪気なメスネコも参戦した。えっと、無邪気っていえばわかるよね。ジャガです。

日向ぼつこの場所は、三日もしないうちに、人間

スプレーかオシッコを雪に強烈に染み込ませます。全員が実行部隊になって、鉄面皮が勤務していないときを狙って、せつせと雪を運ぶことにした……のだが、寒すぎてだれも働きたがらない。働いたところで三メートルの範囲を埋めるには一年以上かかりそう。作戦が終わるまでに雪は溶けて無くなる。

日いずる国には神風が吹く。キムラさんちのタケチヨが散歩で通りかかった。毛の色が茶色どうしのトントが頼んだら、快く手伝ってくれて、たった十五分で窓の下に新雪の山を作ってくれた。ネコは勝った勝ったの大合唱。今夜、提灯行列をやるうという話も出たけど、寒いからヤメになった。みんなは雪山の上に登って、思い切りスプレーとオシッコをしてから引き上げた。

この日の戦いにはオスネコだけでなくメスネコも全員参加していた。ただし、ユラノスケだけは「雪の上を歩くと寒冷蕁麻疹が出る」とか言って箱の中で寝てた。翌日遅く、やっと寝床から出てきたユラノスケは作戦成功の報に接し、狂喜乱舞、まるで自分一匹の働きのように大騒ぎしたけれど、もちろんだれ一匹まじめに相手にしなかった。そこでユラ

にとつては廃液垂れ流しのどぶ川以上の悪臭地帯になった。ネコには『ちよつと匂うかな』くらいだったけどね。そしたら鉄面皮は、窓の下に大量の消臭剤を撒いただけじゃなくて、なにやらオレンジ色の液体を周囲三メートルに散布した。もしかして毒薬？ つて疑ったシュレが調べに行ったら、これがオレンジクリーナー。いつも冷静なシュレも、オレンジのおいを大量に吸い込んで泣きながら帰ってきた。ネコにとつてかんきつ類の匂いは催涙ガスみたいなものを鉄面皮は知ってたんだ。

ネコ側の敗色は濃厚になり、このままでは聖地を放棄するしかないように思えたとき、長老が立ち上がった。

「ネコに告ぐ。耐えがたきを耐えるのはネコの的ではない。それから、もう忍ぶのもやめた。ネコ自身によつて万世のために太平を開こう」つていう布告を出したもんだから、ネコはみんな元気になって新しい作戦を開始した。でもそこはネコだから、込み入った作戦は無理で、簡単に言えば「聖地に新雪を大量に被せてオレンジの匂いを消してしまう」というのが基本線。そして、被せ終わったら、もう一度

は、せめて一番臭いスプレーをかけてこようと雪の二百三高地に登った。

間の悪いネコは運も悪い。スプレーが出ないのだ。オシッコも無理みたい。あたりを見回すと、遠くでシナモンがこつちを見ていた。このまま何もせず雪山を降りたら、オスネコのくせにオシッコもかけられなかったことがみんなにバレてしまう。そうだ、ウンチをしよう、特大のヤツを、と腰を落としていきんだ瞬間、窓の上のヒサシから大量の雪が落下し、ユラノスケの全身、特にしゃがんだ腰を強打した。そのときのユラノスケの「ギャーッ！」という叫び声は、イエネコが間違つて足を踏まれたときの絶叫どころではなく、サービスエリア全体に響き渡り、日本アルプスに反射して、こだまになって返ってきた……と、ユラノスケ自身が言っている。

一部始終を見ていたシナモンによれば、お昼近くで雪が柔らかくなつてるときに、ヒサシの真下に近付くネコが馬鹿。とは言つても、ウンチを半分出しながら気絶している仲間を見捨てるわけにもいかない。すぐに雪山に登って捜索活動を始めた。

そのとき、建物の裏のドアから「どうしたの？」つ

て言いながらハナマルさんが出てきた。いつもはサービスエリアの売店や食堂で働いてるおばさん、いや、おねえさんで、パートなだけどずーっと昔からいるらしくて、倉庫を改造した専用の休憩室を持つてる。雪の山をシナモンが掘っているの見て、すぐに事態を察してくれて、「まあまあ、誰か埋まっちゃったのね」って、急いでユラノスケを掘り出してくれた。

ユラはウンチをお尻につけたまま失神してた。シナモンは「ブザマなネコですけど助けてください」って必死で頼んだ。ハナマルさんは「わかったから、あんたもこっちに来なさい」って、暖かい休憩室にユラを運んで毛布でくるみ、ストーブのそばに置いて「死んじやったのかねえ」って言いながら、ユラを撫で続けてくれた。

実はそのとき、ユラノスケはもう目が覚めていて、あんまりかっこ悪いんで死んだふりしてた。それがわかったシナモンは、ユラのそばに行つて「起きるバカタレ！」って叫んだ。上品なシナモンの言葉とは思えない。ホントに怒ってたんだろう。怒鳴られたユラノスケはやっと起きる気になっ

「ラは「じゃ、そうするか」って、おもてに出てオシッコして帰ってきて、また毛布にくるまった。

「あなた歩けるじゃない！」

「ありやく、歩けた！もうどこも痛くないっ！」

ユラノスケは全身の毛を逆立てて大興奮。二匹はハナマルさんの手や顔をなめて起きてもらった。そして「歩けるようになったよ」って叫びながら何度も何度もお礼を言った。

ハナマルさんも喜んでくれた。「よかったねえ、歩けなくなったら家に連れて帰ろうと思ってたんだよ。でも治ってよかった。ネコは自然の中で跳ね回るのが一番さ」って、ドアまで二匹を送ってくれて「気が向いたら遊びにおいで」とも言ってくれた。二匹が建物から離れて歩き始めると、ハナマルさんの独り言が聞こえてきた。

「白ネコは賢いって聞いてたけど、例外もあるんだね」

その感想にシナモンはまったく同感だった。話を聞いた他のネコ全員も「まったくだ」と思った。驚いたことにユラノスケも同感みたく「そうさ、オレは賢いんじゃない。それ以上の不死身のネコなん

た。目をパチパチさせながら「おや、ここは天国の門かな。神様、イツミ」とか言いながら立ち上がるうとしたけど、腰から下が動かない。どうジタバタしても起き上がれない。シナモンは、最初は芝居だと思っただって。でも本当に腰が抜けてた。多分ウンチするカタチのときに上から雪が落ちてきたんで、雪の重さが全部腰にかかったんじゃないか、っていうのがシユレの推測。

ユラノスケは、それから丸一日、泣きごとを言いながらストーブの前で過ごした。ハナマルさんはミルクとチーズをいくらでもくれたから、シナモンも徹夜で付き合った。食べ物匂いにつられてか、それとも多少は心配だったのか、いろんなネコがお見舞いに来て、結局、長老も含めた全部のネコがハナマルさんからミルクとチーズをもらって満足した。

翌日、看病疲れでハナマルさんが居眠りしてるとき、ユラノスケが「ミルク飲みすぎた。オシッコしたい」ってグズった。「そこでするしかないじゃない」ってシナモンは言おうとしたけど、ちょっと待って、ルルドの奇跡を起こしてあげようって「なら、外でしてきたら」って軽く言ってみた。そしたらユ

だ」って言ったそうだ。

っていうのがムラタネコとニヤニランさんから聞いた話。アタシがここに来る前に、そんな大事件があったんだ。その後どうなったかっていうと、鉄面皮はまだネコがダイツ嫌いみたいで、雪が溶けても窓の下にオレンジクリーナーを撒き続けている。でも、偉い人から「ゴミを散らかしてはいけない」って言われたらしくて、窓からみかんの皮や空き缶は飛んで来なくなった。

オスネコたちは鉄面皮が仕事をしている時間を選んで集団でスプレーしに行ったり、窓の近くでニヤオ〜ニヤオ〜の大合唱をやってる。わざとみつかって走って逃げるのが楽しらしい。前に聞いた報復闘争って、これだったんだ。

シナモンさんはハナマルさんともっと仲良くなった。週に一度は遊びに行つて、お昼寝だけじゃなくて、夜も泊まっていきたい。ハナマルさんにはキジって呼ばれてるんだって。あたしが遊びに行ったら何て呼ばれるのかな。ボケキジ？



11：蔵小路屋の消滅？

ハナマルさんの休憩室に行ってみたくなくなった。食べ物がないからじゃなくて、アタシ、人間っぽい雰囲気は懐かしいんだ。平らな床や四角い机や、ちゃんと映るテレビとか、そんなものが恋しい。世田谷ではあたりまえだったものが、外の世界には全然無いか。草や木や地面がイヤになったわけじゃない。えーと、つまり、白状すれば本格的なホームシックみたい。

最初に休憩室に行くなら、やっぱりシナモンさんに連れてってもらおうのがいいって思った。顔が売れるネコといっしょなら、どこから紛れ込んだ怪しいネコと間違われないうし、紹介してくれるシナモンさんも気分がいいとはず。どこで何するにも仁義は必要だからね。

「近くに行くよ、アタシもつられて」「アタシ、タマ」って言った。

「この子、えらいのよ。一人で飛べるようになってから、ずうっと私たちのこと探してたんですって。助けてもらったお礼が言いたいのと、あのとときの大暴れを謝りたいそうよ。ネコ語も木の上からネコの話し声を聞いて、独学で憶えたみたいなの」

「アリガト。ゴメン。ボク、イイコ」

なるほどねえ。律儀なカラスかあ。命を救ってもらったの感謝するっていう、とーぜんっていえばとーぜんのことだけど、最近のネコや犬の中には、何してもらっても知らん顔のヤツが多い。アタシはかなり感心した。

「カラスは九官鳥と同じくらい他の動物の声を出せるのよ。この子みたいに若いころからネコ語に興味を持ってば、いずれ立派なバイリンガルになるでしょう」

「うん、カンタ、イイコだね」って、とりあえず言っておいた。アタシがカラスを嫌いなのは、カラスが何を考えてるか、まるつきりわかんないから。意思

それでシナモンさんを探したんだ。サービスエリアのどこにもいなかったから林に行ってみたら、なんと若いカラスといっしょにいた。よりよってカラスだよ。怖くないのかな。シナモンさんはカラスにネコ語を教えた。「ボク、カンタ」「コンチワ」「アリガト」：：とか、いろいろ。

カラスがアタシを見て「ネコキタ」って叫んだ。シナモンさんもこっちを見て「タマさん、来てごらん。知ってるカラスよ」って言った。えー？カラスに知り合いはいないけどなあ。「ほら、この前木から落ちてた子カラス。こんなに大きくなった」

あー、あんとときの、やたらと攻撃的なチビか。たしかに大きくなってるね。あんまり獰猛じゃなさそうにも見える。カラスが「キテ、キテ」って言うか

疎通ゼロだと相手を悪くしか思えない。理解できないものは誰だって怖いよね。それにしてもシナモンさんは勇敢だなあ。正直言えば、アタシはまだカンタが少し怖い。

「カアチャン、シンパイ、ボク、カエル」って言って、カンタは羽根をバタバタさせた。

「そうだね、また来ればいいよ。空でシナモンって呼ばば出てきてあげる」

「アリガト、タマ、バイバイ」カンタは飛んで行った。アタシにも挨拶するなんて、かなり細かい気遣いで愛想のいいトリ。もしかして本当にいいヤツなのかもしれないね。

シナモンさんと二匹で、カンタが見えなくなるまで空を見た。ネコとカラスの友好関係か、すごい異文化交流だな。

「タマさん、しばらくぶりね。雨の間、なにしてたの？」昼になってやっと乾いた草の上に寝転がって、シナモンさんが言った。アタシも寝転がって「雨の前半は、濡れるのやだからごはん食べるのも我慢して、ただ鬱々っていう感じだったけど、きのうの夜あたりからちよっと活動的なネコになることにした

の」って、ムラタネコとニヤニランさんから『戦争』の話を聞いたって話した。

「だから一度、ハナマルさんの休憩室に連れてってほしいんだけど、いい？」

「なんだ、簡単なことよ。これからすぐ行ってみましょう。ハナマルさんが仕事中でも、ネコには入口があるからいつでも入れるの」

アタシたちは林を出て、ユラちゃんの話をしながら歩いた。シナモンさんによれば、ユラみたいに常時ハイテンションのネコもこの世には必要で、人間ならスターかアイドルみたいなものだろうって。それで、アイドルは作られた虚像だけど、ユラは筋金入りの実像だからもつとすごい、んだそうだ。アタシが「難しく、わかんない」って言ったら、もしユラがいなかったら、ここでのネコの生活から面白さが減ってしまう。つまり天然の刺激がユラなんだって。うん、たしかに、ちょっとうるさいネコだけど、そのぶん刺激的なのはたしかだな。

シナモンさんが「ここから入るのよ」って、建物の裏のドアで言った。いつも見慣れてるドア。いつ

つも置いてあって、隠れる場所もある。小さな冷蔵庫や、部屋の隅には冬のストーブもあった。ここは文明社会だ。

なにより嬉しいのは、机の上のコンピューター。ノートでフタは開いたままで、よく見るとスタンバイで止まっているのはミツチャンといっしょ。ノートの後ろ側にはLANケーブルもつながってる。わーいネットに入れる、うれしー、やったー。

アタシがひとりゴロゴロ言ってるのに気付いたシナモンさんは不思議な顔してる。アタシも自分がこんな嬉しがるなんて思わなかった。ホントは相当なネット中毒だったんだ。

「なに喜んでるの？」って訊かれたから「コンピューター」って答えた。多分わかってもらえないだろうな。

「ここ気持ちいいでしょ？ 私は少し眠るから、適当に遊んでいいわよ」シナモンさんは本格的に昼寝モード。アタシはコンピューターの前に座ろうとして、そのとき気付いた。ハナマルさんて、ミツチャンほどじゃないにしても、かなりズボラ。キーボードの手前と左右にボールペンやメモや伝票の束

もは閉まっている。どうやって入るの？

「よく見て、私の後についてきて」って、ピョンとジャンプして配水管のつなぎ目に手を掛けて、もう一回ジャンプして、ドアの横の壁にある排気用の穴に飛び込んだ。えーっ、そんなことしていいの？ なんて思いながら、アタシも穴に飛び込んだ。こんなこと、ひとりじゃ絶対できないよ。

「いつもこうやって入るの？」

「ええそうよ。ここを左に曲がって、はい飛び降りましょう」

排気パイプの壊れた隙間から飛び降りると、そこが休憩室。うわあ、部屋だ、部屋。人間の部屋だ！ ソファがあつて、テーブルがあつて、雑誌があつて、鏡があつて、机もある。シナモンさんはソファに飛び乗って、二、三度回って座った。

「だいじょうぶ。ここにはハナマルさんしか来ないから安心して」

「少し探検していいかな」

「もちろんいいけど、ゴキブリは追いかけないでね」アタシもネコだから、新しい部屋は隅々まで見て回る。なかなか居心地よさそう。段ボール箱がいく

やラベルに何も書いてないCDがゴチャゴチャあつて、ネコが座るスペースもない。これじゃ人間だって使にくいはず。それでも整理しないのは…：コンピューターの周りを見るだけで、使ってる人のプロフィールングができるんだよ。

メモの上にか座る場所を見つけて、キーに触ってコンピュータを叩き起こした。ハードディスクが回って、パスワードの入力。ミツチャンのは「ana」だ。ハナマルさんのはなんだろう…：ここで考えるようじゃプロフィールングのプロじゃない。アタシはそのままリターンを押した。大当たりい。見事に起動した。

デスクトップは散らかり放題。画像ファイルとmp3の音声ファイルがグシャグシャあつて、フォルダはとつても少ない。この分じゃデフラグやってないし、要らないバックアップファイルや履歴も溜め込んでるはず。いつか整理してあげよう。

もつと驚いたのは『ひみつ』っていうホルダがあつたこと。開けてみたらいろんなサイトのパスワードから銀行の暗証、クレジットカードの番号まで、全部テキストで入ってる。すごいセキュリティ感

覚！ 木馬でも仕掛けられたら、翌日には『ひみつ』でも何でもなくなるよ。ハナマルさんって、他人を疑わない人なんだ。

もつとあちこちハッキングしてみたかったけど、今は昼間で、いつハナマルさんが入ってくるかわかんない。急がなくていいよ。アタシのフリーメールに溜まりまくってるはずのメールを読むのは後回し。なによりアタシは蔵小路屋の通販サイトを見たかったんだ。ミツチャンが管理してて、少なくとも週に一回は『味噌蔵だより』っていうコラムを更新してる。ミツチャンはかなり自分のことも書いてるから、読めばなにかがわかるはず。ブラウザにURLを打ち込んでリターン。

何よおここれっ。Not Found 404でエラーになっちゃう。タイピングを間違えたのかと思って、何度も打ち直して試してもエラーばかり。サイトがなくなってるよ。蔵小路屋が消えちゃったよ。アタシのおうちがみつつかなくなってる。どーしよーっ。

頭が真っ白になった。瞳孔が開いて目の前も真っ白。ミツチャン。ほとんど失神しかけたとき、部

名前はタマだよ、タマ。お願い、ボケキジだけはやめて。

「そっだ、バナメイなんていうのはどう？ 短くつめてバナ」

やっぱりそーかあ、だれが見ても海老の殻なんだ。せめて濁点とってハナにしない？ ……ま、バナでもいいか。贅沢は言えないもんね。ハナマルさんはエクセルを開いて数字をいくつか打って「そろそろバックアップとらないとね」とかひとりごと言ってるからブラウザを開いて、見慣れないサイトに入った。SPAT4？ 競馬じゃん。

「あつら、またやられた、三百円。馬複くらいきてもいいじゃないの。まったくもう」

そういえば『ひみつ』の中に競馬加入者番号と競馬IDってあったな。それからハナマルさんはポケットから飾りがいっぱい付いた携帯電話を出して、そっちでも競馬の結果を見て「同じだな、やっぱり」ってため息ついてた。そりゃそっだよ。なんで見ても勝ち馬は変わらないと思うよ。アタシはハナマルさんをとつても好きになった。

「はい、お待たせ。キジとバナ、こっちにおいで」

屋に近付いてくる人間の足音。マズいよ、このタイピング。知らないネコがコンピューターやってたら、どんな人間だって驚く。アタシはとにかくブラウザを閉じて、マシンをスタンバイ状態にした。ハードディスクが止まって画面が黒くなった瞬間、小太りのオバサン、いや、おねえさんが部屋に入ってきた。「あらまあ、キジちゃん来てたのね。おやおや、今日はお友達といっしょだね。ふたりともちよつと待っててね。伝票つけたら何かあげるから」って言うて机の前の椅子に座った。アタシの真後ろってこと。ここにアタシがいたら使いにくいよね。ゆっくり立ち上がろうとして、そのとき、左足でキーボードのどこかを踏んじやった。感触ではコントロールキーだと思う。マシンはすぐに立ち上がった。

「賢いネコだねえ。コンピューターつけてくれたよ。最近じゃ人間よりネコの方がよっぽど使える」

ついでにパスワード代わりのリターンも押してあげようかと思っただけ、さすがにやめておいた。ハナマルさんはアタシをじーっと見て、「あなた名前は？ キジだけどボケてるし、なんだか面白い色だね」

もうバナになってる。冷蔵庫から出してくれた牛乳とチーズとお魚のソーセージを、それぞれ小さなボールに入れてくれた。シナモンさんが食べ始めたからアタシも遠慮なく食べた。

「キャットフードを買ってあげたいけど、ここに堂々と置くわけにはいかなからね。そっだ、サバの水煮の缶詰は好きかい？ 試しに買ってきてみようかね」って、アタシたちが夢中で食べてるのを見ながら言った。はい、サバ水煮は好きです。シーチキンはおもつと好きです。

食べ終わって、二匹で正座して顔を洗ってるとき、シナモンさんが「どう？」って小さな声で訊いたので「さいこー」って答えた。

「よく食べたねえ。バナもお腹がすいたらいつでもおいで。それで、あなたたちどうする？ 昼寝でもしてくかい？」

シナモンさんと顔を見合わせて、どーしよーかって目で相談した。初めて来たのに長居するのは図々しい気もしたから、アタシは「帰ろうよ」って合図した。で、二匹とも帰ることにして、排気管はどうやって跳び上がるか考えてたら、そうじゃなかつ

た。ハナマルさんが建物のドアを開けてくれたんだ。シナモンさんが「帰りはドアからよ。休憩室にネコがいるときは、いつでも帰れるようにドアを少し開けてくれるの」

ドアを出たところでハナマルさんに「ありがとうございました」ってお礼を言った。

「まあ、お行儀のいいネコたちだね。きつとお母さんの躰けが良かったんだろう」って褒められた。知ってた？ネコは褒められるとメッチャ嬉しいんだよ。

シナモンさんはジャガと会う約束があるって、ムラタネコの寝場所に行くんだって。アタシはとりたてて用事はないけど、これからドーしよか考えなくちゃならない。それで、ひとりでプラスティックの箱に戻った。

箱ではユラノスケが寝てた。アタシが帰ったのにも気付かないで爆睡してる。ユラちゃん、これまでよく生きてこられたねえ。今悪い犬が来たら、あんたは夢の国から天国に直行だよ、なんて思ったけど、アタシはそれどころじゃない。蔵小路屋サイト消失っていう大事件があったんだ。世田谷で何か悪いことが起きてるのかもしれない。さつき、ブラウザ

どうなるってもんじゃないでしょ。話はタロヤカッチャンには伝わるだろうけど、犬とネコが騒いでも人間には伝わらない。全然解決にはならないよね。

んん？ひとつ思い出した。ミッチャンがいつもやってた無意味なチャットルームの名前、ちゃんと憶えてる。ググれば行ける！とにかく入って様子を見よう。もしかしたらミッチャンがいるかもしれない。そうだったらどうするかは、出たとこ勝負でいいじゃん？ 試す価値はあるよね。そうしよう、そう決めた。今夜決行だ。

昔のアタシなら、期待に胸震えたり、悪い想像したりで眠るなんてできなかった。でもノラを一ヶ月もやったせいで、クソ度胸がついたっていうか、なるようにしかならないって心底思えるようになってる。ノラはきつと修行なんだよ。人間も一度ノラを経験すれば、世の中はもつとよくなるだろう、って考えながらユラちゃんの隣でアタシも爆睡した。

予定通り夜中に目が覚めると、ユラちゃんはいなくなっていて、かわりにギンタがいた。ヒマそうに自分のシッポを見る。

でNot Foundエラーを見たときには焦り狂って思考停止状態になっちゃった。今は、おなかもいっぱいだし、少しは落ち着いて考えられる。さあて、ドーしよーかな。アタシに何ができるかなあ。

エラーコードがForbiddenならまだ救いがあるかもしれない。けど、Not Foundは「そんなサイトはないよ」っていうことだから、アタシのスキルじゃ、これ以上の搜索なんて手も足も出ない。うーん、他に何か手はないかなあ。せつかくコンピューターが使えるってわかってても、出てきたのは悪い知らせだけ。蔵小路屋がなくなったかもしれないっていうのに、今までと同じに、ここでただ待ってるだけなんて、アタシには無理。もう無理。

一番簡単なのは、ブラウザメールでミッチャンにメールすること。もちろんそんなのは最初から考えてたよ。この非常時なら、ネコがコンピューター使えるのがばれたって構わないもん。だけど、致命的にダメなんだ。アタシ、ミッチャンのメアド憶えてない……。あーあ、憶えときゃよかったなあ。

おかささんのメアドは知ってる。だけどさあ、おかささんに言ったところで、ただ心配させるだけで、

「兩ん中、どこ行ってたの」って訊いたら「ミッチャンが来ないかの監視シフトを二回連続でやって、タケチヨに会いに行つて、二日くらいいっしょにいたよ。キムラさんは近々旅行に行くらしい。置いてかれるんだって、かなりいじけてた」

「どこ行くんだろ。連れてつてもらえばいいのに」
「それが、ビーだのギャーだの、とんでもない音を出して喜ぶ変人のミーティングに行くらしくて、そこには犬が泊まれる場所がないらしいんだ」

「人間はヘンなことして喜ぶんだね。ネコには理解できない。でも、そんなヘンな音、聴かされないだけラッキーかもね。40 kHzのサイン波なんか大音量で聞かされたら耳がもたないもん」

「そうそう、人間は自分たちに聴こえなければ、どんな音でも出していいと勘違いしてる。こないだなんか、下の町のオーディオマニアの家から30 kHzくらいの大きな音がずーっと鳴ってた。アンプが発振してツイーターが悲鳴上げてるんだけど、マニアさんは気付いてない。さすがに真空管の音は違うとか言ってた」

「じゃ、その人、出してる音の波形見たことないんだ」

「もちろんないだろう。オーデイオマニアだから」
「動物には迷惑な話ね」

「一部の人間にも迷惑だろうよ」

「それで、キムラさんが留守の間、タケチヨはどうするの？」

「まあ、誰かがごはんをくれるだろうけど、散歩はさせてもらえないかもしれない」

「それなら、留守番の間は脱走して、アタシたちといればいいじゃない。林にいればみつからないよ」

「うん、実はタケチヨもそんなこと言ってたな」

それからアタシは、カラスのカンタのこと、ムラタネコから冬の大戦争について聞いたこと、ハナマルさんに会ったことを話した。ギンタは面白そうに聞いてた。

「それでね、今夜そーっと休憩室に入りたいの」

「どうして？ ハナマルさんは夜中はいないよ」

「だから入りたいのよ。人間に見つからずにコンピューター使えるでしょ」

「コンピューターでなにをするつもり？」

ギンタは生粋のノラだから、それほどコンピューターやネットに強くない。ワードとエクセルができ

る程度なんで、全部は説明しきれなかったけど、アタシがミツチャンとコンタクトしたがってるのだけはわかってくれて「よし、二匹で休憩室に行こう」って言ってくれた。

夜中っていつでもサービスイリアは終夜営業だから、いろんな音が聞こえる。体の大きなギンタは排気管に跳び込むときにつかえてゴソゴソやったり、部屋に跳び降りるときにもドサツといったけど、どうにか人間に気付かれずに潜入に成功した。アタシたち、配管工には向いてないな。二匹してマシンガンでバリバリ撃たれて、全身蜂の巣になるのもやだから銀行強盗もしたくない。

コンピューターは相変わらずスタンバイになっている。昼間と同じに起動してブラウザを開くと、横で見たギンタが「手際がいいね」って言った。「どーもありがと」って答えて、もしかしてって期待して蔵小路屋のURLを入れてみる。やっぱ Not Found だ。もうこれは完全にあきらめるしかないなあ。

グーグルに行こうとしたら、あれえ、ブックマークに入っていないじゃん。検索はヤフーしか入れてない。ハナマルさくん、探したいのを出してくれるの

がグーグルで、出したいのを勝手に出すのがヤフーなんだけど。ま、趣味の問題だからいいけどさ。で、ヤフーで「google」って打ち込んで、それでグーグルに飛んだ。孫さん、気を悪くするかな。

チャットルームはすぐに見つかった。『文化人類学研究3』っていう部屋。そこには二人いて、チャシューの作り方を話してる。漬け汁にお酢を混ぜるのはどうしてだろう、みたいな話。アタシは『たま』のハンドルで部屋に入った。

それから三十分はひたすら我慢で、どーでもいい会話を調子を合わせた。横で見てたギンタが「この人たちが寝ればいいのに」って、アクビしながら言った。アタシもそう思うよ。でも、もしかすると寝らない理由があるのかもしれない。二人とも実は犬で、番犬なのかもしれない。もし人間なら交番のおまわりさんかも。

ついに我慢できなくなつて、ミツチャンを知ってるかどうか訊いてみた。ミツチャンのハンドルは『コノハナ』っていうんだ。日本の神話に出てくる美女の木花咲耶姫から取ったらしい。っていつてミツチャンは古事記も日本書紀も読んでないだろうな。

アタシは「コノハナさんって知ってる？」って打った。そしたら、一人は全然知らないって言う。もう一人は、ずっと前にはよく話したことあるけど、最近は会っていないって。そーかあ、アタシはものすごくガツカリした。希望の糸が切れちゃった感じ。ギンタに「ダメみたいだよ」って言ったら、「状況が変わらないだけだよ。これだけでダメなんて思っちゃいけない」って言われた。

アタシは二人に、「もしコノハナさんが来たら、たまは長野にいるって伝えて」って頼んで、チャットから落ちた。これでもう今夜はすることがない。CNNでネコニュースを読む気にもならないくらいグツタリした。完全に気落ちしたネコを見たければ今夜のアタシがそう。コンピューターをスタンバイにして、「帰ろ」ってギンタに言ったんだ。

ハナマルさんがいないから、帰りにドアを開けてもらえない。二匹で排気管に跳び上がった。ギンタは大きいから簡単だったけど、アタシは助走をつけて必死で跳んだ。

お外に出ると、また雨が降り出してた。シヨボシヨボ、シヨボシヨボ。あゝあ。

まで愛して』さあどうぞお

「ますますひどいなあ。この歌のテーマは骨じゃな
いんだけど。しょーがない、歌うよ」

♪ いーきてるう限りはどごおまーでーも

さあがし続ける 恋ねーぐーらあ

傷つきー汚れえた わたあしーでえも

骨までー骨まで 骨まで愛してほしいのおよ

アタシは少し楽しくなってきた。次はどんな曲だ
ろうってワクワクしてたら、ユラちゃんがナレ
ーションを始めた。

「あの日いつしよに見た夢を、俗世の風が変えてゆ
く。諸行無常の人の世に、若い真心すれ違い。遠く
離れて見る月も、今夜はかすかに違う色。涙無しに
は歌えない、タマとルドルフのデュエットで『木綿
のハンカチーフ』だよ」

ええっ？アタシ？プロの歌手といっしよに？あ
わててるアタシを無視して、ルドルフが一番を歌い
出した。

♪ こ、い、びとーよー ボクはた、びだつー

ひがーしえーと むかーう列車でー

歩きながらジャガがルドルフに『小指の思い出』
はネコの性的にはヘンだから『シッポの思い出』にした
って言った。もしも誰かが小指に噛み付いたら、
それはケンカで、肉球がとつても痛いだろうから、
噛んだネコには二度と会いたくない。シッポなら、
じゃれてれば噛んじゃうこともあるだろうし、痛い
ことに変わりはないけど、噛んだネコを許せる。だ
から小指よりシッポがいい。そしたらルドルフは、
あの歌は人間の歌で、きつと人間の小指の神経は鈍
感にできてるんだろう。それに人間にはシッポがな
い。もしも自分たちの歌を人間に聴かせたいなら『小
指』のままにすべきで、ネコに聴かせると『シッ
ポ』に変えたほうがいい。どうするかは。ペロとカラ
オケぎるに相談しよう。

シユレみたいに難しいこと言わなくても、歌う当
事者のネコ二匹は問題の核心に素朴に近付いてる。
歌って楽しんでるだけならなんにも考えなくていい
けど、それを誰かに聴かせようとか、お金を取るうっ
てなると、シビアな課題が出てくることを、ネコな
ら当然気付くんだけ。人間世界じゃどうなってるのか
知らないけどさ。

よーし、こうなった歌うわ。逃げ出しても恥じ、
歌っても恥なら、撃ちてしままん、玉砕覚悟。

♪ い、い、えー あなーたー

アタシは ほしいものはないのよー

女の子パートを精一杯歌った。音はあんまり外れ
なかったしリズムも良かったと思う。

「タマ、やるじゃん。二匹で組んでユラプロって
いうの作らないか？ホリプロみたいな感じで」

ヨイシヨなのはわかってても、褒められるのは嬉
しいな。アタシはメチャクチャ気分が良くなった。
人間がカラオケを好きなわけが、ちよつとわかつた
気がする。もうひとつわかつたのは、アタシはおな
かがすいてるってこと。

「プロダクションよりおながすいた」

「そうこなくつちや。知らない人のところに行こう
ぜ」ユラちゃんは上機嫌で、ジャガとルドルフに「二
匹も行くだろ？ 作戦は大成功だな」だって。

そーかあ、心配してくれてたんだ。こーゆーのな
ら騙されても怒る気になんないよね。

知らない人の家の近くで森ネコのコアラに会っ
た。こちわって挨拶して「へび元氣？」って訊い
たら「あの青大将、ノルマ果たせなくて脱皮して脱
走しちゃった」って。で、そこに抜け殻があるから
見るかい？っていうんで、みんなで見に行った。う
わあ、へびが裏返ってる。長さがネコ三匹分くらい
ある。犬が裏返る映画は観たことあるけど、へびも
裏返るんだ。どんなエイリアンが出てきたんだろう。
青大将だから、やっぱり青いネバネバだね。ごは
んの前には見ないほうがよかった。

いつものように七時ちょうどにごはんが出てき
た。そんなとき気付いたんだけど、一番向こうの端に
タケチヨが来てて、ギンタとトントといっしよに三
匹並んで座ってた。キムラさんが旅行に行っちゃっ
たんで鎖外しの術を使ったんだ。タケチヨはネコ用
のフリスキードライをアタシの五倍くらいのスピー
ドで豪快に食べてる。

ごはんがなくなつたところでお食事会はおしま
い。お水を飲んで、みんなは知らない人に挨拶して
帰り始めた。「犬が来てたね」「ノラじゃないだろ」

「あんな上品なノラがいるもんか」「あれはタケチヨだよ」なんていう声が聞こえてきた。

そのタケチヨは知らない人のところに行って「ご馳走様でした。またお世話になります」って言うてる。知らない人は犬も好きらしくて、タケチヨの頭を撫でてる。タケチヨは手をなめ返してる。別にシーザーがいなくても、見識のある犬はちゃんと人間と付き合えるんだ。

帰りは大編成になった。ギンタとタケチヨを先頭に、ユラちゃん、トント、ジャガ、ルドルフ、それにアタシが一列になったりフランスデモになったりして歩いた。アタシの頭の中には世田谷まで歩いて帰ろうとか、ウジウジしたのも残ってたけど、まあ、このままでもいいか、みたいな気分になってた。今はけっこう幸せなんだ。

そのときギンタが「タケチヨが用心棒になってくれるから、みんなでアユを見て川に行かないか」って言った。えっ、ってゆーことは千曲川に行くの？クマベーおじいさんの銅像に会えるの？

「アタシ行くー」って叫んだ。ジャガも「アユも川

アタシはワクワクしてた。箱に帰って丸くなってもなかなか眠れない。千曲川ってどんな景色かな。お水がいっぱい流れてるのは知ってる。お風呂の三倍くらいお水があるんだろーな。水道の蛇口を十個いっぺんに開けたくらいかもしれない。アタシ、多摩川にも行ったことないから、それ以上は想像つかないよ。って、モワーツと考えてたら、いつの間にか眠っちゃった。

「タマさ〜ん、出かけるよ」ってジャガが来たんで目が覚めた。ちょうど、水槽にもぐってアジみたいなお魚をパクツとくわえた夢を見てたところだった。目が覚めても、お口の周りがアジ臭い気がする。アユもこんな匂いなのかな。

真夜中にアタシたちは出発した。出発式みたいなのは無くて、ジンタの演奏も日の丸の小旗も、万歳三唱もなかった。そうだよ、出征兵士を見送るわけじゃない。見送るならホームから汽車が走り出さなきゃいけない。ここには汽車が無いから万歳もないんだ。アタシたちは、ただ歩き始めた。

お空にお星様が出る。雨は降りそうもない。ギ

も見たことないよ。あたしも行きたい」だったし、トントは「日本の川は初めてだから、ついてく」って言った。旅が大好きなルドルフも賛成してくれた。ユラちゃんだけが「遠くて疲れるじゃん」とか一応ごねて、ギンタに「おまえがいなきゃ誰が道案内するんだ」なんて言われて、「それもそうだな、オレがいなきゃ始まんないしな」って、よくわかんなく納得したんだ。

それから、今夜遅くに出発、長老には話しておく、各自の準備は何も要らない、食べ物行き当たりばったりで、とかギンタが説明した。途中で眠くなるといけないから、これから帰って、出発まで眠ってよう、とも決めた。どうもギンタとタケチヨの二匹は、川に行く計画のかなり細かいところまで決めてたみたい。犬とネコだから相談して決められるんだよ。ネコどうしだと要らない話ばかりになって、カンジンなことはちーっとも決まらないからね。そーいえはずっと前にママが言ってたな、PTAの役員会って、無駄な話が多すぎてなかなか決まらないのよって。ママさんたちって本当はネコなのかもしれないね。

ンタが見てきたサーブスエリアの天気予報では、もしかしたら明け方にちよつと降る程度らしい。それまでに着いちゃえばいいんだ。そーすれば毛皮も足も濡れない。

タケチヨが班長役で先頭、ギンタが副長役で一番うしろ、他のネコは間に入って一列で歩いた。最初は黙って歩いてた。そのうちユラちゃんが「川はまだか」って言い出した。「まだに決まってるだろ。今、知らない人の家を通り過ぎたところじゃないか」ってトント。「疲れたから休みたいなんて言わないよね」ってルドルフ。続けてギンタが「休むなら一匹でどうぞ。このあたりにはネコの怪物が出るっていうけど。ねえタマ」っていうから「そうそう、世田谷名物のネコワ二様が出そうだよ」ってアタシが言った。なんかユラちゃんに集中砲火って感じだね。でも、このくらいやつとかないと、ちゃんと歩いてくれないだろうって、みんな思ってる。

「ネコワ二様ってなに？」ってジャガが言う。どーしようかと思っただけ振り返したら、話してやれよ、みたいな顔してた。それでアタシは、

「みんなも感じたことあると思うけど、真っ暗な夜

中に、何かが横をスーッと通り抜けるんだよ。それはネコワニ様っていつて……」って話し始めた。

大人ネコ用にちよつとアレنجシしたんだ。耳だけじゃなくてシツポも食べられちゃうことにして、シツポはすぐに生えてくるけど、それはワニのシツポで、そのネコ自身も少しずつネコワニ様になっちゃうことにした。話してるアタシも怖くなったよ。こんな話ばかりしてれば、いつか『ネコの圓朝』って呼ばれるかもしれない。

話し終わると、みんなシーンとした。つまんなかったのかな？ トントが「それ、マジ本当の話なの？」って小さい声で言った。こういうときはストリートに答えちゃいけないんだ。だから「ユラちゃん、どう思う？」って訊いてみた。訊いてからユラちゃんを見ると、両耳を完全に後ろに伏せて、シツポは足の間に巻き込んで、右手と右足を同時に出して歩いてる。目は真っ直ぐ前を見てるけど、なんにも見えてないみたい。こりゃ、やりすぎたかもしれないな。

「だからね、そーゆー話をおかささんから聞いたんだ。ネコワニ様がいるのは、多分、世田谷だけだよ」

「怖い話はいいいね。自然と速足になる。そうだな、もう半分くらいまで来たよ」

「半分かあ、そうだ、『もう半分』っていう怖い落語があるけど聞きたい？」ってアタシが言ったら、みんながいつせいに「やめましよう！」って叫んだ。

ニヤニヤしてたタケチヨが「予定よりずつと早いよ。ネコにはちよつとオーバースピードじゃないの。オレは大丈夫だけだね。その、ちよつと高くなつた場所で休憩しないか」って言うんで、もちろん大賛成だから、みんなで小山に登って一休みすることにしたんだ。

あたりはまだ真つ暗。風の音と虫の声しかない。急に「田舎にいるんだ」って実感した。一晚中クルマの音が聞こえてる世田谷が、また恋しくなりかけてる。アタシ、もしかして重症のホームシック？「水飲みたいよ。足も腰も痛い。こんなに遠いなんて聞いてないぞ」ユラちゃんが文句を言い出した。よかつたあ、いつもの調子に戻ってる。

「まあ頑張れよ。ここから先は下り坂になるよ。メスネコが歩けるんだから、おまえなら楽勝で歩けるさ」ってギンタが言っても、ユラちゃんは「腰が痛

みんながフーッとため息ついたので聞こえた。アタシとしてはネコワニ様がウケたら、続けて地下ネコの話をしようと思つてたんだ。もう今夜はやめよう。誰かが失神するといけないから。

怖いお話って、お話自体、つまりあらずじけならそれほど怖くないんだ。牡丹灯籠にしたって、スジだけなら怖くなくて面白い。どうして怖くなるかっていうと、話し方なんだ。表現力っていうほどのもんじゃないけどさ、聞いている人の目の前に物語の絵が出てくるように話せばいいの。落語を聞いてわかつたんだ。アタシ、落語大好き。いっぱいいる落語家の中でも、円生さんが一番かな。円生さん、ネコになって、どっかで生まれ変わってないかなあ。わかれば会いに行くよ。それから、生きてる人なら五街道雲助さん。ネコにもわかる『粹』な芸。えっ、知らないの？

「まわり中にネコワニがいるかと思つた。世田谷だけならもう怖くないはずだけど、まだちよつと怖いな。怖くて速足になつたから、ねえギンタ、どのくらい来た？」ってルドルフが、やつとふつうの声で言つた。

「い」って言い続けてる。腰痛もちのネコなんているのかな？……あつ、そーゆーことか。ユラちゃんの腰痛の特効薬、アタシ知つてるよ。試してみよう。「名譽の負傷だもんね。勇敢に戦つた話、ムラタさんから聞いたよ」って水を向けてみた。

「聞いたの？あいつ、ちゃんと正しく話したかなあ」トントとルドルフ、ジャガは、そろつて「またかよ」みたいな顔になつて、聞こえない振りで、いつせいにヒゲの掃除を始めた。

「オレは大怪我したんだ。傷痍軍人だ。作戦を大成功させたために身を挺して戦つて、他のネコの命を守つた。そのときにやられた腰の古傷が痛むんだ」挺しかたは戦艦ヤマトくらいトンチンカンだったけどね」ってトント。

「なんか言つたか？」ユラちゃんが睨む。「戦艦ヤマトくらい勇ましかった、って言つたんだ」「そうだろうな。オレが犠牲にならなきゃ、他のネコは一匹も生き延びられなかつたから」

話が長くなりそうだと思つたのか、それとも、この調子で歩かせちゃえと思つたのか、ギンタとタケチヨが「そろそろ出発しよう」って言つた。一番勢

いよく立ち上がったのはユラちゃんだった。他のネコはゆるゆる立ち上がって、ノビをしてアクビして、川に向かって行進を始めた。

「オレたちの聖地、エルサレムにも匹敵する日向ぼつこの場所を、鉄面皮が人間の入植地にしようとしたのが戦争の始まりだった。それは知ってんだろ？」
「うん、それは聞いたよ」ニユアンズというカスケールというかが、だいぶ違うような気がするけど、まあいいか。

「オレたちネコは主にゲリラ戦を仕掛けてマジノ線で敵を包囲し、もう一步で鉄面皮一味を殲滅するところまで追い込んでいた。ところが、弱腰の長老派は過剰な政治的配慮で日和見に転身し、オレたちに戦闘停止を命じ、ヴィシー政権になろうとしていた」
「あー、できれば少しゆっくりしゃべってよ。世界史思い出すのに時間かかるから」

「いい、いい、てきとーで。雰囲気わかってくれればいいんだから。それで、松下村塾と松下政経塾の床下で学んだオレたち青年将校は、憂国の志に燃え、己のとるべき唯一の道として、徹底抗戦の血判状をしたため、雪を踏みしめ、四十七匹の同志とともに

長老宅に討ち入った」

「えっ、あのとき長老のところに行ったの？」トントが驚いて訊いた。

「比喩だよ、比喩。わかんないかなー。オレは主観でしゃべってるんだから、多少は『個人の感想』が入っていいだろ。……どこまで行つたっけ。そうだ、長老宅に討ち入った。長老は狼狽し、炭小屋の中に隠れたけど、引きずり出して血判状を突きつけ、さあ尊王が攘夷か、ふたつにひとつとせまった。長老は言った『長老死すとも自由は死せず』。いや、それでは答えになってない、祖国存亡の非常時に、閣僚のような返答は許さぬ。さらに追求すると『後世に世界の笑いものになるから朝鮮出兵はしない』と、やっとならぬネコの返事が返ってきた。まあ、ネコがやってりや、近代史のごく一部だけど、とんでもない間違いはなかった、ってことさ」

「ねえ、なんかあたまがクラクラする。もうちょっと枝葉を整理しない？」

「そうだな、たしかに枝葉で本質が見えなくなってる。じゃ、少し飛ばして、ついにオレたち青年将校

に勅令が発せられたのである。兵に告ぐ、兵に告ぐ」

「あのさあ、将校は兵じゃないだろ」またトント。

「知らないよ、そんなこと。ネコの数が少ないから将校も兵隊も同じなの。それで負けとけ」

「負けとくよ。面白いから釈台と張扇、用意しようか？」

「歩きながらじゃ小道具は使えないよ。今度またタツプリ語ろう。えっへんっ、雪明かりに浮かび上がる大本営を後に、オレは増援部隊を指揮するため城外の駐屯地に走った。山之内一豊の愛馬、鏡栗毛に打ちまたがり、はっしはっしと駆け抜けたあ。……やっぱり張扇があるな……雪は間断なく降り注ぎ、風雪地鳴りを生み、ついには視界も遮られ、」

「あのさあ、さつき、六行前で雪明りって言わなかった？ なんていきなり嵐なの？」今度はルドルフ。

「つまらないことをすっかり聞いてるね。あのな、ここは山だろ。天気が変わりやすいんだよ。わかった？ 続き行け。猛吹雪の中、駐屯地までの数百里を一気に走ったオレは、すぐさま屯所司令官のタケチヨに面会、長老からの勅書を手渡した。一読してタケチヨは涙ぐんだ。おお、ついに長老は決意遊

ばされたか。この日を待っておりました。もとより命は捨てる覚悟。出撃準備はできております。いざ、日向ぼつこの場所に急ぎましょう。オレは再び馬上のネコになり、タケチヨ以下犬の軍勢三百を引き連れてサービスエリアにとつて返した」

「おい、ユラノスケ、オレはお前の部下じゃないぞ。三百匹の犬なんてどこにいるんだ。それに大体、おまえは迎えになんか来てないだろ。あの日、オレは散歩の途中で、ネコが困ってるのに出会っただけだ」
タケチヨが振り返りながら言った。

「まあまあ、そういう見方もできる。これは歴史認識の違いってやつだよ。認識っていう主観的要素が判断基準になるから、どっちが合ってるっていうもんでもなくなる。困ったことだねえ、まったくユラちゃんにはしらばっくれた。

「ユラにしてはすごい理論武装だ。シユレに教わったんだろ？」ってギンタ。

「わかる？ 他にもいろいろ教わったけど、わかったのは主観的要素のどこだけ。でも役に立つなあ」
「いいから続けるよ」タケチヨはあきらめた。

「でもって、決戦の場では工兵の作業が難航してい

た。ネコには築城の基礎知識がなく、雪を積んではすぐに崩れ、さながらシーシユポスの岩。このままではネコ全員、明日の朝にはカブトムシになつてゐるだろう」

「カブトムシになるの？どーして？」ジャガもちやんと聞いてみたい。

「ホントは、原典では毒虫だけだな。変わるんだよ。理由はカフカに訊いてよ。なんつっても不条理なんだから。細かいことはどーでもいい、オレは早速犬の工兵隊に出動を命じた。穴掘りを唯一の得意技とする犬は」

「ったくもう」ってタケチヨがつぶやく。

「わずが数秒で、高さ三メートルの雪の城を築き上げた。総司令官のオレと工兵隊長のタケチヨは、その場で思わず抱き合つて喜んだ」

「やだね、ユラと抱き合うなんて」ってタケチヨ。「その光景に感極まつたネコたちは、次々と城に登り、聖地奪還の記念にスプレーやオシッコをしていった」

「そこだけは合つてる。どうしてユラは最初に登つてスプレーしなかつたんだよ」トントが訊いた。

「いないよお、そんなネコ。寒い夜中に雪山壊しに来るなんて、そんな酔狂なネコは金輪際いないと思ふよ」ルドルフが言った。

「それが甘いつて言うんだ。専守防衛は、油断なく防衛してこそ意味がある。この戦争の、そもそも最初を考えてみるよ。日向ぼつこの場所は代々のネコが自由に使ってきたから、なんとなくネコのもつて、みんな思つてた。ネコが有効支配してるから『領土問題は存在しない』ことになつた。それがどうだ、いきなり人間がネコ出てけつて始めた。ネコには寝耳に水だったけど、そんなのはい訳にならない。トラブルつてものは例外なく突然始まるからな。始まつたら最後で、騒動が起きちまつてから『ずっと前からネコが使つてた』なんてグズグズ言つても屁のツツパリにもならない。どうやつても平穏な日々は戻つてこないんだ。すべては、最初からちゃんと守つてなかつたのがいけないんだ」
どっかへんなりクツ。でも筋道は通つてるし説得力もそれなりにある。まあ、雪山になつちやつてからユラちゃんが歩哨に立つても、日向ぼつこはもうできないけどな。

「いや、オレは単なる司令官だ。歓喜は民衆の権利、軍人のもではない。オレは少し離れた木の下にたずみ、民衆の喜びを我が物として、心の奥深くで強く噛み締めていたんだよ」

「ユラちゃん、かつこよすぎるよ」純情なジャガはすぐに騙される。

「だろ、だろ？真の名誉は賛辞でも勲章でもない。市井の民の生活を守り抜くことこそ本当の名誉なんだ。勲章や称号なんか邪魔になるだけだぜ」

「へえ、そうかい。次の日にウンチの勲章、お尻に付けてもらったの誰だっけ」トントが言うと、みんな笑つた。

「いやいや、正しく理解されないのは英雄の宿命だろう。まあ聞きなよ。その晩、ネコたちは山の上でスプレーやオシッコをすると、それだけで満足して、みんなねぐらに帰つてしまつた。オレは、せつかく築いた陣地を死守するために、たつた一匹で歩哨に立つた。鉄面皮一味が破壊工作を仕掛けてくる可能性も排除できない。さらに悲しいことに、保守派のネコたちがオレたちの正当な作戦を暴発と見做して、雪の山を切り崩しに来るかもしれない」

「どうやら反論はないらしいな。オレの言つてるところに間違いはない。歩哨の間、雪はしんと降り積もり、オレの純白の毛皮を包み込んでいった。もう寒ささえ感じない。オレにあるのは使命感だけだつた。正直、オレも生身だから、何度か眠りそうになつたぜ。そして、上の脛と下の脛を合わせたとき、そこに見えたのは、しばらく会つてないおっかさん。おっかさんの姿が浮かんできたんだ。オレのおっかさんは今も心の中に生きてる。おっかさーん、忠太郎でござんす。お久しゅうござんす」

「おーい、きこえるかー」今度はギンタだつた。「はまつた穴から出て来いよ」

「うるさいなあ。今いいとこなの。えつと、そうだ、枝葉は切るんだつた。で、結局オレはその晩、たつた一匹で雪の山を守り続けた。誰か来たら代わつてもらおうと思つてたけど、日が昇つて暖かくなつてもネズミの子一匹来ないじゃないか。いくらネコが飽きつぽくても、きのうの今日だぜ。誰か様子くらい見に来てバチは当たらないだろうに、つてオレは段々腹が立つてきた。立腹は排便を促し、ウンチをしたくなつてきた。それに、おなががすいてるこ

とにも気づいた。英雄も不死身じゃない。食ったり出したりしなけりゃ死んじまう。それに、きのうからやつてる軍隊ノリのテンションも、いい加減ゆるんできた。なっ、オレは正直に話してるだろ？オレの話にウン偽りはこれっぽちも無いんだ」

「うーん、まあそれなりに。これからいよいよ大事故が起きるよ。どんな話になるんだろ。」

「オレはそろそろ撤収を考えた。雪山は鉄壁に見える。半日くらい仮眠をとっても大丈夫だろう、っていうことでプラスチック箱の兵舎に引き上げる前に、大いなる足跡を山のとっぺんに残すことにしたんだ。つまり、山の上に、さらにウンチの山を築く。我ながら最高のアイデアに思えた。オレは一步ずつ踏みしめながら山に登って、あたりを見回した。遠くでシナモンが見てた。オレは軽く会釈をしてからウンチの体勢に入った。そのとき、残念ながら油断があった。それは真摯に認めなきゃならない。ふと見上げた屋根の上に、あの鉄面皮がいるじゃないか。巨大なスコップを持って、大量の雪をオレの上に落とそうとしている。雪は一トン以上あるだろう。次の瞬間、オレが最初のウンチを出したのと同時に、雪

の塊がズドンと落ちてきた。背骨と腰骨に激痛が走る中、オレは『九世報国』と叫び、出したウンチを雪に埋めたところまでは記憶がある。その後、オレの魂は地上と冥府との間をさまようことになった」

「じゃ、ウンチをお尻から出したまま雪に埋まったっていうのはウソ？」

「ギンタが訊いた。」

「オレとてネコの末席を汚してる。そんな、ウンチを付けたまま失神するなんて、みつともないことできないよ。雪が落ちてくる直前に、超特急で穴掘って、ちゃんと埋めた」

「それはまあきれいなことで」トントは全然信じてない。

「衛生的とか、そーゆー問題じゃない。ネコの威厳の問題さ。でもな、オレはその瞬間にほとんど死んだんだから、その次に雪の重みで腹から押し出されたウンチがあつたとしても、それがどうなつたかは知らない」

心神耗弱を主張するわけね。裁判員裁判なら勝てるかもしれないな。

「死線をさまよって、ほぼ一ヶ月も昏睡状態が続いた。一部のネコは、オレを設備の整った獣医科大学

病院に送ろうとしたそうさ。これは謀略の匂いがすると思わないか？司令官を現場から遠ざけるのは兵士の士気を失わせる最良の手段だ。そこで、心あるネコたちは、オレを現場近くのハナマルさんの部屋に運び込み、仮の病室、野戦病院にしてくれた」

「仮の病室って、もしかして仮病の部屋だったりするんじゃない？」またトント。

「仮病なわけないだろ。十トンの雪が落ちてきたんだぜ」

「さっき一トンを言ったよ」ってジャガ。

「十のゼロ乗か一乗かがそんなに大切？宇宙的規模で見れば乗数がひとつくらい変わったって大勢に影響ないよ。それより、昏睡状態の間にオレは何度かアチラから招待された。きれいな天使が、かぐわしいマタタビでオレを誘ったんだ。そのとき、七つのラッパがスピニングホイールを演奏し、それぞれの枠の色をした七頭の馬がシャングリラ競馬場でナイターレースをやった。オレは蒼ざめた四番の青と六番の緑の馬複を買って指定席で見た。結果？もちろん勝ったさ。大穴で、馬複なのに万馬券で、払い戻しに行ったら窓口には孫悟空がいた。天国

じゃお金は使えないからって、大きな桃をたくさんくれた」

「待ったあ。頼むから、その桃、川に流さないでくれよ」ってトント。

「なんでわかったの？オレは桃をひとつ、ガンジス川に落としちゃった。桃は川を流れて、サタジツトレイじいさんと孫娘のシーラチャンドラに拾われて」

「はい、それまで。中から桃太郎でも金太郎でも一寸法師でも、何が出てきてもいいけどさあ、先が読める展開だけはよそうよね」

「そんなもの出てこなかったぜ。出てきたのは、まぶしい光に包まれた女の子」

「その子は月に帰るんだろ」

「よくわかってるじゃない。金色に輝く円盤が降りてきて、お月様へと帰って行きました。そしたら今度は、円盤に何匹もの天使が乗って、オレのほうに降りてきた。この船に乗りましょう、とか言いながら」

「天使は『何人』だろ。何匹とは数えない」

「だってネコの天使だもの。ものすごくかわいくて

色っぽいメスネコたちでね、背中に羽根が生えてるんだ。かわいっていてもいろんなタイプがあるけど、そうだなあ、デビューしたころのブリジットバルドー、月曜日のユカに加賀まりこ、百万人のクラスメートの伊藤麻衣子、カルマンギアに乗ってたころのアグネスラム、2046のチャンツイイー」

「大体傾向がわかるね。それならシヨンヤンの酒家のタオホンも好きだろ」トントは俳優ネコだったから映画に詳しい。

「好きだあ、大好きだあ。それからサマリアのクアクチミンもいいね。あー、たまんねえ。そういうネコが極彩色の天使になってオレを呼んだ。おいでおいでって手招きしてた。ついフラフラって近付いたとき、オレはひとつのことに気付いたんだ。天使って、キリスト教じゃあ性別がなかったはずだ。でもオレを呼んでる天使は、どう見てもメス。あれがオスなら二丁目に行くよ。誘惑に駆られながらも、オレは考えたね。どうなってるんだろう、って。すぐにわかった。同じキリスト教でも、スエーデンボルグの言ったことが正しかったんだって。ところで、みんなの中にガチガチのカソリック原理主義者

いる？ いないね、あーよかった。こんなこと不適切な場所で言えば異端審問にかけられちゃうから」

「今度は審問法廷で堂々と、『それでも地球は回っている』って言ったほうがいいよ。廊下に出てからじゃなくて」アタシもヤジに参加した。

「おう、どこでも言ってるさ。森永の絵は天使じゃないってな。砒素ミルクを忘れちゃいない。そうなんだ、どっちにしても天使はヤバいかもしれない。スエーデンボルグが正しければ、手招きしてるハクイメスネコの親玉はルシファード。ついて行ったら地獄の一丁目。レディーならドレスの裾を持ち上げなくちゃならない。そうとわかっちゃいても伊藤麻衣子の天使は、あまりにかわいすぎる。我慢できずに天使に触ろうとした瞬間、空の上から崇高な神の声が鳴り響いた。『起きろバカタレ！』」

ネコも犬もひっくり返って大笑いした。誰も立ち上がれないので行進は止まっちゃった。「それってシナモンが言ったんじゃないの？」ルドルフがおなかを抱えながら言った。

「シナモン？ 違うよ、神様だよ。たしかにオスの声じゃなかったから、きっと女神様の声だ。でもシナ

モンは神様じゃない。シナモンはフローレンスナイチンゲールの化身なんだから」

「みんなあ、ちょうどよかった。ここで小休止しよう。起き上がらなくていいからね」タケチヨも寝転がったままで言った。「いやあ、ネコと歩くのがこんなに楽しいとは思わなかったよ。川まではもうすぐだから、ゆっくり休もう。それと、このへんで馬と合流する予定もあるけど、まだちょっと早いんだ」

「馬あ？ 付き合ったことないよ。蹴らないかな」トントが心配する。

「大丈夫。トントも知ってる馬だから。でもなあ、あんまりバカな無駄話してると、うるさいって蹴られるかもしれないよ」ギンタがユラちゃんに言った。「いいよ、馬に会ったらオレは口きかない。絶対に何も言わないからね」

横になったら少し眠くなってきた。他のネコもそーみたい。ジャガとルドルフは立って続けにアクビしてる。このままじゃ、みんな寝ちゃうよ。アタシも寝ちゃうよ。あつ、まずい。体から力が抜けてる。ジャガの目が閉じた。ユラちゃんは、いきなりどつと倒れてイビキかいてる。アタシもうだめ。ギンタ、

どーするのさー。おやすみなさーい。



13 : 千曲川旅情

聞き慣れない足音でアタシたち全員が目覚ました。道の真ん中を鹿毛の馬がこつちに歩いて来る。どんどん近付いて来ると、デカッ！って叫びたくなるくらい大きい。アタシ、本物の馬を見るのは初めて。こんなに大きいんだ。本能は「逃げ出せ」って言ってるけど、これがタケチヨが言ってた馬だろうから、逃げたら失礼だろうな。みんなもそうみたいで、尻尾を下げて、体を低くして逃げ出す用意のまま固まってる。

「平気だよ。逃げないで。紹介するから」馬の後ろから来たタケチヨが言った。「みなさん、ミスターエドです。これからの千曲川ツアーに付き添ってくれます」

「どうも、こんちわ。エドって呼んでおくれ。ミスター

は要らないよ」馬はきれいなネコ語で言った。

ネコは一瞬で相手のキヤラを見抜くんだよ。馬の人相はわからないけど、目元が優しいし、話し方も知的。だからみんな、もうあんまり怖くなくなってる。怖いより珍しいのが先に立って、エドの足元にそーっと近付いたり、揺れるシツポの先を見つめたりした。でもユラちゃんは、相変わらず逃げる体勢で固まってる。どうにも身動きできないみたい。小さな声で「怖いの？」って訊いたら「こんなでっかい動物、初めて見た」って震えながら言う。えー？ たしか、雪山作るとき、タケチヨを呼びに山之内一豊の馬に乗ったんじゃないか？

ジャガはエドの周りをピョンピョン跳ねて回りながら「エドさんはダーレーアラビアンの子孫のサラ

ブレットですよね」って訊いた。エドは笑って「サラブレットじゃないと思うよ。ずっと前のおじいさんはダーレーアラビアンだけど、ボクは多分スタンダードブレッドかアメリカンダミーだと思う。意味わかる？」ってみんなの顔を見回した。

「へえ、サラブレッド以外にもカッコいい馬がいるの？ 教えて教えて」

「まあまあ、血統教室は今夜あたりにして、それよりエドがえらい馬なのを話しておこう」ってギンタ。「エドはね、人間に飼われてるんじゃないしノラ馬でもなくて、語学の才能を活かして立派に自活してるんだ。もうわかっただろうけどネコ語や犬語はもちろん、ほとんどの人間語も話せる。ねえエド、まだ話せない人間の言葉はある？」

「たくさんあるよ。今はパーリ語を独学中。これが終わったらコプト語を勉強するつもり」

「っていうことで、ぼくにはまったくわかんない。この他、ブタ語、ヒツジヤギ語、ウシ語、トリ語もできるから、このあたりの農協で畜産改善指導員になって働いてる。家畜たちの愚痴や文句を人間に伝えて、みんなの生活を良くする仕事」

「仕事っていつでも、遊んでるようなもんだよ。牧場や農家で道草食ってればいいんだ。誰かがぶられたら見に行つて、文句が正しければ人間に言うだけ。休日は無いけど残業も無い。楽しいよ」

みんなエドと話したくなった。アタシも訊きたいことがいっぱいあったけど、タケチヨがネコを遮って言った。「そんなわけで、エドは忙しくない。今朝の仕事はふたつだけ。おとなしくお上品にしてるなら連れてってもらえる。みんなどうする？」

「行く行く」「ネコかぶってるから」「騒がないよ、約束する」アタシたちは同時に言った。

「それじゃネコのみなさん、ぼくの背中に乗ってください。一発で飛び乗れないなら、トモに飛びついてから背中に乗ってね。あつ、乗り降りには左側からがルールだから忘れないで」

「トモってなあに？」ジャガが訊いた。

「あと足のことだよ。人間が乗るときには触っちゃいけないけど、ネコは特別」ギンタが説明した。

ジャガ、アタシ、ルドルフ、トント、ギンタの順で背中に飛び乗った。わあ、馬って背が高い。お屋根に登ってるみたい。それに背中がとっても広い。

走り回れるくらい広い。どうやってつかまろうか考えてたら、エドが「ツメ立ててもいいよ。ぼくの皮は厚いから痛くない」って言ってくれた。

下を見ると、少し離れた場所にユラちゃんがいる、まだシッポを垂らして背中を低くしてこっちをじっと見ている。「早くおいでよ」ってジャガが言っても動かない。ギンタが「ユラ、乗れよ。おいてくぞ」って言ったたら、「オレわあ、歩いてえついでくう」だって。

「あれえ、ユラノスケは馬が怖いんだ」トントがかかった。ユラちゃんは「マジで怖いよお、乗れないよお」って泣き言。あっちゃー、困ったね、全員にばらしちゃったよ。

「雪の中をはっしはっし、じゃなかった？」ジャガが言ったから全員思い出した。

結局、タケチヨに「面倒くさいネコだなあ」なんて言われながら、ユラちゃんは犬の背中に乗ることになった。「耳にツメ立てないでよ」とか、いろいろ言われてた。どう考えても馬のほうがラクだと思うけどね。

エドの最初の現場は、ウシが暮らしてるひろーい牧場だった。牧場を見たとき、一番嬉しそうだったのはタケチヨで「いいね、この広さ。こういう原っぱ見ると、犬は自動的に走りたくなる。ユラノスケ、しっかりつかまってる。穴掘りしか能のない犬が馬みたいに走り回ってやるから」江戸のカタキを長崎で、だね。

「かんべんしてくれよお。まさかこうなるとは思ってなかったから、言いたいこと言っただけだよお」

「あのなあ、言い訳になつてないの、わかってる？」なんて言っていると、向こうからウシがノロノロ

やって来て、エドとウシ語でモワモワ話し始めた。「背中のネコはなんだ、って言ってる」エドが通訳してくれる。また少しウシ語で話して「オレの背中に乗りたいネコはいないか、だって。八秒乗ってたらチャンピオンだそうだ」

トントは乗りたそうで、「ターンの方向を決めてくれるなら乗ってもいい」って言ったけど、賢明なエドは通訳しなかった。無理だよ、オチヨシンコだって二秒もたなかったんだから。

エドとウシは仕事の話をした。ウシは何度も足

元の草を食べるポーズをしながら、エドに何か言ってる。しばらく話して、ウシは納得したみたいで、アタシたちに向かってモーって言ってから、向こうに歩いていった。

「うまくいったの？」アタシはエドに訊いた。

「うん、問題は解決しそうだ。あのウシが言ってたのは電気柵のことだね、牧場の向こう側、山に近い場所に電気柵があつて、電線の高さが低すぎる。ウシが草を食べようとすると、つい柵に触っちゃってビリッとくる。危なくてしょうがないから、もう少し高くしてほしって頼まれてたんだ。せめて地面から六十センチにしてくれて。イノシシよけなら、あいつらは柵の下はくぐらないから、低くしても意味ないって、牧場の人は知らなかったみたいだ。それはきのう人間に話した。近いうちに改善されるはず」

「イノシシは柵をくぐらないんだね」ギンタが訊く。

「飛び越すだけだよ。ネズミはくぐるけど」

それから、本に書いてある知識と実践知識がどう違うか、アタシみたいに頭でっかちでネット知識しかない、現実生きていけない、っていうような

話をしながら、エドの次の現場に向かった。

近付くとニワトリの声が聞こえてきた。トリ語なんて意味はわからない。何羽も同時にしゃべってる。夕方のカラスみたいで、かなりうるさい。エドは農家の庭に入って行った。一瞬ニワトリはしゃべるのを止めて、次の瞬間、また大騒ぎになった。いくらトリ語がわからなくても、この騒ぎの意味はわかる。知らないネコが来た！大きな犬も来た！なんだろうな。

エドがトリ語で何か言くと、しゃべるのは一羽になって、大きなメンドリだけが超スピードでナンダカンダ言ってる。エドは黙って聞き役に回るしかない。

「このおばさん、きのう話したことを、また最初から言ってる。ちょっと待っててね」ネコ語だった。いるいる、ネコにも人間にもそーゆーの。悪気はないんだけど、相手するのは疲れるよね。

メンドリが黙った瞬間、エドがトリ語で話し始めた。やっぱり早口だ。メンドリは聞いているしかない。エドがしゃべり終わると、メンドリはクケツクケツみたいな声を出して他のニワトリを集めて、また大

騒ぎになった。

「この農家の人と、ちょっと話してくる。ネコのみなさん、悪いけど降りて待ってて」アタシたちが飛び降りると、エドは農家の母屋に人間語で声をかけた。「鬼六さん、こんにちは」

家の奥から出てきたおじいさんとエドが話し始めた。「一ヶ所はふさいでもらったけど、まだ奥のほうに穴がいくつもあるって言ってますよ」

「いくつあって、いくつだね」

「それが、よくわかんないんです。ニワトリは三ましか数えられないんで」

「弱ったね。大きな穴なのかな」

「いや、イタチが入れるのは一ヶ所だけらしいです。ネズミの通り穴はいっぱいあるみたいですが」

「そうかい。しょうがないね。いよいよロープワークじゃ治まらなくなったか。この際、あんたの薦めのとおり、全部金網に取り替えようかね」

「そうですね。穴をいちいちふさぐより、金網で張り直した方が早いかも知れません」

「わかった、明日やるよ。今夜はとりあえず穴の場所にも木の板でも押し付けとくでしょう。風通しが悪

くなるってニワトリに言っといてくれないかな」

「はい、わかりました」

「いつもご苦労だね。よかったら納屋の入り口にあるニンジン、食べてっておくれ」

人間語の会話だから、アタシたち全員、意味がわかった。けっこう気を遣う仕事みたいだ。

エドはもう一度メンドリを呼び出して、超早口で説明した。メンドリは何度か言い返した後、どうやら納得した様子で、仲間とおしゃべりに戻っていった。エドは十本くらいあったニンジンを食べ終えてから「さあ、みんな、もう一回乗って」って言った。

「お待たせ。これで今日の仕事は終わり。いやあ、ニンジン食いすぎたかな。仕事でつらいのはこれだけ。行く先々の農家で、おいしい草とかニンジンとか角砂糖とか用意してくれるんだ。馬は大喰いだって思われてるから、どこでも大量にくれる。食べ残しちゃ悪いでしょ。この仕事始めてから馬体重がプラス五十キロだよ」

ネコが五匹乗った馬と、一匹乗った犬は千曲川に向かって歩き出した。どこでもそうだけど、農村は

寂れきって、道に人通りはない。集落にさしかかっても、アタシたち珍妙な動物グループは人間にみづからずに済んだ。世田谷では人間が余ってるのに、ここには人影もない。ネコはおコメを好きじゃないけど、人間は好きでしょ。たしか、この辺の人たちがおコメを作ってるんだよね。なんで人がいないんだろ。誰がおコメを作ってるんだろ。とっても不思議だった。

「あの鬼六じいさんはヘンに頑固だね」ってエドが話し始めた。「畑に動物よけの柵を作るにしても、ニワトリ小屋の網にしても、何でもロープで作りたいがるんだ。以前は別の仕事をしてたみたいで、ロープワークには絶対の自信があるらしい。でもなあ、ネズミやイタチは食いちぎっちゃうもんね。それで夜中にネズミが入り込んで、ニワトリが安心して眠れなくなると、ぼくに文句を言ったんだ。やっと金網にしてくれそうで安心した」

「そーゆーの、エドが説得するの？」アタシが訊いた。「無理無理、説得なんてできないよ。動物たちは勝手なことを一方的に言うだけだし、このへんの人間は長年農業やってるから、みんな一家言ある。そこ

に馬が出てきて偉そうになんか言ったって、両方から反発食らうだけ。まず意見を聞いて、簡単に言えば両方をうまく丸め込むのが仕事かな」

「それじゃ指導員じゃないじゃない」

「うん、サービス業だと思ってる。少しでも動物たちの生活が良くなって、人間と動物の間の風通しが良くなればいいんだ。どうでもいいような仕事だけど、前やってた仕事に比べれば充実感はあるよ」

「前って？」トントが訊いた。

「あれっ、知らないの。きみと同業。映画じゃなくてテレビドラマに出てた。ミスターエドっていう連続ドラマでね、馬が英語を話すっていう設定なんだ。ぼくはそのドラマに出るために、まず英語をマスターした。ずっと昔のことだよ」

「すごい、ここにはスターが二匹もいる！どっかでサイン会開かない？」ジャガがはしゃぐ。

「それはちよっとお」エドが困った。「困ったもので人間は表面的な現象しか見てくれないんだ。ぼくが人間語をしゃべると、ただそれだけで面白がって、ぼくがどんな馬なのか、何のためにどうして人間語をしゃべるのかまでは考えない。つまり、ぼくは見

世物になるしかない。動物奇想天外みたいなもんだね。ドラマに出て、自分が『動物の見世物』でしかないことに気付いた。人間は嫌いじゃないよ。でも人間が馬より上等だっていうのは違うと思う。ぼくは人間の見世物になるのをやめて、自分なりの生き方をしたかった。そのためにはいろんな言葉をしゃべれるのを隠さなきゃならない。今は知ってる人とか話さないことに決めてるんだ」

馬は本当に誇り高いなって思った。ネコの誇りは空回りだけど、エドのはスジが通った誇りだね。

「だけどもさあ、エドがしゃべれるのを秘密になんかできないだろ」珍しくユラちゃんが言った。「噂なんか聞きつけてマスコミが騒ぐだろ？」

「それはあつたさ」エドが笑いながら言う。「ここに来た当初は、話がわつと広がってね、テレビや雑誌が毎日みたいに来たよ。そういう人たちの前では、ぼくは絶対に馬語しかしゃべらない。人間語が全然わからないフリをするんだ。一時間もねばってれば、みんなあきらめて帰る。その程度の取材の熱意なんだね。例外はフジテレビで、ぼくの馬具に隠しマイクを仕掛けたり、馬房に小型カメラを据え付けたり、

ありとあらゆる違法取材をしたよ。馬には人権が無いんだって言ってね。あの人たちにとつて違法じゃないければ合法なんだろう」

「ニュースをそこそこきちんと報道する局と、ヒマネタ中心の局の違いだね。ボクは『経』が付く報道機関のニュースは一割しか信じない。その他の局にしても三割五分くらいしか信じてないけど」すごい！ギンタの言葉だよ。ただの心優しい旅ネコじゃなかった。

「いずれにしても人間のしてることさ。ぼくたちはヘンなとぼつちりを食わないようにしながら、楽しく過ごせればいいんじゃないのかな」ってエドが言った。

土手を登ると目の前は川！ やつたあ、千曲川だ！ 土手の下には大きな丸い石がゴロゴロしてて、その向こうに水が流れてる。思ってたより水が多いよ。水道の蛇口千本分はあるみたい。アタシは怖くなった。あの水に流されたら生きて帰れない。川に近付くのは危ない気がする。せつかくここまで来たのになあ。

「ぼくはこの土手下りられないから、みんなは先に降りてて」ってエドが言ったんで、ネコはみんな土

手の上の道に降りた。それから、どうやって川まで下りようか迷ってたら、タケチヨがユラちゃんを乗せたまま土手を駆け下りた。ユラちゃんは両手でタケチヨの首輪にしがみついて「止まってくれよーッ」って叫んでた。あれは怖いね。いつまでも犬から下りないからあーなるんだ。

ネコたちは足場を確かめながらゆっくり降りて、地面に石が転がるところまで来た。

「水を見ようよ」ギンタが嬉しそうに言ったけど、アタシはどっちかって言えば帰りたくなってた。

「あのお、水に落ちない？」って言ったのはジャガで、アタシとおんなじみたい。

「落ちようと思わなければ落ちないよ。ついておいで」ってギンタは川に近付いてく。ルドルフも怖くないらしくて、ギンタと並んで歩いてる。しようがないから、アタシはジャガと並んでオスネコたちの後を追った。後ろで声があるんで振り返ってみると、トントがユラちゃんと話してた。ユラちゃんは大きな石の横で寝転がってダラ〜とのびてる。

「川まで行こうぜ。ほら立てよ」

「オレ、ここでもいいよ。ここだって川だろ」

「水が流れるところが川。ここは河原」

「同じようなもんだ」

「おまえ、一体何しに来たんだよ。川見て、アユ見に来たんじゃないの？ 行こうぜ。水が冷たくて気持ちいいから」

「冷たかろうがヌルかろうが、オレは水が嫌いだ」

「なんだ、怖いんだ」

「怖かあないよ、苦手なだけ」

「じゃ、好きにしろ」って、トントはこっちに走ってきて「一匹だけ勝手に残ってるのもネコらしくていいけどさ」とかブツブツ言った。

水辺に先に着いたギンタは、水の中をじーっと見ながら、アタシたちに「ゆっくりソーツと来て」って言った。そこは水から少し高くなった大きな石の上で、すぐ下は深くなってる場所だった。みんなはギンタと並んで水の中を見た。目が慣れてくると、いるよ、いる、お魚がいる。同じところに止まっているかと思えば、スーと泳ぐ。けつこう速い。金魚とは全然違う。捕るのは大変そうだなあ。

「これがアユだね」ってギンタに訊いたら、
「小さくて細長いから、これはハヤだよ。アユはもっと大きくてかっこいい」んだそうだ。

「そっかー、もっと大きいんだ。クマベーおじいさんは、どうやって捕まえたんだろ。」

「ねえ、来て来て」ジャガが石の間を見ながら呼んでる。「ヘンなのがいっぱいいるよ」

面白そうだから、みんな走って行った。虫だ、見たことない虫。それも一種類じゃない。ノロノロ動くのや、ピョンピョン跳ねるのがあっちこっちにいる。アタシたちは虫を手で押さえたり、軽く噛んだりして遊んだ。とっても面白い。横を見ると、こっちに来ないはずだったユラちゃんもいっしょに遊んでる。「食っても大丈夫かな…：食ってみよう。まあ食えるな。もっと食おう」かなり夢中。

そのとき土手の上からネコの声が出た。「おーい、お前さんがた、虫が珍しいかい」サビ色のおばさんネコだった。アタシたちと目が合わないように、半分横を向いてる。ケンカしたくないしるしだ。

「こんちわー、お邪魔してまーす。この虫は食ってもいいですよねー」ユラちゃんが返事した。

「えーと、関越のサービスエリアから来ました」トントが答えた。

「どっちのサービスエリアだね？」

「どっちって…：あっちです」

「あっちじゃわからない。山を越えて来たのかね。谷を越えたのかね？」

「それなら山です。しっかりした山でした」

「山なら遠いほうのサービスエリアだ。歩いて来るのは疲れたらう」

「ええまあ。でも半分は馬に乗せてもらったから」

「馬だつて？ また山にノラ馬が出たのか。困ったもんだ。ここ何年か出なかったのに」

「いいえ、多分ノラ馬じゃないです。農協で働いてるエドっていう馬ですから」

「なんだ、エドか。エドなら安心だ。あんたたちはエドの友達？」

ギンタがシッポを上げて「あの、僕の友達にタケチヨっていう犬がいて、その犬がエドの友達で、最初はネコと犬が歩いて、途中でエドもいっしょになったんで、ですから他のネコはきのうがエドと初対面でした」って言った。

「そんなもん食べるのは子ネコだけだよ。エビでも捕ったらいいのに」って言いながら、サビ色ネコは土手を降りてきた。「こんな日なたで遊んでると脳みそが味噌汁になっちゃう。ところで、あんたたち、ケンカするかい？」って言った。

ケンカ？ この辺じゃ挨拶の代わりにケンカするのかな。そういえばサビ色ネコは頑丈な体つきしてて、どことなくチョリータスみたい。

「いや、できれば無駄な体力は使いたくないんで、僕たちが何か悪いことしたら謝ります」ギンタが丁寧に行った。

「そうかい。あんたたちは利口だ。じゃ、目を合わせるよ」サビ色ネコはアタシたちを一匹ずつキツと見た。貫禄うう。目ぢからっていうのかな、盆ゴザを見る鶴田浩二みたい。アタシたちは自然に、もう一度「こんにちは」って言った。

「あたしは、このあたりを仕切ってるドボンだよ。最近では礼儀を知らない流れネコやノラ犬が多くてね。あんたたちを一目見たときから悪いネコとは思わなかったけれど、念のために訊いてみた。悪く思わないでくれよ。で、どこから来なされた」

「あー、面倒くさいね。あんたたち、みんな仲がいいんだろ？ それなら『みんな友達』でいいじゃないか。知り合いたいきさつや順番まで聞きたかないよ。でも、あんたが律儀なのはよくわかった」

「すみません」

「でっかいオスネコが簡単に謝るんじゃない」

「すみません、いえ、どーも」

ドボンさんはギンタをジロリツと見て「で、これからどこかに行くつもり？ それとも川までピクニックかい？」

「ここが終点です。川を見てアユを見て、探しものをして、少し遊びます」

「そうかい。あたしらにとっちゃ川もアユも珍しくはないが、見たいならいくらでも見ておいで。採め事さえ起こさなければ、いつまでいたって構わないさ。ところで、さっき虫まで食べてたようだが、腹が減ってるんじゃないかね？」

そう言われて、アタシはメツチャおなががすいてるのに気付いた。だから言った。「はい、すいてます。自分の手でも足でもシッポでも食べたいくらいすいてます」

「あはは、正直だね。せつかく付いてるシツポを食うことはない。みんなおいで。死なない程度の食いはあるはずだ」ドボンさんが土手を登って歩き始めたので、アタシたちはついて行っただ。

「一宿一飯の恩義にあずかるんなら、名乗らせていただいでいいでしょうか」ユラちゃんが、ちよつとこつこつけて言う。

「おやまあ、義理堅いことで。それじゃ一匹ずつ名乗っておくれ」

「早速のお控え、ありがとうございます」

「ばか。あたしは歩いてるんだ。控えられないだろ」

「そうか、やりにくいな」

「カチチなんかどうでもいいし体裁もいらぬ。名前言うだけでいいんだ」

「わかった。んつと、オレはユラノスケです。白ネコです」

「見ればわかる。はい、次」

「ギンタです」「ジャガです」「トントです」「ルドルフって言います」「アタシはタマです」

「やればできるじゃないか。どうも人里のネコは無駄な言葉が多すぎるよ。まあ、これからあたしの家

に行くからね」ドボンさんは道の真ん中を、シツポを高く上げて、首を下げ気味にして堂々と歩いた。年季が入った歩き方。昔、旅ネコやってたのかもしれないな。村から村を渡り歩く、女傭振師ドボン……？、名前は変えてたと思うけど。

「タマ」ついでいきなりドボンさんに呼ばれた。

「はい」

「あんたはこの近くの生まれかい？」

「いえ、世田谷です。東京の」

「そうかい、それじゃあたしの見込み違いだね。いえね、あんたはあたしの娘にそっくりなんだ。さっき河原で見たとき、娘がまた悪い友達を連れてきたのかと思った」

「娘さんに？どことが似てるんですか？」

「どことがって、全部だよ。声は少し違うけど、そのほか全部だよ。おなかの下に生えてるアラビアンマウみたいな長い毛もまるで同じさ。だから、もしかしたら、このあたりの血統のネコかと思ったのさ」

「そーです！そーなんですすお。つて叫びそうになつちやっした。アタシのルーツは千曲川です。」「さあ着いた」ドボンさんが入って行っただのは、な

んていうか、とにかくお店だった。スーパーみたいでコンビニかもしれないけど、タバコ屋さんにも見える。お店の前には『大売出し』の幟が二本立ってて、最初は赤かったんだらうけど、今は茶色っぽいピンク。その横にはビールの空きケースが積んであって、クロネコヤマトの看板が出てる。こういうお店は初めて見る。

アタシたちがお店の前で止まってる、中からドボンさんが「早く入って。店の中のもの食べちゃいけないよ。ほら、真つ直ぐこちに来るんだよ！」

一列になって中に入ると、お客さんが一人いた。百五十歳くらいに見えるおじいさん。買い物カートにつかまって、やつと立ってる。ネコが六匹も歩いてるのに、ちくわとハムをじーっと見つめてて、アタシたちに気付いてない。「横顔がハリーに似てるな」ってトントが言った。

「ばあちゃん、ただいま」店の奥に向かって、大声でドボンさんが言うと、エプロンで手を拭きながら小柄なおばさんが出てきた。

「ドボン、ほんとにお前はもう、勝手なときに帰ってきて」って言いながらアタシたちを見て「またよ

そのネコ連れてきて。今日はこんなにいっぱいいるのかい。女親分のつもりだろうけど……」つて眺め回してアタシを見つけて「あら、アツタマじゃないか。よく帰ってきたね。みんなアツタマの友達かね」つて優しい目つきに変わった。

そりゃ、人間によってネコは違う名前と呼ばれるのがふつーかもしれないけど、タロのおばあちゃんならトラだし、ハナマルさんからはバナつて呼ばれるけどさあ、ネコ違いされて別の名前と呼ばれたら、どー答えればいーんだろー。

「ドボンさん、アタシはなんて言えばいいの？」小さい声で訊いたら、「適当に返事しとけば。『違います』つて言つたつて通じないから」

だからアタシは「違います」つて答えた。

そしたら、おばさんは「そうかいそうかい、久しぶりに帰って来たんだもんね。すぐになにか食べ物あげようね」つて、横にある大きな冷蔵庫を開いた。中にはパックの食べ物、信じらんないくらいたくさん入ってる。おばさんは下の段からいくつかパックを取り出して「これは三日過ぎてる。五日だね。十日か、さすがにダメかね」ブツブツ言いなが

ら、パックを二十個くらい選んだ。「こんなに売れ残りがあるなんて、まったくネコのために仕入れてるようなもんだ。賞味期限、書き換えたくなるよ」おばさんは、中身を金属のバットに移して「さあ、好きな食べなさい」ってアタシたちにくれた。

豪華版だった。コロツケ、さつまあげ、はんぺん、ポテトサラダ、エビフライ、ししゃも、ひじきの煮たの、ベーコン、アジのひらき、何でもあつた。ドボンさんが「適当に食べなよ」って言ったから、アタシたちはいつせいに食べるモードになった。ベーコンは一瞬だけ取りっこになった。

そのとき、おばさんがアタシをサッと抱き上げて、いきなり体のあっちこっち調べ始めた。「足は大丈夫、おなかも異常なし、耳の中は汚いね、ダニがいるかもしれない。お尻は、下痢はしてない。まあ合格。アツタマ、お前は一応飼いネコなんだよ。遊びに行くなどは言わないけど、遠くに行つて何日も帰つてこないのはいけないよ。お前はトロいネコなんだから、三味線屋に捕まったらどうするんだ」

ミツチャンに言われてるみたいだった。たとえネコ違いでも、アタシは謝るべきだろーなつて思った

から「ごめんなさい」って言ったんだ。そーしたら、「ちゃんとわかるんだね。さあ、食べなさい」って放してくれた。アタシはコロツケに突進した。

そのとき、おもてで犬が吠えた。「おい、中にいるのか？」ってタケチヨが言ってる。みんなは食べるのに夢中で、誰も返事しない。しょうがないな、アタシはコロツケをくわえたままタケチヨを迎えに出で行った。「おう、タマ。おいを追っかけてきたんだ。メシか？おれの分はありそう？」

「多分あるよ。入つてよ」って、タケチヨを店の奥に連れてきた。チラッと横目で見ると、さっきのおじいさんが、さっきと同じかっこうで、ちくわとハムを見つめてた。大丈夫かな？

「まあ、犬も連れてきたんだ。お前は顔が広いね。あれ、この犬、首輪してるじゃない。どこの犬だろう」って、タケチヨを引つ張り寄せて首輪をよく見て「タケチヨって書いてあるね。お前の名前はタケチヨかい？」

「はい、ぼくの名前はタケチヨです」

「賢そうな犬じゃないか。アツタマの友達にしちゃ上出来だ。ちょっと待ってなさい、別の食べ物あげ

るから」もう一度冷蔵庫を開けて、大きなパックを取り出した。「ほら、ティーボーンステーキ。賞味期限、十日以上過ぎてるけど腐つちやいない。高いんだよ、これ。どうしてこんなもの仕入れちゃったのかね」

タケチヨはきちんと正座して待つて、おばさんからステーキ肉をもらつてもすぐには食べずに「お食べ」って言われるまで我慢してた。

「えらい犬だ。飼い主がしっかりしてるんだらうよ。ネコとは大違い。ネコは待てないもんね」

「悪うござんしたね。あたしだつて好んでネコに生まれたわけじゃない」ドボンさんが唸つた。「前世で死んだとき、来世の第一志望を『犬』にしといたのに、四十九日目の配属手続きのとき、係りのアホ役人が間違えて『ネコ』のボタンを押したんだ。はつきり憶えてる。あの木っ端役人、今度会つたら許さない」

みんなが食べ終わったのを見て、ドボンさんが水飲み場に案内してくれた。お店の裏の洗い場みたいなところ。サーブিসエリアよりおいしいお水だった。「この家にはネコトイレはないよ。ウンチとオシツ

コは道の向こうの休耕田で、きちんと土をかけること。さあて、あたしは眠い。みんなも眠いだろ？物置で眠れるからついて来るかい？」

全員ドボンさんについて行つた。タケチヨは警備員もかねて、物置の前で寝るみたい。

「そうそう、エドもお昼寝だつて。農協にある自分の馬房に帰つたよ。明日迎えに来るそうだ。それから……」タケチヨは、そのあと何か言つたみたいだけど、アタシは眠くて聞けなかった。



14：明かされるルーツ

目が覚めたのは真夜中。ギンタとドボンさんが小さな声で話してた。

「それは無茶な話ですね」ギンタが言った。

「ネコだってそう思うだろ。縄文時代じゃあるまいし、銀行も郵便局も無い場所で、人間が暮らせるわけない。どんどん人が減っていった。人が減ればネコも減る」

「捨てられちゃった集落ってわけですか」

「捨てられた？きれいな言葉だね。実態は死刑宣告だよ。それも、この住人が自分たちで死刑を選んだことになってる」

「冗談でしょ」

「冗談っていえば、全部がジョークみたいなものさ。郵便局単体じゃ採算が取れないから、コンビニと郵

便局をくっつけたもんを作れ、って言ってきたんだ。

そうすれば客がたくさん来るだろうって。それができなきゃ郵便局は廃止だ。コンビニか廃止か、どっち選ぶ？って言ってきた。たくさんの客なんて、どこから来るのさ。コンビニのフランチャイズに払う上納金は、どうやって払うのさ。だから、この地区の人たちは『できません』って答えたんだよ。それしたら郵便局はあつけない廃止になって、ますます不便になって、若い人間は出てっちゃって、J Rパスも来なくなって、のどかなのどかな田舎になったわけさ。お上のやることはほんとにありがたいよ」

「ここまでメタメタだと、もう打つ手はないですね」「ジジとババだけしかいなけりや、村おこしもないからね。せめて休耕田だけでも元に戻せればとは思

うけど、ネコが手伝ってもだめだろうね。さあ、難しい話はやめよう。みんなが起きるころだ」

アタシはアクビして起き上がった。ドボンさんの話を聞いてたことはドボンさんには当然知られているはずなので、聞いてなかったふりするのもヘンだから「人間は大変でも、ネコはそれほどでもないでしょ」って言うてみた。そしたらドボンさんは、

「あのね、イエネコは人間がいないと生きていけないんだよ。食べ物も少なくなるし、寝床はなくなるし。それで、若いネコたちはどんどん人里に出てっ

てしまった。オスネコもそうさ。メスネコが少ないと面白くないんだろう。まともなオスネコが一匹もいなくなっちゃったから、仕方がないからあたしがこの辺を仕切ることになったようなもんさ。あたしだって好きで親分やってるんじゃないよ。あたしの子供たちもみんなどこかに行っちゃった。マンションに住みたいとか言うてね。でも一匹だけ残ったのがアツタマなんだ。あの子も本当はここがイヤなんだろうね。ときどき人間がいっぱいいる場所に遊びに行ってる。昔から走るのが好きな子で、田舎道をブイブイ言いながら走ってどこかに行くのさ。親

としちゃあやめさせたいけど、気持ちが変わるから放っておいてるんだ」

「ふうん、会ってみたいいな。アタシと名前も似てるし」「かなりバカな子だよ。生まれて目が開いたときから、滅多やたらと走るんだ。それも、ちゃんと前を見ないで走るもんだから、あちこちに頭をぶつけてね。人間に『アタマ注意しろ』っていつも言われてた。それでアタマ、アタマ、アツタマっていう名前になったわけ。これで大体想像がつくだろう」

このとき、他のネコ全員の目が覚めたのがわかった。ユラちゃんの耳なんか、こっちに向いてピクピク動いてる。でも、話を聞いているほうが面白いと思っただのか、それともドボンさんが怖いのかはわかんないけど、みんなタヌキしてた。

「それじゃ、ドボンさんの名前の由来は？」ってギンタが訊いた。

「ドボンと落ちたのさ」

「どこに？」

「この辺には下水なんてないのはわかるだろ？あたしが生まれたころ、この家には浄化槽もなかった。もっと説明するかい？」

「いや、あの、わかりました」

「子ネコのときだ。もう死ぬんだと思った。あたしの毛色には最適な死に場所だとも思った。そのとき偶然、あたしのおじいさんが通りかかって、家の人に子ネコが便所で大変なことになってるって知らせられて、どうにか助かったんだよ。それ以来、あたしは一度死んだんだから、もう怖いものはないって思えて、純粹にネコ風に好きなように生きるようになった。何が幸いするかわからないね。おじいさんはクマベールって名前だった。感謝してるよ」

えっ、クマベール、クマベールって言った！

「あの、あのあの、あのですね」

「なに、なになに、なんですか」ドボンさんが調子を合わせてくれた。けっこう面白いおばさんかもしれない。でも、今はそれどころじゃない。

「そーすると、ドボンさんはクマベールの孫ですか？」
「当然そうだよ」

「アタシも、アタシもクマベールの孫ですっ！」

「えっ、だってタマは世田谷のネコだろ」

「そーだけけど、アタシのおかあさんのお父さんは千曲川のネコで、クマベールなんです。おかあさんがそー

言っていました」

「そりゃ奇遇だ。じゃ、タマはあたしのイトコみたいなもんだね」

「そーです、まぎれもない真正正銘のイトコです」

アタシが感動の真っ只中にいるときに、ユラちゃんもむっくり起き上がって言った。「真正正銘のイトコっていうのは、ネコの世界じゃ怪しいなあ。おじいさんが同じでもおばあさんは違うだろうし。それに、おじいさんって言ったって、本当に直系二親等前かどうかはわからない。憶えてない世代が間に挟まってても不思議じゃないだろ。妥当な言い方をするなら、父系の傍系親族っていうのが正しいよ」

「おだまり！」ドボンさんが怒鳴った。「あんたはタヌキ寝入りしてればいいんだ。イトコだろうがハトコだろうが、マタイトコだったとしても、親戚が偶然出会って、めでたいのに変わりはない。それともナニかい、親族関係をハッキリさせないと相続でモメるとでも言うのかい！」

「すんません」

「寝てろ！」ユラちゃんはタヌキ寝入りに戻った。

「これで謎が解けた。あんたとアツタマがそっくり

でも不思議はないね。クマベール一族なんだから」

「とつても嬉しー。長野に来てイトコに会うのが夢だったんです。最初に出会ったドボンさんがそーだったなんて、ものすごく、ギャーッって叫びたいくらいうれしいー」

「この辺のネコは数が減っちゃたけど、イトコならまだいくらもあるよ。道や河原で会うネコの半分がそーだ。世田谷から来たって言えば、みんな喜んでくれるだろうよ」

それから明け方まで、クマベールについてドボンさんからいろんな話を聞いた。クマベールは遠目で見ると真っ黒いネコだったけど、実は全身サビで、黒い毛の間にチラチラと茶色っぽい毛が混ざってた。つまり、アタシとおんなじの、よくわかんない毛色だったみたいだ。体格は特に大きくはなかった。ただネコとは思えないほどガツシリしてたから、よく熊の子と間違えられたらしい。だからクマベールっていう名前になったって。

このあたりの大親分だったのは間違いないところで、一度、川向こうのネコと大喧嘩して勝ったことがあった。旅ネコや流れネコの面倒もよくみてやつ

たそうだ。でも本当はものすごく怠け者で、できれば一日中家で寝たいタイプだったらしい。別の地域のネコとトラブルになっても、なるべく話し合いで解決してた。「ケンカなんかすれば危ないし疲れるじゃん」って寝転がって言ったそうだ。それでも一度だけ抜き差しならない状況になって戦争が起きた。両軍が睨み合ってフー、ハー、ガーって脅かし合って二十分、だんだん疲れてきて全員が爆睡してしまい、なしくずしに引き分けた。この戦いを近隣のネコたちは『嗜眠戦争』って呼んでいる。そんなこんなで、クマベールは世間から頭の良い平和主義者だと思われてた。

縄張りの見回りも、自分で行くのがおっくうだったから、若いオスネコを集めて新鮮組っていうのを作って交代で巡回させて報告だけ聞いてた。これが外からは近代的な防衛組織に見えたみたいで、他の親分には大きな抑止力になって、誰も簡単には攻めて来なくなった。

クマベールはあまり外に出ず、居心地のいい場所で一匹でゴロゴロ寝てるだけだった。なかなか会えないネコだから、それが一種の神秘性を帯びて、いつ

の間にかカリスマになった。カリスマっていうことでメスネコがたくさん集まってきて、縄張りも自然と大きくなって、最盛期には小諸から上田までの河原に一大帝国を築いたっていう。

謎めいた帝王になっても、クマベ―は威張りもせず野望も持たず、ひたすら寝てた。「わざわざ苦労するより、一瞬一瞬を一番ラクチンでいたい」っていうのが口癖だったそうだ。そういった何もしないことで、名君としての地位はますます堅固になった。為政者はコマゴマ動いちゃいけないだよ。

唯一、クマベ―が喜んで足を運んだのがヤナ場川岸に座って、アユがヤナに跳び上がるのを飽きずに見ていたっていう。そして、ネコのカンなのか、アユが大量にかかるのを予知できるようになって、大漁の直前に「これから取れるぞー」って大声で吠えるようになった。漁師さんたちは「クマベ―がガオーッって鳴いたから魚が取れるぞ」ってわかるようになったし、たまに来る観光客にも『アユが取れるのを教えるクマみたいなネコ』って有名になって、一日に何匹もアユの塩焼きをもらっていたそうだ。

帝国の凋落は郵政民営化で始まった。不便な集落

魚は口から出てくれない。口からアユのシツポだけ出したクマベ―は、息ができなくなつて大暴れしているうちに千曲川にはまってしまった。それが、みんながクマベ―を見た最後だった。

ふつうに考えれば、クマベ―は新潟の海で魚の工サになつてしまつたはずだけど、その後、クマベ―を見たという情報が各地から集まつた。信濃川の河原でゴロゴロ寝てるのを見たとか、潜水を覚えて川で素潜り漁をやつたとか、とにかく話はたくさん集まつた。すごいになると、クマベ―は大陸に渡つて、ヤナ漁をロシア人に教える国際漁業指導員になつてる、とか、名前を光太夫に変えて、エルミタージュの番ネコになつた、っていうのもある。もしホントなら、ロシアにもイトコがいそうだね。

つていうのが、ドボンさんがしてくれたお話。ドボンさんはクマベ―おじいさんの若いころの娘の子供だつて。つていうことは、多分アタシのおかあさんより年上なんだろう。どこかでおかあさんに会つてるかもしれない。それを訊いてみると「クマベ―じいさんの子供はウジャウジャいたからね。子ネコ

はますます過疎化し、不景気で観光客も来なくなり、ネコの人口も少しずつ減つていった。オスネコが都市に流出したことで新鮮組も維持できなくなった。クマベ―は一日中ゴロゴロしてたけど、何も考えてなかつたわけじゃない。新しい統治システム、新しい国のカタチを考えていたんだ。

ある日、クマベ―は孫娘のドボンに言った。「縄張りが広くても面倒なだけだろ。だから、誰が親分になつても、手間をかけずに面倒みれる程度に小さくしよう。それに、次の親分はメスネコのほうがいい。オスだと領土拡大なんていう不埒なことを考えるからな。それに、今じゃあマトモなオスネコはいないし。そこでだ、おれはもう引退する。今日からお前がこの辺を仕切れ」あつけなく禅譲が成立して、ドボンさんが親分になつた。

その三日後に悲劇は起きた。ヤナ場で吠えていたクマベ―に、観光客の一人が生きてるアユを投げた。クマベ―は、以前からアユの踊り食いをしたくてたまらなかつたから、これ幸い、アユをアタマから丸呑みした。いくらなんでも無謀だった。クマベ―はアユを飲み込まず、吐き出そうにもピチピチ跳ねるはいちいち憶えてないよ。申し訳ないね」つていうことだった。アタシのおかあさんは、クマベ―おじいさんのいつごろの子どもで、どうやって世田谷まで来たんだろー。帰つたら訊いてみよう。

もうひとつ、ドボンさんの話にはクマベ―の銅像が全然出てこなかつた。あるはずなんだよね、偉いネコ、クマベ―の銅像。

「それと、おかあさんから聞いた話では、クマベ―の銅像があるつていうんですけど、どこかわかりますか？」

「銅像？ネコのかい？うーん、あるのかなあ。この集落のことなら、どの家に缶詰が何個あるかまで知ってるつもりだけど、銅像ねえ……、あれえ、もしかして、あの芸術作品のことかな」

「えっ、あるんですか？」

「違つてたらごめんよ。そうかもしれないモノは、あるといえばある」

「見に行けますか？」

「行けるさ。簡単だ。今日の夕方なら連れて行ってあげられる」

「おねがいします」

すごい。一晩でおじいさんのことがわかったし、銅像も見れるってなっちゃった。ここに来る前、調べるのは難しいと思ってた。集落の家、一軒一軒でネコを探して、ローラー作戦の聞き込みも覚悟してた。来てみたらローラーをかけるほど家はなかったけどね。それでも「クマベー知りませんか？」って訊いて歩くつもりだったんだ。なんて運がいいんだろ。前世での行いがよっぽど良かったんだろーな。

ドボンさんとの話が終わると、他のネコはタヌキ寝入りから目を覚ました。わざとらしくアクビやノビして「おはよ」って言ってる。いいタイムングで起きたフリするのはネコのマナーなんだ。それから、お水を飲んだり、物置の前で座つたり、それぞれ勝手にノロノロしてた。タケチヨはギンタに「あと、よろしく」って言って川のほうに散歩に出かけた。みんなが「来てよかった」って思ってるのがわかる。空気に酸素がたくさんある気がする。クルマの排気ガスの匂いもしない。それに、なにより静かだ。ここで一生暮らしたいかって言えばビミョーだけど、旅の目的地としてはとってもいい。アタシは物置の

お屋根に登って、きちんと正座して、千曲川のお水が流れるのを見た。クマベーおじいさんは、あのお水といっしょに流れて行ったんだ。どっかできっと生きてるよ。

「朝ごはん食べに行こう」ドボンさんがみんなを誘った。それから川の方向に「タケチヨ、ごはんだよ」って叫んだ。

お婆さんは開店の準備をした。準備していても、入り口を開けて、大売出しの幟を二本立てるだけ。驚いたのは、開店してすぐにお客さんが入ってきたこと。ハリーに横顔が似てるおじいさん。買い物カートを押しながら超スローで入ってきて、ちくわとハムを見つめ始めた。

「はいはい、ごはんだね。ほんとにネコっていうのは、呼んだって来ないのに、ごはんの時間だけは必ず来るね」お婆さんは、きのうと同じように冷蔵庫の下段からパックをたくさん出してくれた。今朝は鳥のササミもあったし、コロツケの代わりにメンチカツが出た。「おまえたち、あと三日くらいいてくれなにかねえ。この忌々しい不良在庫の片付けを手伝っておくれ。食べ物捨てるの、あたしにはできない

んだ。ネコが全部食べてくれればスッキリするよ」

タケチヨが速足で入ってきて、お婆さんの前にピタッと正座して「おはようございます」っていいねいに言った。「やっと来たね。おまえは本当に礼儀正しい。ちょっと待ってなさい」お婆さんはタケチヨ用に冷蔵ピザを三枚出してくれた。「人間はオーブンで焼くけど、犬は冷たいほうがいいだろう。食べられるかい？」

「もちろんです」タケチヨは喜んで一気に食べて、「夕飯には魚料理がいいですね」って言った。「おいしかったんだね。ネコもいいけど、おまえみたいな犬なら飼いたいよ。今の飼い主と折り合いが悪くなったらいつでもおいで。うちの犬になりなさい」「それはちよっと。ぼくはキムラさんが大好きですから」って言いながら、お婆さんの手をなめた。「そうかいそうかい、じゃあいつでもおいで。待ってるよ」

会話って、通じないほうがいいのかもしれない。両方ともハッピーになれる、っていうか、通じてると思ってる会話も、実はいつも食い違っていて、運が悪ければそのうちバレる。だからネコは「愛してる」

なんて言わないんだ。

「遅くなってごめん。豚舎の壁にスズメバチの巣があつてね」エドがお店の中に首だけ入れてネコ語で言った。

「まあまあ、エドさんまで来た。まるで動物園だ。明日あたりカバでも来るかな」お婆さんは楽しそうに言った。「今日も仕事かね？」

「はい、お邪魔します」今度は人間語。「有馬さんのブタ小屋の壁にオオスズメバチが巣を作つて、子ブタが危険なんです。知らせましたから、今ごろは駆除作業やつてるはずですよ」

♪ きのう生まれたブタの子が

ハチに刺されて名誉の戦死

ブタの遺骨はいつ帰る

きのうの夜の朝帰る

ブタの母さん 悲しがる

ユラちゃんが歌い始めて、二行目からルドルフとのデュオになった。

「あたし、その歌知らない。ねえ、なんの歌？」ジャ

ガが訊いた。

「カラオケさるが教えてくれた歌だよ。なんかの替え歌らしい」ルドルフが答えた。

「なにをニヤゴニヤゴ鳴いてるの。ごはんを食べたらおもてで遊ぶ。ネコも犬も出てって。さあさあ」アタシたちはおばさんに追い出された。

「今日は豆腐を食べさせられなかったね。賞味期限切れの豆腐がなくなったのかな」ドボンさんがエドに言った。

「豆腐は好きですよ。ただねえ、行くたびに三個ずつ食べさせられると荻生徂徠になった気分。出世の見込みはないから、ご恩返しはできませんが」エドはゆっくり歩き出して、アタシたちは後を付いて行った。

道の両側には古い家がポツポツあって、家の間には雑草がワサツと生えてる。ここは昔、花壇だったのかな。それとも小さな畑？ いろんな人間がいて、たくさんネコがいて、犬もいて、お祭りがあって、縁日が出たかもしれない…なんて想像してみた。そのくらい眠たい街なんだ。

みんなもそんな感じだったらいい。ユラちゃんが

たのも納得するなあ。

もつとそばで見たかったけど、ネコが行ったら迷惑だろうから、アタシたちは川岸に座って見た。

「人間も考えるね。一網打尽ってことだ」ギンタも感心してる。

「あたし、アユをもつとよく見たい。触ったり噛んだりしないから、あっちに行っちゃダメかなあ」ジャガがエドにねだった。

「じゃ、訊いてみようか」って、エドはヤナの人に頼んでくれた。

ヤナまでの橋を渡るのが怖かっただけで、とつても楽しかった。ヤナには小さなお池があって、生簀っというらしい。その中はお魚だらけ。千曲川のアユの半分くらいが入ってたのかもしれない。触らない約束だから、みんなツメを引っ込めてアユの匂いを嗅いだ。海のお魚とは違う匂い。でも金魚とも違う。慣れれば生でも食べれそう。おいしいだろうな。

ヤナから戻っても、まだしばらく川のそばに座ってた。うん、たしかに飽きない。ここでずーっと見ててもいいな。アタシはクマベーの孫だね。だけど、

キヨロキヨロしてるだけで、他のネコはサービスエリアでのテンションが抜けちゃったみたいになりに静かに歩いた。エドの足音とタケチヨの息遣いしか聞こえない。アタシはなんとなく、クマベーおじいさんが帰ってくれば、この街が元通りになる気がした。

「ねえ、知り合いのネコ全員でここに引っ越してこない？」ジャガが突然言った。「それでもって、ネコの国にするの」

みんな、ヒゲやシッポを動かして賛成した。でも、誰も言葉では答えない。なんて返事すればいいかわかんないから。ジャガも返事がほしかったわけじゃないと思う。

「川に行こう。ヤナのところに。アユが見れるよ」エドが少し元気に言った。

ヤナは、きのうアタシたちが虫取りして遊んだ場所の上流にあった。すごい仕掛け！ 最初、大きな木の船が川に沈んでるのかと思った。上流から泳いでくるお魚が、あららっという間に捕まっちゃう。ちよつと見てただけでも十匹くらいかかった。これは面白いわ。クマベーおじいさんがずーつと見て

ユラちゃんとトントが眠くなったって言うし、タケチヨは走り回りたいって言うから、どこか眠れて走れる場所に行くことにしたんだ。

エドとドボンさんが連れてってくれたのは、牧場の隣の原っぱ。サービスエリアのより大きいヒマワリが生えてて、根元はお昼寝にちょうどいい。ユラちゃんはずぐに眠った。トントは少し離れた場所でヒマワリを見てた。じつと見てる。アタシは近付いて「なに考えてるの？」って訊いてみた。

「マルチェロマストロヤンニとソフィアローレンの映画があつてね。ハリーとトントよりいい映画だよ。『ひまわり』っていうんだ。過ぎちゃった時間は後戻りしない」

走り回ってたジャガが、エイヤッって跳び上がった。なにかを捕まえた。赤とんぼだった。くわえたままドボンさんの前に運んで「お世話になりました」って差し出して「あと三匹捕るからね」って、また駆け出した。

トントといつしよにヒマワリの根元でお昼寝しようとする。「ヒマワリの下には死体がいっぱい埋まってる」ってトントが言う。「それ、桜の木じゃ

ない?」「うん、桜もそうかもしれないね。きれいな花は、昔の思い、出を栄養にしているのかもしれない」トントもときどき謎めくんだな。アタシは眠くなつた。

「はい、みなさん起きましょう。今日はまだ予定があるんだよ」ドボンさんがみんなを起こした。

「予定? 聞いてないよ。もう歩くのヤダから帰ろう」ユラちゃんがクビだけ持ち上げて文句を言う。

「なら、あんた一匹で帰ってな」

「タケチヨに乗ってく」

「あのなあ、おれはタクシーじゃない。ただの茶色の犬だ」

「今度カタツムリ捕ってきて頭に載せてやるから、今日は白タクでいいだろ」

「やだよ、絶対」

なんて言いながら、ドボンさんを先頭に歩き始めると、エドがいらないのに気付いた。タケチヨによれば、エドはスズメバチの具合を見に行ったそうだ。ハチがいなくなつたらアタシたちとどつかで合流するし、まだ近くの木なんかにいるようなら今日は

校門から校庭を突っ切って正面玄関に行くと、トビラはまだ開いてた。ネコ七匹と犬一匹は、それぞれ「お邪魔します」って小さな声で言つて、校舎に入つた。そのとき真正面に見えたのが、アタシが探していた『銅像』だったんだ。

ギヤーツ、なにこれ! っつて叫ぶのもできなかった。両耳が後ろに倒れて、手足のツメが全開で飛び出した。ドボンさんは見慣れているから平気だったけど、アタシたちは平気じゃない。ユラちゃんはシッポを足の間に挟んで、そうと出て行くこうとしてた。

怖いのかへんのかわかんないモノだ。大きさが一メートル半くらい動物の像で、まねき猫とタヌキの置物を足した感じ。首から上はネコで、下はタヌキに近い。右手はまねき猫みたいに、おいでおいでをして、左手は、飛び跳ねたアユをパシッと捕まえた瞬間で止まってる。顔は、まあネコっていえばネコだけど、口の両端がアルカイクスマイルで、口が半開きだからほとんどフレーメン状態。それにこのネコは座布団に座つてて、アタマから座布団まで全部が金色に塗つてあった。座布団の端に、赤い字で「クマベ」って書いてあるから、たしかにア

来られないって。「あいつらは巣を壊されても、すぐには降参しない。木や軒下に臨時政府を作つて攻撃してくる。木口小平みたいな虫だよ」ってタケチヨ。

「あんた、あたしより言うことが古いね」ドボンさんが笑つた。

途中の小川でお水を飲んで、ゆるゆる歩いて着いたのは、とつても立派で大きな学校だった。学校は世田谷にもあるから知つてるけど、こんなに広いお庭があるのは初めて見た。砂場、プール、ジャンダールジムもある。砂場を見ると反射的にオシッコしたくなるんだ。でも良識あるネコはしない。

「ここだよ」ドボンさんが言った。

「学校でしょ?」アタシが訊いた。

「そうだよ。小学校。昔は子供がたくさんいたんだ。今の生徒は十六人だけ。何年も前から廃校になるって噂があつてね、人間はみんな反対してるけど、どうなることやら。さあ、こちだよ。この時間だと生徒は全部帰つてる。ネコが入つても追いかけられない」

タシのおじいさんなんだろう。

それだけでも充分へんなのに、おなかの真ん中にチャンピオンベルトみたいな感じで時計が付いてる。今は三時五十分。

「これがクマベおじいさんの銅像?」アタシはやっどドボンさんに訊いた。

「そういうことになるね。人間の間でも、ここに飾るのに賛否両論あつてね。新入生が怖がるからやめるとか、金色でめでたいから置いとけとか、最高にシユールだから芸術だとか」

「ドボンさんは怖くないの?」

「あたしだって最初に見たときには仰天したさ。ネコも人間も、最初はみんな怖がるよ。だけど、一度置いたものを撤去するにはそれなりの正当な理由がいるとかで、ことなかれの教育委員会が放つておいてるんだよ」

「作つた人、かなりイッチャつてるね」ルドルフが的確に指摘した。

「ふだんはおとなしくていい人だったけどね。創作となると方向がズレちゃう人っているでしょ。その人、川漁師の網元のせがれで、この小学校の卒業生。

中学二年の夏休みの自由研究でコレを作ったんだ。父親が親バカで、小学校に強引に寄贈したら、その当時の図工の先生が『タリにも作れない傑作』って褒めて、ここに置いてしまった。おかげでクマベは人間の間でも伝説になったよ」

きつとそれはいいことなんだろうな。ハチ公だって銅像がなければ忘れられちゃってただろうし。どんな力タチでも、みんなに覚えてもらえるネコは幸せなんだと思う。

おかあさん、クマベの銅像はちゃんとあったよ。銅じゃなくて粘土かなんかだと思うけど、しつかり立ってたよ。キンピカだよ。



15：ドブツプルダングァー

「今日はネコは増えてないね」ドボンさんのおうちに帰るとおばさんが店番してた。お客さんは一人で、ちくわとハムを見てるおじいさんだけ。アタシはふと思った。あのおじいさんはちくわとハムを見てるのか、それとも、その場所を見てるのか。おばさんがちくわとハムを動かしたら、おじいさんについて来るのかなあ。エドに頼んで、おばさんに言ってもらおうか。

「少し早いけどごはんにするかい？」おばさんが冷蔵庫のドアを開けながら言った。「タケチヨは手羽先とロースハムでいいだろう。ネコは、さつま揚げと天ぷらと、はんぺんもあったつけ。アツタマの好きなひじきの煮付けもあるよ」アタシの前に黒いモジョモジョしたものが出てきた。これ、食べるの？

ってドボンさんを見ると「やめとけ」って目で合図された。でもなあ、せっかく出してもらったんだから：：ひと口食べたなら、あら、おいしい。アタシ、これ好きだ。「ひじきの煮付け」憶えてこ。

ごはんを食べてから、その辺をウロウロして、眠くなったんで物置で丸くなった。今寝ちゃうと夜中に起きるだろうな。そしたら、川に虫取りに行ってもいーかもしれない。歩いたから眠いんだ。眠いときは寝る。おやすみなさい。

物置の天井をカサカサ引く掻く音で目が覚めた。なんだろう、コウモリかな。屋根に誰かいるんだ。ドボンさんが起き上がって「夜中に誰だ」って唸った。そしたら、「あたしい、あたしだよお、ヘンな犬が

いて入れないよお」ってメスネコの声が返ってきた。「なんだい、アツタマじゃないか。その犬は噛まないよ。入っておいで」って言って、目を覚ましたみんなに「突っ走りネコが帰ってきたよ」って嬉しそうに言った。

「かあちゃん、ただいまあ」身軽にフワッと入ってきたのはアタシと同じくらいの小柄なネコ。「犬がいるからあびつくりしたよお。ネコも大勢いるう。いつからあ増えたのお」

「お客さんさ。怖いネコはいないよ。それにしてもお前は、いつも夜中にしか帰って来ない。とんでもない不良だ」ってドボンさん。

「だつてえ、昼間走ると暑いじゃあん。夜中ならあ制限速度おクソ食らええ、首都高バトルで走れるう」「バカ言ってるんじゃないよ。みなさん、これがきのう話した娘のアツタマだよ」

「はじめましてえ、ぶっチギリのおアツタマです」「お邪魔してます」「どもども」「よろしく」「ご無事で何より」ネコたちはそれぞれ短く挨拶した。自己紹介は朝になってから、って考えたんだろう。でもアタシはとっても気になったんで「世田谷から来た

どーしてかわかんないけどアタシたちは二匹とも、ちよつと安心したんだ。「ごこんとこが違うね」「うん、違うよおねえ」

「だけどそれ以外は、色も模様も、体の大きさも、二個のウリより似てるウリふたつ。チップとデールより似てる。まるでメスネコ版のヘッケルとジャッケル。ドボンさんやおばさんが間違えるのも無理ないな。アタシたちはいきなり仲良くなった。二匹で並んで、同じステップで歩いたり、お互いの動きを真似したりして、じゃれながら物置の前に座った。それで「どっちがアツタマでどっちがタマ？」ってみんなに訊いた。

「悪夢だな。パラレルネコだよ」トントが言う。「ありえねえ」ってユラちゃん。

それからみんなはいつべんに話し始めた。トントは「時空の連続が歪んで割れて、パラレルワールドとくつついた」って言うてる。「おねえさんが二匹になって幸せ」ってジャガが喜んでいる。ドボンさんとギンタは「どうやって見分ける？」って相談し始めた。かと思うとルドルフは「ドッペルゲンガーは

タマです。もしかしてアツタマさんもバナメイ色ですか？」って訊いちゃった。

「ばな、ばなあ？ なにそれえ」やっぱ、わかんないかな。どんな色か説明するの面倒だから「引つ掻かないでね」って言って、アツタマさんに近づいて、正面から顔を見た。

アタシたちの顔はまるで鏡。似てるなんてもんじゃない、大きさも模様もまるつきり同じ。アツタマさんも驚いて「あなたはあたし？」なんて言うてる。アタシたちは、顔以外の模様も調べたくなって、お互いの体も見比べた。すごいよ、細かい模様まで全部いつしよ。頭に付いているアンテナもおんなじだ。わあ、ドッペルゲンガー！

「もつと明るいとこで見ようよ」って二匹同時に言うてる、物置を飛び出して少し離れた街灯の下に行つた。見たたタケチヨが「タマが二匹だつ」って叫んだ。

二匹でくるくる回りながら模様を調べつこした。耳の先からシッポの先まで、おなかの毛まで見て、やっと一ヶ所違いを見つけた。おなかの縞の三本目が、アタシのほう少し薄い。これがわかったとき、

殺し合うんだよ」ってシッポを太くして怯えてるし、ユラちゃんは、ただボヘーッと口開けてた。タケチヨだけは「匂いで判断すればいいじゃない」って平気な顔。

これはまずいよ。脅かすつもりじゃなかったのに。あたしがそう思ったとき、アツタマさんもそう思った。ホントにドッペルゲンガーかもしれない。

「ごめんささしい。わかつたから静かにしてえ」アタシたちは同時に叫んだ。叫んでから二匹で顔を見合わせた。アツタマさん、なんか言うてるよ、って思つたら、タマが先に言いなよ、ってアツタマさんが思つてるのがわかつた。これじゃ両方ともしゃべれない。しゃべつたら同じこと言っちゃう。

「わかつた！ こうすればいい。タマとアツタマさんがいつしよにいる間、どっちかの鼻の先に炭を付けて黒くしとく」ギンタが提案した。

「あたし／アタシが塗る」また同じことをいつしよに言っちゃった。決定的にまずい状況になつてる。そーだ、何も言わなきゃいいんだ。で、アタシたちは黙つた。

ドボンさんはアタシたちが困つてるのがわかつた

みたい。「一番驚いてるのはこの子たちかもしれないよ。思考回路が重なっちゃってるんだろうよ。違うかい?」

「アタシたちは同時に「うん」って言った。」

「やっぱりね。一匹のネコが一匹になった真似をする呪いがかかることがある。特に毛色が同じ場合はひどい呪いになって、二匹の影が重なり合ったとき、両方の体が溶け合って、本当に一匹になっちゃうんだ。この世に同じ毛色のネコは二匹も要らないから、神様がそうするんだろうねえ」

「アタシはギヤツってなって、全身の毛が逆立って、瞳孔が最大になった。アツタマさんも同じだった。うわっ、どっちがどっちの体に入るんだろ。」

「逃れる方法はただひとつ、アツタマ、いますぐ物置に行って、炭袋に顔を突っ込んでスリスリしておいで」ドボンさんが命令した。アツタマさんは、まじりまじりに跳び上がって、そのままの勢いで物置に走り込んだ。」

「なるほどそうか。ドッペルゲンガーが殺し合う理由は、合体を避けるためなんだ。帰ったらシユレに言わなくちゃ」ルドルフは妙に納得してた。アタシ

「はあ?」一瞬、間があってルドルフがマヌケな声を出した。

「はあじゃないよ。だから、あたしが作った呪いだって言ってるんだよ」

「わあ、かあちゃあん、あたしをおだましたのぉ?」

「まじっすか」ってトント。
「だって、放っておけば二匹とも鼻を黒くしそうだったじゃないか。それじゃ意味ないだろ。どっちか片方に、すぐに炭を付けさせたかっただけさ。でも、面白かったね」

「ひどいよお、脅かすなんてえ」

「おやアツタマ、おまえは黒ネコに見えるよ。真っ黒のクロネコだ。うーん、見れば見るほどルドルフとそっくりだ」ってドボンさんは大笑いした。

「今度は僕ですか。キャンベンしてくださいよ」って、ルドルフは、なるべくアツタマさんと並ばない場所に座り直した。

結局アツタマさんは、鼻の先以外の炭は落としていいことになって「かあちゃあん、手伝ってよお」って言いながら、手を真っ黒にして炭を落とした。アタシも少しなめて落としてあげた。

は納得とかそーゆー場合じゃなくて、毛が逆立ったまま、カチカチになって待ってた。

しばらくすると、鼻先はもちろん、耳のあたりまで真っ黒になったアツタマさんが物置から出てきた。「かあちゃあん、これでいいかい?」

「ああ、上等だよ。タマがここにいる間、おまえは顔を洗っちゃいけない。もし洗ったら呪いが戻ってくるよ」ドボンさんがニコニコしながら言った。

「さあタマ、これで呪いは解けた。もう大丈夫だよ」そう言われて、気分がすーっと良くなった。たしかにアツタマさんの顔は真っ黒になったから、もうドッペルゲンガーじゃない。溶けて合わさっちゃうこともないんだ。

「いやあ、一時はどうなることかと思いましたよ」ギンタも安心したみたいで、ドボンさんに訊いた。「さっきの呪いは、このあたりで言い伝えられることですか?それとも世界のネコ全部ですか?動物全部ですか?」

ドボンさんは、寝そべってヒゲを撫でながら「さあ、どうかねえ。好きなのがいいよ。ついさっきあたしが思い付いた呪いだから」

「ああ面白かった」物置の中で、みんな適当な場所に座ってた。面白がってるドボンさんは一番高い棚の上で、軍手の束に乗ってる。位が上のネコほど高いところにいるのが決まり。サービスエリアじゃあまり守られてないけど、ここではしきたり通りだ。アタシは体がすっぽり入る竹のカゴの中に座った。「それじゃみんな、アツタマに自己紹介しておくれ。タマはいいよ。はい、その白いのから」

「白いのって、オレ?」ってユラちゃん。

「あんたは白くないのかい?それとも、物置に他に白ネコがいるかい?なんなら死んだ白ネコの霊でも呼んでやろうか?」

「いや、あの、オレはユラノスケです」

「はい次、黒いの」
「炭が付いてなくてもナチュラルに黒いルドルフです」

「はい、にせペルシャ」

「にせじゃないよ。半分の半分の半分はペルシャなんだから。ジャガだよ」かなりむくれている。

「自白するとは偉いね。半分の半分の半分以外はペ

ルシヤじゃない、ってことだ。ネコの血統なんて人間が勝手に作っただけさ。もつとかわいぐとか、もつと珍しくとか。そんなもん、生身のネコには一文の値打ちもありやしない。ネコは勝手に生まれて勝手に生きるんだから。それに大体……」

「そうです。そうだと思えます」演説が長くなりそうなので、ギンタが割って入った。「ぼくの場合は、先祖代々、自然にデカかっただけで、名前はギンタっていいいます」

「デカイネコはいいねえ。次、チャトラ」
「トントです」

「あんたはものわかりがいい。名前だけでいいんだ。それで、外にいる犬は？」

「タケチヨだよ」って声が聞こえた。

「あの犬はいいヤツだ。あたしが親分だって、ちゃんと知ってる。奇特な犬だね。さあて、アツタマは全員の名前憶えただろうね」

「たぶらん。あたしい、アツタマがあよくないからあ、憶えてえないかもおしんなあいい」

「物覚えが悪いのは昔からだけど、アツタマ、お前のしゃべり方、ますますひどくなってるよ。その小

で、長野のことなら全部知ってるって言った。

「で、山を越えたサービスエリアでは、何か面白いこと起きてる？」ってアツタマたちに訊いた。

面白いこと？なんだろ。

「そりゃスーパーキャットの一件でしょ、やつぱり」
ユラちゃんが即座に答えた。やだなあ、アツタマのことだ。

「いえね、このタマが最初に来たときのことなんです……」ってギンタが話し出した。

ユラちゃんがしゃべってたらカラスのレポートより尾ひれが付いてただろうけど、ギンタだから、おおむねノンフィクションで話は進んだ。性悪犬の真ん中にアツタマが飛び込んで意味不明のタン力をきったところで、アツタマさんが叫んだ。

「タマすごいイノシシ五段目」

「どーも」アツタマは軽く会釈した。記憶喪失だったっていう言い訳には、もう飽きたんだ。

「あたし、その話知ってる照る日も降る日も農家は必死。そのあと建物が炎上したんだよね米沢牛のステーキ」

「炎上なんかしてないよ。それ、カラスが広めた噂話」

さい字をもう少し減らせないかね」

「こうやってえ、しゃべんないとお、あたしい、余計なことをお、言っちゃうんだあ」

「余計なこと言ってもいいから減らしなさい」

「わかったタヌキの寝小便。これでいいかい貝ガラ虫」今度はものすごい早口になった。同じネコとは思えない。

「あたしのおギアわあ二速なのよお。ローとおトツプしかあないのよお」

「いきなりシフトダウンしなくていいよ。ずっとトツプでしゃべりな。小さい字がないほうが、いくらかマシだ」

「じゃそつするスルメの目」

ドボンさんは、生まれてからずっとこの集落にいるんだって。山のほうも谷のほうもサービスエリアには行ったことがないんだってさ。自分は『地回りの女親分』だから「もし留守にしてる間に何かあったらクマベーに申し訳ないだろ」が、どこにも出かけない理由なんだ。でも、いろんなネコが遊びに来るし、アツタマさんから外の世界のこと聞いてるん

「ええ？あたしちゃんと犬から聞いた板の間は六畳です」

アツタマさんは、そのとき谷のほうのサービスエリアにいて、その辺をウロウロしてたタチのいい野良犬が話してくれたんだって。その犬はシェパードみたいな体つきだけポインターみたいに白地に黒のポツポツ模様。

「それはダイフクっていう犬だ」タケチヨが外から言った。「ダイフクにはおれが話したんだ。ごめん」

なーによ、カラスから聞いて面白がってただけじゃなくて、タケチヨはあっちこっちに話して拡大再生産してたんだ。まあ、今となっては文句言う気もないけどさ。

「ね、炎上はカラスが言い出して、タケチヨが言いふらしたガセなんだよ」ってギンタ。

「なんだあ、避難ネコが来ると思って食べ物集めて待ってたのに二階の女が気にかかる。困ったときは助け合いいの一番で飛びましょう」

隣のサービスエリアのネコも気のいい連中みたいだ。いつかお礼言わなきゃ。

「ごめんね、心配させちゃって」とにかくアツタマ

さんには謝った。

「いいのいいの野に咲く花は曼珠沙華。でも、そのときあたしはネコ捕りに遭って、捕まりそうになつたタカがハトを生む」

「ネコ捕り？」一瞬、全員が身構えた。

つまり、こういうことらしい。隣のサービスエリアで大騒動を起こしたネコたちは、いずれ人間に追つ払われて亡命ネコになるだろうから、ここに避難所を作っておこうって、谷のほうのネコたちはすぐに活動を開始した。第一分隊は寢床の確保、第二分隊は食糧の備蓄って決めて、アツタマさんは第二分隊だった。いつもはなるべく人目につかないようにそーっとやってる食べ物探しだけど、非常時だからおおっぴらに、どんな人間にも「食べ物おくれ」って頼んで回った。おかげでかなり食糧が集まった夕方遅く、その事件が起きた。

人間がけっこう親切に食べ物くれるので、アツタマさんに油断ができた。高校生くらいの女の子に「なんかくれ」って言って、伸び上がって手をチョロつとなめたのがいけなかった。女の人はネコ捕りだったんだ。そして、どうしてだかアツタマさんの

名前を知つてた。アツタマさんが手をなめたとたん、

ネコ捕りはこつちを見て「アツタマ」って言ったんだって。自分の名前が呼ばれたんで、反射的に「はい」って返事したら、いきなり飛び掛かれて捕まりそうになった。ここで捕まったら三味線の皮になっちゃう。アツタマさんはスルツと逃げて、少し行つて立ち止まった。ふつうの人間はネコが手の届かないところまで逃げれば、まず追いかけてこない。でもネコ捕りは猛ダッシュで走ってきて、何だかわケのわかんないことを叫んだ。アツタマさんは逃げた。どんどん逃げた。ネコ捕りはよっぽどアツタマさんを気に入ったのか、いくらでも追っかけてくる。サービスエリアの建物の周り、駐車場、どこに逃げても付いてくる。アツタマさんは本格的に怖くなって、サービスエリアの敷地を出て裏の山に逃げ込んだ。

あたりはもう薄暗くなつてた。ネコ捕りは少し山に入つたところで立ち止まった。そして、どうしてだかネコ捕りは泣いてた。泣きながらアツタマさんに言った。タマ、タマ、ミッチャンだよ。ごめんねごめんね。そんなに自由がいいんならもう追いかけて

ないよ。クルマから出たのに気付かなくて、本当にゴメンね。元気で暮らすんだよ。怪我しちゃダメだよ。病気もしちゃいけないよ。さよなら。って言って、ワーツって泣きながらしゃがみ込んだ。

アタシは黙って聞いてた。なんにも言いたくなかった。



16：子ネコの好奇心

朝ごはんはパスしたんだ。物置で寝てるほうがよかった。ギンタが「僕も食べたくない」って、いっしょにいてくれた。ドボンさんが大きなざつま揚げを「食べなさい」って持って来てくれた。

「もう帰れないかな」ってアタシが言うと、ギンタは「帰れるさ、絶対帰れる」って言った。なんでこうなるんだろう。ミツチャーン、怒ってるだろう。な……会いたいよお。世田谷に帰りたいよお。帰りたいよお……アタシはそのまま眠っちゃったみたい。夢の中ではパパのクルマに乗ってた。すぐくおとなしく乗ってた。

「ギンター、おーい、ギンター」ルドルフが大声で呼びながら物置に飛び込んできた。「ちよつと来て。

たよ。ユラちゃんが飛びかかる構えで待ってるんだ。これじゃ怖くて降りられないよ。

「ユラ、やめろよ。このカラス、ネコ語話してるぜ。何か用があるんだろう」トントがユラちゃんに体当たりして後ろに下がらせて「ほら、誰も引つ掻かないし喰い付かないよ」って言うと、カラスは警戒しながらそつと着陸した。

「ボク、カンタ。ヨイコノカラス」

「なんだ、カンタか。黒いから全部同じに見える。「カンタ、デンポーヤサン、ハジメマシタ。オイソギノヨージワ、カンタニオマカセ。イジヨウ、コマーシャル」

「なんだよ、コマーシャル言いに来ただけ？」ギンタは引き返そうとしている。

「チャウチャウ。デンポーダヨ。ギンタアテ。デンブン『ミンナスダカエレ、ダンラク、チヨロー』。キイタカ？」

「聞いた。たしかに聞いた。いつ長老がそう言ったの？」

「サツキ、エート、サツキダ」って、カンタはいきなり離陸して山のほうに飛んで行っちゃった。

すぐ来て。ヘンなのが飛んでる」

ギンタは走って出てった。よくわかんないけどアタシもいっしょに走って出た。ネコたちとタケチヨがお店の前に集まって、川のほうの空を見てる。「また来るぞ」ってトントが言ったとき、川のほうの空に黒い鳥が見えた。カラスだ。何か言いながら飛んでる。よく聞くと「ギンタイルカ、ギンタデテコイ」ってネコ語で言ってる。

「おーい、ここだよ」ギンタが叫んだ。そしたらカラスは急降下してきて、アタシたちの近くに着陸しかけて、急にやめて、地上二メートルくらいのところでホバリングし始めた。

「シロネコ、コワイ」カラスのホバリングなんて初めて見る、って思っ、カラスの真下を見てわかっ

「なんだらうね。わざわざ電報打ってくるなんて、何かあったのかな」ってギンタ。

「呼ばれてるなら帰らなきゃ。また来ればいいよ」ってジャガ。

それから全員がいろんなことを言って、カラスの陰謀説が浮上した。ほんとは全部ウソで、ネコが大あわてで帰ってみると、サービスエリアの屋根にカラスがたくさんいて、指差して笑うんじゃないか、っていう超被害妄想な推測。そうなのかな？

「とにかく急いで帰ってみないか」タケチヨが一番順当な提案をした。ドボンさんも「そのほうがいい」って言うし、アツタマさんは「いったん帰ればレバ刺しうまいが食用禁止」だった。

ネコには帰り支度なんてないから、そのまま歩き出そうとしたとき、向こうからエドが鼻歌まじりで歩いてきて「どこ行くの？」って訊いた。みんながいっせいに説明しかけるとタケチヨが「急いでサービスエリアに帰ることになった」って答えた。そうだよ、事情の説明は後からでもいいんだ。

「じゃ、乗せてくよ。ちよつと待ってて」って、お店に入っ、おばさんに人間語で「農協からの連絡

です。有馬さんとこの蜂の巣、壊しましたけど、ハチがまだ群れています。群れは少しずつ移動して、ここに来るかもしれません。オオスズメバチで危険です。見かけたら農協にご連絡を」

「あらあら大変だね。知らせてくれてありがとうよ。あんたは刺されなかったの？」

「ええ、先行脚質なので逃げ足は速いですから」

「それじゃネコにも言っとかなきゃ。どこにいるかな…ああ、道に並んでる」

「遊びに来たネコは、これから帰るそうです」

「なんで？来たばかりでしょう？」

エドがギンタに「どうして帰るのさ？」って訊いたので、ギンタはカラスの電報が来たことを話した。「ネコが言うには、なんでもカラスの電報屋が来て、帰って来いと言われたそうです」

「へえ、ネコの世界ではカラスが電報配達なのかい。カラスの電報なら、電報用紙は熊野さんの誓紙かね？」

おばさんはきつと三枚起請を聞いたんだろうな。誰のかな。志ん朝さんのなら最高だけど。

「いや、さすがにそれはないと思います。ところで、

できればばくのおなかの周りにロープを巻いてくれませんか？三重くらいにしてももらえれば助かります」

「どこかで海老結びの練習でもするのかい？」

「いいえ、ネコの手綱代わりになります。六匹乗せて走るんで、つかまる場所を作っておかないと落馬するかもしれないから」

「なるほどね。ちょっと待ってて」って、おばさんは店の奥から太めのロープを持ってきてエドのおなかに巻いてくれた。

「はい、ネコたち乗ってごらん」

アタシたちはエドの背中に飛び乗って、ロープに手のツメを引っ掛けた。ユラちゃんも、何か文句を言いながらだけエドの背中によじ登ってきた。

「おや、アツタマ、おまえも行くんだね」っておばさんが言った。道路にいたアツタマさんが「行かないよ伊予は愛媛でみかんの国」って叫んだ。

おばさんはアタシとアツタマさんを何度も見比べて「同じネコが二匹に見える。ついに目に来たかね、今年の夏は暑かったから。奥で少し休もう」ってフラフラ店に入っちゃった。アタシたちはおばさんの

背中に「お世話になりました」「ごちそうさまでした」「また来ます」その他いろいろ、お礼を言った。ドボンさんとアツタマさんにも「サービスエリアに遊びに来てください」「タコヤキごちそうしますよ」「いつでも歓迎します」などなど、口々に言ったら、「ゴチャゴチャ言わない！『ありがとう』だけでいいんだ」ってニコニコ笑って怒られた。

エドはすぐく速かった。山道もぐんぐん登った。タケチヨも頑張つてついて来たけど、半分ぐらいのところまで「オレも乗せてくれ〜」って悲鳴を上げた。「犬は鎖骨がないからロープにつかまれないだろ」ってユラちゃんに言われて「そりゃそうだが、おまえに言われたくないよ。もう絶対に乗せてやらないから」っていう声がだんだん遠くなったので、後ろを見ると、草むらにダウンしてるタケチヨが見えた。

「どうするの？」アタシはエドに訊いた。

「あれでも犬だよ、追跡は慣れてるだろう。こっちはノンストップだ」なんだかますます速くなった。「あのさあ、さっきから両方の耳が痛痒いんだけど、耳にツメ立ててアタマの上に座ってるネコ、せめて

首まで降りてくれないかな。あんまり痒すぎるとアタマ振っちゃうよ。そうしたら落ちるよ」エドがたてがみをゾクゾクさせながらユラちゃんに言った。

「これがオレの騎乗スタイルだよ。背中に負担をまったくかけない究極のモンキー乗り。モスラに乗ってるピーナッツ」

「その分、耳が痒いんだけどな」

「がまんがまん」

「ずっとがまんしてて、もうダメだから頼んでるんだ。ちよつとアタマを振ってみようかね」エドはゆっくりアタマを左右に振った。ユラちゃんは驚いてエドの背中まで降りてきた。

往きは半分歩いたから夜中から朝までかかった道のりが、帰りは一時間ちよつとだった。さすがに馬だね。蒙古からペルシャまで攻めて行けたのもわかる。

エドは、あまり人目につきたくないって、サービスエリアまでは来なかった。タケチヨの家の近くで、「また会おうね」って帰って行った。ネコ六匹は一列になってサービスエリアに急いだ、って言っても、

いつもよりちよつと速めに歩いただけ。

サービスエリアの建物が見えたとき、アタシはなんだか安心した気分になってた。「おうちに帰ってきた」みたいな感じ。おうちなのかなあ、ここが。

寝るのや食べるのは後にして、まず長老に会いに林に行くと、長老、シュレ、シナモンさんが寝転がって待ってた。

「呼び戻して悪かった。だが緊急事態発生じやよつて。ネコの手も借りたいほど忙しくなったのじや」長老がヒマそうに言う。

「古来から生物が掻き消える怪奇現象は多々認められており、その大多数が科学では説明のつかない失踪事件として記録されておりますが、今般、ニヤニランの息子『パ』が過去の事例と類似の事象に遭遇したと推測されます」

「だから一体どうしたんですか？」ギンタが言う。「パがいなくなっちゃたのよ」シナモンさんが正確に要約した。

「おとどの夕方じやった。ニヤニランがニヤニラに行ってる間、ムラタがピポパを遊ばせておつた。草っぱらでカン蹴りしてたと聞いておる。ムラタが

鬼で、ピポパは草むらから飛び出してはカンを蹴っていたそうじや。ところがいつの間にかパが現れなくなり、ムラタは、きつと巧妙に隠れておつて、いつか突進して来るじやろうと考え、あまり気にせんかったという」

「でもね、あんまり長い間出て来ないので、ムラタもちよつと心配になって、タイムって言ってパを探したんだけど、どこにも見つからなかったっていうの。それからみんなで手分けして探してるのに、どこにもいないのよ」

「シナモンは軽度の鬱状態と診断します。ムラタには焦燥感から来る重度の躁鬱状態が認められます」
「なんと、ワシまで走り回ったのじやぞ。ミツチャン番の二匹はシフトから外せんから捜索隊も組めん。それで呼び戻したわけじや」

もうミツチャン番はいーんだけどな。どうも言い出しにくいよ。

「わかりました。すぐに探し始めます。もうすぐタケチヨも帰ってくるはずなので、匂いを追いかけてもらいましょう」ってギンタ。

「おお、それはいい。ペロが建物の裏で指揮しとる。

すぐに行つて助けてやれ」

「あの一、長老、ミツチャンはもう来ないと思うんで、見張りはやめてもいいです」アタシはやつと言つた。

「どういふことじや？ ようわからんが理由は後で聞こう。タマも探しておくれ」

「はい」って、千曲川組のネコたちはサービスエリアの建物に走つた。走つてるとシナモンさんがアタシの横に並んで「蔵小路屋のサイトが復活してるわよ」って小さな声で言つた。えっ、ほんと？

それから夕方まで、ネコ全員でパを探したんだ。最初は各自勝手に探し回つて、それじゃダメだつてギンタが気付いて、全体をエリアに分けて探した。特にサービスエリア外側の、林や土手のあたりではネコが横一列になつて歩いて探したし、子ネコが入り込みそうな溝や土管には、体が小さいアタシとジャガがもぐつてみた。

ムラタネコは気の毒なくらいアセつて「おれのせいだ。ちゃんと見てればよかつたなあ。あの子に何かあつたら生きてられない」なんてずーつと言いながら走り回つて。でもニヤニランさんはそれほ

どでもなくて「パはまんざらバカでもないから、死ぬようなことはしませんよ」って土管の家にいた。母ネコつてすごいね。

タケチヨが帰ってきたのは夕方ころ。「ネコが移つちやたのかな。休んでたらぐっすり寝ちまつた」って言いながらのんきに帰つてきた。だけどギンタから話を聞くと目つきが変わつた。犬だね、やっぱり。「よし、オレに任せろ」って一声吠えて、おとどのカン蹴りの場所から匂いをかぎ始めた。

「雨が降つてないから匂いは残つてるよ。紛らわしいからピトポをウロチヨロさせないでくれ」かなり頼もしい。アタシたちはそーつとタケチヨの後をついて行つた。

タケチヨは匂いのルートを追つて、サービスエリアの建物の前を人間をかき分けながら横切つた。犬の後ろを十匹近いネコがついて歩く光景は、人間にはめつちや異様に見えたはず。それから、裏の通用口から外に出て、林の横の道を進んで、右に曲がつて崖を降りた。ユラちゃんが「もしかして、ヤバイな」って言つた。

「見つけた！ ここにいるよ」タケチヨが見つめる先

に、パがおなかを出して寝てた。

ムラタネコが突進して、パを揺り起こそうとしたけど、小さいネコは動かない。「おい、息はあるか？」ギンタが訊いた。「起きないよ、起きないよお。目を覚ましてくれよお」ムラタネコは半狂乱でパの体のあちこちを鼻で押ししてる。シユレがパの鼻に自分の鼻を近づけて、

「生命反応はあります。バイタル正常」それから心臓の音を聴いて「脈拍異常なし。つまり睡眠中と思われませう」

それを聞いたムラタは、思いつ切り嬉しくなったらしくて、垂直に飛び上がったたり近くの木でツメを研いだり、足で地面を掘ったりした。

「えーとさあ、原因は多分オレじゃないかと…」ユラちゃんが半分逃げる用意をしながらつぶやいた。「パにあんまり訊かれたんで、イヌハツカの場合所教えちゃったんだよ」

ネコ最速の動きでムラタネコがユラちゃんに飛びかかった。「てめー、このー、許さねえぞ」本気だったよ。めちやめちやに喰いついて、足でネコキックして、ツメ全開の手で引っ掻いてる。ユラちゃんは

どうにか逃げようとしてるけど、マジ本気のムラタネコには敵わない。

「やめーいつ、ばか者ども」長老の一喝でムラタは正気に返ったみたい。喰いついてた口を離して、キックもやめて、すっと立ち上がった。ユラちゃんは今がチャンスとシッポを一番下まで下げて中腰で逃げ出そうとした。

「逃げるな！ どアホウ」また長老。「二匹とも道端に座っておれ」って命令して、「ギンタ、パをニヤニランのところまで運びなさい」って言いつけた。

ギンタはパの襟首をそっとくわえて持ち上げて「生後三カ月の子ネコは重いね」ってモゴモゴ言いながら道を引き返し始めた。アタシたちはギンタといっしょに帰ろうとした。ムラタとユラちゃんもついて来ようとした瞬間、長老が静かに言ったんだ。

「二匹は来なくていい。そこに座っていなさい。ムラタ、お前はユラノスケを殺してもいいぞ。だが、殺した後、自分がどんな気持ちになるか想像しろ。後味がいいと思うなら殺せ。ユラノスケ、お前は殺される。万が一殺されなかったら、どうしてこうなったのか、自分の生き様から考えろ。さあ、みんな帰

ろう」

「長老、かつこよかったね」ジャガが内緒話でアタシに言った。アタシもそう思ってたところ。指令電波だの黒ネコのお告げだの、ワケわかんないことばかりパーパー言うボケた年寄りネコじゃなかった。まあそーだよねえ。群れにならないネコの群れを、なんとなくでもまとめるには、見てくれの貫禄だけじゃ無理なもの。

ムラタネコはニヤニランさんのところにパを連れて帰った。パは夜中に目が覚めて「おなかやすいた」って大騒ぎしたってさ。

アタシは眠かった。朝、ドボンさんの家を出発して、ここに着いたと思ったらネコ探して歩き回って、お昼寝してるひまなかなかったからだ。もちろんおなかもすいてたけど、それ以上に眠くて目を開けてらんない。だからプラスチックの箱に入って丸くなった。すぐにギンタも入ってきて、アタシの隣で丸くなった。

「ユラちゃん殺されちゃったかな」って言ったら「今

ごろ、ムラタに傷の手当てしてもらってるよ」って言った。そうだよね。

ユラちゃんは夜中ごろ帰ってきて「あーあ」って言っただけで、アタシたちの隣で丸くなった。

よっぽど疲れてたんだと思う。アタシたちは三匹揃って寝坊した。ペロが起こしに来てくれて、やっと目が覚めたんだ。お日様は真ん中よりも西に傾いてた。

「ニヤニランが来てくれて言ってるよ」

ペロの言葉にユラちゃんはギクツとした。「オレ行かないから。よろしくって伝えてよ」

「どうしてさ。みんなに来てもらいたいって、食べ物用意してるのに」

「行こうよ。ユラは今日行かないと、一生行けなくなるぞ」ってギンタが言ったら、ユラちゃんは意外と素直に「そうかもしれないな」って立ち上がった。

建物の周りを大回りして、サービスエリアの敷地の端を歩いてニヤニランさんの家に行った。歩いてる間中、ユラちゃんは小さな声でなにか歌ってた。よく聴くと、

♪ ドナドナドーナドオナー

って歌ってた。ユラちゃんには一番似合わない歌だ。ピポパは絶対調に元気だった。またカン蹴りやってた。鬼は二匹いて、ムラタネコとトント。長老の提案で『一分ルール』っていうのを作ってたんだって。草むらに隠れて突然飛び出すのはいいけど、一分以上出て来なかったネコは自動的に鬼になる。子ネコの失踪防止のために考えたんだらうけど、一番喜んでるのは子ネコたち。ゲームがスピーディーになつてスリル満点だから。

ニヤニランさんとジャガが、タコヤキとか焼き鳥とか、ジャガバタのカケラとか、いろんな食べ物をおくわえて来てた。この二匹のニヤニラ遂行能力はかなり強力。狙った人間からは必ず何かもらってくる。ジャガが封を開けてないカップさえびせんをくわえてきたのには驚いたよ。売店でギツたんじゃなくて、ちゃんと人間からもらったみたい。やつぱ、ネコは学識じゃなくて愛嬌だろーか。

「みなさん、本当にご迷惑をおかけしました。珍しいもない食べ物ですが、どうか食べてください。子

シナモンさんは大きなゲソ焼きを食いちぎるか丸飲みするかで悩んだ。なかなか千切れないので丸飲みすると喉につっかえる。あわてて口から出して、食い切ろうとしても切れない、の繰り返し。あと三十回くらいやればゲソは柔らかくなるかもしれない。アタシは近付いて話しかけた。

「お忙しいところどもも。きのう言ってた蔵小路屋のサイトの話、ホントですか？」

「これ、大きすぎるわ。ダイオウイカのゲソかもしれない。ちよつと待ってね、どうにかして食べるから。臼歯でもなかなか噛み切れないのよ」完全に座り込んで、ゲソを横にくわえて奥歯で噛んでる。しばらく見てたら、やつと半分に千切れた。

「お待ちどうさま。やつと飲み込めた。もつと小さいゲソにしとけばよかった。それでなんだっけ？蔵小路屋のサイトだったわね。おとこの昼間、ハナマルさんがお留守だったので、ちよつとアクセスしてみたの。ちゃんと開けたわよ。画面の上と下にクマ笹みたいのがゴッソリ描いてあるサイトでしょ？」

「それぞれ。葉っぱが多すぎるでしょ？画像編集フ

ネコたちにはよく言つとききました。『好奇心のままに突っ走るのは極左冒険主義以外の何物でもない。何かする前に、他のネコの迷惑も考えなさい』って一晩中言い聞かせましたから、もう大丈夫だと思えます」

「耳が痛いよ」ユラちゃんが下を向いて言った。

「きのうオレが噛んだところ、まだ痛いかな？」ムラタネコが心配してる。

「それはもう痛くない、大丈夫だよ。違う風に耳が痛いんだ」

アタシたちはニヤニランさんに、ニヤニラの戦利品をご馳走になった。ドボンさんのおばさんが出してくれた賞味期限切れの食べ物もおいしかったけど、サーブスエリアの食べ物はソウルフードっていうか、すっかり慣れてる味で、どこか落ち着く感じがする。タコヤキ二個と焼き鳥を半分食べた。

ピポパは自分たちで袋を破いて、カップさえびせんをすさまじい勢いで食べてた。「ドライキャットフードってこんな味なんだろな」「きつとそーだと思わ」「お腹の中でふくれるね」とつても気に入ったみたい。

ソフトが面白くなって、ミツチャンが何回も重ね張りしたからなんだ。それで、中身読んだ？」

「いいえ、トップページ見ただけ。ハナマルさんが帰って来そうだったから」

「じゃ、アタシ、今夜見てみる。だけど、どうやって蔵小路屋サイトを探したの？」

「ブラウザの閲覧履歴、ハナマルさんがきちんと消してると思う？タマがやってるの見て面白そうだったから、ここんとこヒマがあるとコンピュータで遊んでるの。ビルゲイツさんのルールがわかれば簡単なのね」

そーか、最初にハナマルさんの部屋に行つたとき、シナモンさんはタヌキ寝入りだったんだ。

「そうだよ。ネコにもわかる程度の論理性だよ。早くサイト見たいな」

「私もヒマなら行くからね。千曲川はどうだった？アユはいた？」

「うん、楽しかったけど・・・」

って、クマベーの銅像の話や、女親分ドボンさんのこと、しゃべる馬エドのこと、それからドッペルゲンガーみたいなアツタマさんと、アツタマさんが

遭遇したネコ捕りミツチャンのことを話した。

「それじゃ、ミツチャンは隣のサーブスエリアで探してた、ってどういうこと？」

「どーやらそーみたい。アタシはあきらめられちゃってるかもしれない」

「もしそうなら。あなた、どうする気？」

「わかんないよ。どーすればいい？」

「ネコがコンピュータ使えるの、ばらすしかないかもね。サイトに『ご要望・ご意見』みたいなのがあれば、そこからメールするとか」

「それしかないよね。だけどね、シナモンさん……」

「ん？」

「……アタシ、もしかして帰りたくないのかもしれないんだ」

「どうして？ 飼いネコが家に帰るのは当たり前でしょ？」

「そーだけどさー。たしかにここの生活は厳しいよ。でも、友達いっぱいいるし、楽しいし……」

「わからなくはないけど、あなたバカだわ。好んでノラになるのは世間知らずの証拠よ」

前にもそんなこと言われたことあったっけ。マサ

に言ってるんだろ。

モンモンとしながら時間が経った。どんな姿勢で寝転がっても気持ちよくない。ギンタが「どうかした？」って訊いてくれた。うまく言えそうもないんで「大丈夫だよ」って答えた。

時間って伸び縮みするね。おととい、ヤナに行つてクマベエ像を見た日は、一日があつという間に過ぎた。今日はお日様が沈むのもゆっくり。全部がゆっくり。ずーっと今日みたいなら、アタシはものすごく長生きできそう。だけどやだなあ、こんな気分が続くなら。そーか、ネコが困つてるとき、そのネコは光速に極めて近いスピードで移動してるのかもしれない。アインシュタインさんが、そんなこと言ってた。もし世田谷に帰れたら、今度こそきちんと『場の理論』を勉強しよう。いつも途中で放り出してたから。

アタシはまた眠っちゃったみたい。

ネコ、そうだ、マサネコだ。今ごろどーしてるんだろー。ザーマスに復讐できたかな。川崎に帰れたかな？

「とにかく、サイトを見てから決めればいいじゃない。帰るか帰らないかはあなたの自由よ」

なんだか混乱してるんだ。これなら、なんにもわからないで、ただ待つてるときのほうがラクだった。待つてると流されてることだもんね。今、アタシは決めなきやいけない。いろんな事情がわかつたし、アタシが何かすれば問題は解決するかもしれないところまで来ちゃつて。もちろん、なんにもしないでものままズルズルっていうのも、ひとつの『決める』だよ。もつと言えば、なんにも決めきれなくて、ただ流されるのもアリかもしれないけど、それって、ものすごく重たい『流され』になりそう。一生迷うなんて、ネコにはできないよ。

蔵小路屋サイトを見るの、とつても怖くなつてきた。前はあんなに見たかつたのに。今夜見なきやダメかなあ。あの装飾過剰のトップページ、見たいけど見たくない。わかつてくれる？ つて、アタシ誰



17：馬券の当てかた

目が覚めたのは十時ごろだと思う。アタシはまだ迷ってる。サイトなんか見ないほうがいいよね、って思うし、今夜見なきゃ明日も見ないよ、って片方では思うんだ。一瞬、このまま朝までタヌキ寝入りしよう、とも考えたけど、気がついたら箱から出て歩いてた。ハナマルさんの部屋に行こうとしてた。えーい、決めた！サイトをみるぞ。メールも送ろう。ヤケクソ？そーかもしれないなあ。でもいーんだ。ヤケクソで決めようと熟考熟慮で決めようと、結果はどっちみちおんなじだから。

♪ 義理と人情を秤にかけりゃ

義理が重たいこの世界

アタシは小声で歌ってた。

なあ。

トップページにはいつものキャッチコピーの他に『ホームページのトラブルのお詫び』っていうのがあった。これだね、消えちゃった言い訳は。

リンクで飛んで読んでみると、契約してたレンタルサーバーとケンカして、全部ストップされちゃったんだって。よほどのことやったんだろーね。どんな喧嘩だったんだろー。カッチャンなら知ってるかな。なにしろ自称ケンカの専門家だから。

その次に、ミッチャンが気取って書いてる『味噌蔵だより』に行った。ああよかった、ミッチャンは元気みたい。きのう更新してた。ええーっ！なんだこれ？玄関の前でマサネコが座ってる写真。ピシッと正座して、ちよつと横向いてポーズを決めている。文章を読んでみよう。

「涼しい風が立ち始め、世田谷にも秋が近付いて来ました。冷やし中華ばかり食べていた私も、そろそろ味噌田楽が食べたくなってきた今日この頃。味噌田楽といえば関東風味噌が定番と思われるかもしれませんが…（ここから京味噌の田楽の話なので略）…とところで、私の愛猫タマが長野山中に失踪して

排気口から建物に入るのは三回目。簡単に入れたよ。ハナマルさんの机は前に来たときより散らかってて、座る場所を探すのに苦労した。CDとメモ帳の上にツメを立てないようにして、どうにか座った。コンピューターを起動してブラウザを開ける。気のどっかにあるウジウジを押し退けてURLを打ち込んでリターン。出た、出たよ、京風味噌の蔵小路屋。このグラフィック、アタシが見てる前でミッチャンが作ったんだ。最初は葉っぱが上下だけじゃなく左右も取り囲んで、葉っぱには赤や黄色のボンボンがキラキラ付いてて、どう見てもパンダのクリスマスにしか見えなかった。結局、ボンボンを外して左右の葉っぱも取って、その分、上下の葉っぱを倍量にした。このページ、おかしいけど懐かしい

から二ヶ月以上。元気に暮らしているのでしょうか。今でも毎朝、ベッドの足元を探してしまいます。タマが寝ていた場所なので、もしかしてタマがいるかな、って。そんな、ちよつとブルーな私ですが、今、ある猫に助けってもらっています。写真の猫です。タマがいなくなったの同時に我が家にやってきました。私たちはこの猫をオヤブンと呼んでいます。面白い猫なんですよ。呼んでも絶対に家の中には入ってきません。雨が降っても外にいます。ご飯もタマの食器だと食べず、別の食器からは喜んで食べてくれます。なんだか『タマが帰ってくるまで、俺が少しだけ代わりになってやるよ』と言っているようです。そんなことあるわけないですよ。私の思い込みですよね」

ああ、ミッチャン！ミッチャーン！…：ちゃん
と改行しようよ。太ゴシックだから真っ黒で読みにくいしさあ。

そーなんだ、マサネコはミッチャンを守ってくれてるんだ。おうちに入っていないよ、マサネコ。

アタシはしばらくボートとしてた。そしたらいきなり、右のお尻の下で、何かがブルブルって震えた。

音もブーブー言ってる。ビックリして思いっ切り跳び上がったよ。目がディスプレイの明るさに慣れてたから周りは真っ暗にしか見えなくて、何が何だかわかんなかった。音が止んだんで近付いてみると、あれっ、携帯電話。ハナマルさん、忘れてったんだ。スマートフォンっていうの？そんな形。アタシはしばらく見つめてた。

十円玉がなくてもミツチャンに電話できる。こんなチャンス、二度と来ないかもしれない。ハナマルさんのコンピュータを勝手に使ってるだけでも心が痛むのに、携帯電話まで使っていないのかな？って思った。だから電話を見た。しばらく見てて、やっぱり電話しよう。ミツチャンの番号を押した。

呼び出し音が十回以上鳴ったとき、眠そーな声が聞こえた。

「だーれ？寝てんのに」

「タマだよ。タマだよ」アタシは叫んだ。

「ったくもう、悪ふざけなら切るよ」

「切っちゃダメ。アタシだよ、タマだよお」

「えっ、もしかして、タマ？」やっと気付いてくれた。

「そーだよ、タマだよ」

た。アタシはここでの暮らしが好きだ。気付かないくらい、とつてもとつても好きだったんだ。背中でフワッと心配がしたら、シナモンさんが入って来てた。「どうしたの、ポーツとして」アタシはハナマルさんの携帯でミツチャンに電話したって言った。

「すごいわね、一挙に解決じゃない。よかったわねえ」

「ありがと。でも、少し混乱してるんだ」

「大丈夫よ、一生混乱してるネコはいないから。あら、これ、ミツチャンの文章？」

「そー、味噌蔵だよりっていうの」

「ふうん、高校生にしてはマシな文章ね。改行すれば読みやすいのに」

「そーでしょう？でもそれがミツチャンなんだ」

「このオヤブンっていうネコ、知り合い？」

「うん、うちのお屋根の上で知り合ったネコ。薄グレのマサっていう名前。しっかりしたネコだよ」

「このネコもあなたを待ってるんじゃないの？」

「そーだと思っ」

「やっぱりあなたは帰らなきゃ」

「アタシもそー思う。待っててくれるんだから帰ら

「タマ、タマ、お前かい？」

「うん、ミツチャン会いたいよお」

「じゃ、タマ、一、二、三」

「ハイ、ハイ、ハイ」昔やってた遊び。

「うわあ、ホントにタマだ！元気なんだね。どこにいるの？」

「元気だよお。長野だよお。おしっこしたとこ」

「うんうん、元気そうだね。あれ、ケータイの番号が出る」

「それ、ハナマルさんのだよ」

「これがわかれば、すぐに迎えに行ける。遠くに行っちゃダメだからね」

「行かないよ。ここで待ってる」

それから、電池が切れるまでミツチャンと話してた。っていつても、ミツチャンにはネコ語が通じないから、お互いに声を聴いてただけなんだけど、どっちも電話を切る気になれなかったんだ。

電話が終わってからも、アタシはそこに座ってた。コンピュータもつけたままだった。ついにやった、っていう気持ちと、これで終わった、っていう気持ちと、その三倍くらい淋しい気持ちが混じって

なきゃ」

シナモンさんとコンピュータをスタンバイにして外に出た。お水を飲みながら周りを見ると、夜なのにいろんなものがキラキラに見えた。

次の朝、アタシたちの箱に人間が近付いてくる気配が目が覚めた。ギンタもユラちゃんも起きて身構えている。身構えるっていつても攻撃態勢じゃないよ。どうやって逃げようか考えてるだけ。人間は真っ直ぐ箱に歩いてくる。ここがネコの巣だなんて知ってる人間は絶対にいないはずだから、最初はゴミの片づけだと思った。それなら素早く飛び出せば追いかけては来ないだろう。アタシたちのおうちがなくなっちゃうけど。

人間の足が見えた。あれえ、知ってるよ、この足。ハナマルさんだ。何しに来たんだろ。ハナマルさんは箱の前で立ち止まって「ネコたち、出てきてちょうだい。バナもそこにいるんでしょ」うわっ、どーして知ってるの。極秘のアジトなのに。

「まず僕が出るよ」ギンタが外に出た。

「はい、デカブツおはよう。他にまだいるでしょ」

ユラちゃんが出て、「おはようございます」なんて言ってる。

「あらシロ、怪我してるね。後で薬つけてあげよう。あとはバナだけだ、さあ、出ておいで」
アタシはそーっとおもてに出た。

「やっばりいた。バナ、全部わかったよ。お前の名前はタマだろう。飼いネコなのに苦労したね。さあ、おいで」ハナマルさんはアタシを抱き上げた。「バナ、いや、タマ。きのうの夜わたしのケータイ使ったんだろ。いいえ、怒ってなんかないよ。ネコなのに偉いねえ。今朝、電池切れだったからチャージし始めたら、すぐに電話が鳴ったよ。世田谷の蔵小路さんからだった。一晩中、ずうっと呼び出してみたい。ミチコっていうんだね、お前のご主人。優しそうな人じゃないか。今日の夕方、お父さんのクルマで迎えに来るそうだ。よかったね」

ハナマルさんはアタシを抱いたまま休憩室のほうに歩き出した。「デカブツとシロもおいで」ギンタとユラちゃんは、一瞬間を見合わせてからついて来た。

「勤務まで十五分しかないから、まずシロの手当て

ギンタとユラちゃんはその場に座り込んだ。ここにいるって決めたみたい。排気口からいつでも出入りできるから、鍵かけられても大丈夫なんだけどもね。「そうかい、じゃ、二匹の分も食べ物置いとこう。わたしはお化粧して」って言って、ハナマルさんは鏡の前に座った。真っ赤な口紅と長い付けまつげ、アイラインも太く濃く、頬紅も濃すぎるよ。アタシが人間語しゃべれるなら「スツピンのほうがかわいいですよ」って言ってあげられるのに。

サバの缶詰、ドライキャットフード、チーズ、お水をそれぞれ大きなボールに出して「ないしょでドライも買ったんだ、おいしいよ。休憩時間には戻るからいい子にしててね」って、ハナマルさんは出て行った。

「まず、朝飯をご馳走になろう」ギンタがサバに食いつくと、ユラちゃんはドライをバクバク食べ出した。アタシはまずチーズから。それからギンタと代わってサバを食べた。食べながらやっと、一点の曇りもなく決心した。帰ろう、世田谷に帰ろう、って。今ごろお？なんて思わないでね。自分でも往生際が悪いの知ってるから。

をしよう。見せてごらん。あらま、ケンカの傷じゃないか。誰とやったんだ？ 相手が誰でも、お前は負けたに違いない」

アタシとギンタはククツと笑った。ハナマルさん、ネコをよく観察してる。ユラちゃんは無然としてるだけで、何も言わないし治療の邪魔もしない。長老の一喝がまだ効いてるんだろーな。いつまでもつかはわかんないけど。

「それでバナ、いや、タマ。あんたは夕方までここにいなさい。外に出ちゃいけないよ。蔵小路さんに、しっかり預かるって約束したんだから。食べ物はあるし、簡単なトイレ作った」

見回すと、ダンボールの箱に新聞紙を千切ったのがたくさん入ってるのがあった。見るからにやりにくそう。ハムスターなら喜ぶだろうけど。それに、他のネコにお別れの挨拶もできないのは困る。と、いって、今逃げちゃうわけにもいかないしなあ。

「はい、治療おわり。シロ、クスリをなめちゃダメだよ。包帯も外しちゃダメ。で、シロとデカブツ、お前たちもここにいるかい？ 部屋に鍵かけるから出入りできなくなるよ。どうする？」

「タマが帰っちゃうことをみんなに知らせなきゃ」ギンタが立ち上がった。「アタシも行きたいよ」って言ったら「タマはなるべくここにいたほうがいい。屋飯どきになればハナマルさんは忙しくなるから、そのときに出ておいで。そうだ、世田谷の住所、憶えてる？ それとミッチャンの電話番号」

それって個人情報だよな。ま、いいか。住所と電話番号を教えると「わかった」って、ギンタは排気口に跳び上がって外に出た。

それと入れ替わりにシナモンさんがフワツと現われて「聞いたわよ。お迎えが来るんですってね。おめどう。やっと飼いネコに戻れるわね」

「そーなんだけどさー、ハナマルさんは、迎えが来るまでずーっとここにいろって言うんだ。みんなにお礼も言いたいし挨拶したいのに」

「オレがみんなに伝えるのはどうだ？」珍しくおとなしいユラちゃんが言った。

「やっば、アタシが自分で言いたいよ」

「まあ、それもそうだな」珍しく物分りがいいユラちゃんだった。

「わかった。名案があるわ。ちょっと見ててね」シ

ナモンさんはソファアーの上の毛布にもぐって、シッポを外に出した。「ねえ、シッポだけならわたしとタマの区別は付かないでしょ？」

たしかに。アタシはボケたキジトラだけど、シッポだけはふつーのキジトラと同じ。シナモンさんはきれいなキジトラ。人間には二匹のシッポ模様の違いなんて見分けがつかない。

「やったあ、さいこー。身代わりになつてくれるんだね」

「もちろんよ。でも、わたしがごはん食べるまで待つてくれる？」

シナモンさんのごはんが済んで、アタシは外に出た。夕方にはミッチャンと会える。世田谷に帰れるんだ。だけど、この生活も楽しかった。雪が降るのも見たかったなあ。なんて思いながら、とにかく長老に報告しようって考えた。最初はどーして偉いんだか、よくわかんなかった長老だけど、子ネコ失踪騒ぎで底力のすごさがわかったよ。人間と違って、ネコの世界では底力と実力がないとボスにならない。人間も、お金さえなくせばネコなみの世界を作れるかもしれないね。それって、原初的な原始共

でに線文字Aも読めたらいいな。

「木に彫っておけば、いつでもどのネコでも見られる。しかも昔の文字を使えば人間には読めんじやろ。個人情報秘匿せにゃならんからな」長老は木の周りを歩きながら言った。

「それで、あのー、なんていうか、お礼を言いに来ました」こういう場合、誰に何を言ったらいいのかな。

「お礼ってなんだ？」ペロは正装の長靴を履いている。「どんなネコが来ても、そいつがいいヤツならいっしょに暮らす。助け合いとか、そんなチンケなものじゃない。なんとなくいっしょにいるだけ。ネコは群れを作らないからね。なんとなくいっしょにいただけでお礼なんか言われたら、こっちが困るよ」

「そんなこと言ったって、アタシがここで生きられたのは、みんなが親切にしてくれたからだし……」

「あんな、ネコは生まれながらに親切なんだ。あんたも親切だよ」今度はトントが言った。「お礼の言葉なんて、人間のために取るときなよ」

そりゃそーかもしれないけど、黙っていなくなるのは月光仮面だけでいい。

産制なのかなあ。そればかりじゃないと思うけど……あらっ、思考が世田谷風になつてきてる。

今日はいいいお天気。アタシがここに紛れ込んだ翌日、ギンタにお水の場所を教えてもらった日と同じ真っ青なお空。お日様の光だけがちよつと違う気がする。もう秋だからね。

林の奥にオスネコが集まって何かしてる。みんなでツメ研ぎだ。同じ木の同じ高さを引つ掻いてる。長老が「まっすぐに」とか「それじゃ浅い」とか、かなり細かく注意してる。近付くと文字みたいなのを彫ってた。

「なにしてるの？」って訊いたら、長老が「タマの住所と電話番号を刻んどる」って言った。えっ、ネコの字ってあったつけ。「なんだタマ、これ読めないの？」みんなが驚いた。アタシは、この字をみんなが読めることに驚いた。

「線文字Bだよ。子音のhが無いからqで代用して、数字はアルメニア文字を使うんだ。これ、ネコ標準の表記法」ルドルフの説明に、アタシはますます驚いた。ずっと前におかあさんが言っていたのは本当だったんだ。帰ったら線文字Bを勉強しよう。つい

「でもアタシは言いたいから言うよ。みんな、ありがと。アタシは世田谷に帰るよ」大きな声で言った。声が大きかった分だけ悲しかった。

「タマ、あんたと初めて会ったときから、見どころのある特別なネコじゃと思つとった。別れはこの世の定め。だが悲しいことではないぞ。毎月、満月の夜十二時に、月に向かって念波を送っておくれ。ワシも送り返す。これは特別なネコにしかできん通信方法でな、どちらか片方が危機にあれば、もう片方はテレポーテーションで飛び、相手を助けに行ける。やつてくれるな？」

グエツ、長老はやつぱりブツ飛んでる。でも、もしかしてホントに届いたりして。アタシは「はい、やつてみます。月に吠えます」って答えた。

長老は満足そうだった。「それで、ひとつ頼みがあるんじや。聞いてくれるか？」

ほら来た、嵐の夜に秘密の洞窟を探せとか、二匹の黒ネコに密書を手渡せとか、そーゆーんじやないでしょうね。できることなら何でもするけど。だからとりあえず「はい」って言った。

「それはな、ジャガのことなんじや。どうしてもタ

マに付いて世田谷に行きたいと言い張っておる。一度でいいからカラオケで歌いたいんだそうじゃ。世田谷にはカラオケがあるじゃろ？」

「ありますけど、そんなことしたらムラタさん、怒りませんか？」

奥の木の陰からジャガとムラタネコが出てきた。

「ねえ、連れてってよ。お願い。いい餌いネコになるから」ジャガはアタシにスリスリして、首のあたりをなめた。

「こんな調子なんだよ。ねえタマ、オレはジャガを男手ひとつで育てたけど、一通りの礼儀作法は仕込んだつもりでいる。それほど迷惑はかけないはずだ」なんだ、ムラタネコも承知ならアタシは喜んで連れてってあげるよ。

「いいよ。ジャガも行こう。ネコが少し増えても文句言う家族じゃないから」

「うわーい」ってジャガは跳び上がった。「餌いネコ、カラオケネコ、スターになれるかもしれない！」

「長老、僕からもお願いがあるんですが」ギンタがアタシと長老の前にピタッと座った。「これまであちこち旅して来ました。雪山の寒さも、舗装道路の

暑い照り返しも知っているつもりです。魚が山ほどある市場にも、食べ物があったく無い荒地にも住んだことがあります。でも、大きな都会だけは行っていません。どうでしょう、ぼくも付いて行っちゃいけませんか？」

ギンタも来るの？ すぐくメツチャ嬉しい。アタシはもちろんOKだよ。マサネコに会わせられる。

「ギンタが言うのもわかるが、ワシの心の中ではお前をこの次の頭取にしようと思っておったのじゃ。この思惑は外れるかのう」

「いいえ、長老がそう思っていたことは僕も感じていました。長くても二年で帰ってきます。ご期待に背くことはありません」

「じゃが、ワシも歳じゃ。いつポックリ逝くかわからんぞ」

「それこそ月面反射通信で呼び戻してください。タマのアンテナが壊れない限り、長老の声は聞こえるでしょう」

「まあそうじゃな。若い者を一ヶ所に留めておくのはできません。それに、他のネコなら行ってもよくて、ギンタだけダメというのは理屈に合わん。いいじゃ

ろう。都会で見聞を広めてきなさい」

「ありがとうございます」ギンタは深くお辞儀した。

こんな展開、思ってもいなかった。ギンタとジャガが世田谷に来るんだ。この仲間といっしょに帰れるなんて、夢なら覚めないでほしいよ。

「さあ、そういうことで話は決まった。タマはそろそろハナマルさんの部屋に戻ったほうがよいじゃろ。脱走したとでも誤解されたら、またひと悶着じゃから」

で、アタシはみんなに「またあとで」って言ってハナマルさんの休憩室に戻った。

排気口から跳び下りると、ユラちゃんはおなかを出して熟睡、シナモンさんは毛布からシッポだけ出してうたた寝。ネコの基本的な行動パターンだね。食べ物があって、柔らかな場所があれば、間違いなく眠っちゃう。

「ねえねえ」って、アタシは二匹を起こした。シナモンさんはすぐに毛布から出て来た。

「替え玉もそれほどラクじゃないわ。ずっと毛布の中にいるとかなり暑いよ。ハナマルさん、一度見

に来たわ。わたしのシッポを見て安心したみたい。大成功だった。それで、あなたはどうかだった？」

木に住所と電話番号を彫ってもらっていたこと、それからギンタとジャガも来ることを話した。

「すごいじゃない。サービスエリアの縄張りの世田谷支店ができるってことね。支店を持つてるネコ集団は、そうそうないわよ」

たしかに、ソーユーファーにも考えられるなあ。帰ったら適当な板を見つけて『サービスエリア集団世田谷支店』の表札を作ろう。線文字B、勉強しなくちゃ。「それでね」言うべきかどうか迷ったけど、やっぱり言うことにした。「シナモンさんとユラちゃんも、世田谷に来たくない？ 来ても平気だよ」

「行ってはみたいけどな、オレはやめとくよ。こういう性格だと、絶対に人間に迷惑かけるから」ってユラちゃん。そこまでわかっているなら、来ても大丈夫だと思っけど。「ネコどうしの迷惑なら、ネコパンチの三回くらいで済むけどさ、人間相手だと逃げ出すしなくなるからね。ほら、オレってけっこう自分を知ってるだろ」

「うん、無理には言わないよ。住所は木に書いて

あるから、いつでもおいでよ。それでシナモンさんは？」

「私はね、前に都会暮らししてたから、もういいの。原宿でノラやっつて楽しかったけど、こっちに來てから余裕ができたっていうか、ノビノビ暮らせてる。このままがいいのよ」

そっかあ。それぞれみんな、居場所があるんだ。

「でも、いつでも連絡取りたい。ねえタマ、私にメールアドレスひとつ作ってくれない？」

それっていいアイデア。もちろん作るよ。今すぐ。コンピュータを開いて、ブラウザメールを設定した。元になるアドレスはハナマルさんのを借りて、某検索大手がやってるサーバーにメールアドレスを作った。着信お知らせとか、そーゆーのは全部オフにしたから、ハナマルさんにはまず気付かれない。それから、アタシのメールアドレスをテキストで書いて、ふつうじゃ見えないフォルダに入れた。シナモンさんは全部見てたから、メール使うのは簡単だと思う。

「オレには？」ユラちゃんもほしそうだったけど、もうちょっとスキルが上がったらシナモンさんに作ってもらえばいい。

かる。ユラちゃんとシナモンさんも見たいって、机に上がってアタシの隣に座った。

「この三番の馬はまるつきり走る気ないね」ユラちゃんがまず見抜く。走る気どころか、早く降りたがってる。

「一番もダメみたい」ってシナモンさん。そうだね、夏バテで動くのもダルいって。

「二番はヘンだよ。走ること考えてない」なぜか三コーナーの方角に気を取られてた。幻聴でも聞こえるのかな。お馬の名前はナニカキコエルで、この様子だと間違いなく三コーナーで大きくふくれて、どん尻まで下がるはず。

結局、十一頭立てで走る気があるのは一頭だけ。七番のイッテントッパっていうお馬。他の十頭の中では八番のチョウリョウバッコが、いくらか走ってもしない、って思ってるくらいなのがわかった。

「決まりだね」って全責納得した。

電話代だけ儲ければいいんだから、万馬券は要らない。だから全然期待しないでオッズを見ると、うっそでしょ？人間が競馬で損するのわかるわ。四番のムカンノテイオウがガッチガチの一番人気。単勝

そんなことしてるうちにお昼になって、軽く眠ったら三時ごろになった。ハナマルさんは四回も見に來た。そんなに気を遣わなくていいよ。アタシは絶対に逃げないから。

「ひとつ気になってることがあるんだ」そうなんだよ。このまましばらく帰っちゃうのは、どうしてもイヤなことがひとつ。「コンピュータを無断で使っても、ファイルを壊したりウイルスもったりしなければ、それほど悪いとは思わないけどね、アタシ、ミツチャンに電話かけたでしょ。電話代、ハナマルさんに返したい」

「どうやって？ネコは現金持つてないぜ」ってユラちゃん。

アタシ、恩返しするんだ。人間にはできない方法で。まずコンピュータを起動した。鉄壁のセキュリティ『ひみつ』フォルダから、いろんなIDやパスワードが書いてあるファイルを開けて、要りそうなものを憶えてSPAT4に入れた。やってたよ、今日は船橋だ。ライブ映像にすると、ちょうどパドックを映してた。ネット動画だからテレビみたいにきれいなじゃないけど、お馬が何考えてるのかはわ

で一二倍。イッテントッパは超人気薄の六十八倍。七↓八の馬単を買うつもりだったけど単勝でいいや。七番を百円買おうとしたら、ユラちゃんが「オレの分も百円」って言うし、シナモンさんも「いつもお世話になってるから、私も百円乗せて」って言う。いいけどさあ、元手はハナマルさんのクレジットカードだよ。しょーがないから三百円買った。

返し馬でも全馬まったく変化なしでレースがスタート。結局大当たりだったけど、めっちゃスリリングだった。イッテントッパが人気ないのもよくわかったよ。このお馬、まず出遅れて、走り出したら猛ダッシュで先頭に立った。と思ったら、またスルズル一番後ろまで下がっちゃった。それからまた追いついて、ゴール直前で差し切って勝った。まあ勝ったっていうより、他のお馬にヤル気がなかったって言うほうが正しいけどね。二着に入っただのはチョウリョウバッコ、三着は、忘れちゃった。

これでハナマルさんには二万円くらいのお返しができた。お金でお返しなんて、お義理だけの人間みたいでやだけどき、やっぱ電話代は返さないとね。「競馬って毎日やっつてるのか？」ってユラちゃんが

目を真っ黒にして訊くんで「そーゆーわけじゃないよ」って答えといた。だって、ネコが毎日、当たり前馬券をゴツソリ買うようになったら、大穴なんて出なくなるから。



18 : カラス電報の将来

それからハナマルさんの部屋に、サービスエリア中のネコが一匹ずつやって来た。ハナマルさんが見るたびにネコが増えてたので、そのたびに新しいごはんが追加になって、ネコはみんな満腹してた。ハナマルさん、ドアが閉まってるのにネコが増えてることを不思議に思わないのかなあ。

五時過ぎにハナマルさんがSAPT4をチェックした。自分で買った馬復はいつものように外れてた。でも、身に覚えのない単勝が取れるのに気付いて「あつれー、どうなってるんだろう」って何度も何度もディスプレイを見てた。それからゆっくりアタシたちのほうを向いて「あのね、馬券は二十歳以上じゃないと買えないんだよ」って言った。「いいえ、長老が買ったんです」って、とっさにウ

ソついたけど「あんたたちはいい子だ」って褒められた。

そのころには部屋はネコだらけになってた。シュレも長老も来てた。最後にピポパとニヤニランさんが排気口から跳び下りて、パが「おねーさん、ぼくも行きたい」ってちよつとゴネた。

「さあ、子ネコたち、キーボードよ」シナモンさんが三匹に正しいタイピングを教え始めると「オレにも教えて」ってユラちゃんも勝手に生徒になった。いづれネットで『ユラノスケの電気講座』とか書くつもりかな：昔、カラスはみんな白かった。黒くなったのは感電したから、みたいな。

建物の外でゴソゴソ音がしてる。長老が「誰だね」って訊いたら「タケチヨです。入れないんで、

ここで待つてます。それから、カンタもいますよ。このカラス、耳を突つつくんで結構ウザいです」

「タケチヨきーん、ごめんねえ。あとでチーズ持つてくから」ジャガが叫んだ。

「いいんですよ、犬は待つのに慣れてます。あつ、それからエドから伝言。タマ、元気でね、つて。イテ、なんでそんなに突つつくんだよ。いえ、カンタが喰いつきそうな勢いで……痛いんだよ。なに？電報？」

「カンタ、デンポーヤサン ハジメマシタ。オイソギノヨージワ、カンタニオマカセ。イジヨウ、コマーシャル」

「また言ってる。これを聞かないと電報の内容言ってくれないんだ。それで？カンタ、早く言え」つてトント。

「デンポーダヨ。タマアテ。デンブン 『ブジナキタクライノル イツデモアソビニオイデ ダンラク ドボントアツタマ』。キイタカ？」

「聞いたよー、ありがと」アタシは嬉しかった。長野に親類がいるのがわかって、友達にもなれた。来年あたり、ミッチャンを説得して千曲川に行こう。

もうひとつ、スタッフのカラスは少なくとも三種類の言葉話せて、正しく翻訳できなきゃいけない。そうすれば、たとえば犬語で電報を頼まれて、ヒツジ語で届けられる。好きな言葉で送られて、好きな言葉で受け取れる電報なんて、人間もやってない快挙だ。電報という通信手段が生き残るための付加価値としては、これ以外に考えられない。で、今、カンタは人間語を勉強してるし、若いカラスにいろんな動物語を習わせて配達スタッフを養成中。全国版の電報ネットができたら、そのときには有料化するから、今はお試し期間なんだつて。

ネコはみんな感じ入って聴いてた。「ふう〜ん、あの黒くてチッコイのがねえ。オレよりずっと起業家だなあ。よし、その日のためにカラス電報のコマーシャルソングを作るところ」ペロはカンタにあやかるところらしい。でも、これって便利だよね。ネコから人間に電報送れば、アタシはもっと早く世田谷に帰れたはずだから。

カラス電報がうまく行くかどうか、みんなで見聞を言い合った。シュレによれば、人間のお金と同等の、新しい通貨を作らないとうまく行かないらしい。

おかあさんもいっしょに来ればいいな。

カンタの電報を聞いてたペロが、この世の七不思議みたいな顔して言った。

「あのさ、よくわかんないんだけど。カンタの電報屋、頼んでも無料でしょ？ 無料だからコマーシャルが入るのはわかるよ。でも、コマーシャルの内容が無料電報の宣伝なら、結局全部無料だから、コマーシャルの意味ないじゃない」

そうだよ、宣伝なんかしたらタダ働きの増えるだけ。いつまで経つても『お仕事』にはならない。「あなたたち、カンタを甘く見ちゃダメよ」シナモンさんがタダ働きの理由を説明してくれた。こういうことだった。

親切なネコたちに助けてもらえなければ森の中で死んじやった命、つてカンタは思った。それならこ一番、命をかけた大仕事をやってみよう。カラス集団による全国ネットの電報屋を立ち上げよう。一羽のカラスが一息に飛べるのは十キロくらいだから、全国に十キロおきに『電報局』を作つて、スタッフのカラスが伝言ゲームで電報を伝えて行く。そうすれば、どんな遠くにでも電報を運べる。それから

ただ、カラスの習性として、通貨はビーダマとか服のボタンでもいいのかもしれない。カンタの意識がカラスの域を出ないのか、もっと大きな経済活動を目指しているのかによって、電報屋の成否は分かれる、つて言った。ほら、アタシ偉いでしょ。シュレの言つてること、わかるようになってきたんだ。

人間がこつちに向かつてくる気配で、ネコたちは一瞬静かになった。ハナマルさん以外なら逃げなきゃなんない。ピポパはコンピューターの前で固まった。

「誰がこんな悪趣味な緑に塗つたんだろうね、この廊下。デッドマンウォーキング」ハナマルさんだ。トントがククツつて笑った。

「さあ、タマ、準備はいいかな？」つて言いながらハナマルさんは部屋に入つて来て「わあ、どうなってるの、これ。全員集合のネコランドだわ。どうりで今日は外でネコを見なかつたはずだわ。まあ、しょうがないか。バナ、いや、タマが帰っちゃうんだもんね」それから新聞紙のトイレを見て「タマ、ちゃんとトイレしときなさい。クルマに乗るんだよ。し

とかないとあとで困るよ」

そんなの知ってるよお。それでこうなったんだからあ。しょーがないな、こはひとつ、気持ち悪そうなトイレでオシッコするしかないかな、って思ったとき、裏のドアをノックする音が聞こえた。少し控え目なノックだった。

「さあ、タマ、おいで」アタシはハナマルさんに抱き上げられて、そのままドアのほうに連れて行かれた。ネコたちはハナマルさんの足元に、かたまっただけで来た。

ハナマルさんがドアを開けると、ミツチャンが立っていた。ずーっと会いたかったミツチャン。「タマ！」ってミツチャンが叫んだとき、アタシはどーしていかわかんなくなつて、ハナマルさんにツメを立ててしがみついた。ミツチャン、どーして今まで来なかつたのよお。どーしてアタシを置いてっちゃったのよお。アタシは淋しかったんだよお……そんなことを小さな声で言っていた。

「タマ、行きなさい」ハナマルさんがアタシをミツチャンに渡したとき、もうこれまでのことはどーでもよくなつて、アタシはミツチャンにしがみついた。

しつかり受け取った。人間って、やっぱりわかんない。「おいしいから食べなよ」「もううよ、ありがと」で、どうして済まないんだろ。ネコたちは面白がって人間の動きを見てた。

「さて、遅くなるから行こうか」ってパパが言って、人間とネコ・犬の集団は駐車場に移動した。ネコと犬が全部ついて来るのを見てミツチャンが「みんながお見送りしてくれるよ」って嬉しそうに言った。ミツチャン、もっと嬉しいことが起きるよ。

ここからのシナリオは、さつきまでかかって、みんなで作ったんだ。うまくいくとーな。

まずパパがリアシートのドアを開けてネコ用ケージを出して、そのまま運転席に座った。ミツチャンがアタシをケージに入れようとした瞬間、タケチヨが関係ない方向に向けて大声で吠えた。その声にビックリしたフリのアタシは、ミツチャンの手をすり抜けてクルマの下にもぐり込んだ。ミツチャンがあわててアタシを探してる隙に、ジャガとギンタはリアシートに飛び込んで、暗がり隠れちゃった。タケチヨがクウンと声を出して、これが作戦成功の合図。アタシはゆっくりクルマの下から出て、ミツ

ギンギンにツメ立ててたけどミツチャンは怒らないで、アタシをギューギュー抱いたんだ。苦しかったけど苦しくなかった。

「タマ、ごめんねごめんね。おうちに帰ろうね。もうお風呂に入らなくていいし、どんなオモチャでも買ってあげるよ」これは明白なウソ。信じちゃいけない。ミツチャンは昔から興奮するとあらぬことを口走るからね。アタシはネコらしく、すぐに冷静になつてツメを引っ込めて、いいネコのフリをした。

建物の向こうから、もう一人誰か来た。なんだ、パパだよ。アタシがみんなに「ミツチャンのパパだよ。あんまりネコは好きじゃないらしいけど害はないよ」って教えたら、ミツチャンは「あら、パパが懐かしいのね。ニャーニャー言ってるわ」って、うまく誤解してくれた。

パパはハナマルさんに白い手提げ袋を渡して「どうもいろいろご迷惑をおかけして……」とか挨拶とお札ともつかないこと言ってる。袋の中をチラッと見たら、イサオさんのお煎餅だった。パパにしては最高のチョイスだね。ハナマルさんは「そんなお気を遣っていただかなくても」って言いながら、

チャンの手をなめた。

「ノラやつてたから警戒心が強くなってるのね。でも、ここまで来たら大丈夫よ」ミツチャンが言ったんで、アタシもジャガとギンタに「ここまで来たら大丈夫よ」って言ったんだ。

ネコたちとタケチヨはきちんと正座して見送ってくれた。ケージに入ってもそれはわかったよ。みんな、ありがとう。死んでも忘れないよ。来世でも憶えてるよ。アタシは心の中でそう言った。

クルマが走り出して、高速に入るとケージの扉が開いた。ミツチャンはアタシを引っ張り出してびぎの上に載せて体中を撫で回して、「思ったほど汚れてないし、どこも怪我してない。よかったね、タマ」そりゃそうだよ、ノラのほうが毛皮の手入れをきちんとするんだ。「だけど、明日お風呂に入つてツメを切ろうね」ほーら、もう話が違い始めた。「肉球が硬くなってる。いっぱい歩いたんだね。オリーブオイルでマッサージしてあげよう」いいえ、どーぞお構いなく。「お前は知らないだろうけど、家にオヤブンっていうネコがいるの。頑固だけどいいネコ

よ。仲良くできるかな」もちろん。マサネコとは前から仲がいいんだ。「それから、夕口もお前を探してたのよ。何度もクサリ外して、あちこち匂いかいで歩いてたって」そっか、帰ったらいっぱい謝らなくちゃ。…っていうことは、あいつもクサリ外しの術ができるんだ。やっぱり犬だわ。

「タマ、どうしても訊きたいことがあるの。はぐれちゃった次の次の日、わたしがタマを見つけて呼んだの憶えてる？ なんて逃げたのよ。メチャメチャ悲しかったんだよ」それはネコ違いだつて、どー説明したらいいんだろー。それに、ミツチャンがアツタマさんに会ったのは隣のサーブスエリアでしょ。アタシからすれば、どーして隣に探しに行ったのかわりたいよ。「まあいいわ。こうしてタマが戻って来たんだから」アタシ、よくない。説明してほしい。クルマが高速を外れて側動に入った。あれ、どっか行くの？ あたしがキョロキョロしていると「いったん出てUターンよ」ミツチャンが教えてくれた。そうか、このこと言ってたんだ。長老がギンタとジャガに「クルマは一回高速から出る。それからもう一度高速に入る。そのときまで隠れておるのだぞ」っ

「かっこいい。パパ、一匹はすごく大きなネコ。シャムネコの大きいもの。もう一匹はブルーベルシャで超かわいい。こういうネコもほしかったんだ。夢みたい。ねえパパ、見てよ」

「高速の運転中に後ろなんか向けない。どこで間違つて紛れ込んだのかなあ。リアシートにマタタビでも置いたのか？」

「マタタビは持つて来ないよ。とつてもかわいいよ、二匹とも」
「頼む、外は真つ暗なんだからルームライトを消してくれ」

ミツチャンはしづしづライトを消した。アタシは二匹に「正座してると疲れるから、丸くなって寝なよ」って言った。ギンタは「無作法にならないか？」って気にしながら丸くなった。そしたらジャガが「あたしもタマとおんなじにしたい」って、ミツチャンのひざに登ってきた。

「わあ、おまえはフワフワだね」喜んだミツチャンはジャガを撫でまわした。ジャガも盛大にゴロゴロいってた。うん、たしかにあたは愛嬌だけで生きて行けるよ。

て言い聞かせてたっけ。なるほどね。

ミツチャンはアタシにいろいろ話しかける。どれだけ淋しかったかとか、オヤブンが気にしてくれてる、とか、わりと支離滅裂。それに、抱っこしてる手にいきなりギューと力を入れるんで、そのたびに苦しい。そんなにアタシが大切なら、いつももっと大切にしよう。

足元の暗がり隠れてた二匹が動き始めた。モゾモゾーっと起き上がって、ゆっくりシートに座って「こんばんわ」って言ったんだ。ミツチャンはやつと二匹に気付いて「あわわっ」みたいな声を出した。「ネコがいるう！ パパ、ネコがいるよ」

「そりゃいるだろ。タマを乗せたんだから」ってパパ。「違うの。別に二匹いるの」

それがギンタとジャガが人間の家族になった瞬間だった。

二匹は借りてきたネコモードで、とつてもおとなしくしてた。ミツチャンに頭をなでられると、手をなめ返すサーブスもした。パパに「前が見えにくいからライトを消せ」って言われても、ミツチャンはルームライトを点けっ放しにして二匹を見た。

「ミチ、そのネコ全部飼うのか」パパはあんまり気乗りしないみたい。

「だって、付いて来ちゃったんだよ。きっとタマの友達なんだ」

「オヤブンもいるんだ。っていうことは全部で四匹だぞ。紛れ込んだ動物を全部引き受けてたら、うちは動物園になっちゃう」

話を聞いてたギンタが「ぼくたち迷惑なんじゃないの？」って心配したから「どうにかなるよ。いつものことだから」って言つといた。それでもギンタは心配そうだった。ジャガはひたすらゴロゴロ。

「それじゃママに訊いてみる」ミツチャンは携帯を取り出した。

「訊くことない。訊かなくていい、そんなこと」

パパを無視して、ミツチャンは電話した。

「あのね、今帰りの高速。うん、タマもいっしょだよ。うん、元氣、怪我もしてない。うん、うん、えーと、もうすぐ藤岡の合流かな。えっ、わかんないよ、混んでないみたいだから早いと思うけど。それとね、ネコが二匹付いて来たの。一匹はブルーベルシャで、もう一匹はシャム。え、そんなのネコに訊いても

答えないよ。気が付いたらクルマに乗ってたんだ。シャムは大きくてかっこいいよ。ペルシャは甘ったれ。うん、大丈夫だと思っよ。もちろん！あたしはこの二匹も飼う。いいでしょ？えっ、パパ？なんとなく賛成じゃないみたい。ふっふっ、そうだよ。ね。じゃ、いいんだね。うん、わかった」って電話を切った。

「ママがいいって言うてたよ」

「そうだろうな。そうなんだ、いつも」パパは右車線に出て、思いっ切りアクセル踏んだ。

ギンタはますます心配して「いいのかい？もし迷惑なら、世田谷でノラになるよ」

「迷惑なんかじゃないよ。こーゆー家族なんだ。パパはあんなこと言うてるけど、ネコにだけは優しいよ。特に自分のネコにはね」

ギンタもジャガも、これまで飼いネコになつたことないから、もしかして人間のフクザツさをわかってないのかもしれない。そんなもの、いちいち相手にしたらネコの身がもたない。とあって、人間が何考えてるのか知らないのもダメで、知った上で無視するのが飼いネコの上手な生き方なんだ。空気を

適切に読む、っていうのかな、やってみればどんなネコにも簡単にできる。：：：みたいな話をギンタとジャガにしてあげた。アタシのほうがいいからか飼いネコの先輩だからね。ギンタは必死で聞いてた。ジャガは半分居眠りしてた。つられてミツチャンも居眠りしてた。



19：オデュッセウスの帰宅

無事におうちに帰れたかって？もちろんだよ。タロが喜んで跳ね回ってバクテンしてたし、マサネコは玄関の横に正座して出迎えてくれた。ママは三匹分のごはんとお水を用意して、トイレも少し大きいのに換えてくれた。アタシが一番驚いたのは、パパ。ギンタを見た瞬間に「このネコはすごい。おれが飼う」って言い出したんだ。今までネコなんかどーでもいーって顔してたのに。シャムのメインクーンには一目惚れしたみたい。

マサネコとギンタが最初に会ったときも面白かった。ギンタが型通りの仁義切ろうとしたら、マサネコが「お若えの、およしなせえ。あつしはあにさんの仁義を受けさせていただくほどの身分じゃござんせん。ご当家の軒下三寸借り受けて雨露しのがせて

いただくしか能のねえ、しがねえ旅ネコにござんす。失礼さんながら、仁義の儀、固くお断りいたしやす」ってやったもんだから、ギンタはすっかりマサネコに参っちゃった。その後は同じお茶碗からご飯食べてたので、兄弟分くらいにはしてもらったんだと思う。

ジャガはミツチャンに抱かれてクルマから降りた。ノドが壊れるくらいゴロゴロ言いつばなし。アタシより飼いネコになつてた。ジャガはその晩からアタシといっしょにミツチャンのベッドで寝た。ミツチャンに近いほうがアタシで、ジャガは遠いほう。一応順位はあるんだ。だけどさあ、ミツチャンが寝返り打ったり足をバタバタさせると、下敷きになるのはアタシだから、もしかしたらジャガはすぐ

く利口なのかもしれない。

帰って来た翌日、ギンタとジャガは「散歩してくる」って出かけた。ギンタは縄張りの見当をつけてるんだろう。ジャガはカラオケ屋を探しに行ったに違いない。ミツチャンは学校に行ったし、パパとママはお店にいる。アタシは久しぶりに一匹になった。そうだ、こんな感じだったよね。お昼寝するのも、オモチャを出して遊ぶのも、パパの本を読むのも、お庭やお屋根に行くのも自由。フウガア…あくび。そーだ、タロとマサネコに会わなきゃ。眠るのはいつでもできる。

タロは大騒ぎでアタシに跳び付いて、体中なめ回してくれた。「ネエサン、淋しかったよ。いきなりいなくなるなんて、ボクは悲しかった。あれ、前と違う匂いがある。何の匂いだろう。まあいいや、ネエサン、どこに行ってたの？」

「長野だよ。クルマで二時間くらいのこと。オシッコしようとしてクルマから降りたら、ミツチャンとはぐれちゃったんだ」

「歩いて帰って来ればよかったのに」

「ネコが歩けると思う？無理に歩いたら、どっかで

「そうだなあ、一番つらかったのは、とにかくミツチャンが見てられないくらい落ち込んでたことかな。ネエサンが帰って来ないかって、毎日ウロウロ探してた。ネエサンはボクのところによく遊びに来てたろ。ミツチャンは通るたびにボクの犬小屋見てた。こっちが悲しくなったよ。でも、マサさんというネコがいつも玄関の前について、ミツチャンに声かけてたから、いくら良かったのかもしれない」

「やっぱりそうなんだ。マサネコはスジが通った立派なネコだから、助けてくれたんだね。ちゃんとお礼を言わなくちゃ。ところでマサネコの姿が見えないけど？」

「マサさんは、ネエサンといっしょに来た二匹と散歩に行った。道案内するって」

「いっしょに散歩かあ。すごいだろうね。マサネコとギンタがつるんで歩いてたら、かなりの迫力だよ」

「あの二匹ならこの辺を仕切るのは簡単だな。どっちもボクと同じくらい強いと思う。で、ギンタっていつの？大きいネコ」

「うん、ギンタっていうんだ。それから毛がムクムクしてるネコはジャガ。あとで挨拶に来させるね」

クルマに轢かれて道路になっちゃうよ。だからミツチャンが来るの待ってたんだ。よくわかんないけど、いろいろ行き違いがあったみたいで、ミツチャンがなかなか来なかったから、アタシは向こうのネコたちの仲間に入れてもらって暮らしてたんだ。タケチヨっていう犬もいたし、エドっていう馬もいた。カラスとも知り合いになったんだよ」

「すごいな、それ。面白そうじゃない。ボクも行ってみたい」

それでアタシは、長野のいろんな話をした。タロはいくらでも聞きたがった。夢遊病状態のアタシが野良犬と喧嘩したところでは本気になって怒って、「そんなやつら、何匹いてもギャインと言わしてやる」って興奮したし、冬の戦争の話ではひっくり返って笑った。

そのとき、タロのおばあちゃんが出てきて、「あら、トラだ。帰ってきたんだね」ってアタシをなでてくれて「これ、食べるかい？」ってニボシをくれた。タロと二匹で食べたよ。おいしかった。

「アタシの話はいつでもしてあげるから、世田谷のことを教えてよ。留守してる間に何かあった？」

「話すの楽しみだな」

「留守の間のこと、他にはない？」

「うーんと、そうだ、シロがおとなしくなった。あの見栄っ張りで高慢チキネコがカメみたいに静かになったよ。ザーマスと何かあったみたい。ボクにも悪口言わなくなつて、今じゃ人やネコの目を避けてビクビクしてる」

やっぱりな、って思った。きっとマサネコにネコパンチの二、三発、食らったんだ。

「でもなあ、シロはなんかすごくいじけちゃつて、ちよつとかわいそうにも見えるよ。シロは今までが今までだから友達もいないだろ。愚痴こぼす相手も相談する相手もない。ネエサン、ヒマがあったらシロと話してみてくれない？」

「シロとお？いいけどさあ。また厭味言われなにかなあ」

「今は厭味なんか言つ余裕はないと思つよ」

「わかったよ」

タロが言うんだからよっぽどなんだろうね。年下の、しかもメスネコの出る幕じゃないかもしれないけど、あとでシロと話をしてみよう。

そーだった、カンジんなネコを忘れてた。おかあさんに会いに行かなくちゃ。タロに「また来るからね」って言って、下駄屋さんに走って行った。魚勝のお屋根にいたカッチャンがアタシを見つけて「おいタマ、シラス食うか？」って言うてくれたけど「またあとで」って答えて、お向かいのおかあさんの家に飛び込んだ。

「かあさん、ただいま」

「そろそろ来ると思ってた。昨日の夜に帰ってきたんですって？ほんとにもう、羽目を外すのもいい加減にしなさいね」

「アタシ、挨拶に来たのに、なに怒ってるのよお」
「だってそうでしょ。ご主人のクルマからの逃げ出して、サービスエリアの建物を全焼させて、探しに来たご主人から、また逃げ出して、黙って待ってればいいものを、あつちこつち放浪して、オデュッセウスにでもなったつもりですか？」

「だあれがそんなメチャクチャ言ったの？アタシはミッチャンとはぐれたから、その場所でおとなしく待ってたよお。そりゃ、千曲川は見に行っただけさ」
「それだけなら、こんなにニュースにはならないは

ずです。お前がなにをしたか、全部CNNに書いてありました」

わかってきた。そうか、カラスだ。

「もしかして、そのCNNの記事って『長野発カラス電』とかじゃないの？」

「そう。カラスの話を長野のCNN特派ネコが記事にしたようです。これほど確かなニュースはないでしょう」

「あのさあ、カラスだよ。おかあさんまでカラスの言ってること信じるの？たしかにサービスエリアでは軽いモメごとがあったけどね。建物は火事になつてないし、誰も怪我してないよ」

「じゃ、まるっきりのウソですか？」

「いや、まるつきりでもないけどさ」

「お前の言ってることは全然わかりません。ちゃんと話してごらんさい。怒りませんから」

怒られるようなことはひとつもしてないはずだけど、そー言われると緊張するよね。で、アタシは、歌合戦とか冬の戦争とかは省いて、自分についてのことだけしっかり話した。

「なあんだ、そういうことですか。ニュースとだい

ぶ違いますね。ネコJAROに報告しときましょう。それでもふたつほどわからないことがあります。まず、探しに来たミッチャンから、お前は大逃げを打った、ということですが、たしかにネコは追いかけられたら逃げるのが本能にしても、最後は捕まるべきではありませんか？逃げてしまつたから帰ってくるのが遅れた、とも言えるでしょう？」

「ネコ違いなのよ。ミッチャンが最初に見つけたと思ったのは、アタシにものごく似たアツタマさんというネコなんだ。ミッチャンが『あつ、タマ』って呼んだから、名前呼ばれたと思つて『はい』って返事したらいいの。これが誤解の始まりなんだよ。それに、アツタマさんがいたのは隣のサービスエリアなんだから」

知らないうちにカッチャンが来てて、縁側に座つて、持つて来たシラスをチョボチョボ食べながらアタシたちの話を聞いてた。

「世の中に、飼い主が見ても間違えるような、すごく似た毛色のネコがいるものでしょうか」

「それが、いたからアタシもアツタマさんも驚いたの。アツタマさんに会つたのは千曲川の川岸にある

小さな集落でね、そこにアタシのイトコに当たるドボンさんというネコがいて、そのネコの子どもがアツタマさん。イトコの子どもは、アタシから見ても何ていうの？」

「知りません、そんなこと。傍系親族でいいでしょう」
「なんだ、ユラちゃんと同じこと言ってる。「血がながつてるのであれば多少似ても不思議はありませんね」

「多少じゃなくてソックリなんだよ。おなかの縞模様が一箇所ほんの少し違うだけ。アタシたち、とっても仲良くなつたんだ」

「それはまあ、仲良きことは美しきかな、大変結構ですけれど、お前はミッチャンを待つてサービスエリアにいるべきなのに、どうして千曲川などに出かけたんですか」

「だって、おかあさん言つたじゃない。千曲川はアタシたちのルーツだって。クマベーおじいちゃんの銅像があるって」

「まあ、言いましたよ。そういう言い伝えだから」

「だからアタシはクンタキンテになって自分のルーツを探しに行ったんだ。アユも見たかったし銅像も

見つけたかった」

「それで、なにか発見しましたか？」

「大当たりよ。アユはウジヤウジヤいたし、クマベールさんが吠えてた理由もわかった。面白いんだよ、ヤナっていう魚の捕りかた。川の中に大きな台を作って、お魚が飛び込んでくるんだ。アタシ、すぐ近くまで行ってお魚の匂いかいだよ」

「まさか一匹くわえて逃げたりしなかったでしょうね」

「しないよ、そんなこと。したかったけど我慢した」
「ならいいわ。くわえて逃げてたらルドルフと同じになりますから」

「えっ、ルドルフ知ってるんだ？」

「ええ、お魚盗んで放浪の旅に出た有名なネコです」

「うんうん、サービスエリアにいたよ。相棒のイッパイアツテナは東京だって。歌がうまいネコで、アタシとデュエットしたんだ」

「それで、銅像は見つけた？」

「うん、小学校の玄関の奥にあった。銅じゃなくて粘土でできてたみたいだけど、キンピカだったよ。お腹に時計が付いてて、かっこいいっていうより非

常に印象的だった」それ以外、なんて言ったらいいの？

「そういうことは、お前は伝説のルーツを探し当てたんですね。世田谷ネコの有史以来の快拳じゃないですか。偉いねえ……って言うと思う？ 確かに快拳ではあるけど、あまりに冒険主義的過ぎるでしょう。飼いネコとしては、あくまでもサービスエリアを離れるべきではありませんでした。静かにミツチャンを待ってるのが仕事だったはずですよ」

「そんなこと言ったって、ずーっと待ってて、待ちくたびれたし、いろいろあったんだよ」

「いろいろって何ですか」

えっとお、何があったら。思い返すとなんにもない。アタシが勝手に淋しくなったり落ち込んだりしただけだ。そんな理由にならないだろうな。

「たとえば、アタシは淋しくなった……」

「そんなことは理由になりません。何日でも、何十日でも、耐えて耐えてご主人を待ち続ける……」

「待ったあ」シラスを食べてたカッチャンが割って入ってきた。「おばさん、そりゃ酷っていうもんだぜ。今ここで、タマにどうすべきだったか言うのは

「あつ、いけない。ミツチャンが帰ってくる時間だ。おうちに帰らなきゃ。おかあさん、またね」アタシは縁側から飛び降りて道に出た。カッチャンがついて来て「よく帰ってきたな。オレはもうダメだと思っただぜ」

「アタシも半分以上ダメかなって思ってた」

「なにしろよかった。それと、あのマサっていうネコ、貫禄だねえ。オレは惚れたぜ。町内に居ついて仕切ってくんねえかなあ」

「どうかなあ。川崎に自分のシマ持つてるから」

「それじゃ川崎行って舎弟になるかな」

「長野からもう一匹、ボス候補の大きなオスネコが来たよ。アタシとっしよに来たんだ」

「どんなネコだ？」

「ボスの素質はあるけどマサネコとはタイプが違って、武闘派じゃない。ギンタっていうんだ。それと、かわい〜いメスネコも一匹」

「おお、会いたいね。明日にでも行け。よろしくな」
って、アタシはカッチャンと別れておうちに帰った。

「うん、落ち着いたら文章にするつもり。タイトルは決めてあるんだ。『サービスエリア』っていうんだよ」

「何語で書くの？ 線文字Bにしなさいよ」

わっ、ヤバイ。この話題はなるべく避けたい。

ミツチャンはもう帰ってて、ギンタとジャガをお風呂場に閉じ込めてた。それに気付いてアタシは逃げ出したけど一瞬遅かったみたい。ママに捕まってお風呂場へ。「何が始まるの？」ってジャガが真っ黒な目で言った。「シャンプーだよ。大声出して騒いでいいからね」って教えたんだ。ギンタは「洗ってもらえるんだ。生まれて初めてだなあ」なんて悠長なこと言ってる。

最初にギンタが洗われた。「耳には水入れないでください」って言っただけで堂々とした。アタシたちはそれどころじゃなくて、なるべく水がかからない場所に逃げて、二匹でなるべく小さくなっていた。ギンタはおとなしくしてたからすぐに終わった。ママに首の下とお尻を拭いてもらって「いやあ、気持ちいいな。毎日でもいいや」なんて言ってる。ギンタはネコの神経じゃないんだ。

ジャガはもう大パニック。お風呂場中を走り回って逃げてた。ミツチャンがシャワーを振り回すもんだから、アタシにも水がかかって、こっちも走って逃げるしかない。ミツチャンはアタシたちを「木下サーカスのオートバイみたい」って笑ってる。アタ

うんだから。よし、今夜から一生懸命ツメ研ぎするぞ。

夕ごはんはマサネコといっしょだった。「たまにはいいでしょ」ってママが言って、全員でお外で食べたんだ。みんなで食べてると、長野の知らない人を思い出しちゃった。いまごろユラちゃんは、七時の時報で食べ始めてるのかもしれない。コアラは元気かなあ。新しいへじを見つけてほしいけど。シュレはいつものように簡単なことを難しく言ってる。うなあ。なにより、あの森の匂いにする空気が忘れられない。帰ってきて二日目なのに、もう懐かしくなってる。本当に帰って来てよかったのかな、なんて、ちよつとは思うんだ。アタシが二匹いれたいのね。

一匹で勝手にタソガレして、ハッと気付くと、ギンタとジャガが正座して食べてる。どーしたんだろ、立ち食い専門だったのに。少し見てたら理由がわかった。マサネコがビシッと座ってごはんを食べてるのを見て、二匹が真似してるんだ。食べ方も犬食いじゃなくなってる。マサネコのオーラってすご

シとジャガは反対方向に走り回ってたんだ。でもジャガは偉かったよ。ツメを全然出さなかった。もう立派に飼いなコだね。

最後のアタシは？いつもの通り、ひたすら嫌がらせで大鳴きしてやった。もうお風呂に入らなくていいって言ったの誰だっけ？ だから鳴いたんだ。

三匹でベランダに出て体をなめて乾かしていると、お庭をマサネコがゆっくり歩いてた。「どうも、ご難なことって」ってニコニコしてる。「どうしてマサさんだけお風呂に入らなくていいの？」ってジャガが訊いたら「ふだんの行いがいいからだろうぜ」ってマジに言った。理由はともかく、おうちに入らないネコは洗われなくてもいいんだ。アタシもお外で暮らそーかなあ。

ミツチャンはどつてもズルいんだよ。ツメを切られたのはアタシとジャガだけ。ギンタは切られなかった。リビングにあるツメ研ぎを一番気に入ってガリガリやつてるのはギンタなのに、ギンタはツメ伸ばしてもいいんだってさ。「オスネコは喧嘩しなきゃならないからね」ってミツチャンは言うけど、メスネコだって喧嘩するよ。それに、近々シロと会

いね。やっぱり親分なんだなあ。

食べ終わってから、ギンタとジャガはタロに挨拶に行った。ご近所さんだからね。タロは大歓迎で、二匹をなめ回して「シャンプーの味がするよ」って言ってる。

アタシは久しぶりにお屋根に登ってみた。そーなんだ。ここでマサネコと会って、相談に乗ってもらったのが始まりだった。きのうの夜のことみたい。

うしろにフツと気配を感じたら、マサネコが登って来てた。そうそう、前もこんな雰囲気だったな。

「タマさん、お帰りなさい。ご無事でなにより」鋭い目つきは変わらないけど、どこかどっしりした感じになってる。

「いろいろご迷惑かけちゃったみたい。ごめんさいい」

「迷惑なんて言いつこなしですぜ。ネコは欲得ずくで生きてるわけじゃねえ、そうしたいからしたままで」

「でも、川崎に帰るの遅くなっちゃったでしょ」
「なあタマさん、どっちが大事だ？ たしかに川崎のシマにゃあオレを待っててくれるネコたちが何匹か

いるけどな、こっちじゃ死にそうなくらい悲しがつてる人間がいる。どっちを守るのがスジかね？落ちた木の葉みてえなハミダシのオレでも、そのくらいはわかる。タマさんの代わりじゃあなれっこねえが、朝な夕なに『元氣出しな』って声かけるくらいはできそうだから、オレの好き勝手に居させてもらった。それに、毎日満腹になるまで食わせてもらってる。礼を言うのはオレだぜ」

「そんなあ、お屋根の上でちよつと話しただけのアタシのために、やつぱり迷惑かけてるよ」

「あんなタマさん、ちよつと話したとか、ずーつと話したとかは関係ねえ。ネコにはそのときそのときで、しなけりゃなんねえことがあるんじゃないかな。他のネコから見りゃあ見当違いかもしれねえが、そりゃどうでもいいんだ」

「でもアタシ、川崎が気になるよ。マサさんがいないと、みんな困るんじゃない？仕切ってくれるネコは大切だと思う」長老やドボンさんのことを考えれば、リーダーがどれだけ大切か、よくわかるもん。「ありがとうよ。心配してくれるなあ嬉しいが、オレ一匹いなくなっただけで左前なるような組な

ら、とつと潰れちまえばいい。心配はいらねえ、留守の間、大番頭がきちんと仕切ってるだろうよ」
「どうやらマサネコの組織は、かなりガッチリしてるみたい。一度遊びに行ってみたいな。」

「ミッチャンがネットに書いてたけど、マサさんはおうちに入らなかつたんだよね。とつても暑かつたのに。入っても誰も怒らなかつたのに」

「お言葉はありがたくちよつと嬉しいが、オレにもケジメってえもんがあつてな。飼いネコになる気もねえのに、人様の家にながら込むわけにゃいかねえ。この家のネコは、タマさん、あんただよ。オレは、ちよつと寄つただけのノラだ。いや、誤解してもらつちや困るぜ、あんたに義理立てしたわけじゃねえ。もしオレが上がり込むとすりゃ、その家は川崎のおじさんだけなんだ」

マサネコの気持ちは、すつごくわかつた。アタシには来世になつても真似できないけど……。そうだ、もうひとつ訊くことあつたんだ。

「よくわかつたよ。マサさんが、そーゆーふーに決めたんなら、アタシは『偉いな』って勝手に思うだけにする。偉いな」

「勝手に思われちまつちゃ、何の文句も言えねえ」つてマサネコが笑つた。

「長野でも気になつてたの。ザーマスにちゃんと復讐できた？怪我しなかつた？」

マサネコはニマツと笑つて「おうさ、気が済むまでやつて、まだ進行中だ。おじさんが言つてた永久革命つてえのが、この歳でやつとわかつたのかもしれねえ」

復讐を始めたのは、アタシがクルマで出かけた翌日からだつて。アタシが出かけたとき、マサネコはお屋根の上でザーマスの家を偵察して進入経路と逃走経路を頭に入れてた。そんなとき、アタシがギャーギャー騒ぐのが聞こえたんで、すぐにお屋根から下りて助けようとしたけど、パパのクルマには追いつけなかつた。でも、アタシが脱走してくるかもしれないから、丸一日待つてくれた。

で、翌日、車が帰ってくるのを気にしながら復讐作戦を始めた。まずザーマスの玄関のドアに、思い切りツメを立てて傷だらけにして、それからドアにスプレーしまくつた。それでも気が済まなかつたんで、家の羽目板の目立つところを、精一杯ツメ研ぎ

板にしてやつた。マサネコが言うには、ザーマスの家は、おじさんのアパートくらいボロつちくなつた。その後、マサネコは羽目板でのツメ研ぎを日課にしてるんだつて。おかげでいい具合にツメが短くて鋭くなつた。

「ミッチャンはほんと水をくれるが、トイレがねえのに気付いたか？」つて訊かれた。そういえばそうだね。マサネコ用のトイレがない。

実は最初のころ、縁側の下に、ママがマサネコのトイレを用意してくれてた。「だがなあ、ネコ砂も安かあねえだろ。そのくらいの始末は自分ですっらあ」で、トイレは使わずに、オシッコとウンチはザーマスの花壇で済ますことにした。十日も続けると、ザーマスの庭はプーンと匂うようになって、花壇のケバの花は枯れ始めた。この作戦は蔵小路家の経済にも貢献し、復讐にもなる一石二鳥だから現在進行中。

何度かシロに見られたけど、睨み返したら何も言わずに引つ込んだつて。まー、その程度だろうね、シロは。



20 : 災難と救済

ところが、マサネコの復讐には考えられない展開があったんだ。いや、よく考えれば考えられる展開かなあ。とにかくね、被害者が出たんだよ。

見栄っ張りのザーマスは、玄関がたまんない匂いになって家の外側がガサガサになったのに気付いたとき、完全にヒステリー起こして、なんと犯人はシロだ！って決め付けたんだ。シロがいくら言い訳しても聞いてもらえなかった。それで、ついにシロは家を追い出されちゃった。ひどいよねー。自分のネコを最初に疑う飼い主なんて信じらんないよ。

だからここ一カ月半、シロはザーマスの家の床下で暮らしてる。ごはんももらえないみたいで、マサネコの食べ残しをもらってるって。マサネコはあーゆー性格だから、おなかすかせたネコには「食べる

よ」って言うんだけど、シロには「遠慮して食べる」って言うてみたい。なぜって、ミッチャンがくれたごはんだから気が引けるんだってさ。シロはタロのところにも「何かください」って行ってるらしい。そーか、タロが言うてたのはそーゆーことなんだ。

マサネコはいろいろ話してくれた。面白い話もいっぱいあった。たとえば、カツチャンが初めて会いに来たとき、いきなりマサネコに仁義切ったんだって。「お控えなすって、お控えなすって」って勝手に言うて、マサネコが相手にしないで寝転がっていると「さっそくのお控え、ありがとうござんす」って始めたらしい。マサネコが黙って聞いてたら、言うてることがメチャクチャで、生まれも育ちも葛飾柴又だったり、世田谷のどぶ川で産湯を使ったりで、

「仁義や杯事をオモチャにするなあ好きじゃあねえが、あんときぼっかりは笑うしかなかった」そうだ。こちら辺は平和だ。飼いネコが多いから食べ物で喧嘩になることも、妙な縄張り争いもない。アタシみたいに長野まで行かなくても、マサネコには世田谷が保養地だ、とも言ってた。保養地なんて言わないで、できればずっーといてほしいけど、そーもいかなーいよなあ。

アタシたちはお屋根から下りて、マサネコは玄関の横に、アタシはミッチャンの部屋に帰った。

「この二匹に名前をつけよう」ってミッチャンが言った。いいけどさあ、それ、家族全員で決めてもらわないと困るよ。三人がそれぞれ違った名前つけたら大混乱になるよ、って思ったら、それが通じたのかミッチャンはジャガとギンタを抱え上げてリビングに下りてった。アタシも面白そうだから付いてった。

「えーと、まずこのモコモコの名前は『ピンキー』がいいと思う」って、パパとママの顔を見た。

「まあかわいい名前」ママが賛成。

「色がブルーなのにピンクなのか」って、パパ。

「あのねえ、ピンキーって小指にはめる指輪のことよ。なんにも知らないんだから」ってミッチャン。あの一、それ違うよ。ピンキーは小指の意味で、指輪ならピンキーリングだよ、って言ったけど、もちろん通じない。

「じゃあいいよ、それで」って、パパ。

これでジャガの世田谷名は決まり。半紙に「命名」って書いてくれとまでは言わないけど、ネコの名前って、あんまり簡単に決まりすぎる。アタシんときはどーだったんだろ。

「それじゃ、この大きいのが、どうする？」

「それはおれのネコだ」って、パパが言い出した。

「いいですけど。あなたがごはんやったりトイレ掃除したりするなら」ってママ。

「そんなもの、他の二匹といっしょにすればいいだろ。ついでだから」

「ネコはついでに生きてるわけじゃありません」ってママが言う。

「なんにもしないで自分のネコだなんて、ネコが懐かないわよ」ってミッチャン。

怖いねえ、この家。ミッチャンに弟がいれば二対

二なのに、現在パパの形勢は極端に不利。アタシはそーっと「ギンタ、パパのネコになる？」って訊いてみた。ギンタは「それでもいいけどさ、僕は何すればいいんだ？」って困ってた。

「大体あなた、このネコはおれのだ、お前のだなんて、所有権の対象にするのはおかしいでしょ」

「所有権だなんてオーバーだな。おれのネコだって言いたいだけだよ」

「言えは？ 言論は自由ですから」ほらほら、また変てこな方向に行き始めてる。

「そんなのどうでもいいよ。うちのネコなんだから名前つけなきゃ」ミッチャンが一番賢い。

三人の真ん中に座って、ギンタはキョロキョロしてた。それから小さい声で「ぼくはギンタです」って言った。

「ほら、何か言ってるわよ。早く決めてほしいんだよね。えっ、何ですって？」ミッチャンはギンタの口に耳を近づけた。「そうなんだ、あんたはポチっていうんだ」うわっ、全然違うよ。ポチだって。

「ポチか。犬の名前だ。でも犬なみに大きいし、鼻の周りが黒いから、ポチでもいいか」ってパパ。こ

なんだ。

こうして蔵小路家の、人間三人、ネコ三匹半のシフトが固まった。「半」っていうのは、マサネコが自分のことを、あくまでも『たまたま寄宿してるノラ』って位置付けてるから。ネコが増えて、一匹でいたときよりアタシは少し嬉しい。ミッチャンがいなくてもジャレて遊べるし、なによりおうちの中でもネコ語で話ができる。二、三日はそれだけで楽しかった。

二、三日経った夜中、雨が降ってて風も強かった。ジャガと二匹でミッチャンの足元で寝たら、外でかすかにネコの声が聞こえた。「寒いよ、冷たいよ」って言うてる。隣のシロだ。

ジャガに「ちょっと出かけるからね」って言うのと「あたしも」って付いて来そうになった。長野に行く前のアタシなら、ケーハクに「いいよ」って言ったと思う。でも、ここは一匹で行ったほうがいいって判断できたから「長毛種は雨に弱いでしょ」って断ったんだ。ジャガは「なんで？」って顔してた。

ネコ道からお外に出て、マサネコの前と通ると、「行くんだね」って言われた。「うん、放って置くわ

りや明瞭な紛争回避の出口戦略。

「ポチねえ。タマにポチ。創造力欠如を絵に描いたようだよ」ママが、とりあえず異議申し立て。

「だって、ポチって言ったもん。それとも他にいい名前ある？」ミッチャンは頑張る。

「そうねえ、ゴエモンなんてどう？ コジロウとか」そーいえば、マサネコをオヤブンにしたのもママだって。

「ゴエモン！ 釜茹でだ」ってパパ。「中国にはネコの水炊きっていう料理があるらしい」

「やめてよ、ネコが怖がるでしょ」ミッチャンはアタシたちを抱え込んだ。

「わかったわよ。ポチにしましょう」ママの気が済んだ。

ネコの間じゃ相変わらずギンタだけど、人間から見るとギンタはポチになった。そして、その夜からパパの部屋で寝るようになった。ジャガが「あの人がわいそうだから、せめて懐いてあげなよ」って言ったからかもしれない。次の朝、アタシたちがギンタの様子を見に行くと、超でっかいフカフカのネコ用クッションの上で寝てた。パパも本当はネコが好き

けいかないじゃん」って答えたら、マサネコはヒゲをビクッと動かした。

ザーマスの敷地に入って家の羽目板を見ると、マサネコすごい！ どこもかしこもヒツカキ傷だらけ。こういう模様の家かと思うくらい。それに、ネコのウンチとオシッコが、雨の中でもぶんぶん匂う。その、ものすごい匂いの先、床下の隅っこにシロがいた。

「誰だよ！ 入ってくるな」ってシロが唸った。

「アタシだよ、タマだよ。近付くけど引く掻かないでね」脅かさないようにゆっくり進んだ。

「こっちは来たって何にも無いぞ」シロはまだ唸ってる。でも、最初の「来るな！」じゃない。

「知ってるよ、話したいだけ」シロからよく見える角度で近付いた。シロはものすごくくやなヤツだったけど、今の姿はヤとかイっていうもんじゃない。真っ白だった長毛が灰色っていうか泥色っていうかになってて、ごわごわに体に張り付いてる。それにめっちゃ痩せちゃってる。

「どうしちゃったの？」あたしは訊いた。

「どうもこうも、全部ダメになった」

「悪いけど、話は聞いてるよ」

「おれがダメになって面白いのか」

「何言ってるの。面白いわけないじゃん。なんか、ひどすぎる気がする」

「うん、ひどい話だ。たった二時間。二時間で天国から地獄に変わったんだ。もしかすると、最初から地獄なのに気付かなかっただけかもしれない」

「シロらしくないよ。もっと威張ってないよ」

「威張る？もう無理だよ。威張る理由がなくなつた」

「アタシはもう少しシロに近付いた。シロは力チカチに緊張して、なるべく小さくなるようにうずくまつた。」

「あんた、どうにかしないと死んじやうよ」

「いいよ、それで」

「なにバカ言ってるのよ。こんなことで死んじやうくらい、あんたはバカなの？」

「そうだよ。だましたオバンも悪いけど、信じたおれは本当にバカだ。いいよ、世の中にネコはいっぱいいるから、おれ一匹死んだって……見てくれよ、ノミだらけだ。きつとギョウチュウもいる。エリートネコはノミなんか飼ってない」

これはもしかして東大生の挫折ってやつかもしれないな。挫折して当たり前なんだけどね。挫折しない無反省なヤツが地球を滅亡に導くんだ。

「死ぬより少しだけマシな解決があるかもしれないよ。ちよつと待っててね」アタシは走ってマサネコのところに戻って「借りるよ」って声かけて、ネコ元気を口にいっぱいくわえた。それから走って戻ってシロの前にネコ元気を置いて、それを三回繰り返した。ネコの口は小さいから、こういうときは不便だ。ペリカンになりたい。

「食べなよ」

「いいのか？」

「あんたが食べなきゃネズミが食べちゃう」

シロはすぐに食べ終わった。

「モンプチのゴールド缶より何倍もうまい。食べたらあんまり寒くなくなつてきた」

「それじゃ、毛皮をきれいなめてフワフワにしよう。毛が張り付いているから寒いんだから」

シロは素直に体をなめ始めた。脇腹をなめて「汚いなあ」って独り言いつてる。脇腹からお腹に移つたとき、シロは話し出した。

「おれは血統書付きのペルシャで、ペットショップで五十万円で売られてたんだ。でも、運が悪かったのか、性格が悪かったのかで、四ヶ月になつても売れなかつた。仲間が売れて行くのに、ずっと売れ残つてるのは自尊心傷つくよ。ペットショップはおれをバーゲン品にして二十万円に値下げした。そのときオバンが来て、五万円に値切つたんだ。そうさ、考えてみればおれの生涯って、最初からつまづいてた」

「そんなの、人間が勝手にやったことですよ。シロに責任はないよ」

「わかっているけどね、でもやだつたよ。それからオバンは、おれを白いベンツに乗せてあちこち連れて歩いて『五十万円のペルシャなんざんす』って言うって回つたんだ。おれは何度も五十万円って聞いているうちに、本当に五十万円みたいな気がしてきた。今から思えば錯覚だけだね。それだけじゃないんだ。オバンはおれに『お前は世界で一番価値あるネコなんざんす。ほら見てごらん』って血統書を掲げるんだ。『そこの駄ネコとは、ネコの出来が違うのを忘れちゃ困るざんす』って何度も言われた。おれは若かつたから、オバンの言ってることを疑わずに、

自分はエリートだと思い込んでた。そうだ、このネコ元気も、信じ込む理由になつたんだよ」

「どーして？」

「おれのいつもの食事はモンプチゴールドで、それがネコのふつうの食べ物だと思つてた。でも、タマの家に忍び込んでタマのごはんを見たら、なんだか汚らしいドライフードだった。いや、今はそんなこと思わないよ、絶対に。だけどそのときにはそう思つたんだ。それで、そうか、おれはやっぱり最高のネコだつてますます信じた。救い難いバカだね」

「あんたのせいじゃないよ」

「いや、おれのせいだ。おれにも信じ込みたい気持ちがあったからね。おれは五万円のネコじゃなくて五十万円のネコでいたかった。信じるほうが楽だったんだよ。だけどね、心のどつかで、いつも『五万円』で引つ掛かつて、それを忘れるために他のネコを馬鹿にして見下してた。全部おれが悪いんだ」

「もういいじゃない。シロは今日から無料ネコ。無料なら気負わなくていいし、何でもできると思わない？」

「そう思えばいいんだけど。おれが自分でそう思

始めるならよかったんだ。でも、オバンに先に言われたんで、反発しなくなってる」

「どーゆーこと？」

「さっき二時間て言ったろ。二ヶ月くらい前、家がヘンになってるのにオバンが最初に気付いたとき、オバンはおれのせいだと思ひ込んだ。それでおれを捕まえて、ぶったり蹴飛ばしたりしたんだ。あんなオバンは初めて見た。いつもは『シロちゃ〜ん』なんて甘ったれた声しか聞いたことがなかったんで、オバンが別の人が変わったかと思った。あんまり怖かったから、おれはついフハーって威嚇しちまった。そしたらおれのシツポを握って逆さ吊りにして、あちこちにぶつけながら『お前には五十万円の価値なんてない。五十万円が聞いてあきれれる。本当は五十万円の忘れたか。いいや五万円の価値もない。お前はそこの雑種と同じタダのネコだ』って、二時間もやられたんだ。それでおれは外に放り出された。家に入れてくれて叫ぶと水ぶっかけられた…：少し経ってわかったよ。おれはあの人のアクセサリーだったんじゃないかって。アクセサリーなら高いほうがいいものね。気に入らなくなったアクセサリー

が嫌みみたいだからなあ。でも、そーと来るならマサネコの食べ残しもある。シロがやる気になってちゃんと食べ物を探せば、今よりやせないだろうと思う。飼いネコからノラになるのがつらいのは、アタシにも身に覚えがあるからよくわかってるよ。ミツチャンの部屋に帰ると、ジャガが「お帰り」って言って、寝る場所を少し空けてくれた。ギンタはいなかった。パパの部屋だろう。アタシは「おやすみ」って言って、ジャガの耳をペロツとなめてから丸くなった。

ジャガはミツチャンの役に立ってる。毎朝七時にミツチャンの枕の周りで騒ぐんだ。「起きなさい、学校の時間ですよ」って。寝ぼけたミツチャンに叩かれそうになるとパツとかわして、起きるまで騒いでる。だからミツチャンの遅刻と寝坊でさぼる回数が劇的に減った。ギンタはパパの部屋で寝て、パパといっしょに起きて、トイレや洗面所に付いてくらしい。「ボチは犬みたいに忠実だ」ってパパは喜んでる。アタシ？アタシは前と変わらなしたよ。人間の役に立つことは、ひとつもやってない。ごは

は捨てられても仕方ないものね」

「違うと思う。アクセサリーに飽きても捨てちゃいけないんだ。高い安いは関係ない。飽きたらしまつとくか、誰かにあげればいいんだよ。捨てる人間は心がない人間だと思うよ」

シロが意地悪かつたのも、尊大だったのも、アタシなりにわかった気がする。シロが言うように、シロが悪いのかどうかはアタシにはわかんないけど、なんだか違う気がする。でもなあ、どーすればいいんだろー。いくらネコは自己責任だっていっても、「そうかい、あとは自分で考えな」なんて言えるわけない。といて、アタシは自分の頭のハエも追えないネコだから、どーしてあげることもできない。困ったなあ。

シロは片方の脇腹とお腹をなめ終わって、背中にとりかかっていた。なめた毛は乾き始めてフワフワが戻ってきてた。この分なら夜明けには全身フワフワに戻りそう。よかった。

アタシは魚勝の場所とカツチャンのことを話した。遊びに行けばお魚のアラくらいはもらえる。もちろんアタシんちに来てもいいけど、パパはシロ

んの心配がなくなった分だけ、長野にいたときより怠惰になった。昼間は疲れないように寝て、夜中は本を読んだりコンピュータやってる。線文字Bは意外と簡単にマスターしたよ。もうネコペディアも読めるんだ。場の理論にも挑戦してる。これ、数式なしで説明できないの？多分できると思うよ。最初に概念がわかんないや、数式なんて意味ないでしょ。この世には、わかっている人がわかってる人に向けて説明するような本しかないね。そういう本を無駄な本っていうと思う。アタシみたいなバカなネコにもわかる場の理論の入門書、どっかにないかなあ。

ギンタとジャガはお外が好きみたい。晴れてるとかなり遠くまで遊びに行ってる。芦花公園あたりまで。いつか多摩川に行きたいらしいけど、ネコワニが出て知らないよ。ときどきマサネコもいっしょに出かけて、ネコ道探検してるらしい。家の裏とか塀の上とか、ネコしか通らない道を歩いて珍しいものを見つけて面白がってる。こないだはタヌキのウンチを見つけたって。

それからいいニュース。シロがカツチャンやマサ

ネコと出かけるようになったんだ。もう全然威張ってない。オスネコどうしでつるんで、何が楽しいのか木登りなんかしたり、雨で溜まったお水飲んだり、捕まえた虫を食べたりしてる。毛皮は真っ白のフワフワに戻ったから、どう見てもノラには見えないけど、やってることはしつかりノラだよ。ギンタと追いかけてこするのも好きみたいで、家の周りをすごいスピードで走り回ってる。もうシロが死ぬとしたら餓死じゃなくて交通事故だろうね。

マサネコは、相変わらず玄関の横が定位置。門番みたいだ。でも最近、一匹でいるとき、ボーっとしてることも多くなった。気になったから、他のネコのプライバシーに立ち入らないっていうネコのルールを破って話しかけてみたんだ。

「マサさんがいてくれるから、とっっても心強いよ」
「そんなことあねえさ。オレなんか何の役にも立ちやいなえ」

「役に立ってないのはアタシだよ。毎んちブラブラしてるだけだもん」

「いいじゃねえか、それで。何か意義のあることしようって身構えてたら、いつも肩肘張ってなきやい

けねえだろ。そんなのは疲れるぜ。ネコはなあ、そこにいるだけで飼い主の役に立ってたんだ。飼い主がそう思ってくれりゃ、ネコとして最高の生き方だ」

「だよね、わかるよ。それでさあ、すごく言いにくいんだけど……」

「言ってみな。何か言われて怒るほど肝っ玉は小さかあねえぜ」

「あのね、アタシの希望だよ。そうなればいいなって思うんだけど……マサさん、川崎のアパートに行っておじさんと会ったらどう？もういないかもしれないけど、いるかもしれないでしょ？ノラを貫くのもかっこいいけど、一ヶ所でも帰れる場所があるなら、試しに帰ってもいいと思う。飼いネコのマサさんなんて想像できないけどね」

マサネコは黙ってた。下向いて地面を見た。しばらくして小さい声で言った。

「ありがとよ……こないだまで暑かったのに、季節は変わったみてえだ。風が冷てえな」



21：解決なの？

「ひどい話だわ。カッチャンとマサさんから全部聞きました。おなかやすいたらいつでもいらっしやいって言っといてね」座布団の上に座って、おかあさんが言った。もちろんシロのことだ。「実は、ネコに迷惑かけただけじゃなくて、あのザーマスは商店街の人間にも大迷惑だったのよ」

あんまりヒマなんでおかあさんの家に行った。シロの話は世田谷中で有名になって、ネコはみんな知ってた。カラスがいたら個人の感想がくっ付いて、もつと惨劇風になってたろう。まあ、尾ひれが付かなくても充分ヒドいけどさ。

「ザーマスは人間にも何かしたの？」

「知らないの？お前が帰ってくる前のことだから、知らなくてもしょうがないけれど。ザーマスは商店

街のサーバーを無断で落としたんですよ」

「どっかのレンタルサーバーでしょ？どうしてザーマスに落とせたの？」

「お前、蔵小路屋のURL見たことある？」
「あるよ」って、憶えてるURLを言った。

「ほら、WWWに続くドメインは商店街のどの店にも共通なのがわかるわね。それって、ザーマスが名義人になってたのよ。商店街の各店でホームページ、まあ正しくはウェブサイトだけど、作ろうとしたとき、各店がそれぞれURLを持つとお金がかかりすぎるっていうので、商店街全体でひとつのドメインにしたの。その下にいくつもディレクトリを作ってお店に割り当てたわけ。そのとき、ザーマスがしゃり出て『わたくし、コンピューターの専門家で

すから、サーバーとの交渉を担当してさしあげます』とか言つて、ドメインを自分名義にしたのよ。あとで調べたら、駅前のコンピュータ教室に二回通っただけだってバレましたけれど。

それで、ドメインの維持費とかサーバー代を自分以外のお店に割り振つて、ザーマスはタダで使つてた。お金持ちはやることが細かいわ。

ザーマスのサイトには不動産管理の宣伝と『白猫と貴婦人』っていうブログまがいがあつたけど、見たことある？」

「貴婦人？ 誰があ。そんな気色悪いもの、見たことないよ」

「見なくて正解ね。ある日、ブログまがいのタイトルが『裏切られた貴婦人』に変わったんです。ちょうどザーマスの家がスプレー臭くなって、羽目板がガリガリになったときよ。キャッシュで取つてあるから、どんなページか見たければ見せてあげる。汚い羽目板の写真や、庭にあるネコのウンチの写真をたくさん載せて、飼いネコに裏切られた！ っていう書いたわけ。写真の中には、追い出されたシロの惨めな姿もあつたの。泥んこになって玄関で鳴いてるの

や、窓から家に入ろうとしているシロに、部屋の中から殺虫スプレーを吹きかけてるところや、とにかく虐待シーンがいっぱい」

「ザーマスって、アタマおかしいんじゃない？」

「そう思うでしょ？ ブログまがいを見た人間もそう思ったみたい。『いくらなんでもやりすぎだ』、『お前はサド公爵夫人か』、『お前の家はグアンタナモなのか』、いろんな批判コメントが書き込まれたの。ザーマスも無視すればいいのに、いちいち反論したわけ。『自分のネコなんだから、どう扱おうと自由』とか、『五十万円もしたのにバカネコだった』とか、『批判があるなら面と向かつて言え』みたいに、自分で燃料投下しちゃつた。ついにブログ内だけじゃなくて2チャンネルに板が立つて、一週間しないうちに大炎上状態になって、ザーマスの住所と家の写真、顔写真がネットにさらされてしまった。

さすがにここまで来るとザーマスは怖くなったんでしようね、レンタルサーバーに電話して、ドメインを消してURLを使えなくしてくれて言い張つたの。名義人本人からの申し出だから、サーバー業者は言うとおりにした。当然だけど、下の階層にあつ

たいろんなお店のサイトも消えちゃつた」

なるほど、これで謎が解けた。アタシが最初にアクセスしたのは、ザーマスがURL消したときだったんだ。ホントに身勝手なババアだな。ザーマスの玄関にオシッコしたくなった。

「今は復旧してるよね」

「そうよ、ミッチャンが苦労して直したのよ。トラブルに備えて、全部のお店のファイルをFTPで落としてあつたんですって」

「ミッチャンが！ すごい」かわいい子には旅をさせろ、だね。アタシがいないと結構しつかりするじゃない。

「そうよ、お前の飼い主は少し利巧になったようだよ。ミッチャンは別のサーバーを探してきて、ザーマスと交渉して委任状とつて、どうにかこうにかURLを復活させたの。まあ、この商店街は地元密着型の魚屋、下駄屋、金物屋、ラーメン屋みたいな店ばかりだから、サイトがなくても関係ないんですけどね、やはりこの時代、ネットに出しとかないと形が付かないのかもしれない」

「蔵小路屋はネット通販もしてるよ」

「ええ、だからミッチャンは頑張つたのかもしれない。今は、恐ろしいことにミッチャンがドメイン全体を管理してます」

そりやおつかないや。今夜にでもサーバーの中身、チェックしよう。アドミンのIDとパスワード、どっかにテキストで入ってるだろうから。

おかあさんに「またね」って言って、カッチャンに会いに行った。でも、カッチャンはどこかにお出かけ中。魚勝さんがアタシを見つけて「おおタマ、よく帰ってきたな。ご祝儀だ」って、マグロの切り身をくれた。赤身でかなり大きかった。お刺身は久しぶり。お店の奥に持つて行って全部食べた。いい匂いでおいしかった。

最近、マサネコは定位置を変えたみたい。ついでうか、第二の定位置を決めたのかもしれない。夜中だけじゃなくて昼間もお屋根にいたことが多くなった。今日はお昼前から登ってギンタといっしょにいる。アタシも登ろうかなって思ったけど、やめた。縄張りの守り方なんていう話だったら、話の腰を折っちゃうもんね。

お向かいのタロを見ると、こっち向いてシッポ振ってた。そーだ、タロと遊ぼう。

「何やってんのよ」

「立ってシッポ振ってる」

「どーして？」

「ネエサンが見えたから」

「やっぱ犬は即物的な生き物だ。シーザーは『犬は考えない』っていうけど、表面的にはたしかにそーだね。でも、シーザーの言ってることは間違ってる。犬は考えるよ。気も遣う。表面じゃなくて裏から見れば、ネコより情緒タツプリアかもしれない。特にこのタロは。」

「あんた鎖抜けできるんだ」

「いきなり何だよ。秘密なのに」

「長野でタケチヨっていう犬が鎖抜けのワザを見せてくれたんだよ。犬なら誰でもできるって言ってたけど、あんたは半分ネコ入ってるから無理だと思ってた」

「ぼくも犬です。できますよ。秘密だけど」タロは目の前で鎖を抜いてすぐ元に戻した。「ほらね」

「アタシがいなくなったとき、鎖外して探してくれ

「たんだってね。ありがとう」

「あれは非常時ですよ。ネエサンの匂いを追いかけて、どっかにいないかと思って探し回った。それにしてもネエサンは動かないネコだね」

「どーゆーこと？」

「だって、ネエサンの匂いは蔵小路の家を中心に半径二十メートル以内にはなかった。ひとつの方向だけ、そう、下駄屋さんの方向にだけは延びてたけど」

「だって、それ以外どこにも行かないもん」

「で、ぼくなりにわかったことは、ネエサンはヒッキーのコンピューターヲタクネコだったこと」

「うるさいね、少しホントだけどきさ」

「ますます心配になったんだよ。長野のどっかではぐれたって聞いて、ヒッキーなネクラネコが野生で暮らしているわけじゃないもの」

「あんた、ヲタクとかネクラとか、せめてひとつにしてよ」

「いやあ、最近語彙が豊富になって」

「国語辞典でも読んでんの？」

「辞典じゃないよ、蔵小路のパパが捨てた古い週刊

誌の特集に『ちゃんとわかる若者コトバ』っていう特集があったんだ。正確には捨てたんじゃないけど、窓から飛んできたんだけど」

「窓から？」

「そう。蔵小路さんちで大喧嘩があって、そのときにリビングの窓から飛び出して、うちの庭に落ちたの。だから、もらってもいいかと思って。まずいいかな？」

「まずくないと思うよ、週刊誌くらい。ねえ、その喧嘩って、いつごろ？」

「じゃ、週刊誌はぼくのだ。えーとね、喧嘩はネエサンがいなくなった直後だったと思う。どのサービスエリアかでモメた」

「わっ、もしかしてすごく大切な情報。」

「どんな喧嘩だった？」

「とにかくうるさい喧嘩だったよ。家族三人がいつぱんにしゃべって、どんどん声が大きくなって、マサさんも逃げ出したくらいだ」

「そーゆー意味じゃない、喧嘩の内容よ」

「ああ、それならわりと単純。ネエサンがどこで行方不明になったか、ってことだった。整理して言う

と、ネエサンがいらないのに気付いたのは長野の別荘に着いたときみたい。その間の高速では二ヶ所のサービスエリアでクルマを止めたらしいの。最初のサービスエリアでは、ミッチャンは寝てて、ネエサンも寝てたってミッチャンは言ってる。パパは、お前は寝てたんだからタママも寝てたって言い切れないだろって言うし、ママは、あの人ごみの中にタママが飛び出すわけないって言うし、とにかくメチャメチャ。」

それで、次のサービスエリアにも止まったらしい。ミッチャンがトイレって言ったからだよ。暑かったから、クルマ止めてる間は窓を全開にしてたっていうんだ。ミッチャンがトイレ行ってる間に、パパとママはアイスクリームを食べに行っただって。ミッチャンとママは、そこでタママがクルマから出たんだろって思ってた。パパは二ヶ所とも可能性はあるって言うし。それで明日、どっちのサービスエリアを探すかで喧嘩してたっていうわけ」

「うーん、そーゆーことだったんだ。パパの主張が通ってれば、アタシは二、三日で発見されたかもしれない。でも、いつものようにミッチャン⇨ママ連

合軍が勝ったんだ。パパだつてときどきは正しいこと言うのにな。

「それで全部わかった。タロ、ありがと。ミッチャンが、どーして隣のサーブスエリアを探したのか、今まで謎だったの。隣に行っちゃったからミッチャンは誤解したんだ」

「ん？ 隣に行ったのがそもそも誤解でしょ？」
「違うのよ。もうひとつ大きな誤解があったの」

「って、アツタママさんのことを話してあげた。タロは面白そうに聞いてて「そんなに似てるの？」って驚いてた。「ネエサンの毛色は特殊っていうか、カスタムメイドっていうか、ユニークっていうか、この世の終焉っていうか、ありえないっていうか」

「おやめ！」

「すみません。だけど、まったく同じ毛色のネコがいたなんて奇跡だな」

で、ドッペルゲンガーも説明してあげた。

「もしそうなら、ぼくとまったく同じ犬がどこかにいるんだね。会ってみたいな。それで二匹並んで座って『どっちがタロでしょう？』ってやったら面白いだろうな」



22 : とりあえず終わり

世田谷に帰ってきてから二ヶ月ちよつと経った。アタシたちはネコっぽく、それぞれ勝手に眠ったり動き回ったりしてた。ジャガは駅前のカラオケに入り込んだみたい。人間のお客が他人の関係を歌ってくれるのを待ってる。そんな古い歌をリクエストするお客、最近じゃあんまりいないよね。ギンタはカッチャンと気が合うみたいで、神社の床下やお寺の本堂に忍び込んで、他のネコと会ったりネズミや虫を追いかけてる。それから、信じられない組み合わせだけど、マサネコとシロがいっしょにいるんだ。昔のことは水に流したんだろうね。マサネコが「ネコの正しい立ち居振る舞い」を教えるらしい。
ミッチャンはすっかり昔に戻った。朝、ジャガに起こされて、ちゃんと学校に行くのが変わったくら

やっぱこの犬、ネコが入ってる。アタシとアツタママさんがやったのと同じこと考えてる。

今日はすごい日だよ。謎がふたつも解けた。少なくともアタシにとつてはね。ミッチャンからすれば、どーしてアタシが隣のサーブスエリアに移動したのか、依然謎のままだろうけど。それに、どーしてアタシがハナマルさんの携帯からミッチャンに電話かけられたのかも謎だらうな。メール書いて教えてあげよーかな。やめとこ。謎って残ってたほうが楽しいと思わない？ それに、謎って自分で解くもんだから。

い。相変わらず勉強はしないし本も読まない。意味ないチャットも再開した。パパとママは相変わらず何かにつけてぶつかってる。アタシは二年しか付き合っていないからわかんなかったけど、パパとママは結婚したときからずーっとそーだったみたい。結婚したときから「離婚するんだ」って言ってたって、タロのおばあさんが言ってた。一種の娯楽なんだね。真に受けて損した。

そんな感じでユルい時間が過ぎてったとき、マサネコが川崎に帰るって宣言したんだ。「派手な見送りは遠慮してもらえねえか」って言ったけど、何にもしないわけにはいかないでしょ。アタシはネコたちをお屋根の上を集めた。長野の集会みたいだな。丸くなって座って、下からはタロが見えた。

「こんな風に集まってもらうほどのもんじゃねえんだが、みんな、ありがとよ。オレは川崎のシマに帰ることに決めたぜ。とめてくださるネコもいらっしやるだろうが、どうかわがまを聞いてやってちゃくれねえだろうか。お頼み申します」

マサネコはみんなに頭を下げた。

「寂しくなるよ。いろいろ教えてもらって、まだ聞きたいことはいっぱいあるけど、マサさんがそう言うんなら、無理には引き止められない」ギンタが言った。

「わかってくれて嬉しいぜ。ここは居心地良くてな、思わず長居しちまった。あんまりテメエのケツが重いで、すっかり焼きが回っちまったのがわかった。だがな、川崎にはちよとだけだがやり残した仕事もあるんだ。くたばる前にケリい付けたこともいくつかある。つて、まだ死ぬつもりはねえから安心してくれていいぜ。いつでも遊びに来てくれよ。焼きイカか串カツで歓迎するぜ。競輪場の近くで『マサはいるか』って訊きゃ案内されるはずだ。競馬場はいけねえよ。オレのシマじゃねえんでな」マサネコは渋く笑いながらみんなを見回した。

「タマさん、世話になったな。ノラには過ぎた扱いだったぜ。極楽を味あわせてもらった。ご当家の方々にはお礼の言葉もねえ。薄グレのマサ、生涯かかって返せねえ義理がでちまった。くれぐれもよろしくな」

「そんなあ、借りができたのはアタシとミツチャンだよ」

「そりゃ違うぜ。ゴタゴタ言いたかあねえが、オレは世間様からはじき出された半端なノラだ。そんなゴクツブシに、メシの一杯でもくれる人間は決して多かあねえんだ」

たしかにそうだ。ニヤニヤは簡単じゃなかった。知らない人やハナマルさんは、世の中では『変わった』人だった。ドボンさんとこのおぼさんだつて、全然知らないネコには何もくれないだろう。世の中つて、けっこうキツイ。

「それからもうひとつ、みんなにお願えがある。オレにシロを預けちゃくれねえだろうか」

シロがマサネコの隣に座った。頭を下げる。

「タマさんご存知の通り、オレとシロとは因縁の仲だったが、事情が変わってな」

「すみません。みんなに迷惑かけっぱなしで」シロ

が言った。「みんなが助けてくれて少し元気になったけど、ぼくは飼いネコじゃなくなった。この辺でノラになるのは、なんだか未練がましいみたいで、できれば避けたいと思っただけです。そしたらマサさんが川崎に誘ってくれて、三下からでよければ修行してみないかって言ってくれたから、どうせ生きるなら自信を持って生きたい。マサさんに付いて行きます」

「というわけだ。世田谷の仲間を一匹減らしちゃうようでも申しわけねえが、シロの身の振り方はオレに任せてやっちゃくれねえか」

「シロ、よかったじゃないか」ってギンタ。「かっこいい！修行して偉くなってね」ってジャガ。「おれも行ってえよお」はカッチャン。下からタロが「頑張れよ」って吠えた。

アタシはなんて言ったらいいかわかんなかった。シロは本当はいいネコなんだ。別れるのはつらいけど、川崎で他のネコを助けるような仕事をしてくれるなら……。

「体に気を付けてね。あなたは純血種で病気に弱い

んだから」アタシはやつと言った。

「よかったなあ、シロ。みんなわかってくれたぜ。それからギンタ、いつでも客人で来てくれ。オレのやりかたあ見てれば、長野でも少しは役に立つかもしれねえ」

「マサさん、ありがと。いずれ必ずお邪魔します」
「待ってるぜ。さあ、出かけようか。この季節だと多摩川越える橋は寒いだろう。一日でも早えほうが身のためだ。明日あもつと寒くなるだろうぜ」

マサネコとシロはお屋根から下りて、すぐに道を歩き始めた。二匹はかなり速足だった。

そのとき、ミツチャンが帰ってきたんだ。向こうに歩いてく二匹を見つけて「オヤブン、どこ行くの？」って声をかけた。

マサネコは立ち止まって、ミツチャンに向かって正座して、頭を三回下げて、それからまた歩き始めた。

それからどうなったつて？知らないよ、これだも。過去のことは書けるけど未来は書けない。ネコはリアリストだからね。でも夢は見るんだ。



アタシです

サービスエリア

蔵小路タマの冒険

イラン暦 1392 年 Shah の月 24 日
フツの西暦では 2013 年 9 月 15 日
 β 1.0 リリース

著ネコ：蔵小路タマ（イラストも描いたよ）
もっとイラスト描きたいけどメンドーなので誰か描いてよ

編集と著作権をイヤイヤ任せてる人間：大塚 明
ISBN ……ありません

このお話で勝手にお金儲けしちゃイヤです。いないだろうけどね